

奇譚クラス

3



1972・3

新しい風俗文献誌

奇譚クラブ

臨時増刊

女体緊縛写真集

カメラ・ハント楽我記 辻村 隆



天然色写真

柔肌に喰い込む麻縄 前田真知子
首縄横臥二態 前田真知子
典型的後手縛り 前田真知子
自由な肢のもたえ 前田真知子
麻縄と統肌の明暗 前田真知子
厳しい縄目を味う 前田真知子
準備態勢OK 前田真知子
股間縛りの表情 前田真知子

女体緊縛の華

本誌写真部構成

金髪碧眼の美女	シラ・ケイ
答打ちの態勢	関谷富佐子
鞭撻の痛苦	関谷富佐子
洗腸責の序曲	長井葉津子
亀甲縛りの美態	左近麻里子
麻縄と白肌の対照	中河恵子
陽を浴びた柔肌	左近麻里子
猿ぐつわに喘ぐ	中河恵子
緊縛裸身の露り	中河恵子
責め疲れの放心	梨花悠紀子
没我の心境	中河恵子
痛打の末の悦	関谷富佐子
沖縄美人の緊縛	座間富明子
剣玉子の縛り	佐々木真弓
狂変する裸女	川路叢子
責めくたびれて	佐々木真弓
紅毛碧眼の白人を責める	シラ・ケイ
海老責の狂態	川路叢子
ボリウムの挑戦	座間富明子
鞭打の下に挑	関谷富佐子
祭壇の人身御供	渡部好美子
稚妻は縄を知りぬ	金原加奈子
開股の正面と背面	中河恵子
華麗な開股責め	中河恵子
イルリガートルを前に	長井葉津子
非情な責めの終末	長井葉津子
両手吊りの晒し	中河恵子
柱縛りの完了	川路叢子
処女縛りとまどう	三浦純子
麻縄に身をゆだね	中河恵子
盗視するSMの目	佐々木真弓

緊縛女体の光と影

編集部構成

両手挙げ棒責め	川路叢子
柱宙縛りに浮く	長井葉津子
後手吊りに苦しむ	中河恵子
どこでも責めて	佐々木真弓
鞭の法悦境	関谷富佐子
ムチが痛い、許して	関谷富佐子
柱を挟んだ連縛	関谷富佐子
花と蛇の静子です	中河恵子
針責めをして頂戴	渡部好美子
二つ折りの女体	長井葉津子
猿ぐつわの哀飲	中河恵子
日本式縛りの白人	シラ・ケイ
マゾの女王に答	関谷富佐子
柱しばりの恥らう	金原加奈子
夫婦のレイの趣味	渡部好美子
長襦袢の艶姿	梨花悠紀子
豊満ボインを誇る	愛川悦子
美女今縛られる	梨花悠紀子
受入態勢に充	関谷富佐子
折檻にも汚れず	前田真知子
責めてみたい碧眼の女	佐々木真弓
日本式高小手縛	シラ・ケイ
猫の目のような女	絹川文代
足吊りのある風景	中河恵子
亀甲縛りの媚態	中河恵子
M女二輪の花	渡部好美子
苛責に乱れた黒髪	中河恵子
開股縛りの幻想	中河恵子
鏡の前での放恣	前田真知子
愉悅のひととき	川路叢子
ハリツケ晒し	左近麻里子

これからの、どうするの？	長井葉津子
美しき吊り	前田真知子
苦痛か悦楽か	関谷富佐子
一筋の縄の魔術	中河恵子
逆エビ縛りに入る	三浦純子
愛撫の責め	渡部好美子
俯瞰撮影	前田真知子
黒縄と白肌	中河恵子
身動きできぬ境地	座間富明子
浮上した女体	中河恵子
麗しき背面	中河恵子
汚辱の縄	金原加奈子
高小手本縛り	佐々木真弓
責めの陶酔境	川路叢子
失神したマゾ女	関谷富佐子
前手縛り悶悦	関谷富佐子
柱の彼方の天国	中河恵子
荒縄の海老責	三浦純子
美と縛の女神	前田真知子
はげなれた猿轡	梨花悠紀子
可憐な置物	長井葉津子
酒の肴になる	佐々木真弓
妖蛇の洗礼	川路叢子
奔弄されるままに	前田真知子
海老縛りの妙味	川路叢子
柱につながれた女	長井葉津子
痛さをこらえる異国の女	シラ・ケイ
責の果の諦観	前田真知子
ホステス裸人生	関谷富佐子

女性モデル募集

勇敢な女性の出現を望む

▽規定△

入に推
選作品
の

一、以て御承知おき願います。
 一、応募作品は、すべて未発表の作品の自作の作品に限ります。たとえ未発表の作品でも他社へ投稿されたものはお断りします。作品の中に他人の作品を引用する部分があります。作品の中に他人の作品を引用する部分があります。作品の中に他人の作品を引用する部分があります。
 一、出処へ作者、書名などを明記して下さい。
 一、紙を原稿は必ず二百字詰又は四百字詰原稿用紙を一枚以上三百枚まで。三枚以上は四百字詰換算にて三十枚以上三百枚まで。三枚以上は四百字詰換算にてきは一枚以上三百枚まで。三枚以上は四百字詰換算にて一、だけは締切日は毎月十五日、入選作品は出来るだけ早く誌上に掲載致します。
 一、懸賞応募作品は一般の原稿、読者原稿と區別するため第一頁に「懸賞」とお書き下さい。
 一、ペンネーム、匿名はご自由ですが、住所へ連絡先、氏名は必ずお書き願います。応募者の氏名を公開したり他へ洩らしたりなどは絶対にご致しません。原稿は原則として返戻は致しません。故、若しご入用でしたらコピーをとって置いて下さい。
 一、原稿の送付先は、大阪市住吉郵便局私書箱第41号「暁出版株式会社編集部宛」必ず郵便（第一種郵便にて）して下さい。直接の訪問並に持込みは固くお断り致します。

での謝礼を差し上げます。

○応募されました方々の個人的な秘密は絶対に漏洩致しませんから御安心の上御応募下さい。尚その際、お好みの傾向を出来るだけ詳しくお書き下されば幸いです。

○誌上掲載を原則としておりますが、若し掲載を望まれない方がありましたら、その旨添記して下さるようお願いします。御都合に依って分譲用又は助手介添え或はプレイのみの出演をして頂きます。その時の報酬については改めて御相談に応じます故御照会下さい。

○モデルに關してのお申込みは、年令、略歴の他に身長と体重をお書き添え願います。写真を同封下されば尚結構ですが、若しお手元に適当なものがなければ、なくとも差支えありません。

申込先 大阪市住吉郵便局私書箱第41号
暁出版株式会社編集部宛

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatukishuppan

Osaka Japan



〔緊縛フォト珠玉落穂抄〕

奇妙なブランコ遊び

中 河 恵 子



奇

譚

ク

ラ

ブ

三月号目次

△昭和四十七年△

△第二十六卷Ⅱ第三号Ⅱ通刊第二八九号△

本

文



フォト「すき間風」△江口淑子▽……………北川ミノル……………(9)

読切創作『愛しの薔薇奴』……………城崎 恭介……………(10)

慕情告白「前田真知子はどこに?」……………利根川五郎……………(22)

懸賞入選創作『賽目無残』……………ゆい 狷介……………(24)

告白「マゾヒスト」への復活……………丸目 忠……………(36)

マダム・美『SMの好きなお姐さん』……………福井 桃子……………(42)

連載S大河小説パロディ「花と蛇」四……………山光 純……………(56)

ファンレター 三浦夫人により奇クファンとなる……………小倉 悠紀……………(68)

連載・時代S小説『紫蘭の門』(7)……………風流極道軒……………(70)

告白「私とプレイした人たち」……………谷山久美子……………(88)

連載小説『大噴火』△第四十二回▽……………千葉 青鬼……………(94)

手記「被虐と浣腸の幻想」……………中川 英子……………(102)

連載・アブ紳士行状記「M派交友録」(25)……………鬼山 絢策……………(110)

奇クサロン

(228)

維感「SMプレイの歴史的考察」	虎落笛
渡部好美夫人に捧げる憧憬詩	豊田二浪
M女性を求めて「飼育と素質」	一角正人
イメージ画「鑑賞物」	柏木真佐男
夫婦プレイの経歴「私たちの場合」	早坂信治
マゾ記「ある夜の拷問」	早木夢二
美少女無惨絵秘帖「斬首独演」	桐原紫門
告白「理想のプレイ・メイト」	佐野みさ子
サロン楽我記「第九十三回」	辻村隆
モデル志願	砂川圭子
イメージ画「力学責」	堀真彦
深田菊子嬢に浣腸したい	芝正輝
一月号雑感	山田赤秋
詩「爽快な朝」	南原雪子
人間馬プレイの隠し撮り	佐野寿
夫婦プレイのお誘い	室生部
編集部だより	編集集
映画「性倒錯の世界」を観て	馬祖漢
肥満女性パンサイ	赤畑修造
私のスウィート・サディズム	中津浩
一月号「カメ・ハン」に感ず	国川栄一
「夫婦プレイ」雑感	井上浩
「MY VENUS ゆう子様へ」	野田由雄



アマゾン憧憬告白「馬化開眼」	佐野寿	(122)
小説「拷問クラブ」	鶴見浩一	(128)
シリーズ3『破壊と教育』	小倉幸男	(141)
惨酷ショートショート「K・C処刑場」	塚本鉄三	(144)
カメラ・ルポルタージュ「深田菊子の巻」	芳野眉美	(164)
『水車小屋緊縛記』	高村浩子	(176)
M的ポルノ紀行「夫婦交換」	大西弘明	(188)
△M女通信△私は誘拐されたい	辻村隆	(194)
昭和四十六年度刊「随想と私見」	編集部選	(252)
SMカメラ・ハント「野村信子の巻」		
『陶醉への誘い』		
読者通信		

イメージギャラリー「彩りプレイ」須坂旭(17)・「大の字晒し」小川茂正(31)・「ハイドウドウ」春川ナミオ(40)・「イヤリング」志羽利也(61)・「身悶え」小妻容子(75)・「誰か来る!」須坂旭(79)・「責め問い」市原幸三郎(84)・「自虐」豪城二(107)・「懇願」岡たかし(119)・「手荷物用荷造」志羽利也(132)・「新妻教育」室井亜砂路(136)・「散歩後の御礼」春川ナミオ(170)

緊縛フォト珠玉落穂抄 (目次裏)

「奇妙なブランコ遊び」	中河恵子
「脚を挙げるのは許して」	長井葉津子
目次フォト△三木敬子・浜本喜美△カット△KOJI・S△	

〔緊縛フォト珠玉落穂抄〕

「脚を挙げるのは許して」

長 井 葉津子



奇

譚

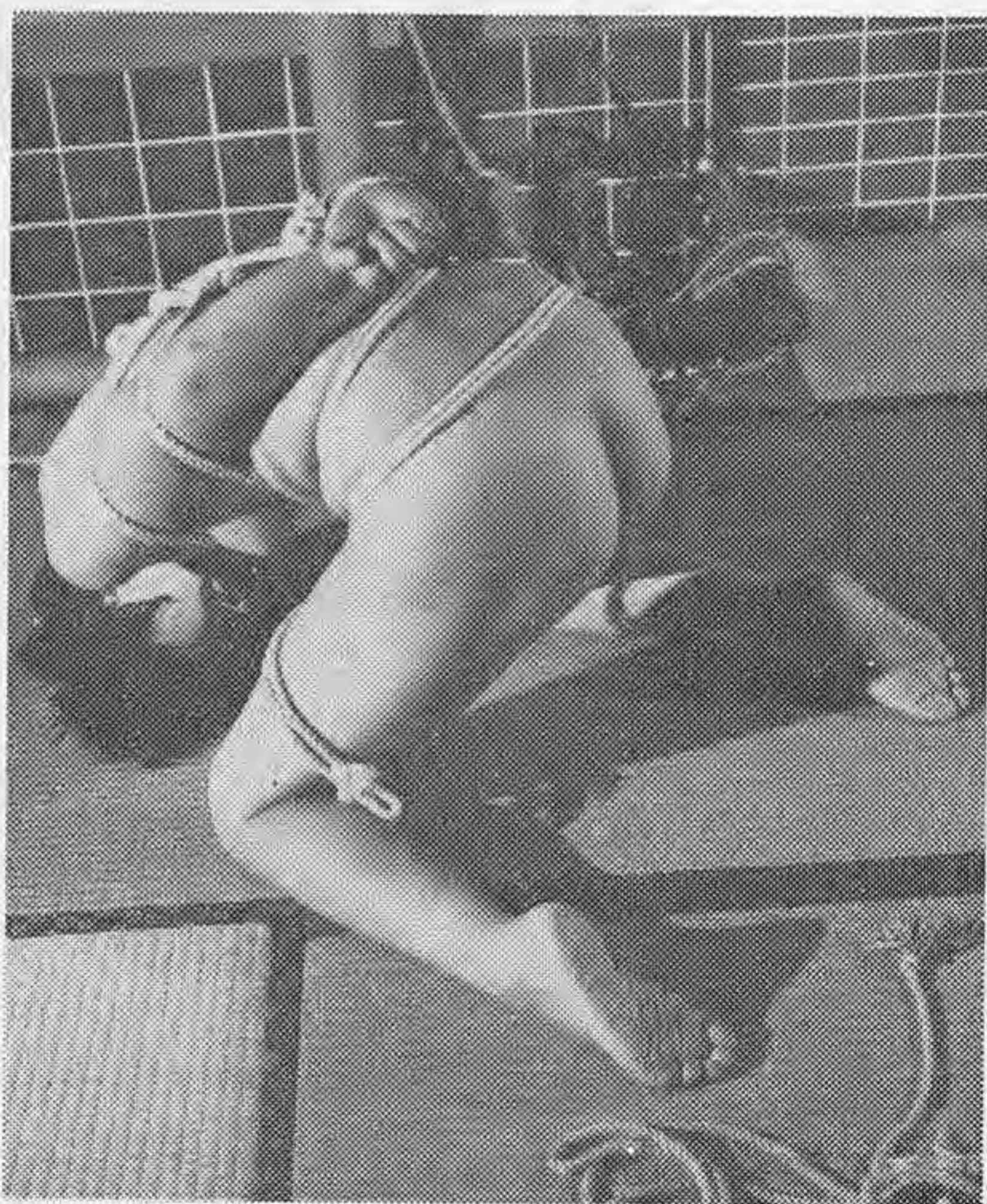
ク

ラ

ブ

1972年3月号

＜第26巻第3号・通刊第279号＞



すき間風^{まかせ}

／＼江口淑子

縛られた縄目の痛さもさることながら、お尻の辺りに、さっと通り過ぎてゆく、すき間風のような、女体の秘密を盗り去ってゆく通り魔のような、心もとなさの方が、私の心を千々に砕き、いたたまれない気持にさせる。私の身体のすみずみまでを、舐めまわすような視線を肌に痛く感ずると、私の心の奥底にくすぶっていた好奇心は、くすぐったさに頭を持ち上げ、そして、身体全体を這いまわってゆくのである。

(北川ミノル)

カット・KOJIS



夕風が終わって、かすかに浜風が吹きはじめたのか、浴室の窓が鳴った。

東伊豆、伊東の郊外ともなると、さすがに

読切創作——美妾の刻印——

愛しの薔薇奴

いとしのばらど

城崎恭介

春の訪れも早く、忍びこむ微風にまじって、
辛夷こぶしの花の香がした。十日前の雪が、嘘のようである。

——春は、海から来るんだわ。

玲子は、生ぬるい湯に肩まで沈みこみ、窓外の薄明を見やりながら、いつもこの季節に味わう実感を、あらためて反芻した。

玲子の腰をしっかりと抱いていた大作の腕が弛み、蟹のようにいかつい指が、鳩尾から脾腹にかけて這いあがると、小さなさざめきが

起こり、湯の底で白い輪廓が揺らめいた。

「まだ拗ねてんのか？」

大作は、ゆっくりと乳房を握みあげ、その重さを計るように掌の上で玩弄しながら、玲子の耳朶に唇を寄せた。

「だって、今日は玲子のお誕生日よ。パパだって、ちゃんと知ってたくせに……えりにえって、こんな日に……」

玲子は、大作が客を連れて来たのが、不満だったのだ。

今までも客の前で責められたことは、一再ならずある。しかし、記念すべき二十才の誕生日だけは、大作と二人きりで過ごしたかった。妾^{めかけ}以下の性の奴隷の境遇に甘んじながらも、せめてもの女心であった。

「だからさ、プレゼントしてやろうとおもって、わざわざ、あの男を連れて来たんじゃないか」

「なんのプレゼントよ？」

「勿論、成人式のさ」

「成人式……？」

玲子は、おもいきり首を捻じ曲げて、背面抱きにした大作の顔を窺おうとした。

白髪頭から湯滴をしたたらせながらも、ゴルフ灼けた膚は、青年のように引きしまり玲子を見つめる眼は、玲子だけにしか見せたことのない、少年のような幼なさを宿していた。

「何だよ、じろじろ見たりして……」

「ん、何でもないの」

玲子は、大作の瞳の奥に、卑猥な色は微塵もなく、むしろ温いおもいやりが潜んでいるのを確かめて、安心して正面に向き直った。「おかしい奴だ。せっかくプレゼントしてやろうというのに、拗ねたり、ふくれたりしや

がって……」

大作は、勃起した淡紅色の乳頭を、用心深く避けて、年齢に似合わず豊満な隆起を、丹念に揉みしだきながら、玲子の耳朶の後に唇を這わせた。

玲子は、肩を辣めて身を振りながらも、背筋を突きぬける快美の戦慄に負けて、軀の力を抜いて、大作の腕に預けた。

「ねえ。あの人、商人でしょ。何屋さんの？」

と玲子は、執念深く訊ねた。

大作の連れて来た客は、ひどく不愛想な男で、大会社の社長である大作と、対等に振舞っていたが、言葉づかいや物腰のどこかに野卑な面が覗き、どうみても政界や財界の人間に見えず、いいところ、小さな商店の主人だと睨んだ。

「お前の欲しがってた、琉球絣を背負ってきたとしたら、どうする？」

「ほんと！ 呉服屋さん？」

玲子は、潤んだ目を、パッと輝かせた。

外界との交渉を絶たれて、海と緑が見えるだけの海浜の別荘で、三年近くも幽閉生活を強制されている玲子にとって、都会の香りのするものは、千天の慈雨の如く、心を慰め、

安らぎを与えるのだった。

母が芸者の娘だったというだけあって、着物に対する趣味も母ゆずりの粹好みで、あっさりした絣や結城が、清楚な美貌に映えて、よく似合った。

「ねえ。ほんとに、呉服屋さんなの？」

と、甘えかかるように、身を摺りあげて、大作の頬に自分の頬を擦り寄せると、いかつい指が、スツと下腹部に伸びた。

「うふん、いやん……」

玲子が慌てて腰を据え直すと、大作は脚をからめて玲子の腿を割り、ざらざらした感触の掌で下腹部一帯を撫でまわし、

「髭を剃らにやいかな……」

と、独り言のように呟くと、玲子の濡れそぼった軀を抱いて、洗い場に出た。

拘束は後手を括った革手錠の一つなのに、

玲子は嬰兒のように扱われた。

どっかりと胡坐^{あぐら}をかけた大作の膝の間に仰臥させられると、小柄な玲子は、すっぽりと収まってしまう。

以前は、こういう恰好にされて、軀の隅々まで洗われるのに、ずいぶん抵抗を感じたがこの頃でも皺の一本一本、髪の本一本一本にまでスポンジに浸した石鹼を塗りたくられて、

丹念に洗い清められると、ブーツと軀が浮くような陶酔を覚えて、エクスタシーに達してしまうこともあった。

「ほほう。こりゃあ、わが社の製品もバカにならんなあ」

栄華堂製薬の創業者であり、社長である大作は、最近売り出した『アカトール』というクリーム状の薬剤を、玲子の膝に擦りこんでぞろぞろ振り出される垢の大群に、驚嘆の声をあげた。

「いやあねえ。そんなに、じろじろ見ないでよ。ええ、そうでしょうとも。どうせ、あたしは垢だらけの女でしょうよ」

と、口では悪態をつくものの、膝頭の裏の窪みから、踵に至るまで、自分では手際よく洗えない部分を、入念にこすられて、シャワーの温湯を浴びると、一皮剥いたようにさっぱりして、身も心も軽くなった。

しかし剃毛だけは、何回やられても慣れることはできず、灼きつくような羞恥にまみれて泣きたくなった。

洗い場にゴムマットを敷いて、ことさら優しく抱き上げ、添寝でもするように玲子を仰臥させると

「いい子だから、脚を拡げて……」

と、大作は、自らの手を下さずに、玲子の意志による開股を要求した。

大作の手にかければ、一瞬ですんでしまうこの単純な動作が、こうされると、何層倍も時間がかかり、拡げてはためらい、ためらっては拡げる心の葛藤が、そのまま、責めになっていった。

結局、立膝にした脚を、おもいきりよく左右に割って、腿と胫とで菱形をつくった恰好で、玲子の開股は完成した。

「二十才のおもい出に、きれいさっぱり剃りあげてやるか……」

と、呟くと、舌尖を丸めて喘いでいる玲子に、そっと接吻をしてやり、大作は脚部に回って、腹這いになった。五ミリほど伸びた玲子の叢毛は、純白の肌に淡い翳りをつくっていた。

「そーっとね……そーっとよ」

シェイビングクリームの白い泡が、ゆっくりと股間を覆いかくし、金属の刃先の冷たい感触が膚を襲ってくると、玲子は絶え入りそいうな声をだした。

「動くんじゃない、玲子」

大作は、しっかと玲子の太腿を抱えこむと毛根まで抉るような厳しさで、しなやかな膚

に芽生えた若芽を刈りとっていった……。



玲子が、夕餉の後の茶を運んで行くと、襖に手をかけただけで話し声はぴたりと止み、部屋に入ると、大作と例の男の視線が、意味ありげに玲子に注がれていた。

玲子は、まるで自分の品定めをするかのようにな、不遠慮にねめまわす男の目が、不快でならなかった。その蛇のように冷たい目を見ただけで、黒い疑惑が渦まき、不吉な予感におののくのがあった。

「初代目そっくりですな」

男は、塩辛い声を出した。

「だろう。美音の娘なんだよ。玲子ってなんだ」

と、大作は平然と、いつてのけた。

「へ？」男は、金壺眼をくるりと剥いたが、やがて鬼瓦のような笑顔をつくり、「こりゃどうも。い、ひ、ひ……親子井ですかい」と野卑な眼をほそめて、あらためて玲子に向け直した。

玲子は、その場に居たたまれなくなって、震える手で茶碗を男におしやると、挨拶もそ

ここに逃げ出そうとしたが、大作の逞しい手に腕を捕えられて、引き据えるように坐り直された。

「玲子。ちょっと、ここにいなさい。今、お前にやるプレゼントの相談を、してたことなんだ……」

「もういいんです。プレゼントなんか、いりませんから……」

と、いいかけると、大作の指に力がこもり玲子は苦痛に顔を歪めた。

「彫辰さん。この通り、ねんねで困るよ」

大作は、男を彫辰と呼んだ。

——刺青師だったんだわ。

玲子は、いよいよもない恐怖に襲われて頬の血の気が、スーッと失せて行くのを、はつきり自覚した。

「初代もまア、似たようなもんでやした。こういうおぼこなところが、旦那のお気に召すんだから、しゃあないやね」

「先代に彫ったのは、いくつの時だったかなあ？」

「二十才か、二十一才か……膚が若くて、きれいな人だったね」

彫辰は、ふッと神妙になって、追憶にふけるかのように目を細めた……。

玲子の母も、大作の妾だったのである。

沼津の芸者の子として生まれた母は十六才になったばかりの頃、街のチンピラ同然の若い店員に強姦され、その縁がどうしても切れずに駆落ちする破目となった。

十八の時に、玲子を生み落とすと、薄情な情夫は逐電してしまい、玲子ら母子は、心中寸前まで行って、大作に拾われたのである。

大作は、伊東の在の漁村にあったこの別荘を、玲子ら母娘に与え、母の美音は十九才の若さで、大作の妾となった。

幼い頃の玲子は、大作と母との間に、どういうことがあったのか知るよしもなかった。

ただ、日頃の憂げで沈みがちだった母がある日突然、目も覚めるばかりに美しく装ったかとおもうと、もっと母親のあで姿に見とれていた気持を無視されて、大作の親戚筋にあたる仕出し屋兼旅館の浅田屋にやられてしまうのを、うらめしくおもった。

大作の来る日は、必ず浅田屋に預けられてしまったので、ずいぶん大きくなるまで大作の顔すら見たことがなかった。こども心にもお父さんと呼ばれている男が、ほんとうの父親でないことを鋭く嗅ぎとっていたので、玲子は格別、会いたいとおもわなかった。

小学校へ行くようになって、村の悪童どもから、「妾の子、妾の子」とからかわれ、いじめられるようになる、自分の母親が、たまらなく卑しいもののおもえて、玲子は激しい反発を覚えた。

中学生になると、「浅田屋のこどもになるんだ」と母親のもとを離れ、浅田屋に寄宿しながら学校に通った。

少女時代の玲子の夢は、看護婦になることだった。藤たけた美しさを誇る母親に反発するあまり、白衣の天使こそ自分の天職のようにおもったのだ。玲子は修道女のように純潔に憧れ、清浄無垢な白に、信仰に近い感情を抱いた。

しかし、彼女の夢が、あっけなく破れる日が来た。

高校に入っただけの六月、患いつく暇もなく、母の美音が死んでしまったのである。

湯罐の時、玲子は、はじめて全裸の母を見た。眩いばかりに美しい母の死顔は、かすかに喜悦の色を含み、清らかに澄んでいたが、鼠蹊部を彩る色も鮮かな薔薇の刺青を見た時玲子は脳漿も凍りつくほどの衝撃を覚えたのだった。

ほんの一瞬、垣間見ただけで浅田屋の小母

さんによって巧みに隠蔽されてしまったので図形の記憶は定かではなかったが、蒼白い膚に滲みついた濃い朱と緑の華麗な色彩は、玲子の脳裏に、こびりついて離れなかった。

それは、あまりにも淫靡で、こよなく美しかった——玲子の心に、同性としての母に対して、嫉妬の情を燃やしたのは、後にも先にも、この時がはじめてで、最後だった……。

「それじゃあ、膚を見せてもらいましょうかい」

彫辰は、急にかめしい彫師の顔になってまともに玲子の眼の奥を覗きこみながら、例の塩辛い声でいった。

「パパ……」

玲子は、救いを求めるように、大作の顔を仰いだ。

無駄な努力とわかっていても、何の心の備えもないままに、野卑な彫師の前に裸身を曝すのは驚天動地の出来事だったのだ。

「彫辰さんのいう通りにするんだ」

「だって、パパ……」

「成人式のお祝いに、お母さんと同じ姿にしてやろうというんだ。わしのいうことがきけるのなら、縛るよ」

大作は、玲子の反応もたしかめずに、握り

しめた白い手首を、背後に捻じあげた。

縄が一筋かかっただけで、本能的に玲子は抵抗意欲を喪失した。大作は簡単に後手に縛りあげると、強く肩を引いて自分の膝に落とし、着物の裾をはだけて白い脛を露出させると、玲子の白足袋を穿いた足首を掴んで、ぐいと軀を二つに折り曲げた。

玲子は、自分の腿部や腰を覆った長襦袢や腰巻が、まるで肌から別れるのを惜しむかのように、柔らかく滑り落ち、やがて剥き出しになった臀部に、夜の冷気が忍びよってくるのを、目もくらむような羞恥の底で知覚していた……。

「旦那、こいつは先代よりも凄えや……」

彫辰は、大作の手にかかって、おもう存分開股させられた玲子の腿の間に、無遠慮に顔をのめりこませ、まるで物品を扱うように、剃り痕も生々しい下腹部に手をやって、つまんだり、撫でたり、指を喰いこませたりして吟味していたが、やがて上気した顔をあげて感に堪えぬ溜息を洩らした。

「やっぱり、食いもののせいかね、膚の張り具合が、何ともいえねえですよ。こうやって手をあてがっていると、しんしんと冷えてきます。脂が乗ってる証拠だね」

と、見られるのでさえ恥かしい個所に、じっと掌をあてて、女の膚の感触をたのしんでいた。

「どうだ、何時間ぐらいかかる？」

「へい、手彫りで行きてえから、五時間ととかな」

「これから、とりかかるかね？」

「善は急げだ。カーッときたところで、やっちまいたいね」

彫辰は、しかつめらしく着こんでいた背広を、乱雑に脱ぎ捨てると、禪一本の裸になって、きりきりと白い晒しを腹に巻いた。職人氣質というのだろうか、一刻の猶予もおかぬ気忙しさである。

大作は彫辰の動きに煽られて、玲子を抱き起こすと、これまた気忙しく、裸に剥いて縄をかけはじめた。玲子の意向に一顧も与えぬ冷厳さである。

厚いマットの上に、後手に括られて仰向けにされた玲子は、両足首に別々に縄をかけられて、二本の責め柱をつかったの、股裂きにあっていった。格別、柔軟な玲子の脚は、ほとんど水平に引き伸ばされても、その拷苦に耐えられた。

「旦那、この人を責めるわけじゃねえんです

から、もうちっと弛めておくんなさい。肝心のところに皺が寄っちゃまって、細工がやりにくいやね」

と、彫辰にたしなめられて、縄に弛みをもたせたくらいである。

玲子は、自分の周囲を慌しく歩きまわる二人の男の足を、虚ろに見ていた。気が転倒してしまつて、これから自分に加えられる苦痛を推しはかる余裕すら失ってしまったのだ。

彫辰は、人の字に張られた玲子の両脚の間に、きちんと正坐すると、アルコールを真新しいタオルにたっぷり浸して、青々と剃りあげられた腿のつけ根を、ごしごし磨きはじめた。

かすかに鼻を鳴らして、玲子は異様に冷たいアルコールの感触をこらえた。

大作は、マットにあがって、胡坐あぐらをかいた膝の間に、玲子の頭を挟みこみ、はかなく身悶える玲子の動きを封じた。

「旦那、行きやすぜ。絵柄を見ておくんなさい」

と、彫辰は声をかけて、古風な矢立てを口に銜えると、古びた筆を抜きとって、青磁の輝きを帯びた膚の上へ、さらさらと薔薇の下絵を描きはじめた。

眉間に深い縦皺を刻んで、懸命にむず痒さをこらえる玲子と彫辰の筆の先から生まれるみごとな薔薇の花を等分に眺めやりながら、大作は、複雑な感慨を抱いた。

——十八年たつて、また、新しい薔薇奴が生まれるんだ……。

すると愛いとおしさが、いっそう増して、一筋二筋、涕滴を光らせた玲子の頬に、おもわず愛撫の手を伸ばすのだった。



それから三日ほど、玲子は寝こんでしまった。

刺青の痕は地肌れがして、疼くように痛んだが、それ以上に刺青によってうけた精神的打撃が、玲子の繊細な神経をずたずたに引き裂き、すっかり参りこませてしまったのだ。

刺青が終わったのは、暁方近かった。

手足の縛しめをほどかれて、痺れ切った軀を抱えあげられ、手鏡に映した彫りあげたばかりの刺青を見せつけられたが、血が滲み、赤く腫れあがった薔薇の花を、格別、美しいとも、おもわなかった。

「玲子、お前は薔薇奴だ。わかるか？ おれ

のマークをつけた奴隷だぞ……他のだれにもやらん。わしのもんだ」

大作は、刺青の痕を濡れたタオルで冷やししながら、間断なく玲子の唇を吸い、のどから胸、腹から腿へと、狂おしい愛撫の手を伸ばしながら、呪文のように囁きつづけたが、玲子は、むしろ疎まうとましげに、白髪うしろの男の情欲の噴火を、うけとめていた。

かつて、どんなに厳しい責苦をうけても、玲子は愛情の奔りを感じとって、それに酔うことができた。

大作は、冷酷な飼主であると同時に、温かな父親であり、稚氣満々たる優しい恋人でもあった。特に、父親の顔も知らずに育った玲子は、いかつい体軀に似合わぬ、こまやかな気づかいをみせてくれる大作の中に、幻影の父を見出し、父の愛を貪ったのである。

しかし、刺青を施されてみると、父としての大作、恋人としての大作は、あとかたもなく消え失せて、冷酷なエゴイストの本性だけが覗いた。玲子は、暗然として、醒めた心境になった。

——このおじいちゃんいは、六十よ。あたしはたった二十才なのに……。

いまだかつて、大作の死後のことなど、考

えたこともなかった。しかし、今となつては股間の秘奥に大作の烙印を刻みつけたまま、長い長い余生を送るのは、あまりにも悲しくみじめで、絶対に許せないおもいに、かられた……。

「パパなんか、きらいよ……」

玲子は侵入してくる大作の舌塊を、懸命に押し戻し、ようやく喚きかけたが、再び唇を吸われて、「きらい」は、のど奥の、くぐもり声になった。

しかし玲子の、かたくなな反抗的挙動を読みとったのか、大作は綿のように疲れはてた玲子を浴室に引き摺って行って、シャワーの下で逆海老に括りあげ、哭いて許しを乞う玲子を見捨て、やおら冷水を浴びせかけたのである。

肉を抉ったような刺青の痕に、至近距離から噴射した冷水がたたきつけられたのだからたまらない。玲子は悪寒を覚え、身を削ぐ痛みに、のたうちまわった。

「パパ、おねがい……タオルをあてて」

と、息もきれぎれに懇願する玲子の顔に、無情にも、大作の足がかり、

「甘ったれるんじゃない。お前が、薔薇奴の自覚をもつまで、こつてりと仕込んでやるわ

い……ふ、ふ、苦しいか？ 辛いかな？」

と、悪鬼のように蹂躪するのだった。

——ああ、パパとあたしは、どんどん離れて行くわ……。

肉を削ぎ、骨を砕くような、業苦の嵐に苛まれながら、玲子は、隔絶した世界へ飛翔してしまつた大作を、必死に追ひ求めた。

しかし、白い矢となって射かけられるシャワーの飛沫は、膚に滲みついた薔薇の花卉を鮮かな真紅に燃えあがらせはしたが、どす黒い憎悪の澱みも蟠らせ、いつも拷苦の底で味わった甘い陶醉を、完全に奪ってしまった。

玲子の心は孤独の荒野をさまよつた——。

その荒涼とした悲しみの彼方に、奴隸になる前の無垢な姿が浮かびあがり、玲子の哀切感は、いっそう昂まって慟哭の淵に沈んだ。

玲子が、処女を奪われたのは、亡き母の初七日の晩だった。

母親の遺影を飾り、骨箱を安置した仏壇の前で、突然、大作に襲いかかられ、厳しい縛しめをうけた時は、驚愕のあまり、泣き叫ぶのも忘れたくらいだ。

かりそめにも父と呼んでいた男に、貞操を奪われるとは、夢想もしていなかったので、玲子はもはや、大作が人間でなく、巨大な妖

怪に変貌したとしか、おもわれなかった。

全裸に引き剥かれた玲子は、足指の股から膝の後の窪みに至るまで、ねちっこい唇による愛撫をうけて、悪寒が走った。

「美音……美音よ……」

大作は、泣き腫らした目から、なおも涙滴を迸らせて、玲子の軀をかき抱いたが、亡き母を慕う男の至情にほだされても、自分に加える凌辱を是認する気持には、どうしてもなれなかった。

灼熱した疼痛感に、背骨の髄まで軋ませながら、玲子は、早く母のもとへ行きたいとねがった。軀の芯は痺れていても、脳髄は不思議なくらい澄んでいて、獣欲にまみれた父であつた男の、刻々変化する表情を、霞んだ意識の底で、冷酷に捉えていた。

軀を離れた後も大作の嗜虐心はつのる一方で、清浄な股間を彩った破処女の惨血を、貪るように舐めとって、顔半分を朱に染めたまま、玲子の唇を吸おうとさえした。

「父さん……殺して！ あたしも、お母さんと同じ、お墓に埋めて……」

玲子は、滂沱と涕滴を溢れさせながらも、凜然と顎を引いて、大作を睨み据えた。

「そんなに、死にたいかな？」

玲子は、あどけなく頷いた。
「ようし、死ぬって、どういふことか、教えてやろう……」

大作は、長い包帯を持ち出すと、問答無用の冷酷さで、玲子の全身を、くまなく白布で覆いはじめた。両脚が、そろって一本の棒と

なり、両手を腰にあてがったまま、包帯に包みこまれると、直立不動の姿勢で、一匹の大魚のように括りあげられた。

胸から首、首から顔と、包帯の輪は這いあがって行き、玲子は生きたミイラになった。完全に白布の中に押し込められ、辛うじて、



イメージギャラリー 『彩りプレイ』 須坂 旭

鼻腔のあたりが外気に晒されていたので、最低限の呼吸はできたが、幽暗の中にいた。

大作は、そんな玲子を、浅い浴槽に抛りこみ、首だけを水面に覗かせて、間断なく流れる温湯の中に漬けた。

たちまち、包帯が水を含み、じわじわと玲子の膚を圧迫した。とくに口にくいこんだ布が濡れてくると、それは水の壁となって一切の呼吸を拒み、わずかに露出した鼻腔を切なく喘がせて、せわしげに空気を吸いこむばかりだった。

一時間、二時間と経過しても、大作は、温湯の中を遊ゆうよくする玲子を見守るだけだった。

発作をおこした精神病患者のために、温湯の中に放置しておく沐浴療法というのがあるが、玲子の場合にもこれがあてはまり、リズムカルに流れる水の刺激と、どうにも足掻きようもない緊縛のおかげで、猛り狂った感情も次第に鎮静してきた。

玲子はむしろ、孤独な安らぎを、たのしんだ。たのしみながら、奇妙な人恋しさに悩まされた。深山幽谷で修行に励む修道僧のような心境だった。

突然、外界との唯一の通路である鼻腔が、こじあけられ、スポイトのような器具で、生

臭い薬液が点下された。満足に首を動かすこともできないミイラ縛りの中で、心ゆくまで薬液の注入をうけ、玲子は激しく咽びながら薬液を嚥下した。

それは、強力な下剤だったらしく、錐を揉みこむような激痛が、たちまち下腹部一帯を襲い、閉じ合わされた双臀の谷間に、熱いものが滲み出てきた。

玲子は、異臭のただよう温湯の中で、一つ一つ人格を剥奪され、人間以外の何者かに変身させられて行く自分を、醒めたおもいでみつけていた。

そして、父子相姦という重罪を犯した玲子にとって、死に勝る汚辱と拷苦が、悲しい贖罪の途につながっているようにも、おもえた……。



「どうだい、今日の案配は？」

昼近くになると決まって浅田屋の小母さんが、姿をみせる――。

旅館兼仕出し屋のおかみさんとして、結構忙しいのに、十年一日の如く、玲子の妾宅に足をはこんで、掃除、洗濯、食事の世話と、

一切の面倒をみてくれていた。

玲子は、どんなに塞ぎこんだ時でも、小肥りで愛嬌のある小母さんの顔をみると、ほっとした。

母親の存命中から、この小母さんを母親同然におもい、実の親にもいえないようなことでも、この小母さんになら、平気で打ち明けられたのである。

「うん、もう今日から、おきるわ」

「まだ、痛むの？」

「いやあねえ、小母さん。へんなこと、きかないでよ……」

玲子は、耳朶まで赤くして、はにかんだ。

「玲ちゃん、気を廻さないでくれよ。あんたの旦那ツクったら、あたしのとこへ、じゃんじゃん電話をかけてきて、玲子はどうした、どんな案配だ」って、うるさくてかなわないんだよ……」

「あら、小母さんのとこなんかへかけなくたって、ここにも、ちゃんと電話はあるのに」

「それが、あの男のいいとこさね。年甲斐もなく、氣まりが悪いんだらうよ」

「どうして、氣まりが悪いのかしら？」

「あんなのおッ母さんに、同じような悪戯をした時もね、一カ月も寄りつかないもんだか

ら、どうして来ないんだって、あたしが代りに捻じこんでやったことがあるのさ。するといい草がいいじゃないか。何だか、もったいなくて、まぶしくて、拝みに行くのが、こわいんだって……あ、は、は」

と、底抜けに明るい小母さんの笑い声をきいていると、薄皮を剥ぐように、玲子の蟠りも淡くなって行くのだが、電話をよこさなければよこさないで、それが小さな棘となり、傷ついた心を疼かせる。

「きっと、どっかで浮気でもしてるんでしょよ、そんなうまいこといって……」

「そりゃそうかもしれないね。あんな白髪頭でも、クラブやキャバレーじゃ、結構もてるんだって、自慢してたよ」

「よして下さいよ、小母さん！」

「あら、今度は嫉妬かい……は、は、夫婦喧嘩は何とやらだよ。桑原、桑原……」

「やだなア、夫婦だなんて、あたしまで老けこんじゃうから、そんないい方なしにして、小母さん」

「強がりいってないで、玲ちゃんのほうから電話でもかけておやりよ。あの旦那ツク、きつと仕事もゴルフも放っぱらかして、あんなのとこへ、とんでくるよ」

「いやよ。あたしのほうから、かける筋合じやないわ」

玲子は、口ではきっぱりいつてのけたものの、煙草の匂いのしみこんだ大作の体臭が、奇妙になつかしくなつて、心が濡れた。

「そんなら、ラブレターでもお書きよ。省三を送りに今夜、東京駅に行くから、途中で届けてあげるよ」

「あら、省三さん、どこへ行くの？」

「春休みだから、能登のほうへ遊びに行くんだってさ。ほんとに、学生なんて気楽なもんじゃないか。この間までは、棍棒ふりまわして、あばれてたとおもったら、今度は旅行だ……少しは玲ちゃんでも見習うがいいんだ」

「そう、能登へ……いいわねえ」

と、玲子は、遠い彼方を見透かすような眼つきになった。

省三は、玲子の初恋の人だった。

「妾の子、妾の子」と、悪童どもに苛められて、渚の道を泣きながら歩いていると、浅田屋の三男坊の省三が追いかけて、貝を拾ったり、珍しい魚を掬ったりして、遊んでくれたものだ。

彼女が、中学生になった頃、浜木綿の花咲く浜辺で、二才年上の省三と、はじめて接吻

を交わした。

少年らしい、しなやかな腕に抱き締められると、玲子は無性に切なくなつて省三の胸にもたれて慟哭した。

「ごめん、玲ちゃん。堪忍してくれよ」

省三は、少女の細い肩に手をかけて、いじめっ子があやまるように、同じコトバを繰り返したが、玲子は強く頭を振って、

「省ちゃん、捨てないでね。捨てちゃ、いやよ……」

と、人生の荒波にもまれた年増女のようなセリフを吐いた。

玲子が、看護婦になりたいとおもいつめたのも、省三が友達相手に「将来は、薬大に入つて、病院に勤めるんだ」と話していたのがきっかけだった。

しかし、玲子の母の葬儀がすんで間もなく省三は、ぷいと家を出て三島の高校のそばに下宿してしまった。玲子は、それを小母さんからきかされて、はじめて母の跡を継ぎ孤独な妾宅の主になることを承諾したのである。

「あたしも、旅行したいなア……」

玲子は、身を起こして、海を眺めながら、しみじみといった。

「そうだねえ、あんただって若いんだから三

年も四年も、こんなとこに閉じこめられてたら、カビが生えちゃうわね……今度、旦那にたのんでごらんよ。案外、あっさり連れてくかもしれないよ」

「あたし独りで、行きたいんだ……」

省ちゃんと二人でと、いいたかったのを、無理にこらえて、独りといった。

玲子は、むらむらと、東京駅に行ってみたくなった。一目でいいから、省三に会いたくなった。ずいぶん長い間、音信不通だったが省三の心の隅にでもいいから、自分の面影を宿してほしいと、念じつづけてきた自分が、いじらしかった。

しかし、下腹部を疼かせる刺青の痕をおもつと、とたんに弱気になった。

——あたしは、もう、省ちゃんの前に出られる女じゃないんだ……

玲子は、むやみに感傷的になって、じーんと瞼を熱くした。

「ねえ、小母さん……」玲子は、しみ出た涙を見せまいとして、顔を背けながらいった。

「省ちゃん、あたしの噂をすることなんか、ある……？」

「ちっともきかないねえ。あいつ、香気坊だから、忘れちまったんだろ」

小母さんは、きわめて自然に、いつてのけた。

玲子は、こらえにこらえていたものが爆発して、とめどなく涙が溢れた。今日という今日は、おもいきり泣きたいとおもった。

「あら、ごめんね。あたしゃ、気にするようなこと、いっちゃったかね……」

枕を抱きしめて号泣する玲子の、慄える肩に手を伸ばしかけると、玲子は邪険に肩を揺すって、

「小母さん、あっちに行つて……玲子、独りにしといて……」

と、怒気を含んだ涙声でいった。

障子が閉まって、小母さんの足音が遠のくと、玲子は身を振って、慟哭した。

慟哭する臉の奥に、朱と緑も鮮かな薔薇の花が、二重にも三重にもなつて、妖しく燃えあがった……。

五

交換台から社長室に電話がつながるまで、ずいぶん長く、待たされた。

気の弱い玲子は、プツンと音のしなくなつた受話器を抱えていると、俄に動悸が昂ま

て、何度も電話を切ろうとおもった。

「あ、もしもし……柿沼だがね」

突然、大作の声が、耳朶をうった。馬鹿馬鹿しいくらい、乙にすました声である。

「あたし……玲子です」

と、蚊の鳴くような声でいうと、

「なんだ、お前か……伊関なんていいやがるから、どこのどいつかとおもった」

大作は、本来の調子に戻った。

伊関というのは、玲子の母親の戸籍上の姓で交換手に「どちらさまですか」ときかれてとっさに、いつてしまったのだ。

「パパ、会社にお電話なんかして、ごめんなさいね。今日、お召しが届いたもんですからあたし、すっかりうれしくなつて……」

と、玲子が、くどくど弁解をはじめると、

「ところで、痛みのほうは、どうだ？」

大作は、ズバリ訊ねた。

「ええ、すっかり、もう……」

「おれのプレゼントは、気に入ったかね」

「プレゼントというと、そのう……」

「とぼけちゃいかんよ、もちろん、薔薇のほうだ」

「あなた……」

玲子は、絶句した。せつかく、今朝届いた

ばかりの琉球紵のお召しを着て、電話でもい

いから、よろこんでいるさまを見てもらいたかつたのに、大作は玲子の恥かしがるようなことばかりいう。ちよっぴり、泪が滲んだ。

「おい、だまってちゃわからん。お前の感想をいつてみる」

「わかりません、すっかり隠れてしまいましたから……」

玲子は、拗ねた調子でいった。

「隠れたア？ わ、は、は。髭が生えたんだな」

「あなた電話で、そんなことまで……」

「いいから、お髭の声をきかせてみる。裾を捲つて、ぞりぞりやりやア、電話にも音が入るはずだ」

「いやですよ、そんなこと……」

「そんなら、電話を切る。おれは、忙しいんだ……重役会議を抜け出したんだから」

大作は、あきらかに不機嫌になった。

せつかく、過去の蟠^{わだかま}りを捨てて、大作の腕

に飛びこむつもりで電話したのに、こういう結果になるとは……玲子は、切端つまった気持になった。

「あなた、許してよ……怒らないで……」

「奴隷の分際で、いやですとは、何だ」

「すみません、あやまりますから……」

「許してやるから、おれのいう通りに、しなさい」

「あなた。玲子は、お待ちしてるのよ。いつ来て下さるか……」

「そんなこと、きいちゃいない。お前に用があるんじゃない。髭に用があるんだ。まだわからないのか！」

「わかりました。おっしゃる通りにしますわ……」

観念することは辛かったが、玲子は、頬を濡らす涕滴を静かに拭くと、角力取りのように腰を割って、着物の前をはだけた。そして緋色の腰巻の奥へ受話器を忍びこまずと、ブラシのように毛尖の突出した部分を擦りあげて、シャリシャリと陰微な音をさせはじめた……。

公衆の面前で、排泄を強要されるような羞恥が、こみあげて来て、玲子の屈曲した脚がわなないた。

受話器に伝わってくる大作の高笑いを玲子は膝を窄めてこらえようとした――。

こんなにあられもない痴態を曝したというのに、大作はいつになっても、あらわれな

った。

一週間たち、十日たつうちに、縄一筋かからない生活が、どうにもやりきれなくなっ

玲子の心は苛立った。

こうして、放置しておくことが、周到に計算された大作の責めなのだろうか。

――ひどいパパ……ほんとに、いじわるなパパ！

玲子は、頭の芯が疼いて眠れなくなった。

バラバラに分解してしまいそうな自分の軀をしっかりと縛りあげてくれる男の出現を待ち望んだ。縄目の奥におしこめてしまわない限り自分が自分でなくなるような倒錯的激情に襲われた。

破処女の玲子を、包帯で緊縛したミイラ責めが、今となっては痛切になつかしかった。包帯の奥で、サナギのように眠りこみ、やがて、繭を紡ぐように、包帯が解き放たれると玲子は、晴れがましく、大作の腕に抱きとられていた。

サナギが蝶になるような華麗な変身――それは、超現実的な陶酔の瞬間であり、人間の魂を売り渡して、被虐の十字架を背負った神聖な儀式であった。

玲子は、白い膚を覆った下腹部の贅りを、

次第に、うとましくおもうようになった。夢幻の美しさを湛えた、あでやかな薔薇が、いつまでも隠蔽されているのに、耐えられなくなった。

――あの薔薇を晒したい。

自分でもおどろくほどの渴仰ぶりだった。

あんなに嫌いだった剃毛が、今となっては甘美な期待、いや、それ以上に激しい貪婪な欲望に変わっていた……。

「あなた……剃ってよ。もう一度、あの薔薇が見たいの。何でもいうこときくわ。どんなに責められても、哭きません、あたし……剃ってちょうだい。あなた……」

洗い場のマットに仰臥して高々と足をかかげて開股しながら、幻の責め手に哀願した。

それは神聖な祭殿に捧げられた生け贄の女のようにも見えたし、自淫にふける淫蕩な娼婦のようにも見えた。

窓ガラスを透かして春の寂光が忍びこみ、愛しい薔薇奴を愛撫するかのよう、白い裸身を、くまなく照らし出した。

海を渡ってくる風は、潮の香とともに、濃艶な春の匂いを運んできた。

しかし、大作は、まだ現われなかった。

――（おわり）――

慕情告白

前田真知子はどこに？

利根川 五郎



一九七一年一月号に、さっそうと登場し、臨時増刊号の花形となった前田真知子は、そ

そして、おそらく服を着ていれば、あまりめだつほどでない乳房。だが、その全裸の豊か

の後まったく姿を消した。

前田真知子はどこに――

前田真知子に対する私の慕情をつづってみよう。

前田真知子は、東京の某大学の学生だという。そのように、伶俐そうな顔。ちようど首だけをかくす、くせのない髪。

さは、男どもを悩殺するに充分である。大臀筋に支えられた実によくはった腰を、仔細に視れば、はいていたパンティのあと――。

パンティのゴムがつよいか、彼女の無染めの肌がつよいか、相争うた跡のようである。さらに太腿の美しさは、えもいえない。なにやら植物のように健康で、それでいて掌を触れれば、その温かさは、彼女の心がそうであるように、再び離すのを惜しませるのではないだろうか。そして、われわれには見えぬ秘かな処は、どのような美しい花が咲き乱れていることだろうか。

しかし、見よ。彼女の無染めの肌には、きつい、よごれた、おそらく何人もの女達の肌を知っている黒い縄が、情無用と巻いているさまを見よ。その表情は、緊縛されたからといって、そこに快感のようすがない。そこがたまらなく美しいのだ。

首を巻き、やがて股間におりてゆく縄。縄は、女をまっぷたつに割って、うしろにまわされ、ぐいともちあげられて、腕にしばらく留まる。おう、おう、といって私は、彼女の肩を抱き、くびれた乳にくちをつけ、そして女の奥処にまで、くちをつけて、いつくしんであげたい。

女が、なぜ裸身を晒し、恥かしい処まで意図的に見せて、あまつさえ、いましめられてそこに快感をみようとするのだろうか。

男が、いとおしい女をなぶり、いましめようと欲し、それでいて、縛った女体を、このうえもなく、いたわろうとする、謂わば心のメカニズムは、いったい、なにか。

そして、そのおおかたが、男女、SとMが交替可能なのは、なぜか。

ほかでもない。それは、われわれが、現に浮世に生きているという事情が、それぞれの精神を、がんじがらめにしぼりつけ、または縛りつけられているという状況が、そうさせるのである。

愛するものを愛していると
 いえない。愛されているはず
 のものに、愛されているとい
 う証しをみせてもらうことが
 できない。そんな住みにくい
 浮世で、いっそのこと愛して
 いる女を、愛しているという
 ことは、たとえば私が前田真
 知子を愛しているということ
 は、私の精神が前田真知子に
 所有されているという謂れで
 あり、現に私が所有されてい
 るのに、彼女が意図的に、積
 極的に私の精神を、つかみと
 ってくれない、という不満で
 ある。

ならばその女を、ひとおも

いに縛りあげ、私の掌上におき、おもうさま
 愛でよう、と思うのである。

人の生命は、個人的なものである。愛して
 も、愛しきれるものではない。やさしくして
 も、やさしくしきれるものではない。

だから、われわれは、一本の縄で、愛する
 女の肉体と精神を、がんじがらめに縛りあげ
 その精神の全体をひとり占めしようとするの
 である。愛するものに対する独占の願いこそ
 が、われわれの、すくなくとも私の、女体緊
 縛願望の謎を解く鍵である。

前田真知子が、みずから裸身をさらし、し
 かも縛られ、数人の男に見られ、写真をとら
 れようと望んだのは、露出癖であるとか、自
 己愛過剰というようなフロイト流の解釈も成
 立するだろうけれど、彼女の心の、もっとも
 深いところにあるものは、彼女の精神と肉体
 を、全き姿で、愛するものに、完全に所有さ
 れたいという、女なるが故の願いが、そうさ
 せたのである。

これは、荒尾慶子についても然りである。
 愛されているという状態は、精神を所有さ

れているということであり、そ
 の形象が肉体捕縛なのである。
 手も足もでないように縛りあげ
 られ、そうした状態で、あらゆる
 部分を、愛されるというほど
 の快感が、われわれの世界に他
 にあるといえるだろうか。

前田真知子萬歳。

できるなら君を、この写真に
 あるように、がんじがらめにし
 ばりあげ、あますところなく、
 くちをつけてゆきたい。

前田真知子は、同じ東京にい
 る。

一千万都民を、ひとりひとり
 しらみつぶしにして、君をみつ
 けだそうか――。



カット・豪 城二

懸賞入選創作



賽

目

無

残

ゆ い 狷 介

序 章

贅沢の粹を凝らした、豪華なバス・ルームである。

高い天井から垂れたロープに、素裸の女が万才の形に立ち縛りにされ、八の字に広げられた下肢には、青竹が固定されている。

円い肩に頸を埋めて震えるその女の下肢のつけ根に、節くれ立った手が伸びて、漆黒の纖毛を一巻きすると、無雑作に引き巻いた。

「——ああッ！」

つんざくような悲鳴が、バスルーム内の湿った空気を震わせた。

「名前……」

抑揚のない声で尋ねた男は、女体の纖毛を少しずつ束ねては、巻取る。

「——ヒイツ、由、由香子」

「トシ、なんぼや……」

「十七……ツウウッ」

「ふん。仲々ええ玉やの……パン助にするに惜しいわい。お前にヤキ入れたれちゅうこ

っちゃが、これも何かの因縁や。せいぜい楽しまして貰おか」

異様な程、眼光に陰のある、大阪弁のこの男——判っきりした素姓は知れず、ただ、関西一円の筋者には、通称「シバ健」と呼ばれる。

一匹狼の賭博師、柴村健治郎である。

「遁ズラしよったそやないか。サツにタレこむ氣イやったんかい。そらあかんで……九州から北海道の果て、日本国中どこへ隠れても必ず若い衆が見つつけ出して半殺しや——ええ

か！二度と変な了見、起こさんこっちゃ。

今夜は儂の流儀でゆっくり可愛がったる」

腸に染みいるような、ドスの利いた声音で脅しをかけながら、尚も柴村は、無表情に作業を続ける。

「あぐうッ！」

ブツツ、と微かな、鈍い音を残して、雫られた纖毛がタイル張りの床に散った。

その女——由香子は、小さな花卉のような下唇を噛みしめ、激痛とともに足元に散る自らの纖毛を、悄然と眺めている。

白磁色に波打つその下腹部に、既に鬚りとなるものはなく、項垂れた彼女の目に、浅ましい姿が、くっきりと映るのだった。

「どや、綺麗になったやないか。おまえ、十七やったなア……」

抜毛されて薄く血の滲んだ部分を、柴村の指腹がなずり、ほどなく、内奥に侵入しようと蠢き始めた。

抗らうことの無理な姿勢である。

由香子は、されるが俚になっていた。

彼女と同じように、リンチにあった仲間の女が、片足だけで一晩中、逆吊りにされ、見るも無残な責めを受けた挙句、全身を醜く鬱血させて死んでいった。そのときの光景が、

ふと脳裡を掠める。

が、それも束の間——由香子は狼狽した。

女としての体が、勝手に熱く反応し始めたのだ。

柴村の指先から発する、めくるめくような感覚が、微かな太鼓のように響いて、手足の隅々まで波及し、痺れさせるのである。

「ああ……」

（そこは、いや！）と言いかけて由香子は、口を噤んだ。意志とは関りなく、追い上げられ、昂まりゆく自らの肉体と、必死に闘うしかなかったのである。

尚も柴村の指先は、攻撃を続けてくる。

羞恥に喘ぐ由香子は、十二分に煮沸された蜜が今にも噴き溢れそうになるのを懸命に堪え、小刻みに裸身を痙攣させる。

（たすけて、お姉さん……何処にいるの。いま何処に……由香子はもう……ああッ、お姉さん！）

名状し難い呻きとともに、攻め落とされた無念の熱涙が、柴村の掌を濡らした。

「——ええ声で啼きよる」

薄い唇を微かな笑みに歪めた柴村は、傍の浴槽に、ゆっくりと手を浸す。と、やおらその湯を一掬い、女体の、まだ余韻にくすぶる

燃え跡目がけて、バシヤツと、ぶちまけた。

「……キヤァッ！」

俄に激甚、灼爛するような痛みが、由香子の抜毛された部分を襲った。

「どや？ 硝酸銀の味は。ただの湯でのうて悪かったの。毛エ抜いて硝酸銀入りの湯をかける——こいつは効くやろ」

言いながら柴村は、湯を掬うと、今度は丹念に擦りこみ始めたのである。

「ヒイツ、やめて！ やめて下さい。か、かんにん——ああッ！ つううッ……」

真赤に焼けた、鋭い刃で抉られるような、激痛である。

由香子は、小粒の齒並びをカチカチと鳴らし、天井から垂れて手首を縛る太いロープを握りしめて呻いた。

「なんじゃ、これ位で音あげとったら、儂の出る幕もないわい。——さあて、今からが本番や。湯加減もええ……」

言いながら柴村は小さなケースを出した。その手に掴み出された縫い針の束を見て、

由香子は、凍りつくような戦慄が、五体に走り抜けるのを覚えた。

「——い、いや。堪忍して！ もう逃げたりしません。お願い……」

「やかましいッ！ 遁ズラしよった女子が、
どんな目に合うか、よう覚えとけ！」

大の字に立ち縛りにされたまま激しく右に
左に、身を振って哀願する由香子——その、
十七才とも思えぬ熟れた胸乳に、苛責の手が
伸びた。

柔らかい絹餅の感触を、暫し、掌に受けた
柴村は、

「勿体ない……ちいと勿体ないのう」

そう独り呟き、グイと右の乳房を鷲掴みす
るや、

「こうじゃ！」

喚きさま、手にした縫い針を突き立てた。

「——ヒューッ！」

鋭い絶叫を迸らせ、由香子は、背筋を弓の
ように、のけ反らせた。

今や柴村は、狂気に近い形相で、次々と針
を突き立てていくのだ。左右の乳房を交互に
掴んで、一本、また一本と、見る間に十数本
——白く、たおやかな胸乳に、様々な角度か
ら、深々と。

由香子の意識は、朦朧とした世界を彷徨い
始めていた。

「これが地獄の針山ちゅうんじゃい——」

と、額の汗を拭う柴村の眼光が、ますます

凄味を増す。柴村は、憑かれたように熱中し
ていった。

まさに、地獄かも知れなかった。

由香子の、透きとおるような雪白の双臀に
一面、針が突き立てられ、小刻みに慄える二
の腕にも十数本の針。そして最後に、とりわ
け柔らかい両腿の内側に数本ずつの針が突き
立てられたとき、彼女は、一際高く咆哮し顎
をのけ反らせて、失禁していた。

全身に無数の針の衣を纏わされ、由香子は
形の良い唇を苦痛に歪めて、弱々しく哀願す
るのだった。

「むうッ。か、堪忍して……針を……」

が、あとは言葉にならず、振り絞るような
呻吟が洩れただけである。声帯の発する僅か
な震動さえ針に伝わって、彼女の全身を強襲
するのだ。

だが、柴村のヤキ入れは、これだけではな
かった。

文字通り針の山となって、キラキラと金属
的に輝く双房——。

柴村は、その小さな、ピンノ色の乳頭を掴
むや、激しく揺さ振り、こね廻しめたので
ある。

「——あうッ！」

弾け飛んだ針の跡に、玉となった鮮血が、
ポツリと浮かぶ。

あまりの激痛に、再び遠のいてゆく意識の
なかで、由香子は、死というものが、彼女を
不思議な甘美さで恍惚の奈落に誘いこむのを
覚えていた。

始めて知らされる、愉悦の世界であった。

死の深淵から快楽の絶頂へ——彼女は一種
の本能的な確かさで、かき昇っていった。

「殺して……ああ、殺して……」

由香子は、苦悶とも歓喜ともつかぬ表情を
浮かべ、微かに何度か、そう口走った。

が、それも次第に意味のない、うわ言にな
っていった。

今や血の気も失せ、天井から垂れたロープ
に力なく縋る由香子……。

不気味に北叟笑んだ柴村は、手際良く、女
体から針を抜き取ってゆく、そして最後の仕
上げにかかるべく、ぐったりとなった女体を
嚴重に縛り直すのだ。

まず、息も絶え絶えに喘ぐ由香子を俯伏せ
にすると、後ろ手に縛る。ついで足首をも揃
えて固く縛る。さらに、その手足の縄目を、
それぞれ背後で極限にまで近づけ、緊め上げ

た。

逆海老である。

柴村は、荷物のごとく折り畳まれた女体を軽々と抱え上げ、傍の浴槽に、いとも無造作に投じた。

浴槽に満たされた劇薬の溶液が、すぐにも効果を表わす筈である——。

「あッ——ヒョーッ！」

眩い光の下で、逆海老に縛られたまま、水しぶきをあげ、のたうつ由香子の、人間の声とも思えぬ凄惨な絶叫が、何度も進み、甲高い反響となって、広いバスルーム内に響き渡った。



「さあ！ ないかないか、半はないか——」

二の腕から背中にかけて華麗な鬼面の彫り物をみせ、白鉢巻を締めた半裸の男が、一同を、ずいといと見渡す。

「よろしいか……はい、コマ揃いました——勝負っ！」

その男を取り囲むように犄めき合う、十人余りの血走った目が、一斉に壺を凝視した。

同じビル——一、二階は倉庫と事務所。四

階にバスルームがあり、賭場が開かれているのは、三階の一室である。

室内には、異様に緊迫した熱気に加えて、濛々たる紫煙がたち籠め、束ねられた一万円札が、まるで紙屑のように飛び交っていた。

この賭場では、一夜にして数百万、時には一千万近くの金が動く。

客筋は馴染みに限られ、それだけに、数は少ないが、芸能人、企業主、政治家など、その他、いずれも壮々たるメンバーである。

貸元は蔦川寅一。

表向きは『蔦川貿易株式会社』との金看板を、このビルに挙げ、取締役社長として実際に宝石の輸入、加工、卸しを業とするが、前身はレッキとした筋者、蔦川組代貸で、以前は、かなり大規模なシマを押さえていた人物である。

その蔦川が、若くして関西で暴れ廻った頃の、唯一ともいえるヒキ（相棒）が、『シバ健』こと柴村健治郎であった。

賽コロ一本で名を成した柴村に対して、蔦川は、恐喝、詐欺、売春などにも手を出す、いうならば、軟派の筋者なのである。

そして、由香子もまた、その網に掛かった一人であった。

姉を頼ってこの町に来たものの、既にその行方は知れず、途方に暮れていたところが、壺振りの欽治という、小指のない男に眼をつけられ……という次第である。

「ヘイ、お遊びさんで。さ、どうぞ——」

使い走りの三下、政吉に案内されて、ダブルを着込んだ初老の男が入ってきた。

男は、魔法瓶から燗酒を受けながら、数人の挨拶の声に鷹揚に頷く。

先刻から蔦川は、客に混じって片隅に陣取る紅一点、紀代という張手を、それとなく窺っていた。

紀代は、淡い牡丹粧を小粋に着流し、とりたてて飾り気のない、清楚な身形である。

その襟許に、こぼれるような白い肌艶は、どうみてもまだ二十四、五——蔦川は、そう踏んでいる。

「二六の丁！」

吼えるような声に続いて、今また、紀代の前に札幌の山が押しやられた。

勝負の進行は、着実に紀代のペースであった。

つい四カ月前のこと、馴染み客の一人に紹介されて以来、時々この賭場に顔を出すようになった紀代は『……まだ駈け出しで』と

いう触れ込みにも拘らず、その勝負勘といい度胸といい、どうして、もう一端の業師に違いないのは明らかであった。

勿論、そんな玄人跳の張手にテラ銭を掠められて、みすみす黙っている鳶川ではない。

が、紀代の方も心得ていて、『お陰様で受かりました』と丁寧に挨拶しては、必ず何がしかを置いて帰るのであった。

だが、今の鳶川にとって、そんな金など問題ではない。つまるところ、紀代を手中にする機会をこそ虎視眈々と狙っているのだ。

端正に坐した紀代の腰の辺りの膨らみ、どこか凛とした、冷たく冴え、謎めいた美しさをもつ風貌——鳶川は、年甲斐もなく溜息混じりに眺めると、何杯目の酒を呷って席を立った。

快い冷気に触れながら、雪駄を響かせて階段を上がった鳶川は、すぐ右手にある、バス・ルームのドアを押した。

渦巻く湯気の下に、転がされた女が、微かに嗚咽している。

由香子であった。

「おうシバ健、やっとなるか。どうだ——下で一丁打たんか」

と、壺を振る仕種をする鳶川に、
「そやのう、僕は、こっちの方が、ええんじやが……」

一服していた柴村が、気の乗らぬ返事をした。

「ワッハッハ……相も変わらずって奴だ。まあ聞け。ちょっとばかりキツ（手強）い相手だが、こいつでハメてくれんか——」

言いながら鳶川は、二個の賽を出した。

精巧な仕掛け賽であった。

「勿論差しでやる。お前の腕なら造作もねえこった。こいつと、すり替えたら折りをみて騒いでくれ。あとは俺に任せろ——どうだ」

紀代にイカサマの濡れ衣をきかせてから、ゆっくり料理しようという鳶川の魂胆である。

「なんや、トウシロウ（素人）相手にグラ賽か？」

「それがキツいんだ。女だがな」

「女子やてエ？」

柴村が素ッ頓狂な声をあげ、ピクリと小鼻を蠢かした。

鳶川は、得たりとばかり頷く。

「ああ——しかも、とびきりの上玉ときた」

「そうか、とびきりの上玉かア……それを早ヨ言わんかい」

と早速、立とうとする柴村を、鳶川は押しとどめる。

「まあ待て、今頃行ってみろ、肝心の寺銭がさっぱりだ。それより——」

と、床に転がされた女体の、ピンク色の乳首の辺りを足先で嬲りながら、

「この由香子と、ちよっぴり愉しんでからでもよからう」

徳利シャツをかなぐり捨てると鳶川は、由香子のいましめを解きにかかった。

「それもそうじゃ。ついでに芸術映画といこうや——」

と、ニヤリとしてカメラの用意をする柴村である。

「派手に凄いヤツ頼むでエ。二本ともカラーやからの」

言いながら柴村は、二台の8ミリを器用に操って構えた。

「——よし、いくぜ」

鳶川は、覆面代わりの縋帯を両眼に巻き、手指の関節を鳴らした。

フィルムが、冷たい機械音をたてて廻り始めた。

素裸の女が追われ、青竹で打ちのめされるというのが、最初のシーンらしかった。が、

もとより筋書きなど、あろう筈もない。少し酒も廻った蔦川は、容赦なく、本気で打ち据えるのだ。

ビュッと唸った太い青竹が、由香子の丸まった背中に飛んだ。

「——ヒッ！」

続く一撃は、むっちりと艶やかに光る双臀に、小気味よい音をたてて炸裂した。

「あうッ——ゆ、許して！」

不様に這いつくばって哀願する由香子の悲しげな表情を、柴村の8ミリが執拗に追う。

「ワッハッハ……もっと逃げろ。派手に逃げ廻れッ！」

さらに激しい青竹が、肩といわず、腿といわず、ところかまわず躍り狂う。

由香子は、火がついたように転げ廻り、呻いた。

「そうれっ、こういうのはどうだ……」

バスルームの隅に追いつめられ、震えおののく由香子の豊かな胸の隆起を、青竹の先が襲った。

「イイ……うぐうッ……」

身を振り、必死に攻撃から逃れようとする由香子の美しい顔が、みるみる紅潮する。

息つく間もなく、その両足首がグイと掴ま

れ、再び中央に引きずり出される。

いきなり、蔦川の充分な怒張が、由香子の眼前につき出された。

「言っとくが、変な真似をするんじゃないぜ——八つ裂きにされたくないやな」

そして、それは可憐な花卉にあてがわれたのである。

「……ああ……んッ……」

熱さが紅唇を割り、おぞましい屈辱が舌を圧する……身震いしながらも由香子は、従順に、健気な努力を始めねばならなかった。

近寄った柴村が、その光景をアップで撮影する。

由香子の小粒の歯並びの間から、薄赤色の柔軟な舌先が戯れるようにチロチロと覗く。

喘ぐような彼女の呼吸と、微かな水音らしきものが、暫し続いた。

蔦川は一瞬、由香子とは別の女——紀代を追って、昇天した。

可憐な咽喉を大きく動かした由香子は汚辱に塗れた唇を震わせて、再びせつなげな鳴咽を洩らし始めた。

小さな奔流の痕跡が、まだあどけなさの残る彼女の頬にまで飛散していた。

「さあて、そろそろ行くか」

「——おう」

蔦川と柴村は、二人がかりで由香子を再び雁字搦目に縛り上げると、バスルームをあとにした。

二

夜半も過ぎ、賭場の活気は、いよいよ最高潮となっていた。

まず蔦川が、皆に柴村を紹介する。

「ご一同さん。すまんが、こゝらでちょっとケン（見）にしてくれねえか。此奴がそちらの紀代さんと差して打ちたいそうだ。此奴は関西でシバ健といわれた……」

「半端な業師やが、どうぞ宜しゅうに」

あとを続けて柴村は、紀代を一瞥した。

（紀代か……なるほど美人や。だが……キツい）

それは、何度も修羅場を踏んだ勝負師だけに通ずる、特有の勘である。

（下手は打てんの……）

懷中に、グラ賽を握りしめた柴村の手が、じっとり汗ばむ。

紀代は、少し後へ引き、右手の掌を柴村に向けて、三寸に指した。

相手に敬意を表するという意味である。

そして、その切れ長の美しい瞳を伏せがちに、丁寧な挨拶を返した。

「紀代と申します。ご昵懇に願います。あたくしのような駆け出し者で宜しければ、お相手、務めさせて戴きます」

低い、澄んだ声音である。

紀代にとっても、関西一と謳われたシバ健と打つといえば、まず光栄であり、名を挙げるにも、またとない機会であった。

その紀代の突き刺すような気魄に、ともすると圧倒されそうに感ずるのは、普段の柴村らしくもないことである。

が、そんな表情を、暖にも出すような柴村ではない。

「紀代さんとやら、まあ堅苦しい仁義は抜きじゃ。それよりまず一杯、受けてくれんか」

と、切った盃に酒を注いだのである。

それを受けて紀代は、軽く乾す――

「ほう、仲々いけるのう」

その瞬間――

柴村の技は、終わった。

鳶川でさえも気づかぬ程の素早さである。

それまで使われていた賽は、柴村の掌の皺に、ひっそりと挟まれていた。今、盃にある

のがグラ賽というわけである。

顔色一つ変えずに、柴村が言う。

「早速やが、始めるかの。さ、遠慮はいらん――紀代さんから振ってもらおう」

喧噪と熱気は、嘘のように失せていた。

貸元の鳶川、欽治、政吉、それに七名の客は、この珍しい一戦を、固唾を呑んで見守っている。

まず、双方から五十のコマが出された。

紀代は、一礼し、壺を手にする。

「ではお言葉に甘えて、不束ながら、執らせて戴きます」

「――うむ」

作法通り、賽と壺を相手に示した紀代は、静かに柴村を見捉えたまま交叉させた両の手を、素早く水平に掃った。

既に、二個の賽は壺に収まり、カラカラと乾いた音をたてている。

誰もが始めて見る、紀代の見事な賽捌きであった。

「――半！」

と、鋭い柴村の声。

すれば、紀代は丁である。

「よろしいか……。勝負っ！」

果して目は、三五の丁。

「おう、ハナ（最初）の三五郎か……。やるのう、紀代さん。さ、続けてくれ」

と、新たに五十のコマを積みつつ、柴村は内心、北叟笑んでいた。目は、何度やっても三五の丁――充分に承知の上である。

紀代は、再び寸分違わぬ見事な賽捌きを見せ、柴村の決目を待った。

刹那――。そのしなやかな手が、柴村の右手にしっかりと掴まれる。

「またんかい」

「なっ、何をなさいます！」

「おのれの胸に問うてみい。こんなモンで、僕の眼が胡魔化せると思うとんのか」

言うが早い柴村は、賽を抓むと、カリッと噛み割ってみせた。

不審げに見ていた客達も、一斉に騒めく。

「おい紀代。一体こらア何の真似じゃい」

「い、いえ、あたくしは決してそんな……」

「とぼけるなっ！」

柴村の一喝に、不気味な静寂が流れた。

こうなっては、既に技を仕掛けた者は知れぬ。つまり、誰であれ、それを見破った者が優位に立つ。それが、この世界の不文律である。

相手が、いかに聞こえたシバ健といえども

紀代は、その最も初歩的な心得を、忘れるべきではなかったのである。

逆に、鳶川・柴村側の狙いも、その点にあった。

予定通り鳶川が、一座の沈黙を破って、慣れた調子の科白を吐く。

「持つもご法度のグラ賽……。シバ健の名に

泥を塗ったばかりか、ご一同さんにも、さんさんの迷惑。ひいては貸元の俺の沽券まで丸潰れだ。指の一本や二本差し出して済むってもんじゃねえ。とっくに覚悟はできている筈だが簀巻にして三途の河にブチ込まれた処で文句は言えねえ掟だ。^{きまり}さあ紀代。ここは、どいういふ詫びをいれる心算だ——」



——イメージギャラリー——

『大の字晒し』——小川茂正——

「……」

紀代は、自らの迂闊さを悔みつつ、悄然と項垂れていた。

「構わねえ。おう——」

と鳶川が、左右に目配せした。

ゾロリと立ったのは、欽治と政吉である。

紀代は、半身に構え、隠し持った白鞘を秘かに握りしめた。が、すぐさま手を離すと、
「わかりました……。あたくしで済むことなら、どうぞご存分に、気の済むようになさって下さいまし」

きっぱりと言ったのである。

イカサマでも、勝負は勝負——

微妙な賽の目にコマを張るということは、即ち、生命を張るということである。紀代は今、その命懸けの勝負に敗れたのであった。
「よし、いい度胸だ。欽治、政。縛りあげろっ」

鳶川が麻縄を投げてよこすと、たちまち、紀代の両足首は二人の男によって別々に縛られ、苦もなく壁際まで引きずられていった。

三

その壁の上方、天井近くに二米位の間隔で

鉄製の輪が打ち込まれている。

賭場が開けた後、客の前に引き出された女が余興のシヨウとして責められるための小道具や、ブルーフィルム映写用のスクリーンも揃っていた。元々賭博も非合法なら、その種のシヨウも非合法。正視に堪えぬ、赤裸々な代物であった。

紀代は、捲れあがった裾を掻き合わせると努めて落ち着いた声音で言った。

「今更、逃げも致しません。この縄目は、お解き下さいまし」

だが、鳶川はゆっくりと、煙草に火を点ける。

「いやなあに。——物騒な道具で斬ったり突いたりしようってんじゃねえ。ご迷惑をかけた皆さんにもお詫^{かたがた}び、いつもの面白いシヨウを、ご覧にいれようって寸法だ」

「そ、それでは……」

全てを察し、絶句した紀代の、美しく繊細な表情が凍りついた。

「——卑怯者っ！」

屹っと鳶川を見捉え、立ち上がろうとした途端、紀代は、足首の縄尻を引かれて突っ伏した。

間髪をいれず、襲いかかった欽治と政吉が

その手足を押さえ、素早く帯を解くと、紀代の牡丹緋を引き裂くように剥ぎ取った。

オウ、とあちこちで、感嘆とも溜息ともつかぬ声があがった。

真っ白い細身の褌が、ぬめぬめと艶やかに光る、紀代の形の良い双臀に喰いこみ、深々と陥没しているのであった。

「ほう……女だてらに褌とは、また大した心掛けじゃねえか。なあ紀代。これで竜の刺青^{がまん}でも彫ってみろよ、立派に中盆が立つぜ。ええ？　ワッハッハ」

「……ひ、卑怯な。この怨みは、きつと——ああッ」

屈辱に震える紀代の声を中断したのは、欽治と政吉であった。両足首の縄が、壁に打ち込まれた二本の鉄輪に別々に通され、ググーッと引き絞られたのである。

被虐の女の開股逆吊りが、同時に出来上がつていた。

鳶川の声を待つまでもない。ニヤリと笑った欽治は、紀代の手首を背後に回して縛り上げると、愉しげに、ゆっくりと白木綿の晒を解いていくのだ。

締めつけられていた紀代の胸乳が、見事な量感で躍り出る。ついで、その艶々とした下

腹の翳りから臍の辺りにかけての雪白の柔肌には、縦にくっきりと、褌の跡があった。

数人の男がゴクリと生唾を呑み、またある男は指に挟んだ煙草を微かに震われていた。

凡そ場違いな咳払いが聞こえた他は、全く静まりかえっている。

素裸に剥かれたうえ、逆吊りの姿態を晒した紀代は、無残に開かれた下肢の一点に集中する、何人もの粘りつくような視線を避ける術もなく、その耳朶までを羞恥の色に染め、下唇を噛みしめていた。ただ、不様な呻き声は洩らすまいとしていたのである。

うら若い女としての性を勝負のために捨て包み隠した紀代が、何人もの男達の前で、あられもなく悶え狂う——そのさまを思っただけで鳶川は、表情も緩み、熱っぽい眼差しで紀代の素肌を舐め廻すのであった。

「あいよっ——お待ち遠さんで」

ドアを開けた政吉が、バス用の洗面器を手には、そろそろと運ぶ。

続いて、一糸纏わぬ姿の由香子が、欽治に小突かれ、よろめいて部屋に入った。

全身のあちこちに痣も生々しい由香子は、犇めき合う男達の眼前に、いきなり引き出さ

れて、呆然と立ち竦んだ。そしてそこに、無残な紀代の姿態を目にした途端、声もなくその場に崩折れた。

「今日の役者は、これで揃ったってわけだ。

さあ早エとこ、始めろい」

目をギラつかせた鳶川が、捉す。

「——あッ！」

由香子は欽治に、したたか腰を蹴られ、転ぶように、紀代の傍にうずくまった。

そして、改めて紀代の顔を、まじまじと凝視した——と、彼女は、

「……姉さん。……お姉さんっ！」

悲痛に叫んだのである。

柴村が目を剥いた。

「——なっ、何やてェ？」

「由、由香ちゃん！ どうしてこんな……」

と言いかけて、紀代は息を呑んだ。

痛々しい妹の全身の痣と、幼女のように抜毛された下腹部。そして、彼女自らもまた、

眼をそむけるような姿に……。

三年半振りの、あまりに、むごい対面であった。

「そうかい……そうだったのかい。こいつは面白え。紀代の妹だよ。ワッハッハ」

哄笑する鳶川に、縋りつくように紀代が言

った。

「由香子を、妹を許してやって下さい。あたしが、どんな仕打ちもお受けします。お願いです！ 妹だけは……」

「フフフ、まあそう恐い顔をするねえ。お前も可愛い妹の手で苛められりゃあ、本望だろうて。——欽治」

「——ヘイッ」

「そいつも由香子に渡してやれ」

「——はい、きた」

欽治が、鈍く光る物を由香子の手は無理矢理、握らせようとした。が、由香子は、弱々しく頸を振って、二、三步、後退りした。

それは、石鹼水を満たした浣腸器である。

「甘ったれるねえっ！」

素早い欽治の平手が、彼女の両頬に音高く炸裂し、脇腹に固い拳が、めり込む。

「あぐうッ——」

呻いて、ふっ飛んだ由香子の体が、海老のように折れ曲がる。

紀代が必死に叫んだ。

「——ま、待って！ 後生です、鳶川さん。

これ以上、妹に手荒なことをしないで下さい仰有る通り……由香子にさせます……」

「よかろう。おう、欽治——やめろ」

と、鳶川。

紀代はもう、全ての抵抗を諦めるつもりであった。

「由香ちゃん。それを取って、お姉さんに、して頂戴——」

「で、でも、そんな……」

「——早く！」

叱りつけるような紀代の声に気圧されて、由香子は、おずおずと、そのおぞましい浣腸器を手にし、躊躇り寄った。そして、剥き出しになった姉の艶やかな双臀に、震える手を添えたのである。

細い嘴管は、スルリと収まった。

冷たい石鹼水が、微かな音をたてて紀代の体内に侵入し、僅かな残滴が、その背筋を伝って流れた。

「もう一度、やってみろ、由香子」

鳶川の、つつけんどんな声である。

欽治が浣腸器に、たっぷりと液を満たし、再び由香子の手握らせる。

紀代の体内では、早くも刺激的な液との苦しい斗いが始まっていた。

美しく繊細な眉根を、せつなげに寄せた紀代は、妹の手による二回目の注入を、祈るような思いで受け容れるのだった。

この妍艶の姉妹の姿に、満足そうに薄笑いを浮かべた薫川が、冷たく言い放つ。

「仲々うめえもんだぜ、由香子。さあ、もう一度だ——今度は、皆さんにも、よく見えるようにな」

「お、お姉さんっ！ ああ、もういや……できない」

と由香子は、耐えきれなくなったように、姉の体を縛と抱きしめて嗚咽するのだった。

「駄目、由香ちゃん、泣かないで……言われた通りにして——」

その黒く澄んだ瞳を翳らせて自ら苦悶しながらも紀代は、優しく言ったのである。

だが、強烈な逆吊りの圧迫感に加えて、石鹼水の攻撃を受けた彼女の忍耐は、殆ど限界にまで追い上げられていた。

気も狂うばかりの悪感が刻々と過ぎゆく。

時間につれて、ますます激しく、おし寄せる波のように繰り返し、繰り返し噴出口を求めて、こみあげる——その、ヒクヒクと蠢く小さな個所に、白く愛らしい由香子の指先が触れ、そっと押し上げられた。

「ああ——か、堪忍して、お姉さん……」

すすり泣きながら、懸命に注入してゆく由香子。

「うッ……むうッ……」

遂に耐えきれず呻きを洩らし、僅かに自由な頸だけを激しく左右に振って喘ぐ紀代——その色白の端正な顔が不自然に、ゆがむ。

身を乗り出して喰いいるように凝視していた薫川が、思い出したように喚く。

「由香子、次だ。愚図々々するねえっ！」

再び欽治、由香子の眼前に浣腸器をつきつけた。

ベツトリと額に脂汗を浮かべた紀代の、半開きになった唇をついて、ますます苦しげな吐息が断続的に洩れる。その傍に泣き伏した由香子は、もう動こうとしなかった。

チツと舌打ちした薫川が欽治に目で促す。

待ってました、とばかり欽治は、紀代に襲いかかった。

「へへッ、こんな汚ねえ手で悪いが、この欽治兄哥が、たっぷりブチ込んでやるぜ——」

と、浣腸器を片手に、紀代の桃のような双臀を愉しげに撫でさすると、欽治は、その体内に溶液を勢いよく送りこむ。

「——うぐッ、もう堪忍……して……」

「へええ、まだ口が利けるのかい」

尚も欽治は、器用な手つきで溶液を満たし注入を繰り返すのだ。

「むうッ——こ、これ以上そんなこと……」

「うるせえっ！ もちっと辛抱しな」

欽治は、目を血走らせて憑かれたように作業を続ける。

洗面器は殆ど空になっていた。

息を呑んで見つめる男達の前で、玉の汗を振り散らして、もどかしげに身悶える紀代のふくよかな乳房が、激しい呼吸のたびに大きく波打つ。

「あ……後生です……ああッ……」

懸命に縫うその妖しいまでに美しく冴えた顔は、みるみる蒼白となり、夥しい汗と唾液とに塗れていった。

「フウッ、凄エヤ。全部、呑みやがった。ついでに、こいつもだ——」

欽治は、空になった洗面器の底から溶けかけた石鹼を掴み出すと、短刀で真二つに縦切りにし、それを次々と紀代に……。

「——いやあッ！ つうッ……」

「なあに、腹ン中で、勝手に溶けるって寸法だ。こうやって……」

と欽治は、張りつめた紀代の腹の辺りを力をこめて揉み始め、不気味に笑って、

「どうだい、気分は。おっと——折角、入れたのに出されちゃ勿体ねえ。おあつらえの栓

をしてやるぜ……」

と、空のビール瓶を手にしたのである。

「——ヒューッ！」

つんざくような悲鳴を迸らせて紀代は、その切れ長の瞳を恐怖と苦痛に見開いた。

「ああッ、ゆ、許して……許してっ！」

今や逆吊りの裸身を狂ったように、くねらせる紀代の、波打つ、柔らかい腹部に、尚も欽治の手が伸びて、残忍に揉みしだく。

「あううッ……か、堪忍……むうッ！」

白磁色の柔肌に褐色のビール瓶を突き立てられ、身も世もなく虚しい哀願を続ける紀代の妖艶な姿態——それは鳶川にとって極限の美しさをもつ『芸術品』であった。

「や、やめて——お願い、もうやめて！」

眼を真赤に泣き腫らした由香子が、欽治に犇と、とり縋った。

「ええい、すっこんでろっ！」

蹴飛ばされて、貪るように見つめる男達の間まで転がった由香子は、姉を呼びながら、尚も縋り寄ろうとした。が、その足首は、男の一人に、しっかりと掴まれていた。

「あっ、いや——離して」

逃がれようとする由香子の可憐な唇が酒臭い口に塞がれ、無防備に剥き出しになった両

腿の間に、淫靡な手指が伸びる。

別の男の手が、彼女のむっちりとした、白い果実のような乳房を痛い程、握りしめ、ゆさぶった。

「へへッ、逃げるこたアねえ。妹のお前にもいい思いをさせてやるぜ」

目を血走らせ、獣と化した何人もの男が、一斉に襲いかかり、その、乱舞する腕、腕の嵐の中で、必死にもがく由香子の華奢な裸身が、僅かに見え、そして隠れる。

「いやあッ！ 助けて、お姉さん……」

泣き叫ぶその声もまた、折り重なる荒々しい吐息に、かき消されていった。

終 章

翌未明——

まだ夜の帷も明けやらぬ頃、人目を忍んで暗いビルの陰に、ひっそりと立つ二つの影があった。

一つは、裂けた牡丹緋をベツトリと血に染め、いま一つは、素肌に男物の丹前を纏った——女二人。

昨夜から降り続く雪混じりの小雨に、そば濡れつつ、手に手を取り、肩を寄せ合いなが

ら薄闇の道を何処へともなく、消え去った。その後の二人の行方は、杳として知れず。ただ、その日の地方紙の夕刊には、『鳶川社長ら二人、刺殺さる』との見出しで、血生臭い事件が小さく報道されていた。

——八日午前六時二十分頃、鳶川貿易ビル四階の寢室で、鳶川貿易社長鳶川寅一さん（五一）と、その友人で堺生れ住所不定、柴村健治郎さん（四八）の二人が血まみれになって倒れているのを同社社員、横井政吉さんが発見し、すぐに近くの病院に運んだが、鳶川さんは全身十数カ所を鋭利な刃物でメッタ突きにされ、すでに死んでおりまた、柴村さんも背中や肩など六カ所を刺されており出血多量のため間もなく死亡した。

調べによると、現場の同ビル三階で昨夜大がかりな賭場が開かれていたことがわかり、同市捜査一課、同四課では、暴力団仲間のいざこざか怨恨による犯行とみて捜査している。なお……

△告

白▽

『マゾヒスト』への復活

カット・岡たかし



まる
丸 目め

ただし
忠

人には誰にも言えない秘密というものを、一つや二つは必ず持っているでしょう。私にも、これだけは人にも言えないし、ましてや肉親には死んでも言えないという秘密を持っております。ましてや、連れ添う妻には、どうしても言えないのです。それでいて、その陰に潜在する無上の快楽が、私の心身をしがれさせるのです。これがMという妖しい世界の魅力なのでしょう。

小学校六年生の時に、一ツ年上の女の子によってMに目覚め十六才にして本誌の存在を知り、以後二十五才まで空想と想像のMの世界をさまよい歩くような日々を送っておりました。その年の暮、ようやく適齢期を迎えた私にも当然のことのように結婚話が持ち込まれました。

それ迄に、友人達と二、三度、赤線にも行きましたが普通の状態では皆目エレクトセズ商売女を前にして随分、みじめな思いをしたものでした。だから、このまま結婚しても、果たして

うまくやっていけるのだろうか、日夜、悩み続けました。

その結果、このMの性癖を断たなければいけないと固く心にきめ、以後三十五才になる今日迄、Mの世界と惜別、いや忘れようと努力してきました。そして現在では二児の父親として平和に暮しております。又、家内も私のこの秘められた性癖を少しも知ることなく今日に至っております。

ところが、今年の夏も近い或る水曜日。たまたま所用で出かけた淀川河畔の乗馬クラブで、私は、見てはならないものを見てしまったのです。それは私にとって、余りにも衝撃的な、目から火花が散るような場面だったのです。

その瞬間、押えに押えていた十年間の努力が、もろくも崩れ去ったのです。お恥かしい話ながら、どうしてもその欲望を押える事が出来ずに、思わず年甲斐もない行為に及んでしまいました。

私はその性癖柄、これ迄、女性の乗馬シーンを映画やテレビ、雑誌など、或は直接的にも数知れず見てきましたが、これ程、魅了され興奮させられたのは、十数年前、本誌上で春日ルミさんを、始めて拝見して以来のことでした。

今にも泣きだしそうな空模様が、いっそうその小柄な老馬を哀れに思わせました。手綱

を強く引き絞られた、その顔は悲しげに天を仰いでいます。「可哀想に」という私の馬に対する同情の念も、馬上の女性を仰ぎ見た瞬間、激しい嫉妬に変わりました。

何という素晴らしい女性でしょう。一見して三十才ぐらいの奥様風でしたが、私のMの幻想の中で、常に女王様として君臨してきた崇高な女性そのものでした。

美人であることは申すまでもありませんがそれにも勝るポリュームのある肉体は立派でした。重量感溢れるそのお尻は鞍が小さく見える位でしたし、肉つきの豊かな両腿は、小柄な老馬の馬体が細く見える程、威圧感がありました。

加えて力量感のある、まろやかな両腕で、馬の口がはり裂けんばかりに手綱を引き絞っています。叶順子に良く似た美貌の顔は、苦しげに喘ぐ尻の下動物とは対照的に、にっこりと微笑んでいます。

ぴったりと豊かな臀部に密着したクリーム色の乗馬ズボン、こんもりと盛りあがった胸を掩ったブルーのシャツ、真紅にひかれた唇とが、妖しくも見事に調和しています。

元来、馬を歩行、又は疾走させる状態にある時は、手綱は適当にゆるめなければならぬ事は私にも、よくわかっています。馬が彼女の意志に反した動作をした為の罰なのでしょうか。それとも彼女の、ほんの気まぐれな

のでしょうか。先にも書きましたように、手綱を思いきり引き絞って動きを止めておいて一方に於いては巨大なお尻を馬上で震動させ豊かな脚を包んだ長靴で間断なく馬腹を責めているのです。

彼女の肉づきのよいお尻の下では、光沢のある鞍が悲しげに、きゅうきゅうと音を立てています。

見ていた私の頭の中からは、もはや現実的なことはすべてなくなり、只幻想的な世界のみが私を支配していました。

「ああ、あの馬が羨ましい。あの鞍が私であつたら——」

私は、そんな思いにかられました。マゾヒストは常人に比べ想像力、空想力は特に逞しいものです。遂に私の豊かな想像力は幻想の世界に迄、到達してしまいました。私は、その責め抜かれて苦しさに喘いでいるヤセ馬との会話をするように迄なつたのです。

馬「おい、その男、助けてくれ。もう死にそうだ。こんなに苦しむより、いっそ死んだ方がましだ」

喘ぎながら言う馬の言葉が、私の耳に入ってきます。

俺「何を言ってるんだ。俺はお前が羨ましくて仕方がないんだ。お前の余りの幸せに嫉妬している位なんだぞ」

馬「畜生、首が痛い、背骨が折れそうだ。」

なんとか、この女の奴の大きなお尻と、この太い太腿を早く俺の背中から降ろしてくれ。おい、その男。お前から、この背中の中女に頼んでくれ。頼む、なんとか早く——」

しかし、哀れなこの馬の断末魔の絶叫も、この驕慢な女性には軽快なメロディーにしか聞こえないでしょう。一方では馬腹を激しく蹴り続け、片方では頬にまつわるおくれ毛を、その繊細な指を包む白手袋で掻きあげているのです。

支配する者と支配される者の対照的な二つの表情が、私の幻想の中で鮮かに目前を走馬灯のように行き交います。

そして現実の目の前では、鼻孔をふくらませ顔面に血管を浮きあがらせ、苦悶の中にも半ば諦めを伴った醜い顔をさらしている一匹の老馬。自らも認める美貌を誇らしげに、太股の谷間で喘ぐ奴隷馬に征服欲を満喫している女性の姿があります。

そんな女性のサディスティックともいえる微笑を陶醉状態で眺めている私を、もし他人が見たら、なんと思うでしょうか。幸いにしてあたりに人影はありません。

その瞬間、私にはMの世界しか外に、何も存在していませんでした。私は完全にMの幻想の中に浸りきっていたのです。又もや私の耳の中に、尚責め続けられている馬のうめきにも似た声が、電波を伝って私の耳に流れ

てきました。

馬「オイ、そのマゾ男。どれだけの時間俺のめじめな姿を見ていれば気がすむのだ。俺はお前のようなMではないんだぞ。むしろS的な性格なのだ。それなのに俺の意志に反して、こんな女の尻の下で喘いでいるのだ。ああ、なんとか、この首さえ、うしろに回れば文句なく噛みついてやるのに。それにこの前足、これが簡単に上に回りさえすれば、蹴落として後足で踏みつけてやるのに——」

老馬のそんなファンタスティックな声を耳にしながら私は一方では乗り手である美しい女性の遅いばかりの太股を眺めていました。その太股に連なる豊かな臀部の下に、うめく老馬の、か細い四肢を見ているうち私は、これさえきかない欲望におそわれ、なりふりかまわず、思いきり二度目の射出をしてしまったのです。

私がこの乗馬風景を眺めていたのは約一時間ばかりだったでしょうか。見るも無残なヤセ馬は、その極限の疲労も無視されて六十キロを優に越すと思われる美女の尻の下で責め続けられたのです。やっと下馬されたドミナは疲れ果てたヤセ馬には一瞥もくれず、更衣室へ向かわれるため、悠然と歩いてゆかれるのです。

その後姿の圧倒されそうな臀部から太股にかけてのズボンが、汗のためべっとりと肌に

はりついていました。

今尚、その時の情景が私の脳裡に、はつきりと灼き付いて、甘くも苦しい思いを与え続けているのです。

悲しむべきか、喜ぶべきか、この瞬間にこそ、私は完全にマゾヒストとして復活を遂げたのでした。

最近、週刊誌でも梶山季之氏や戸川昌子さん等が、M傾向の小説を発表し、又有名人のS女性との対談等が、ひんばんに誌上で行なわれている御時世です。過日も本誌の辻村隆氏が女性二人を従えてモーニング番組の小川宏ショーに出演された時は実際のところ、驚きました。生憎そばに家内と、いつもこの番組を楽しみにしている老母が共に見ておりましたので、あわててチャンネルを回して、あらぬこじつけの理由を言って二階に上がり、もう一台のテレビで見た次第です。

それにしても辻村氏と二人の女性の勇氣には、まったく敬服の他ありません。折しも、その辻村氏及びその時の女性の一人（一月号の辻村氏の文で知る）が出演されている東映の『性倒錯の世界』が全国津々浦々の劇場で上映されていました。この映画程、世のMの期待に応えたものは他にないと信じてますが、私には全く興味のないホモ、切腹シーン等のフィルム長さには、うんざりしましたが、その後にくる待望のMシーンには、随喜の涙

が出る程に感激しました。

Mに無智なる普通の女性には、このマゾシーンが果たして、どのように映じたことでしょうか。私は正確にこの映画、特にMシーンを八回も観たのですが、それもあながち、私一人ではないように思います。結果、勇気のない私にも三十五才という年令が、そうさせたのでしょうか。残り少ない青春というには些かオーバーですが、この年令に於いてしか機会がないと思いつめる日々が続きました。

いたたまれない欲求不満の気持と不安が先走って落ち着かない私でしたが、とうとう意を決して或る本に紹介されていた、この種のクラブに電話をしてみました。

電話で会の趣旨や規約等を詳細聞いた上、入会金を送って入会の手続きをしました。

それは忘れることの出来ない十一月一日、午前十時のことです。私は指定された市内のターミナルの近くにあるマンションの階段を期待と不安におののきながら、夢遊病者のような足どりで上ってゆきました。

私がMであることを知る最初の人間、私の不安はいやが上にもつのりました。後に引き返すことは一生の悔いを残すのだと心にはつきりと言いきかせ、勇気を揮って鉄扉をノックして思いきりドアを押しました。

入ったところの小机の前で私は、会の世話をしているという男から、改めて趣味や性向

について確かめられました。その上でカーテンの向こうにいる女性を紹介されたのです。

その女性は私の想像していたイメージとはかなり違ったタイプでした。およそSとは程遠いと思われるような容貌容姿の、私と同年輩の人です。余談になりますが、それ迄、私はこの様な場面を、次のような状態で夢想していました。それは他の雑音を一切、遮断した地下の一室で、私は正面に悠然と構える女性の足下にひれ伏し、その足に口づけすることとで奴隷の宣誓をさせられるのです。

奴隷の宣誓を終わってから、女主人と奴隷という会話で終始し、それから、あらゆるMプレイが、彼女の強制の下に行なわれます。私の助けを求める願ひに対する女王様の返事が苛烈な鞭であり果てしなき加虐です。

しかし、現実には私の夢想とは違った場面でした。やがて世話人の男が外出して、さして広くないマンションの一室に私とその女性の二人が残りました。件の女性は、私の性癖について改めて、くどい程、尋ねるのです。それに答えて、私はMの満足を求めて、わざわざ此処へ来ているにも拘らず、やれ柔道三段であるとか、男同士の争いでは絶対に負けることは嫌で今迄一回も負けたことはなかったとか、今にして思えばサマにならない自己弁護ばかりしていました。

これでは、うまくMプレイに入れるわけが

ありません。でも彼女が私の首に首輪をはめそれにロープをつないでプレイを始めた時には、私は精一杯の努力をして目の前にある彼女の白い足の指を舐めつづけました。彼女はロープを強く引きつけ左足の膝で私の背中を押さえつけ、「上手になめるのよ。さあ、早く、もっと上手に」と言いながら、手にした革の紐で私の尻を打ち続けるのでした。

始めSには程遠いタイプの女性と申しましたが、その頃になって、初めての経験である私には何か彼女が空恐ろしい存在のように思われてきたのが不思議です。そんなことが凡そ十分ぐらいいも続いたでしょうか。意外なことに、この女王様は非常に舌なめにも弱い方で私の舌が足首より徐々に上にあがり、胫より太腿、そして太腿のつけ根から、その部分にさしかかった時には、異常な程の興奮ぶりを示され、その段階より、このプレイは、最早SMのそれではなくて、単なるセックスそのものに化してしまい、全く味気ないものになってしまいました。

私に対して、「御免ね」と謝る彼女からはもはやS的要素は、みじんも窺うことは出来ませんでした。私は現実とはこのようなものかと、高い山よりころげ落ちるような絶望感を味わってしまいました。そして、もう二度とこんな処を訪ねまいと心に固く誓って、そのマンションを後にしたのでした。

ナミオ M 画廊 『ハイドウッドウ』 春川 ナミオ



しかし、Mの心情というものは奇妙なもので、日を経つにつれて私の空想力、想像力が遅しくなつて、一旦は絶望感を味わったとはいえ、Mを理解してくれた貴重な存在である彼女に、もう一度逢つてみたいという気持が

日増しに強くなつてくるのを、どうすることも出来ませんでした。そして、とうとう再度彼女に接する申込みをしてしまいました。その日、十一月十三日は偶然にも先の一日と同様、仏滅の日でした。今度こそは、先の

失敗は繰り返すまいと心に念じて心の中でいろいろのプレイの模様を描いておきました。こんな自分の気持を、先ず彼女に話して頼んで見ることにだと思つてマンションの石段を登りました。

気のせいかな、今日の彼女はこの前、見た時よりは美しく感じられました。ライトブルーのストラックスに真紅のブラウス。髪をアップに結び、ややきつい目に引いた眉毛と赤い唇が私のM性を、いやが上にも、かき立てました。彼女に逢う前は、ああも言おう、こんな事も頼んでみようと思つていましたが、いざ逢つてみると、思つてゐることの半分も言えない、もどかしさを味わいました。が、とにかく五分間だけ対等の立場で口を利かせて貰いました。

「Mという者は命令される言葉、罵倒される言葉の中にも快感を味わうことが出来ます」等とプレイの注文と合わせて、くどくどとお願いする私の言葉を彼女は冷ややかな含み笑いで聞いていました。興にのつた私は、こんなことも言いました。

「先日プレイでは卒直に申し上げて、少しの快感も味わうことが出来ませんでした。それは貴女様が手加減をして、やさしくして呉れたからだと思うのです。今日はいくら責められても決して参るようなことはありませんから、もし貴女様の足下で苦痛の余り、許し

を乞うようなことがありまして、それでも貴女は決して許さず、あらゆる残虐性を私に施して下さい。責める貴女様の体力の続くかぎり責め抜いて下さい」

約束の五分間が過ぎますと、「じゃあ、もういいのね」と言いながら、彼女はソファ用の椅子を部屋の中央に持ち出し、私にその椅子を正面より抱くように命じました。言われるままに腹這いの姿勢で手を回しますと、「絶対に動けないようにしてやるから」と冷たく言い放って、彼女は用意のロープで、私の手首を縛りました。

彼女の白い頬に紅がさしはじめた頃、私はもう身動きも出来ない糞虫のような格好になっていました。なんと哀れな姿でしょう。その昔、奴隷達がこの様な姿で、どれだけ女主人

「伝言板」○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則として取り扱いは致しておりません故御了承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

人、貴婦人達の過酷な仕置を受けたことか、鞭の下でドミナの足下で百万遍の許しを乞い断末魔の叫びをあげたことか。身体は固定されていても頭脳は、めまぐるしく働き、次から次へと空想が湧き上がってきました。

「さあ、どの様に料理してやろうか」

彼女の声が頭上に響いた時には、すでに私の頭髪は綺麗にマニキュアされた女王様の指に掴まれて無理矢理、引きあげられていました。女王様の上から覗き込まれる顔と、髪を引きあげられた私の顔とが向き合いました。

サジスチックな微笑を洩らして私を見つめる彼女の目を、まともに見る勇気がなく私は伏し目がちに彼女の口もとを見ていました。その時です。真紅に染められた唇の中から、パツと彼女の唾液が私の顔に二つ、三つと飛んできました。生温いものが私の額を、つたってゆきます。なんという快楽でしょうか。口のまわりに飛んでくる唾の、無上の美味しさ。私は無意識に叫んでいました。

「もっと、もっと」私の呻きが終わらない中に今度は両頬がたて続けに激しい音をたてて往復ビンタを受けました。火花の散るような衝撃、それでも私は快感を味わいこそすれ、少しの痛さを感じませんでした。

横に回った女王様の次の私へのお恵みは、左足で喘ぐ私の頭や顔を踏みつけ、用意の革バンドで私の尻や背中を鞭打つことでした。

私の背中や臀部にビシッ、ビシッとバンドが音を立てる合間に、「これでもか、これでもか」と言う彼女のヒステリックな声が私の耳に入ります。

少しも音をあげない私に、最初は幾分、手加減していた鞭が次第次第に激しさを増してきます。顔面を踏みつけている足も、鞭と同様に、だんだん力が入り、私の頬がソファに沈んでしまいます。それでも参らぬ私に業を煮やした女王様は、大きく足をあげて椅子を跨ぎ、その豊かなお尻を、私の身動きも出来ぬ細首の上に、ずしりと落とされたのです。

その甘美な臀部と雪のように白い太腿で、ぴったりと押し潰された私の横向きの顔はクッションの中に埋まりました。そうしておいて、彼女のお尻は、はずみをつけて椅子をゆするよう上下運動を続けるのです。

ああ、私が永年、夢見続けていたことが、今や現実となってこの身に加えられているのです。私は苦しみと快楽の中で「もっと、もっと」と声にならぬ声を洩らしていました。

「このまま死んでしまいたい」

「一生、このままでもいい」

その不可能な願いも、約束の時間が私を現実の世界に引き戻してしまいました。

女王様に「次に来る時迄に、私のネクタールを飲める様、練習してくるのよ」と言われたのが、その日の別れの言葉になりました。

— マダム 芙美代の告白 —

SMの好きなお姐さん

福 井 桃 子

此の前、大阪までお邪魔したときは、私、大分酔っぱらってしまっただけですわね。ご馳走になって、つい度を越してしまっただけかしら。あのときに、お喋りしたAさんとのこと、まだ雑誌にのってませんの。

今日来られるって、お電話あったとき、今日あたり、もう出来てるかと思って楽しみに

してましたのよ。自分の喋ったことが、のるようになってから、なんだか、気になって、早く見たい、早く見たいっていう気持ちと、それに、なんだか恐ろしい気持ちもするのよ。変でしょ、こんな気持ちって——。

あら、私の記事が好評ですって。それに反響もスゴイってですか。そりゃ、よかったで



すわね。それを聞いて私も安心しましたわ。

でもネ、私って、体当りでなんでもかんでも、さらけ出してしまうでしょ。だから、すぐ底が見えて種切れになってしまわないかと思ってるのよ。写真の方も、もう大分、何回も何回も、うつされてるでしょ。私の身体のすみずみまで、みんな知ってしまったわねと違いますか。こんな私のどこに、まだ魅力が残されてるんでしょうかね。

ええ、私はネがオッチョコチョイですからあなたが来て下さる限り、お酒を頂きがてらべらべらと喋らせてもらいますよ。そうなのペンを持つのはニガ手だけど、口を動かしているんだったら御機嫌なんですよ。

さあ、これで雑誌にのせてもらったのは、何回ぐらいになるんでしょうかね。今日もそれじゃ、私のお喋りをテープに吹き込んで頂きましょうか。あら、もうさっきからテープが廻って



いたんですの。だったら、最近の私の、とっておきの話をしましょうか。折角こんなむさくるしいとこまで、おいで下さったんですから、サービス精神を発揮して、ぼつぼつ喋らせて頂きましょうか。

ええ、お店の方はってですか、あれから、ずーっと休んでますのよ。店を閉めてますと

ね、おかしなもんで、あんな裏通りの狭い店なのに、売ってくれていう物好きな人もあるんですよ。世間は広いものですわね。

そいでね、売るって約束だけはしたんですが、まだ正式には受け渡しはしておりませんの。いずれ、この手にお金が入ったら、あなたにも奢りますわよ。まあ、アテにしないで待ってて頂戴。お店が売れた前祝いに、先ず一杯頂きますわ。あなたも一杯どうですか？

あら、そんなに御遠慮なさらずに。どうせ今日の御勘定は、あなたがお支払いになるんですからね。店を休んでるのにボルなってですか。そりゃ、あなた、それとこれとは別ですわ。あなたのようなお客さんがいるからこそ、こうやって、のんびりとお店を休んでいられるんですわ。

さてエーと、今日は、何から話すんだったかしら。そうそう、Bさんのこと

だったわね。うちの前からのお客さんでBさんという一寸、男前の人がいるのよ。年齢は三十二、三ぐらいかしら。ヤセ型の苦味走った一寸いい男なの。

私が面喰いってですか。そんなことはありませんよ。やはり顔より心ですものね。ハンサムな方がよいには、きまってますけど。そんなこと言わんで頂戴。話をまぜっかえされたら、私のお喋りのあとが続かなくなるじゃないの。だって、こんなにテープを廻しながら話してたら、なんだか、本心を言うのは恥かしくなるじゃない。

えーと、そのBさんがネ、私にSMのパートナーをやらないかって誘うんじゃないの。どう、こんな私に一寸おかしいと思わない？ そんなことを頼むんだったら、Bさんと私が怪しいってですか？ ゼンゼン、そんなことがないのよ。だからおかしいのよ。

私ってネ、こう見えても身持ちは堅いの。ただお喋りするだけ。ほんとうよ。すぐ話をそんなとこへ持ってゆくから、話の腰が折れてしまうじゃないのよ。

どうせ、私の喋る話だからエッチにきまってるって思ってるんじゃない。そりゃ、まあそうに違いありませんけど、この話は一寸マジ



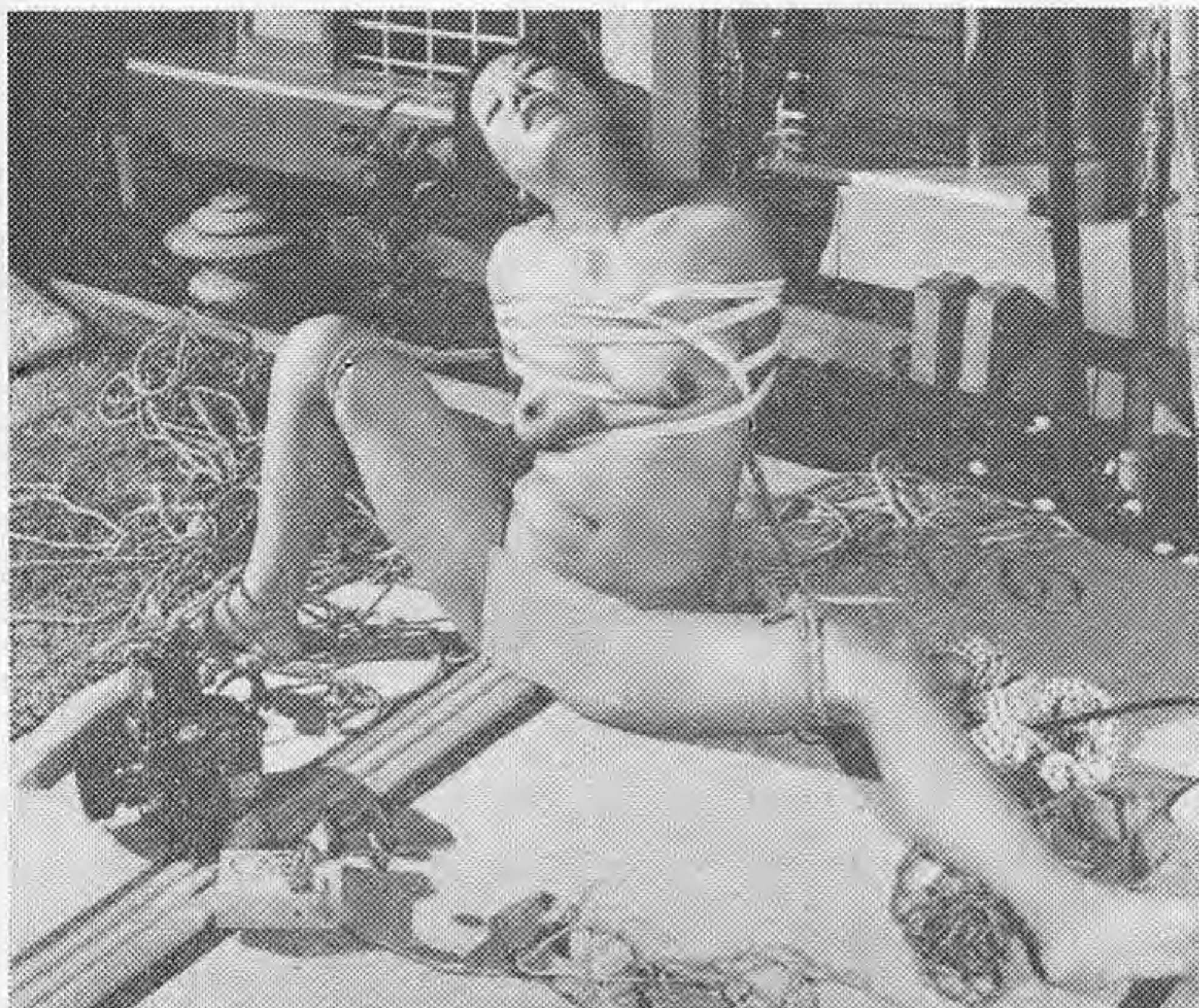
メな話なのよ。Bさんの生活がかかってるんですから。でも、話はズバリSMそのもの。

まあ、奇クの読者の方だったら興味はあると思うわ。ねえ、SMのクラブだとか、なんとか、よく聞くじゃない。こんな話、あんた持って帰ったら特ダネモノよ。

秘密SMクラブ潜入記だなんて、一寸面白

いと思わない。そこのホステスにならないかって、私に誘いに来てるのヨ。どう？ 今日わざわざ、あんたがテープレコーダーとカメラを提げて出てきた甲斐があったというもんでしょ。

あら、ちっとも感心しないのネ。芳紀まさに二十五才のこの私が、体を張って秘密クラ



ブに潜入出来るか出来ないかという瀬戸際なのよ。少しぐらい感心したらどうなの。

大体、Bさんっていうのはネ、時たましか

顔を見せない人なんだけど、私がいつもSMがかった話ばかりするでしょ。だから、こんな話を持ってきたと思うんよ、きっと。私な

んかだったらね、第一、こまごました説明なんかしなくたってツーカーだもんネ。

そのパートナーっていうのは、どんな仕事かって聞いたの。そしたらネマダムはSもMも出来るから、一つMとSのお客さんの相手をしてくれなかって言うんじゃないの。馬鹿にしてるわネ。でも、好奇心の強い私なんですもの、イエスともノーとも返事しないで詳しいことだけ聞きだしてみたのよ。

Bさんはネ、私が承知したものと思って、ベラベラと何でも喋ったわ。もっとも、大分、お酒もまわっていたけど、もう

私と二人で、そんな商売してるような気でいるのよ。

その商売ってですか。なんでもね、マンションの一室借りてて、私も一度、行ったことがあるけど、そりゃBさんって、着のみ着のままで家具なんて何もないのよ。それでいて、二十三才ぐらいのホステス上がりを内妻に持っているんだから、アノ方は一寸した腕ね。

今のところ、その内妻というのが、MになったりSになったりして、お客をとってんのよ。Bさんは、さしあたりヒモ兼客引きといったところなのよ。今までと違って、お客も単なるセックスだけじゃ満足しないってわけらしいのね。それで、急ごしらえのSMの相手を内妻にさせているわけよ。

Bさんの話ではネ、レスボスやホモ好みのお客さんも時々あるんだって。そんなときはアルバイトを呼んでくるんだって言ってたけど、十七、八の少年でホモの相手をする者だっているのよ。私も二度ばかり見たけど、ええ、普通の男の風よ。家出てきた少年の中で、そんなケのある者を使ってるんでしょうね、きっと。レスボスのお姐さんたちも、ちゃんとツルがあるそうよ。

近頃は商売が繁昌で人手が足りないらしく



私にも助けてくれて言うわけなのよ。どう、この話、面白くない？

勿論、断りましたヨ。仕事が忙しいからってね。そしたらBさん、マダムが承知してくれると思って喋ったのになって大変怒っていったわ。だって話をすっかり聞いてみないことには承知か不承知か、返事できないものね。

見習いがてら一度、見にこないか、面白いぞ。ってBさん、盛んに私をスカウトしようとして一生懸命じゃないの。一ぺん遊び半分で見学してようかしらね。ポルノ女優の募集にわんさと若い娘の志願者が集まる時代なんでしょう。私が海辺で海女として裸で暮らしていた頃とは、同じ裸になるんでも大した違いだ

わよ。Mのお客を片っぱしからムチでぶったり足蹴にしたり、それに足を舐めさせたり、オシッコをぶっかけたり、こんなこと出来たら、面白いと思わない？

お店を売ってしまったら、私も身体があきますからね。私の好奇心が大分うずいてきますのよ。でも、あのBさんって男は、余り信用できないのよ。内のお勘定も相当、溜まってるの。あなたみたいにキャッシュでスパッと払って下さるんだったらいいんですけど、僅かな飲み代の払いを渡るような男だったら信用出来ないですものね。

あのマンションだって、自分の持物や家具なんか一つもないもんネ。いつなんどき、夜逃げするとも限らないから油断できないわけよ。ええ、私の貸しなんか僅かですから、構いませんけどね。

どう？ こんな話って、少しは参考になった？ 私って、お喋りのくせして話は下手だから、もう一つピンと来なかったでしょ。

そのマンションは、どこにあるかってですか。それは此処からは近くなんですよ。はっきりと場所は言えませんが、あなたがお客さんになって下さるんだったら、御案内してもいいですよ。実際のところ、私も少しばか

り興味があるんですもの。

私一人がホステスとして入って材料をとって来いってですか。そりゃ、やれんこともないけど、今のところ、そこまでは気が動きませんわ。それよりもネ、この間から頼んでおいたMの人、集まった？ 私かね、M男をいじめてるところの写真を撮って誌上に載せたら、うけると思うけどナ。

ふん、そんなに希望者があったの。凄いわあ、私も張りきっていいじめちゃおうかしら。

私って、身体中、ムチの痣だらけになったって、頑張るかわりに、責める側になったら徹底的に責めるかもよ。あら、あなたにはMのお話は禁物？ そうかしらネ。私も、どちらかといえば、縛られたり責めて貰う方が趣味に合うんだけど、M男に対しても理解が持てるわね。自分が責めてほしいように相手の男性を責めてあげれるもの。

SとMと分けて言えば、七分三分ぐらいかしらね。だから、あなたがMの話がおいやつて、おっしゃるんだったら、この話は、このくらいにしておくわ。

浣腸とムチ打ちについては、前に二回に分けてお喋りしましたわね。だったら、今日はお話は、これくらいにしておいて、出掛けま

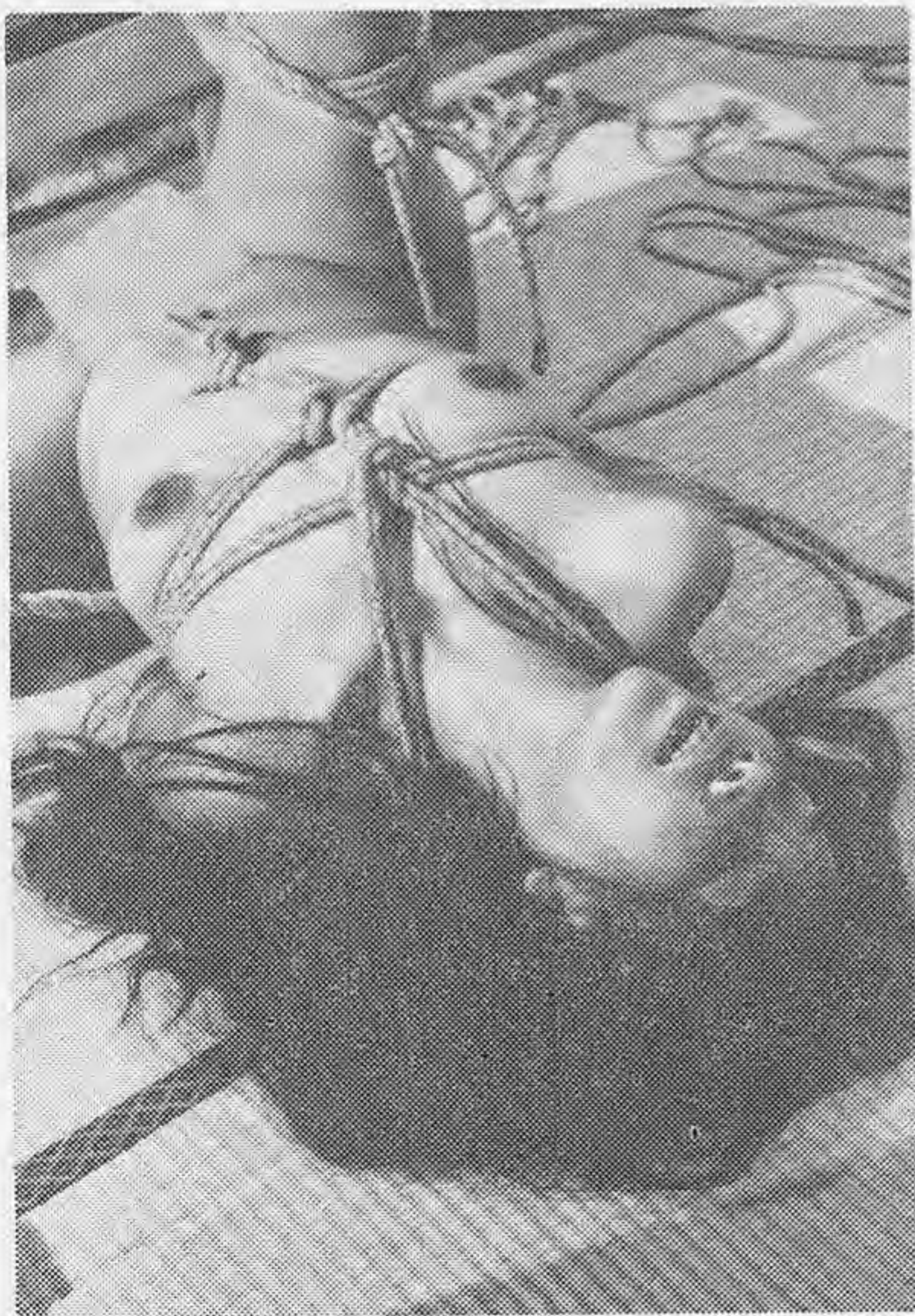
しょうか。実は私、ゆうべは夜ふかししてお風呂へも入らなかったの、どこかお風呂の大きなホテルへ行きたいワ。それに、一時間ぐらい昼寝してみたいの。おねだりして悪いけど、連れてってくれる？

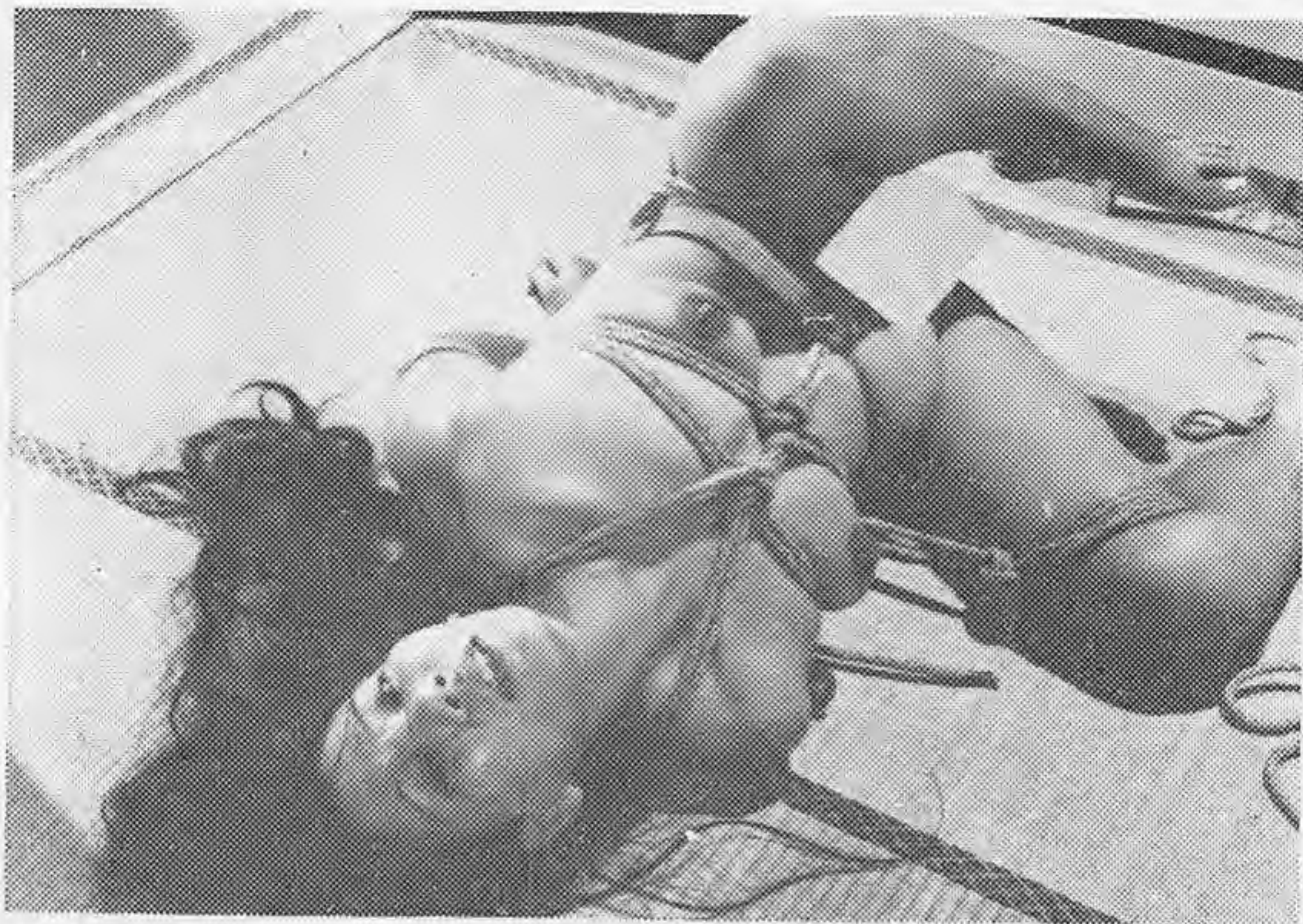
もうテープ止めときなさいヨ。まだ陽は高いつてですか。だって、もう四時ですよ。今

日はお天気がよいから、こんなに明るいですが、釣籠落としに急に暗くなりますから、今から出かけて丁度なんですよ。

○

暖房してるんだわネ。湯上がりのせいもあるけど、ハダカでいても少しも寒くはないわね。ねえ、私のフクラハギ、こんなに毛が





生えてんのよ。エバクリームでとったけど、またすぐ生えてくるから、そのままにしてるんだけど、ストッキングはいたとき、すけて見えるのはいやーネ。

Aさんったら、私の、毛深い毛深いって言うんヨ。どうあなたが見ても毛深いって思う？ 毛深い女は情が深いって言うけど、私が、男の方を抓ったり、噛んだりするのもそんなところに関係があるのかしらネ。

あなたが太鼓判押して、そんなにおっしゃるんだったらAさんの言ってる事も嘘じゃないわね。この頃、剃毛っていうのが流行してるそうね。そりゃ、私も一ぺん、そんなにまでして可愛がってほしいと思うことがあるわ。今日は一つ凄いSMプレイをしてみませんか。お喋りしてるだけだったら、つまらないもの。

私を思いっきり縛りあげて、ええ、エビ縛りでも逆エビ縛りでも、アグラ縛りでも、菱縄縛りでもいいわ。とにかく、あなたのお好きなように、簡単には緩まないように厳重に縛ってほしいの。

そうしておいて、私の身体中を擦るってのはどう？ 私、お腹をかかえて笑いころげると思うけど、両手を括られては、お腹もかえられないから、ただ、ころげまわるでしょうね。両足をバタバタさせて――。

ほんとに、そんなこと、されたことないのよ。ねえ、だから今やってみないこと。擦りの次には抓るのも面白いわね。こう見えても私って、皮膚は海で鍛えてるから、ずいぶんと強い方よ。だから、痣がつく位、抓られたって、少々のことだったら辛抱、出来るわ。ええ、自信あるもん。

そりゃ、そうよ。肩やお尻だったら、ましね。内股のやわらかいところや、太股のつけ根あたりを力一杯、抓られたら、さぞ、とびあがるでしょうね。だから私、そんなところを抓らせないように、足を動かせたり、ころげたりして逃げまわるから、面白いSMプレイになるんじゃない。

そうね、エビ縛りかなんかだったら、足を

バタバタ出来ないわね。思っただけでも身体中がムズムズしてくるわ。そんな縛り方で抓られたりしたら。

例のAさんたらネ、ズボンのバンドで私をぶったでしょ。今はすっかりアトは残ってないけど、最初は血がにじんだ様に赤黒いアトが、だんだん蒼黒くなって、それが黄色に変わってきたら、もうすぐとれてしまうのね。私はまあ、内風呂だったからいいけど、あれだったら、外のお風呂へは行けやしないわ。

写真に撮られたとき、現像している人がネガにゴミがついてるんかと思って、拭いたけどとれなかったって、言ってもらいましたけどあのと私の肌は、写真にも、よく出てましたわね。カラー写真だったら、ズバリ、血のにじんだのが出ていたでしょうネ。

一寸、見せて。あなたの持つておられる、このムチだったら、いいわね。肌に傷アトが残らないで——。こんなムチで思いつきぶたれたら、さぞ、気持いいでしょうネ。

そうなの。私って、お尻だけじゃなしに、身体中をぶってほしいのよ。普通はお尻をつき出すような格好で縛られていてムチ打たれるのでしょけど、私、今考えてるの。開股縛りでネ、正面むいて縛られていて、ええ、

そうなのヨ。思いきり両脚を拡げておいて、正面からSの人が、自分の好きなところを狙い打ちにムチ打つのヨ。

そんなことをして欲しいって考えている私って女も、変わってるわね。考えてても言わない人が多いってですか。そりゃ、そうでしょうね。私のように、なんでもかんでも口に出して喋る女ってのは少ないでしょうネ。女というのは、おしとやかですもの。

そりゃ私だって空想していても結構、楽しいんですヨ。

たとえば、私が密輸団の手先になって、ダイヤを運んでいるとするでしょう。それが急に競争相手の暴力団に襲われてつかまってしまふのよ。それで私は咄嗟に大粒のダイヤ数個を飲み込んでしまふの。

暴力団の隠れ家で素裸に縛られて、数人の男たちの手でさんざん、ぶたれたり蹴られ





たりして責められるけど、私は頑張ってダイヤのありかを白状しないのよ。

ここに隠してるかもしれないって、いうので、思いきり開股縛りにされて、私の秘所も厳重に調べられるけど、ないわね。それで、結局、腹の中を探してみろということでは荒くれ男の見守る中で、素裸で浣腸されることになるのヨ。

こんな場面を一人で空想するのも、いいものだけど、あなたとお喋りしてる方が、まだ楽しいわよ。SMプレイの可能性がある方が、そりゃ、現実的で楽しいんヨ。だから私こうしてお喋りしていても結構、興奮してんのヨ。おかしいでしょう。

アノ時にね、女の人って声を出すでしょ。私なんか、自分で声を出せば出すほど、気持ちがいいの。だから、私のエ

ッチなお喋りも、それとよく似ているのと違うかな。

ええ、そりゃ、肉体的に縛られたり、責められたり、いじめられたりするのは大好きだわヨ。これは文句なしに、私の身体中を燃えあがらせてくれるのよ。モチ、中心はアソコなの。それは違いないんだけど、そこだけを狙ってくる単純なやり方だったら、私のような女は一〇〇%燃え上がらないわ。

ええ、そうなのよ。無理して縛らなくなっちゃって、そんなことするのは、いやッ——って言うのを、足の親指を握っておいて足の裏をくすぐるっていうようなことだけでも、そりゃ単純な攻め方よりも、そのあとの燃え上がり方が大分、違うと思うわ。

あら、あなたのようなベテランの方に、釈迦に説法のようなことを申し上げて、ごめんなさいネ。でも、私の申し上げたこと、今まで私を何度も縛ったり責めたりされた、あなたが、よくご存知の通りよ。

だから、私のような女、前戯って言うんですか、なんて言うのか知りませんが、その予備行動をしないで抱いたりしたって、つまらないと思うわ。なにしろ、口から出まかせに喋りまくるでしょう。精力の弱い男なんか

だったら、そりゃ、ずけずけと、こんなちっぽけなもの、なんなの——って、大声でどなるもんですから、ますますいけなくなってしまうのヨ。それで、結局、あの女には、かなわんなんて逃げだすの。

でもネ、私って、そんなんじゃないのヨ。例えばね、あなたの持ってきた縄やロープ、それに浣腸器、ローソク。こんなの、見ただけで弱いネ。もう、こんなに、さわってごらんなさい、胸がドキドキしてんのヨ。ええモチロン、あの方もよ。だから、こんな気持ちでいるとき、そりゃ、高手小手に縛られたりしてごらんなさいヨ。噴火口に立っているみたいに、爆発寸前ってところネ。

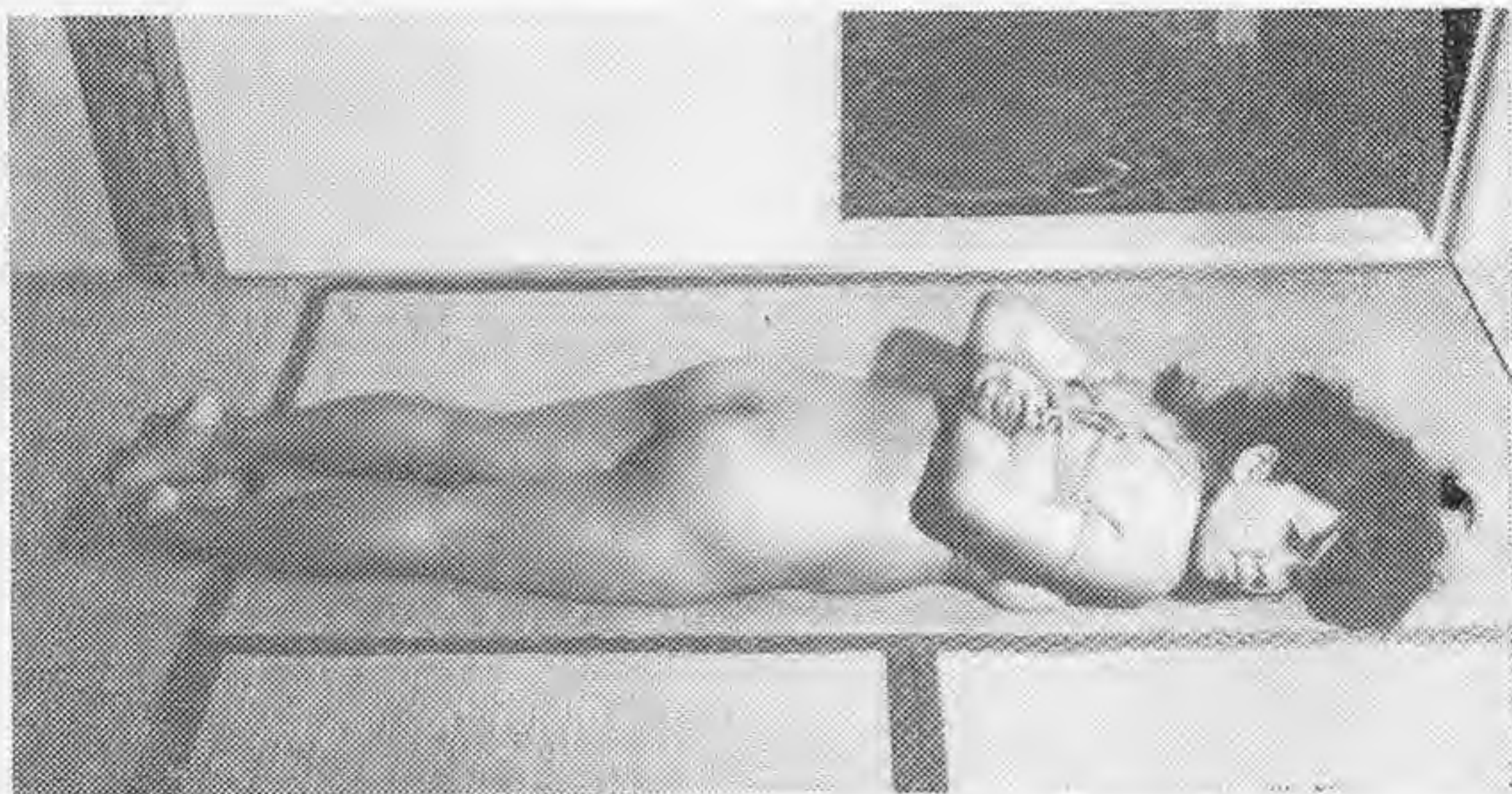
物は試しだから、やってごらんになる。いくら、お狭やんでお喋りの私でも、途端におとなしくなって、そりゃ従順な女になってしまうの。それに、サービス精神も旺盛になっ

てしまって、その殿方の喜ばれることだったら、どんなことでもやってしまうわ。

今日は下地が十分に出来上がってるんだから、これから縛り上げて、責めに責めて、こんがりと色づくまで仕上げてみられない？

中途半端ではっておくのは嫌よ。

どんなポーズでもとるから、写真はとりま



くった上で、私が仕上がるまで可愛がってくれでないかえ。あら、そんなにあわてなくていいってですか。あなたって、案外のもんぶりしてるのネ、お酒好きの私が、お酒を控えてまで、こんな恥かしいことを頼んでるのに、情知らずだわネ。

それは、そうと、この前から頼んでる、M男の志願というの、どんな男なの。結構ドレイ志望者があるというじゃない。今度、あなたがくるときには二、三人、連れて来て。

私ネ、一寸、考えてることがあるのヨ。

私、大親分の妾で姐御って呼ばれてるの。親分に責められてるときは、素直ないい女なんだけど、乾分や三下奴には、そりゃ、ヒドイことをする姐御で、足を洗わせたりするのは朝飯前で、気に入らなかつたら、頭を蹴ったり、小便をひっかけたり、そりゃ、ヒドイこき使い方をするのヨ。

と、いうわけで、あなたがその大親分、私が親分の妾。乾分の三下には、そのM男たちを使ったら面白いじゃないの。三下を責めたりいじめたりするんだったら、私にまかしといて。お仕置きには、この大きな裸のお尻をデンと顔の上にのっけて、下敷きにしてやるわよ。さしあたり、お尻の窒息責めという

ころでしょうか。ええ、かまいませんヨ、二人でも三人でも、まとめて面倒みますわ。

親分は乾分の見ている前で、妾の私を責めてもいいですよ。筋書きは、またゆっくり考えておきますけど、親分は私を責める。私は、その腹いせに乾分を責める——という形でSMプレイをやったら、さぞ私はハッスルすると思うわ。考えただけでも、もう、こたえられせんわよ。

親分は私と乾分の間を疑って私を責める。私はそんなことは絶対にありませんと、親分の目の前で乾分を責める。それで、興奮した私が親分と仲良く——という筋書きでもいいじゃありませんか。とにかく、そのM男というのを早く連れてきて下さいヨ。

親分に抱かれる前に、乾分に舐め舐めの奉仕をさせるっていうのも面白いじゃない?

お前ばかりがいい役ってですか? 私は親分も乾分も、結構いい役だと思うけど、違いますかしら。モチロン、私もいい役ですわ。だから、みんな、それぞれ自分の好みの役をやったらいじゃないの。あなたに、三下奴を責めてくれなんて、言いませんわヨ、それは姐御の私の役ですもの。

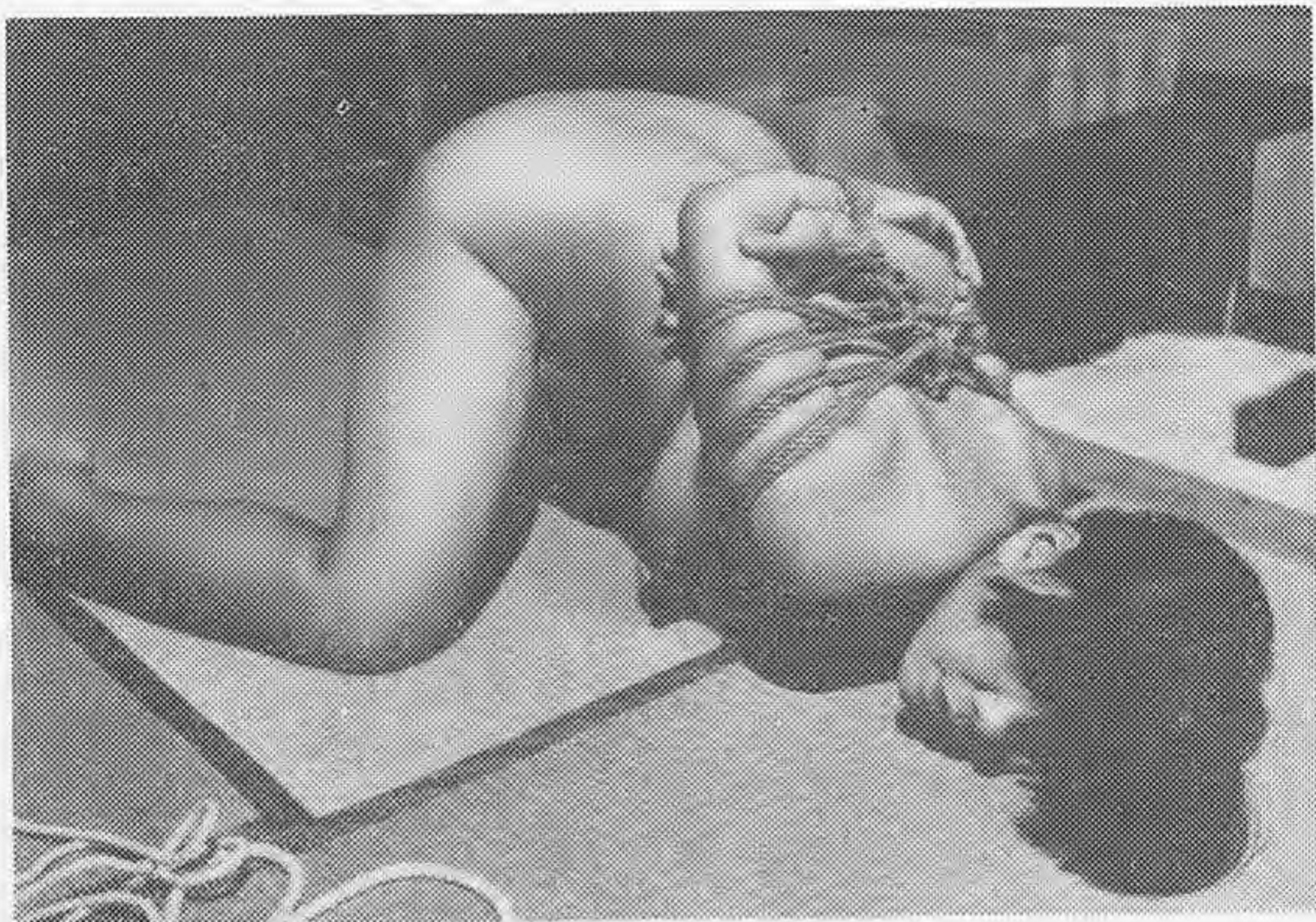
以前の古い月の号には、なんだか、背中に

刺青をした姐御肌の女の人がいきましたわね。私じゃ、刺青はしていませんけど、気性はそんな姐御風なところが、多分にありますのネ。人前で乾分の頭を蹴ったり、足を舐めさせたりするくらいは平ちゃらなのよ。もっと汚いところの掃除も舌でさせろってですか。それも、平っちゃらじゃないけど、場合によっては、やっちゃいますよ。

そうかといって、私、ミニスカートも案外似合うんですヨ。背が一六三センチもあるでしょ、だから、足はこの頃太くなっただけどまあ、見られんこともないの。でもネ、こんなに、太股のツケ根近くまで陽に灼けてしまっって、ズロースの、あとかい? って言われるけど、これはミニの境界線なのヨ。

だからネ、現代風にあなただが暴内団のボスになってもい





いのよ。私が差し当り、その情婦ってわけネ。凄腕の水商売上がりのアバズレ女ってことにしておいてもいいわ。男ドレイ志願者は、やっぱり田舎から、ぽっと出の世間知らずのカモの青年ってところかな。

あなたと二人で、その純真な青年を、さんざんに玩具にしていじめるのよ。理由はなんだってつくわ。暴力バーに欺かれて連れ込まれ、法外な飲代をふっかけられて払えなくてヤキを入れられるっていうことでも、いいじゃない。なんでも、去年の暮、ボーナスを貰った彦根の工員二人がなにか面白いことがないかって、大阪ミナミの坂町のあたりを午前一時頃、歩いてたんだってネ。そこへ二人の若い女が現われて誘うじゃない。とどのつまり、変なところへ連れ込まれて殴ったり蹴っ

たり、二人の持っていた十万円近いボーナスを袋ごと奪われた上に、財布まで巻き上げられて、帰りの電車賃もなくなったって話ヨ。

どう？ 私がキャッチガールをつとめるから、カモの青年を二人していためつけたら。

あなたが直接手を下して責めなくたって責めるのは私がやるわ。その方は、まかしといて——。ぎゅうの音も出んように、嬉しがらせて、泣かせてみせるわ。

それだったら、あなたが私を責める番がなってますか。それもそうね。なんとか、そんな筋書きをつくらないことには、あなたもおさまりませんわね。

そうそう、私がね、その青年をあまり濃厚なセックス責めで嬉しがらせるものだから、あなたが焼餅をやいて、私を責めるっていう趣向はどう？ ねえ、私には青年を責めて、その方の下地は充分、出来ているから、あなたの手間は充分、はぶけると思うけどナ。

こんな筋書きは、お気に召しませんか。

だったら、早いとこ、親分と姐御か、ボスと情婦か、どちらでもいいから、私を思う存分、責めてみないこと。ねえ、こんなに、両手をうしろに回してるじゃない。早く、縛っ

てしまいなさいヨ。

私の別れたグウタラ亭主なんか、今から思えば、責め甲斐、いじめ甲斐のある男だったかもしれないわね。アノ方は、からっきし駄目の腑抜け亭主だったけどネ。今、どうしてるかしらね。一寸、気になるわ。

私のような女と恋仲にならず、おとなしい家庭的な女と世帯を持ったら、案外、平和に暮してたかもしれないわネ。

あら、こんなシメツポイ話は、よしにしておきましょう。それよりも早く、今日のプレイってのをやりましょうヨ。

そう、両の手首を思いっきり、きつく縛っておいて、腕が水平になるくらい、ぐっと持ち上げて下さいヨ。私しゃ、ゆるく縛ったりだらりと手首が下がっているのなんか、きらいなんですからネ。縛るからには、身体中が喰いちぎれるくらい、厳しい縛り方をして下さいね。御注文つけて、すみませんけど、ごめんなさいね。私の悪いクセなんです。

乳房の上から二の腕が、ぎゅっと締めつけられると、こう、なんて言いますか、身体中がぞくぞくって言うのでしょうか。思わず脇腹や膝頭のところが、ぶるぶると、身ぶるいするようになってきますの。こんなのを、なんと言うのでしょうかね。他の女の人って、



こんな経験は持っていられないのでしょうかしら。こんなのは、私だけのことなのでしょううか。丁度、なんといいますが、オシッコをこらえているときみたいな、身体の奥底からムズムズしてくる感じなのヨ。

あーあ、とうとう縛ってしまったのネ。縛られてしまったら、私って、急におとな

しくなるでしょう？ なんででしょうかね。さあ、もうこうなったら、あなたの思いのままに、私の身体を料理して頂戴。煮て喰おうと焼いて喰おうとマナイタの鯉ですもの。じたばたしやしませんわ。

まだ、写真を、うつす準備が、出来てないってですか？ だったら、このまま私を、こ



ろがしておいて、準備をされたらどうなの。その間に私、十分に熟しますわよ。いいこと？

そうね、こんなにガンジガラメに縛られて放っておかれたら、どの位、辛抱出来るでしょうかね。

もう、手首の色が変わってきたってですか。

だんだん、しびれてきましたワ。肘が少し痛いみたいだけど、手首なんか、もう麻縄がびっしりと喰い込んで、なんだか自分の手ではないみたい。ウウン、痛さなんて感じませんわ。

でも、縄を解いたとき、しびれが戻るでしょう。

あの感じは痛いっていうのか、なんていうのか、嫌な感じですね。

遠慮なさらずに、ごゆっくり。私じゃ、直ぐ縄を解かれるより、こんなに長い間、縛

られて放っておかれる方が好きなの。

早く解かれると物足りないの。だから、気になさらずに、ゆっくりと写真をうつして下さったらいいのよ。

ええ、今までだって、痛いとか、早くほどこいて、なんて弱音は、絶対に吐かなかったでしょ。私って、こんな女なんですヨ。わかった？

さあ、次はどんなのを写すんですの。アクロバットまがいのポーズも平気ヨ。

ただネエ、私、頭を下にすると弱いのだから、逆さ吊りなんてのはニガテ、生理的にも嫌だわ。

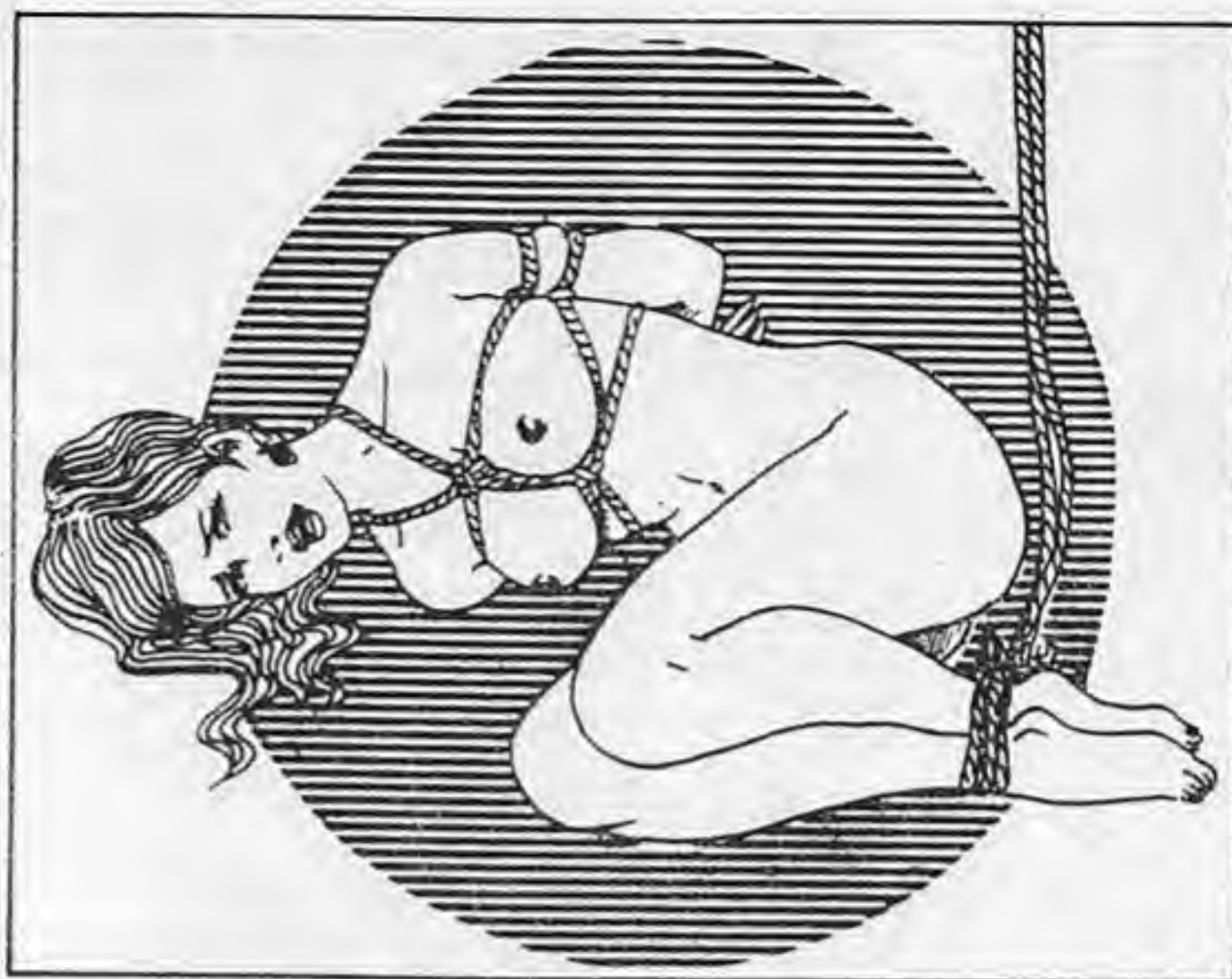
それ以外のポーズだったら、おっしゃる通りにとってみせるわ。もし出来なかったら、ムチでしばいたり、私の脇腹を抓ったりしたらいいわ。

そのかわり、あとで、たっぷり仇をうってあげるから、いいこと。

あら、いやだ。そんなことせんといて。まだまだ、これから沢山写真うつすんですよ。カメラが汚れるじゃないの。馬鹿ネ。まだ縛りはじめだっていうのに。

ねえ、テープを止めといて。お願い。

カット・須坂 旭



若い奴隷の崩壊

むせかえるようなピンクに全身を染めて、
ピクピク痙攣しながら悶える桂子を前に、満
座の男女は瞠目したままである。

むっくりと大きい双臀をジュウタンにこす

パロディ

花

と

蛇

連載 S 大河小説

山 光

純

(四)

りつけるようにしているのは、この美少女が
いやおうなしに昂進させられた性感に満ち満
ちている、せいだ。まっ白い内股は、かろう
じて閉じられているが、夥しい愛液が分泌し
ているため、下腹部のあたりはヌラヌラして
いる。

豊かな漆黒の髪を乱し、政やんと竹田によ
って齒の根も合わない、やる瀬なさに追いこ
まれている元の令嬢の艶姿は、男心を無限に
そそる色っぽさに、あふれている。

宙をさまよっている濡れきった瞳は、トロ
ンとして何ものをも見ていない。いちめんの
桃色の霞がかかった花園のついそこに、目も
眩む恍惚がある。その花芯を、いままさに摘
みとって貰える一瞬前に、すっとしりぞいて
いったあの戯れ——あのテクニックだけを、
切ない思慕をこめて追いもとめているのだ。
皆んなは、あの静子夫人さえを狂乱させた
塗り薬の偉力を知っている。いま、みるも淫
狼なポーズでイモムシのようにのたうってい

る桂子の美肉の奥の奥で、熱い体温と愛液とで充分に醗酵した媚薬が、どんな効きめをあらわしているかが想像できた。

のたうつ桂子の、えもいわれぬ官能の炎にあぶられたのか、一座に酒が廻されてきた。見物は、ほっとしたように次々とコップ酒でカラカラの喉を、うるおす。

しかし、陽気な胴間声などはでてこない。

コップが重ねられ、酔いがまわりはじめると、座の重くるしい淫逸な空気は急速にふくれあがってくる気配である。

すすり泣きをもらして、生殺しに悶える桂子は口のなかで、つぶやいている。

「……ああ……おねがい……おねがい……おねがいだから、い——てほしいの……」

とうとう塗り薬を調合した、鬼源がいいだした。

「いくら暫くの別れだといっても、このままだと、こいつの神経がどうかなっちまうかも知れんぜ。もう引導を渡してやったらどうだい。千代夫人」

調教師にも仁義があった。

「そうだねえ。それにしても仲々のみものだし、どうしたものかね。どうする、朱美」

「あたいに、まかしといて。けっこう面白い

でしょ。はばかりながら、あたいは、このお嬢さんの軀のできぐあいは、よく知ってるんだ。まあ、まかしといて」

「そうかい。なんだか私としたことが、くすぐったくて、しかたがないんだけど、まあいいよ、面倒くさい。どうせ朱美に預けた女なんだから」

「サンキュー、千代さん。いっそのこと、この女を色気狂いにしちゃってやろうかしら……ふふふ……そんならオッパイをさわったりしてやる手間なこともいらないし。……四六時中、乳繰りあっていないと、もたない女が一人くらいいても、いいかもよ」

それが聞こえたのだろう。ピンクに染まっている裸女は、ネットリとした瞳の焦点をあわせようと、朱美のほうに向ける。

「さあてと、お嬢さん。あんたも喉がかわいているだろう。さあ、これを飲んで、いよいよ最後のときをむかえようよ。ふふ……」

朱美も、先ほどからコップ二杯の酒をあけているから、きつい三白眼が据わっている。手にしているコップを、桂子の唇にあてがおうとして、

「おっと、これは、あたいたち用の、お酒。ピンク・スター用は、こっちの特別製のやつ

よ。さあ、これを皆さまにおねだりして飲ませていただくのよ。いつもの要領でね」

夢見る表情の桂子は、少女のように素直にうなずき、赤茶けた、いまわしいマムシ酒を慄える掌で、つつむようにして受けとる。

いつもながらの、みえきった結末を知りながら、全裸の女は頬をテラテラと紅潮させたまま、つい左側で淫らな笑いを浮かべている三人目の川田のほうに、にじり寄ってゆく。

異常な雰囲気の中にあるこの邸では、もはや、世間の常識など通用するはずのものではない。たったいま行われつつあるこの加虐シーンも、ここではただの座興、ただのお遊びにしかすぎない。この一夜を面白くするために、この女体にどんな羞かしめを加えてもいいのだ。

桂子の哀れさは、彼女がそれに対して全身全霊をふりしぼって奉仕せねばならないところにある。この邸の中は、性奴隷の彼女にとって全世界なのである。

中年を過ぎかけた、すれっからの売春婦でさえ、唾をひっかける行為の報酬として、桂子は、これまで何を得ることができたのだろうか。そして、これから先は……。

桂子は、まだ二十才前だ。どんなに手荒く

取り扱っても、まだ二、三年は使用に耐えるだろう。それまでの間に、稼がせ、楽しませ、羞かしがらせ、そして大いに嘔り泣いてもらわなくてはならないのである。この肉体からむさぼれる限りの若さと、艶やかさを奪って、何一つ、与える必要もないのだ。もちろん、一連のお楽しみの過程で、この裸女に対してどんな口から出まかせの約束をしても、すべては許される。

邸の連中がこの女の肉体に飽きたとき——桂子は、どんなふうな処分をうけるのだろうか？ そんなことは、その時に考えればいいことで、性奴隷などの知ったことではないのだ。

さて、川田は床の上を這って、にじり寄ってきた桂子の捧げるコップを取り、すっかりご満悦のていである。そして、いやらしげに口元をゆがめ、耳元に、こそこそと囁きかける。

コックリと、うなずいた美少女は、ソファに坐っている川田の膝に、白い腿をひらいて乗りかかってゆくのだ。

双つの山をなす胸の隆起を、ぴったりと男の胸におしつけてゆき、男の首筋に白い腕をからませる。

「……キスして……けいこ、に……」

川田は口一杯に含んだ、まむし酒を口うつしに飲ませはじめた。満座の注目が集まっているのを見ると、ことさら濃厚なディープ・キスを、あたえる姿勢をとる。もとより、このくらいのことでは照れるような男では、さらさない。

桂子は、すこしずつ流しこまれてくる生温かい酒と、固くしこっている乳首の感触に醜弄されて、むせる。男の両手で微妙に撫でられる張りきった双臀が、もじもじとせつなげに揺れる。

人間の牝の、なまめかしい曲線と淫らな匂い。若い肌に、ほんのりと浮いている静脈と羞恥の、さくら色の美しい、とりあわせ……骨ばってゴツゴツした川田の太い指には、

印鑑になる大きい悪趣味な金の指輪が、はまっている。一ところの小遣銭にも窮していた川田たち森田組の手合いには、考えられもしなかったアクセサリーである。実際、彼らのほとんどは、朝飯代をだすために売血さえしなければならなかった、経験をもっているのだ。

しかし、それも昔のはなしで、静子たちの性奴隷を手中にしてからの羽振りには抜群のもの

のとなっている。何しろ、数十億にのぼる遠山家の資産が千代の手に入った上、ビター文報酬をやることもない裸か女どもが、すべてを投げ出してボルノグラフィの製作に打ちこんでいるのだ。これこそ、一石三鳥といわずして何であろうか。

ヌード女どもは、森田組を儲けさせ、大笑いをさせ、存分に御馳走することに美肉を競いあっているのである。

川田の純金の指輪は角ばらないように周囲を丸く加工してある。桂子の暖かい体温によって、ぬくもっているが、それは今、黄金特有の輝きを、しめしていない。逆に輝きは、まったくうすれて、粘質のトロリとした液体に浸って、にぶくヌラヌラした感じにおおわれている。

もとより言うまでもない桂子の愛液に、まみれているのだった。

内なる方から、つきあげてくる衝動に煽られて、桂子の涕泣は座の空気を、くまなく昇華させるばかりに長い尾をひいて流れる。

「おい、いいかげんにして次へ廻せよ。俺もムズムズしてきたぜ」

川田の横にいる吉沢が、肘をつついて、せかせる。

裸女にペチャペチャという肉の音をたてさせながら、その感触を楽しんでいる川田は、情欲にくもった声で、

「まあ、……もう少し待ってくれよ。これからが……いいところなんだから」

「そういうが、お前、随分になるぜ。もういいだろう。俺にまわせったら！」

「気分が、こわれるじゃねえか……うるせえな！」

この肉体の専有をめぐる醜い言い争いは、なすがままにされている桂子の耳にも、はいつているのかどうか。まるで無重力状態にでもいるような恍惚境をさまよいつづけているが、あの全身がくまなく溶ける至上の衝撃は、まだ与えられない。

桂子は、男の指先の、ちょっとした仕草、ちょっとした耳元への囁きかけにも、くまなく応じ、ためらうことなく、より淫逸な、より放恣なポーズをとってみせるのである。この美少女にとって、邸の者のすべてが、完全な専制君主、絶対者なのだ。絶対者であるからこそ、どんな暴虐を加えられても、それに従うことしか、道はない。朱美が桂子に男と乳繰りあうことを命令すれば、桂子は相手を知らずより前に軀を開く心の準備をしなければ

ならないのだ。

「まあまあ、二人で、そんな言い争いをしないで、次は吉沢さんの番よ、フフ……。ところで、桂子——」

と、朱美は上気した頬を川田の胸にぴったり押しつけているセクシーな裸女の耳元に、何やらヒソヒソと囁きかける。顔を近づけてみると、二人の女の容貌の違いが、あまりにも際だつ感じである。

桂子は夢中で朱美の言うことに耳をかたむけていたが、美しい眉をたちまち曇らせて顔を伏せてしまう。

「なんだって？ 桂子、出来ないというのかい。あたいが親切にいつてやってるのが、わからないんだね。何さ、そんな素っ裸で特出し・ショー専門のくせに——じゃ、いいよ。さあ、お次は吉沢さんよ。たっぷり、いじめてもらったらいいよ」

「ま、待って……朱美さん……許して。だって、だって桂子、そんなこと、とっても羞かしくって……皆さんの前で、そんなことをしろといったって……羞かしくて……」

「ふん、何さ。まるで生娘きむすめみたいなことを言っ、お上品ぶったりして、いやな女ね。じや、吉沢さん、好きなようにしてよ」

吉沢は、火のように熱くなった裸女の腰をぐいとひきよせ、見物を楽しませるために背後から膝の上にかかえあげる。ポツテリと重い双臀が、男の膝の上で、はずむ。

豊かに波打つ黒髪を、芝居がかった手付きで掴み、ざらざらな頬をよせる。香ぐわしくあえいでいる桂子の唇は皓い齒をわずかに見せて、吉沢の舌のたわむれに応じるのだ。

彼女は、すっかり綺麗にされた腋をみせて後向きに吉沢の首筋に白い腕をからませる。へ何さ、まるで生娘きむすめみたいなことをいつたりして……朱美の言い草に、淫らな笑い声をたてた満座の視線をあびながら、ただ一人真裸の美少女は、今宵も魔窟のニエとして果てしれぬ被虐の淵を、どこまでも転落しつづけるのである。

吉沢はたたみかけて尚も、桂子を追いこんでゆく。唇から首筋、腋の下から肩先にかけて軽い愛咬をまじえ、女に小さな叫び声を何度も立てさせながら、右手でタツプリと豊かな乳房をとらえる。美しい裸女の乳首は固く勃起し、ピンクの乳暈は、触れなば落ちん、という、あの風情に泣き叫ぶようだ。

男の左手は、なかばひらいた桂子の両肢をゆっくりと押しひろげてゆく。

「サービス満点。随分、濡れてやがるなア」と誰かが、つぶやく。もとより、熟れきった女の耳に入らない。

吉沢の目も、次第にギラギラした光を放ち始めている。

しかし、もはや焦点のさだまらない女の体内で、淫靡な淫靡な、いたぶりと塗り薬と、まむし酒との三重の責苦が、どれほどのやる瀬なさを発揮しているかを知るのは、蜘蛛の巣にかかった蝶だけであろう。

広げられるかぎり押し広がつたそれは、おびただしく満ちあふれ、一と筋は紐のように垂れかかり、小指の先ほどに突きだしている——は息たえだえに蠢動しているのだ。

「ねえっ、ねえっ！」

といいながら、桂子は吉沢の手を自ら……間に持ってゆこうとする。

「おねがい……中途はんばは、もう、よしてちょうだい……おねがい……もう許して、許して……けいこを、めちゃうちゃにしてちょうだい……おねがい、朱美さん……あたくしもうなんだってするわ……」

朱美は、ここにいたって、ようやく立ちあがる。ブルブル慄えている裸女を吉沢の膝から抱えあげ、床に坐らせる。

「じゃあ、いいのね。さっきいった通りのこと、出来るのね？」

「……ええ、朱美さん……あたくし、もう狂ってしまいそう……ありがとう……ありがとう……」

「じゃ、もう、もうなのね。フフフ……」

「ええ。桂子、もう、もうなの。お道具を、ちょうだい。桂子、皆さまのまえでも……」

むちむちと撓って、むせるような肉づきの美少女は、ともすればグニャリと、くずれかかるのをささえて、気弱な眼差しで同年輩のズベ公に哀願するのだった。

巷間に溢れている笑止なヌード・モデルなど、はるかに及ばないセクシーな裸女は、睦言の囁きそのままに、

「……ええ、もうなんだってしますわ……桂子はもう、あなたの思うまま……あなたのドレイ、いいえ、公衆おトイレ……メス犬なの……さあ、お道具を、ちょうだい」

全裸の美少女は、酷たらしいばかりに色っぽかった。全身は、わななく恍惚感に、とっぷりと浸りきり、もはや、ほんのわずかの刺激にも絶えいってしまう風情である。

ついに朱美は、わざとらしい舌打ちをして承諾した。

「そのかわり、皆さんに向かって、これからお前のしようとすることを、はっきりと説明するんだよ！」

そして、とっくに用意してある特大の道具を、けがらわしいものでも扱うように二本の指でつまみ、先端を桂子の……にあてがうようにして置くのだ。

見物の若い者から、ちょっと、おどろきの声があがった。特製の道具が、桂子専用に使われたものではなく、いや、あの静子夫人用のものより、もっと節くれだった、更に逞しい出来ぐあいのものだということが一目で分かったからである。それは人差指と親指で作る輪には、もとより入らず、毒々しい血管の彩色さえ、されているのだ。

桂子は、一瞬、大きなショックを受ける。

朱美がたたみかけて、

「お前の願いをかなえてやっているんだよ。この上、どうしてもらおうというの？」

絶対絶命の境地にある美しいヌードは、しばらく、いやいやをするように頭を振ったが抗しきれずに、オズオズと手をのばす。そして、なかば棄て鉢のように、

「……桂子ネ……たくさんの男のかたに、いろいろと、おいたをされて……もう、すっか

り……欲情しきってしまったの……桂子、もう、グッショリぬれてしまったのに、どなたも、さいごまで桂子を自分のものにしようとしてくだらない……あたしは、もうフラフラ……このままなら狂ってしまう……」

いいながら、桂子は濡れ光ってトロンとし

た瞳を宙にすえて、左手で愛おしげに巨大な道具をまさぐり、その右手は、女の泉をこんこんと溢れさせている……触れてゆくのである。

「……桂子、皆さまの前で、もう、こんな淫らなこともできるようになりましたのよ。さ



……イメージギャラリー……『イヤリング』……志羽利也……

げすんで、ちょうだい。どうか、あたしを許して……せめて、自慰^{オナニー}だけでも好きなようにさせて……」

きれぎれに口走りながら、桂子は床に両膝をつき、両肢を奇妙な恰好にひらいて、ユルユルと、みずからを破滅に追いこむ……、ひたりこんでゆくのだ。

小指の先ほどに硬直した——を白く細い指でつまむようにしながら……する。桂子は、もはや一匹の白いメスとなって、あたりにメスの匂いをありったけ振りまきながら、ただ昇りつめてゆく、大きな白い尻を振って……頬を上気させた朱美は、特製のあの塗り薬の蓋をとり、桂子の耳元に唇をつけて囁きかける。

上の空で、朱美の命令に少しのためらいもみせず、うなずき、

「ええ、あ、朱美さん。いいことよ。桂子、もう何だって、できますわ。何人の人たちに見られたって桂子、もうかまわない。さあ、そのクリームを、ちょうだい」

ギリギリの境地にまで追いこめられた桂子の容姿は、妖艶なまでに美しかった。酷薄な調教のくりかえしは、彼女の肉体を二十才とは、とてもみえない、豊満さに仕立てあげ、

一かけらの愛情もないセックスに深い陶醉を感じるように馴らしつくした。……

桂子はブルブル慄える繊細な指先で、クリムをたっぷりと、すくいとり、醜怪な巨大なものにヌルヌルと塗りつけてゆくのだ。女の呼吸は早くなり、ときどき小さな痙攣が双乳をゆする。やがて桂子は、ゆっくりと絨毯の上に仰臥していった。

その間にも、朱美は桂子の耳もとで何ごとかを、ささやき続け「さあ、カメラ、カメラの用意は、いいの——」と催促したりすることも忘れない。

二筋の強力なフラッド・ランプが赤々と点灯され、見物のすぐ前に、両肢を拡げる桂子の白い肌があますところなく浮かびあがる。千代の指示によって、ぼってりと大きく成熟した双臀のしたに真紅のクッションが、さし入れられる。その残忍なまでの赤さが、女体を、よりエロチックに鞭うつ感じである。裸したように美しい光沢をはなっている山なりの内腿——

美少女は、一気に……しようとするが……るため、うまくゆかない。

「ああ、入らない。入らないわ……」

と囁りなきをもらしながら、こよい曲線

をえがいて、くねくねと蠢く。困惑と羞恥のため、閉じられた目から涙がながれ、素敵な脚線をつっぱりようにする。情感の嵐を耐えぬこうと、足指はつよく内側にまくれこまれているのだ。更に女は両肢をひらくと、弓なりにそりあがった桂子の唇から、その時、短いが火のような叫び声が洩れる。

「……アア……入るわ、入るわ……」

あの醜怪なそれは、濡れそぼった暖かい体内に深く深く、ぬめりこんでゆきはじめてのだ！

……道具にそえられた右手はやがて激しい律動をくりかえしはじめ、そのうねりのたびに、感覚は嵩まり、さらに嵩まる。

そして遂に、電気にうたれたような強烈な恍惚感に達した桂子は、周囲の人目を忘れきった猥雑な^{ポーズ}姿態のまま、

「……」

と、その時の教えこまれた女言葉を口走った——ながくながく尾をひいて、生命のありったけを、進らせつくす、この世にもあらぬ女の弓なりの肉体の叫び……。しとど流れる脂汗……狂おしい崩壊に女のセックスのすべてを灼きつくす桂子の官能の炎……あまりに濃厚な、あまりに巧緻な^{カクストロフィー}大団円……その感覚

が、ついに元の令嬢の骨の髄までを犯しつくしたのだろう。開いたままの裸女は、奇怪なものを深くくわえこんだまま、悶絶し果ててしまったのである。

素敵な衣裳

まだ官能の残り火のほてりに頬を紅潮させている桂子の表情は、たまらなく可愛いかった。

失神に陥って、やっとケダモノたちの視線からのがれることができたのも束の間で、今はこうして三下たちの「芸術写真」のためにポーズをとらされているのだ。

……しとど濡れた道具を深々と、くわえこんだまま、二人の若いヤクザが向けるレンズにポーズをとる。

「おい、もう少し引っぱりだしてみな。そうそのくらいでいいぜ。上体をそらして、こちらを向いてニッコリするんだ。——何度いったら、わかるんだ。股をとじるなといってるだろ。よし」

ストロボが強烈に光って、ガチャリとシャッターが落ちる。

「どうも気にいらねえな……もっとシンから

嬉しそうに笑えねえのか。ケツをぐっと振りたてるようにして、とろけるような顔つきをするんだ。右手で乳を掴み、もう一方で、その太いやつをつまむ。いってみな、チーズ。このフィルムも、カラーだから安くはねえんだぜ——」

満座のなかで弄りものになっている桂子の容姿は、ストロボの鋭い光の中で抜群に映えた。三、四十枚の撮影が終わり、ようやく彼女は、道具を抜きさることができ、思わず全身の力が抜けて、うつぶせに伏してしまう。

「ほら、これですっかり拭きな」

と、ハンカチーフを投げてくれたのは、岩崎組の権田であった。

挿入するときより、抜きさるときの方がずっと勇気が、必要のようだった。半狂乱の身体の際は、必死の勢いだったが、果ててみると、その羞かしさは一しおだった。死ねるものなら、たった今、死んでしまいたい思いである。

「それにしても、ちょっとした熱演だったわね。あんた、人の前で、よくあんなことができるわね」

桂子が気を取り直すことができたのは、調教とよばれる苛酷な稽古のせいである。けな

げにも、彼女は姿勢をたてなおし、ほほえみをつくった。

「ご、ごめんなさい。すっかりお恥かしいところをみせてしまつて……」

「まあいいわよ、フフ……」と千代。「ところで、その恰好のままで岩崎組にお前を借しだすわけにはゆかないし、さりとて、お前の稼ぎでは衣裳代も出なかったので、どうしたものかしらね？」

まっていたように、朱美が、

「桂子、あんたのために素敵な衣裳を用意してあげたのよ。こんなこともあると思って、あたいがデザインしたの。きつと、よく似合うと思うわ。千代夫人によくお願いしたら」衣裳ときいて、桂子の美貌は、パツと輝いた。なにしろ、この邸に拐わかされて全裸に剥かれて以来、一糸も身にまとうことを許されなかったのだから、着るものに対する憧れは、並の娘とは、まったくちがったものなのだ。

「ありがとう、朱美さん、ありがとう。そんなにまで桂子のことを思っていてくださったなんて……」

桂子は、澄んだ声で礼をいい、乳房をゆすって何度も頭をさげる。その瞳には涙さえ浮

かんでおり、感謝に溢れていたが、朱美にすっかり屈服しきった卑屈な、いろもあった。元の令嬢が、自分の処女を奪い、肉体を踏みこじる指図をしたズベ公に頭をさげるのである。

「いやねえ、そんなにお礼なんかいうことはないのよ。お前の稼ぎが悪かったから、大したものじゃないのさ……フフフフ、だ。その丸裸のまま、岩崎組にやったりすれば、森田組の名にかかわるからね。普通より、うんと節約した、大胆なデザインだけど、センスのいいお前のことだから、きつと、ぴったりだと思うの。さあ、竹田さん」

竹田が運びこんだ段ボールの函がひらかれると、満座は、しんしんたる興味につつまれる。平気な風をよそおっている権田すら、身をのりだすようにするのだ。

どんな衣裳かと胸をときめかす桂子の目の前にとりだされたのは、数本の束ねられたパンドのようなものであった。

もとより、邸に連れこまれた時の最新ファッションは、のぞみえないとしても、これまでに肉体のすべてを捧げつくして奉仕してきたご褒美に、せめてパンティとブラジャーくらいは、お情けで与えてもらえるかもしれない

と、桂子は、そう朱美の一ぺんの気まぐれに期待したのだ。しかし、素敵だというこの衣裳はどうだろうか、バンドのような黒い皮革でできた輪にすぎない。

「じゃ、お前の新しい門出を祝って、着つけをしようね。いいでしょう。とってもシックで、大胆でしょう？」

黒革のそれは、朱美が考案した奇抜な拘束具である。いずれ、何かの三文雑誌でヒントを得て、面白半分に作ったものなのだが、これを一目、見て、芯から脅えきった表情をみせる桂子の反応に、満足する。

「さあ、桂子。この椅子に、すわって。さあ早く」

背もたれのない木の丸椅子に双臀をおろす桂子の表情には、もはや抗らう気力の失せた従順さがあるばかりだ。

まっ白い首筋に、まず首輪がはめられる。

柔らかい光沢のある皮革に金属の尾錠がついており、パツチリと、うなじのところ留められる。キラキラ光る細い鎖がついていて、犬の首輪のようだ。

続いて、足首にも足枷が装着される。桂子は、見事な脚線をそらして朱美の作業に協力するのだ。

「さあ、次は、おっぱいバンドよ。人さまにしてもらうんじゃない、自分でとりつけたらどうなの。いまさっきは、一人であんなことさえできたじゃないの。フフフ……」

素直にこっくりうなづく以外に、どんな方法も美少女には残されていない。ズベ公のいやらしい揶揄に、裸女の全身には又も、美しい羞恥のくれないがのぼる。

乳バンドという代物は、電車の吊皮にぶらさがっている吊輪を、やや大きくしたくらい黒い輪を二つ、つないだものである。例えていうなら、メガネのようになっており、胸の隆起を、ぐっと誇張させる仕掛けだ。

もちろん、露出した乳房を覆いかくすものではなく、逆に男たちの加虐心をそそり、桂子を、ますます心理的に、どうにもならない屈服感へ追いこんでゆく効果をねらったものである。

オロオロする桂子は上気し、困惑しきった明眸を朱美にむける。

身体は観念している、しかし心はそうではない。散々にオモチャにされた肉体ではあるがその一部始終を野卑な連中に見物されるのには、どうしても慣れる事はできないのだ。しかし馴致された、うら若い性奴隷の手は

心とはまったく別の生き物のように、いつしか朱美のさしだす異様な拘束衣をうけとって自らの柔肌に装着しようとするのだった。羞辱のために、ワナワナと唇を慄かせながら。

桂子は、むっちりとした八十八センチの乳房に、輪をはめ両手を背にまわして尾錠をかけようとする。丸い輪は、ぎゅぐゅと両乳にくいこみ、ひときわセクシーな魅力にあふれて、とび出すのだ。力をこめて懸命にわが身を虐んでいるヌード女の姿は、座を充分に楽しませる、いじらしい仕草だった。「できないのかい、そのくらいのが。なんて鈍な女だろう……のろまったら、ありやしない」

朱美は、しんから楽しそうに、桂子の可憐な仕草を、からかう。

「なにをモタモタやっているの？ 手伝ってやろうか。ホラ、アハハ……」

断わっておくが朱美は決して異常な加虐性色情性などではない。千代や鬼源をはじめとする邸の者たちにとって、この位のこととは日常茶飯事なのである。毎日のように、裸女たちにさまざまなゲームをさせていると、彼女たちは、もはや家畜に似た、性奴隷以外の何ものでもなくなってしまう。こうなると、人

間誰しも、奴隷と自分とはもともと同列であるなどとは考えられなくなってしまふものである。朱美にとって、今の桂子は、さまざまに新鮮な反応をみせる性具にすら、思えるのだ。

「……ご、ごめんなさい、朱美さん。だってこのオッパイ・バンド、きつすぎるんですもの……」

「おや、そうかい。おかしいわね。あら、いやだ。お前、男の人のお相手をしているうちに、ずいぶんくらんでしまったのね。寸法を計って、ぴったり合うように作ってやったのに、ちょっと油断している間に、こうなんだから、实际いやになっちゃう……」

座を冗談で笑わせながら、朱美は裸女の背後にまわり、バンドをきつく引きしぼったの

だ。

「あ……」

と身悶えする桂子にかまわず、パツチリと尾錠を留める。

丸い双つの輪のなかで、胸の隆起は、むっくりと誇張され、頂点のグミの乳首が、あえぐのだ。

このやり取りを興味ぶかげに見ていた千代が、

「なかなか奇抜なスタイルね。朱美も、いがいとセンスがあるじゃないの。見直しちゃったよ。桂子お嬢さん——どう、素敵な衣裳をもらって、うれしいでしょう？」

朱美は、低い鼻をうごめかし、

「さて、いよいよ肝腎のところをかくすほうね。四、六時中、すっ裸でウロウロされたんじゃ、岩崎組の皆さんにも、ご迷惑だろうしさ。大切なところは、大親分にご挨拶するまで、かくしておこうね。さあさあ、いい子だから、このオふんどしを、はきましようね——この、下ばきこそは、最大の恥辱をあたえるものである。ウエストを締め、股間をくぐらせる細くやわらかい皮革製のT字帯なのだ。

桂子は息をつめ、絶望にひしがれた瞳を周

囲に、もう一度、振り向け、疲れた動作で、ゆっくり立ちあがる。すこしの慈悲と憐愍をもとめる美少女は、楚々とした風情で、身をおおう役目をはたしてくれない下ばきを、またいだ。

たちまち起る口笛との喚声のなかで、彼女のかくしようのない下腹部の褪色の一線ははつきりと剥きだしになるのだ——

「あんたたちも、よくよく好きなのね。アハ……お嬢さんの身にもなってあげたら、どうなの。その前に、専用のお道具を身体におさめておいていただくのよ——ええ、うんと深々とね……そこへよ、わかるでしょ。そこへよ！ はじめにもいったでしょう。手にもっていて、どこかへ置き忘れでもしたら、大へんだからって……」

朱美は、抗らうことのできない桂子を、ほしいままに嘲りながら、ますます図に乗って「こうして奇妙キテレツなスタイルをしていると、丁度、大人のオモチャってところね。ええと、お次のペッティングご希望は、どんな？」

「おいおい、朱美。また、やらせるのかい？ お前も、好きだなア」

それに反発するように、それでもヘラヘラ

四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四首画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しません。只今、若干在庫があり、すので、未入手の向はお早めには是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号。出版株式会社へ。

略号「花」 定価五〇〇円(送共)

笑いながら朱美は、次のようなことを説明するのである。

皮革の緊縛スタイルの桂子を関西に出張させると、当分の間は、物珍しさのために、岩崎組の連中に桂子はコキ使われることになるにちがいない。といって、関西にまで聞こえた森田組支配下の性奴隷が、お座なりのお相手をした、などということになっては朱美の名折れである。

「——つまり、いつだって心をこめて殿方のお相手をいたしますワ、という身体の準備をしておくのよ。いいわね、桂子も、はじめのうち、ちょっとムズムズするだろうけれどおしまいには、とっても気持がよくなってくるかもしれないじゃないの。フフ……さあて今のままの体のうるみぐあいじゃ、お道具を深く、くわえこめないだろうから、桂子、当分のお別れに、森田親分にお願ひしたら。これまで、いろいろと、お稽古をさせて頂いたお礼に」

名指された森田は満更でもなさそうな酒やけのした顔をゆるめる。近ごろは静子を寵愛しているが、その合間に座敷をかけることもある。こつてりしたビフテキのあとで、トロをつまむのも結構というわけだ。

ただ、桂子の管理にあまり注意をはらってこなかっただけに、先程からの大熱演と、すっかり成熟した肉体に改めて感心してしまっている。桂子を関西にやることなどきめてしまったのは、早計だったかな、という気持が脂ぎった表情のどこかにでているようだ。

「そうか。じゃ、送別のしるしに、ちょっと可愛がってやるか。さあ、こちらへ来な」

相手が、つぎつぎとかわっても、主役は同じの加虐ドラマが又しても始まるのだ。このドラマのクライマックスは、必ず女主人公の絶叫と悶絶ということにきまっているのだがそれまでにいたる筋書きは、それぞれに狡智な趣向が用意されている。

加虐者たちは、完全に手中のものにした美女どもをへ一寸試し、五分刻みといった、あのやり方で、性地獄をのたうちまわらせることに夢中である。こうして淫猥な遊びにふけている間に、金と快楽が自然に流れこんでくるのだから、こたえられないのは当然といえよう。

だが、その一方、無法者たちは裸女を扱う際に、女どもが上流階級の出身であることを最大限に利用している。最低のパン助以下のことを次々とやらせながら、その屈辱感に身

悶えする女の優しい心根をつみとってしまったりはしないのである。

乳房を責める時と、貞操を奪うときの命令や囁きは、それぞれ微妙にちがっており、それが一層、女どもの屈辱感と羞恥心を燃えあがらせ、どうにもならない心境に追いこめられてゆくのだ。

女どもは、つねに断崖絶壁のきわに立たされていくような心理状態にあり、誰がどんな調教を加えようとしても、みじめに、時には自ら進んで加虐者の前に褶伏してゆくようにしつけられているのである。

「おう。桂子、そうやって変わった衣裳をつけていると、素っ裸とはちがったお色気がでるのう。いつだったっけ。お前のママと、お前を並べて味くらべをしたときは、尻のまわし方なんかのテクニクで、ママのほうが味がよかったが、この頃は、そうでもないようだな。ワハハ……」

いいながら、森田は、桂子の、乳バンドで締め上げられ、ぐっと、せり出している乳房を、ゆっくりと、もみほぐしはじめるのであった。

作六鬼団



決定版

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚『奇譚クラブ』誌上に連載中でありますが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となつた訳であります。八十年の集積を味読して下さい。

●瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

●客号「花決定版」●定価一、〇〇〇円(送200円)●

△内容主要見出し一覧▽

第一章 発端 第二章 人ろ 第三章 美探 第四章 華淫 第五章 救者 第六章 救者 第七章 救者 第八章 救者 第九章 救者 第十章 救者 第十一章 救者 第十二章 救者 第十三章 救者 第十四章 救者 第十五章 救者 第十六章 救者 第十七章 救者 第十八章 救者 第十九章 救者 第二十章 救者 第二十一章 救者 第二十二章 救者 第二十三章 救者 第二十四章 救者 第二十五章 救者 第二十六章 救者 第二十七章 救者 第二十八章 救者 第二十九章 救者 第三十章 救者 第三十一章 救者 第三十二章 救者 第三十三章 救者 第三十四章 救者 第三十五章 救者 第三十六章 救者 第三十七章 救者 第三十八章 救者 第三十九章 救者 第四十章 救者 第四十一章 救者 第四十二章 救者 第四十三章 救者 第四十四章 救者 第四十五章 救者 第四十六章 救者 第四十七章 救者 第四十八章 救者 第四十九章 救者 第五十章 救者 第五十一章 救者 第五十二章 救者 第五十三章 救者 第五十四章 救者 第五十五章 救者 第五十六章 救者 第五十七章 救者 第五十八章 救者 第五十九章 救者 第六十章 救者 第六十一章 救者 第六十二章 救者 第六十三章 救者 第六十四章 救者 第六十五章 救者 第六十六章 救者 第六十七章 救者 第六十八章 救者 第六十九章 救者 第七十章 救者 第七十一章 救者 第七十二章 救者 第七十三章 救者 第七十四章 救者 第七十五章 救者 第七十六章 救者 第七十七章 救者 第七十八章 救者 第七十九章 救者 第八十章 救者 第八十一章 救者 第八十二章 救者 第八十三章 救者 第八十四章 救者 第八十五章 救者 第八十六章 救者 第八十七章 救者 第八十八章 救者 第八十九章 救者 第九十章 救者 第九十一章 救者 第九十二章 救者 第九十三章 救者 第九十四章 救者 第九十五章 救者 第九十六章 救者 第九十七章 救者 第九十八章 救者 第九十九章 救者 第一百章 救者

第二十二章 身代金奪取の失敗 第二十三章 涙の宣誓 第二十四章 連命の逆転 第二十五章 奇妙な三々九度 第二十六章 飼育される白い動物 第二十七章 悪魔と悪女の悪業 第二十八章 屈辱の地獄 第二十九章 逃走の恐怖と失敗の結末 第三十章 悪鬼達の残忍な所業 第三十一章 落花無残の修羅場 第三十二章 淫らな美女の調教 第三十三章 すすまじいショーの展開 第三十四章 汚水にまみれた宝石 第三十五章 華々しき美女の屈伏 第三十六章 対峙する美女と美女 第三十七章 あくどい陥穽 第三十八章 羞恥図絵の展開 第三十九章 清純な令嬢の屈服 第四十章 人身御供の令夫人 第四十一章 深窓の美少女とズベ公 第四十二章 小夜子への執拗な調教 第四十三章 変性色事師の登場

第四十四章 生れかわるスター京子 第四十五章 激しいスターへの訓練 第四十六章 低脳男と令夫人の結婚 第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人 第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊 第四十九章 悪魔たちの哄笑 第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄 第五十一章 珍芸を開陳する令夫人 第五十二章 淫靡な時代劇ショー 第五十三章 華々しきショーの展開 第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり 第五十五章 ズベ公達の邪悪な責め 第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち 第五十七章 悪党の執拗ないたぶり 第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面 第五十九章 勝ち誇る悪党一味 第六十章 中国伝来の秘法 第六十一章 緊縛された美女の涕泣 第六十二章 新しい餌食への触手 第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄 第六十四章 恐怖の責め続く 第六十五章 結末なき責めの結末 第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人 第六十七章 新しい機軸の到来と静子の狂態 第六十八章 あくなき汚辱に泣く美女 第六十九章 ニューフェイスに飼育開始 第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女 第七十一章 熱気を帯びたマゾの競演 第七十二章 女盛りの妖美な肉体 第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊 第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。
〒558 暁出版株式会社宛

— ファンレター —

三浦夫人により

奇クファンとなる

小倉悠紀

誌上に、折々往時の黄金時代と比較してグラビアのない現在の『奇ク』を物足りなく感ずる読者の声を見かけますが、小生の如き、極く最近のファンとしては結構、今の奇クを楽しいものだと思います。

なかでも『夫婦プレイ』を始めとして一般の愛好者の報告写真が多数、掲載されていることが、何よりの驚きでした。

意識的に遠ざけておりましたところが、ふと心空しいとき、古書店で手にして以来、忽ち熱狂的なファンとなってしまう、大金を投じて、昭和二七年以来の『奇ク』を全冊とり

揃え、分譲写真にまで手を出す始末です。

今やSMに対する偏見、罪の意識は完全に払拭され、それどころか、これ程甘美なものはないとさえ思うに到りました。

いろいろな点で絶望的な状況にある小生にとって、時にはいてもたっても居られぬ寂しさに襲われることもあります。大声で叫び出したい程の狂気に駆られることも度々です。年令と共にコントロールする術を体得しつつありますが、絶望的な孤独感、今尚一つ間違えば身の破滅をもたらします。

困難な状況は、結局ストイックな努力によ



って克服するしか道はないということ、わかってはいるのですが、全くの悪循環で困難な現実に向け刹那的な刺激を求める度に気力も減退していく様です。SMの世界もその一つかも知れません。だが、この味わいを知った以上、逃がれることはできないと思います。

これ程までに私を捉えた、その大きな誘因は、金銭によるモデルの、単なる縛り写真にない、生々しい『夫婦プレイ』の魅力にあると思います。かつて二、三度『奇ク』を手にした事もあります、縛りの写真もヌード写真の亜流位にしか考えておりませんでした。

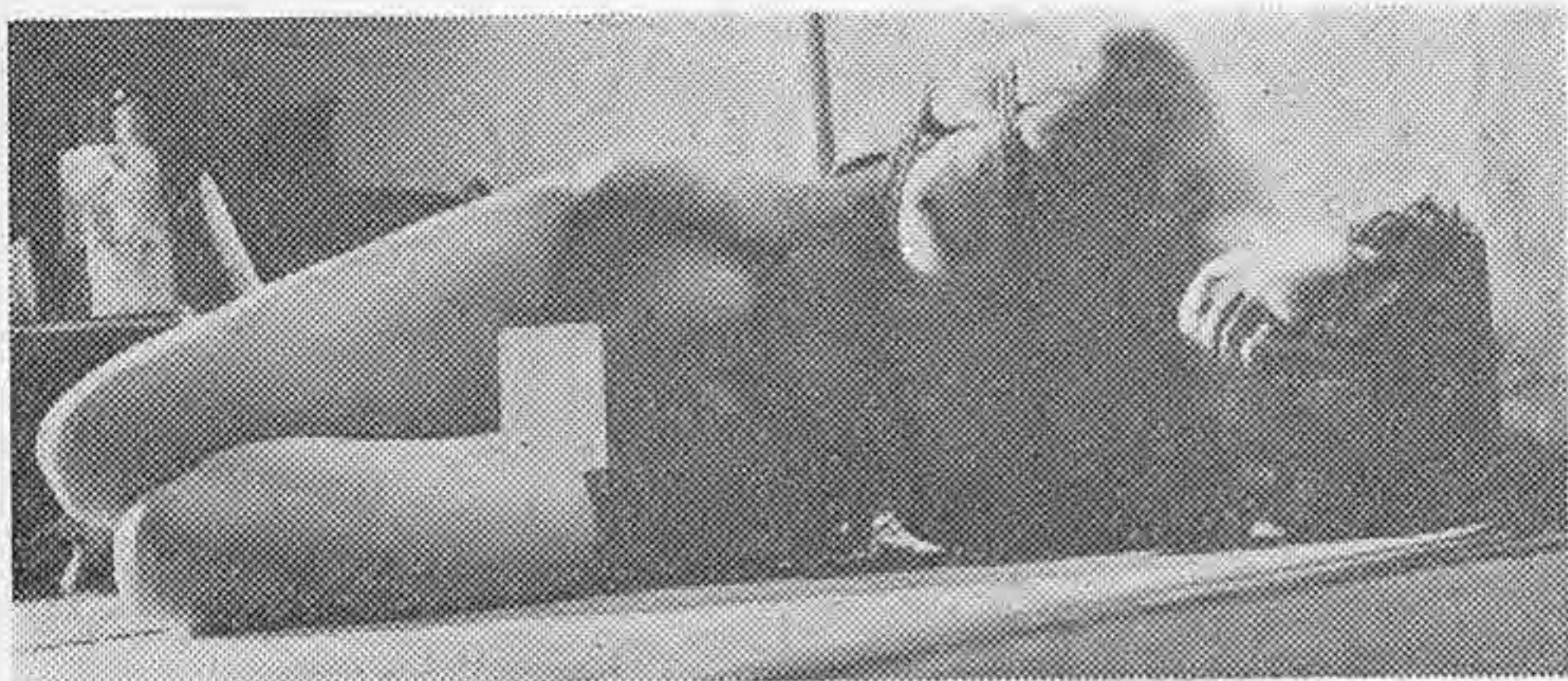
しかし、十年ぶりに垣間見て、忽ち惹きつけられたのは、いかにもリアルな素人プレイの写真です。そして小生にとって、この道に決定的に呪縛されることになったのも、始めて手にした『奇ク』に三浦純子さんが登場していたことです。

今大急ぎで、二七年以降の『奇ク』のグラビアを繰っています。小生の目から見て三浦純子さんは、その中で五指に入る方だと思います。

成熟した人妻としての味わいという点では、彼女の右に出るものはないとさえ思います。古来よりのいわゆる「貞淑なる人妻」というイメージにぴったりです。主人を立て、素直従順で少々夫に乱行があっても常にいそいそと献身的にかしずいてくれる男にとっては理想的な女性だと思っています。

(安井夫人と共に)

男は女性の裸というと、すぐ目の色を変える如く云われるけれど、最近公衆



の面前で、でれでれとからみ合い「仕事のためなら裸なんてへっちゃらよ」と、さもそれが職業意識の高い所以と感嘆しているポルノ女優がいたりして、まるで羞恥心がなく、このような女が全裸になつて逆立ちしたところで何の興味もありません。

三浦夫人の如き日常の生活に於いて誠につつしみ深く、しとやかな女性であつてこそ、いろいろ恥かしいめに合わせる意欲が湧くというものです。彼女が股縛りにされているときのあの羞らしい表情こそ、SMの極致であると思います。

陳腐な言い草であります。が、このように貞淑で清楚な彼女を、夜毎全裸にして自由にできる三浦氏は、本当に果報者と云わねばなりません。羨しき限りであります。

誌上で、二度拝見しただけですが、まだまだ無限に貴めの方法が残されていると思います。辻村氏のみならず、三浦氏自身も登場し

て、もっといろいろな領域に踏み込んでいただき度いと思います。誌上発表の制約上、絵に表わせるには限界があるでしょうが、可能な限り努力してもらい度いものです。

試みに私の夢想するのは――。

① 全裸にして首輪、くさりをつけ犬として庭や野外を連れて歩く。もちろん、ちんちんもさせるし、木のそばに來れば片脚あげでオシッコもさせる。又犬小屋の横でお坐りもやってもらうこと。

② 谷山久美子さんのような逆吊り、とくに梨花さんのときの如く男のサポーターを穿かせること。

③ 着衣姿でトイレに入るところからの連続写真、全裸縛りのものはあっても、着衣の普通のトイレシーンは誌上に発表されたことがない。スカートをまくって、しゃがんでいる姿も又一興ではなからうか。メンスパンド着用は是非実現してほしい。

④ 彼女自身に是非、手記を書いてもらいたいことです。

いくらSMとは云え、人の奥様について勝手に淫らな空想をして申し訳ありません。三浦氏ご夫妻や出版事情などもあり、唯の空想に終わるかもしれませんが、とにかく、どういう形であれ、今後再登場して下さることを心から願います。

以上

連載・時代S小説

紫

蘭

の

門

(7)

別にためらう事なかれ
悠々と潤歩すべし
天地 正しく
紫蘭の門

カット・岡 たかし

風 流 極 道 軒

千登世無慚

激しい怒りを含みながら、日本橋四丁目の本邸に北町奉行
所与力工頭監物をともなうて帰ってきた元禄屋を待ち受けて
いたものは、京都の菊亭政房からの吉報であった。

「フッフッフ……。黄金のロザリオでは腹のたしにもなるま
いて。昭吉、百両もおくり届けてやれい。フッフッフ……。」
五指を数える妾のうちで、最も可愛いがっていたお国が、
間夫と思われる御家人崩れの文次郎とともに、怪盗徳夜叉に
奪われた怒りを一時、忘れさせるに足る朗報。

それには――

もうこれ以上、娘の貴子を責めることなく妻として可愛が
ってやって欲しいと、縷々、述べたあと「丙夜のロザリオ」
は、本日、確かなものが江戸に下るといのでことづけたが
この書状のほうが早くつくとおもうのでお知らせすると、珊



瑚樹四十七箇を環いた十字架の立柱の裏側に
有為の奥山今日越えて

と、かねて元禄屋たちが予想したとおりの
文句が彫られてある旨が、達筆で書かれてあ
った。

「問題は、次の和蘭文字でしてな」

元禄屋は、そのあとにつづく、

22、42、14、20、26

奇態な文字を工頭にさししめし、

「こいつは、神宝方探秘職棟梁の折戸様より
ほかには読めないのです」

と、深夜にも拘らず、喜々とした様子で番
頭の昭吉に、早駕籠を命じる。工頭監物があ
わてて、

「お国のほうは、いったいどうするつもりな
のだ！」

と訊ねると、

前号まで——豊太閤五夜のロザリオを
めぐって幕府為替御用元禄屋に責め罵ら
れる女たち。菊亭貴子・久我雅子は日本
橋の本宅の座敷牢に。麻生六本木の別邸
では、櫛師春日和泉の妻豊香が穴沢流緊
縛術の縄に哭き、義理の娘千登世にも鞭
兵衛たちの嗜虐の魔手がのびる。

「そいつは町奉行所のお役目でござりましょ
うがな。なおざりになされますと、私どもの
手で徳夜叉を捕えまするぞ。そうすると、北
町奉行所きつての鬼与力様のお顔に傷がつき
ましようぞ」

「この野郎！」

工頭は酔いもさめたように自嘲を交えて冗
談めかしたが、元禄屋は、むうっとしたまま
であった。

その頃、麻生は、六本木の別宅では——。

十五人もの男たちを迎え入れた千登世が、
身も世もあらず悶えていた。

肥田、工頭が抱き、つづいて三人目の元禄
屋が、まるで放尿でもするようにそっけなく
すませて、さっさと日本橋の本邸に帰ってし
まったあとは、籤の順番どおり、白豚、昭吉
鞭兵衛、赤狐、利倉屋、そして斑猿に黒馬と
指を折るのも面倒なほどの男たちが、長いも
のは小半刻もかけて、たっぷりと千登世を抱
いたのである。

十一番目は、手代の金吉であった。お国の
誘拐を知らせにきたばかりに、幸運にも籤を
ひくことを許され、しかも、種彦たちよりも
先に抱く。喜び勇んで入っていき、ものの四

半刻もたたないうちに夢でもみているような
顔付きで、ふらふらと出てくる。

「ざまあねえぜ、金吉。しっかりしなよ」

と十四人目の貧乏籤の当たった青蛇が、ど
なりつけ、入れ替りにたち上がった種彦に、

「先生、早く頼みますぜ。夜が明けっちゃい
ますからね」と声をかける。

まこと、明けやすい六月の夜、びったりと
閉められた襖のすきまから、朝の光がさし込
んでくる。

「一緒にやりですか、青蛇さん、芳年先生」

青蛇に遠慮したわけでもなからうが、種彦
がいうと、芳年も青蛇と顔を見合わせ、

「どうです。こう、どんじりに近い貧乏籤を
ひいた以上、四人がかりで魚鱗に鶴翼、車懸
かりで責めたてちゃあ。種彦先生も、せっか
くああ言ってくださっていることだし」

青蛇と和吉に、異存のあるはずがない。

四人ぞろぞろと襖を開けて入って行く。

八畳ほどの部屋であった。

鳳凰をそめぬいた甲州八端の夜具が敷かれ
てあったが、お目あての千登世の裸身はそこ
にはなく、かたわらの畳の上に、惨めな姿態
を曝していた。

惨めな——というのは、部屋の四隅から伸

びている紫色の縄で、四肢を『大』の字に、仰向けにはりつけられ、腰の下に目もあやな真紅の座蒲団が三枚、千登世が一番、隠しておきたい所を、突き出すようにして曝されていたからである。

「フッフッフ……これはまた、処女一人を扱いかねて、こんな形で、ものにするとはい

「最初からじゃあないでしょうよ。多分、いま抱いた金吉さんが、趣味でこうしたのかもわかりませんな」

「いやいや、ここを見て御覧なさい」

と芳年は、雪のように白い双臀がのっけている座蒲団が、しとどに濡れているのを指さしながら、

「この濡れかたは、一人じゃあできません。三人か四人、ひょっとすると、それ以上も、このままで抱いたに違いない」

絹地の座蒲団のところどころには、すでに男の或は千登世のものかもわからない××がすでに乾いて糊状の斑点ができていた。

「かわいそうな気がしますなあ。なにしろ、始めての経験でしょ。それなのに、十二人も男が一夜のうちに花を散らせるとは」

「フッフッフ……御慈悲は無用。どうです、この肌、この端麗な横顔。始めて女になった

と云う色気が、むんむんしてくるじゃありませんか」

芳年たちが勝手なことを饒舌っている間、和吉は、じいっと、虫の息の千登世を見つめていた。和吉にしてみればこの女は、同僚の昭吉を、仇敵にしてまで惚れていた女であった。その女が、今、このように無残な裸身を曝そうとは――。

つい二刻ほどまえ、(フッフッフ、和吉さん、おさきに頂戴しましたよ。まったく凄えのなんのつたって。骨の髄までとろけっちないそうな味ですよ。まあ、のちほどごゆるりと)と、つかえにつかえていた溜飲を一度にさげたと云うと、主人の元禄屋のともをして、本邸に帰っていった昭吉の顔が、ねたましくうかんでくる。

どこが、どうすごいのか――。

ともかくも、順番どおり、種彦が、下半身をあらわにして、千登世におそいかかる。

「ウッ！ ウウ！」

死んだように身動きひとつしなかった千登世が、突然、低い呻きを洩らすと、四肢を縮める。紫色の縄が、ピーンとはりつめて、

「ア、アアッ……」

乾いた紅い唇がひらいて、中から真白い齒

並みがのぞき、熱い息が押し出される。

「手伝いましょうよ、皆さん」

ぴったりとくっつきあった種彦と千登世の胸のあいだに手を押しこんだ芳年が、千登世のまだ蒼みの残っている、こりこりとした乳房を揉み始めると、負けじと青蛇が、よこから、乾いた朱い唇をべろべろと舐める。

(もうこれまでさ。この女も結局は、ただの女にすぎなかったってわけだ。これから散々おもちゃにされることだろう。私の百年の恋心もこれで一度にさめてしまったってわけ)

フウツと大きな吐息を洩らした和吉は、千登世のまるでくちなしの花のような二の腕の内側に、妙に、なまなましく生えそろうっている黒々とした腋毛に、飢えたけだもののように、むしゃぶりついて行った。

時おり、「ムウツ」と呻きを洩らすだけの千登世を相手に種彦がことを終え、つづいて芳年が、のしかかっていても、もてあそばれつづけた女体は何等反応を示さなかった。

「こう刺戟がなくちゃあ、面白くねえよな。やっぱり少しは、いやがって抵抗してくれなくちゃあ」

芳年のあと青蛇は、はやばやと、事をすまして起きあがる。

「さあ、和吉さん。いよいよ、どんじり、あんなの番ですぜ」

と種彦に云われた和吉は、まず、千登世の四肢の縄を外した。外されても、乳房はおろか、女の××を覆う力ひとつ消え失せている裸身を、和吉は、芳年に手つだってもらって夜具のなかによこたえる。

「これはまた、ご親切なことで」

種彦にからかわれながら和吉は、あれほどまでに自分が、天女のようにうやまっていた女の末路がこれかと、複雑な気持で生絹（すずし）のような肌を撫でてみる。ほかの男たちのように欲望の対象とする気には、まだならなかった。と、

「和吉さん、惚れなおしても駄目だよ。この女にや、れっきとした新五郎という男がいるんですよ」

種彦の言葉に、和吉の妬心がメラメラと燃えあがる。

その通りなのだ。

千登世は、捕われの身となった恋しい新五郎の生命とひきかえに、この辱かしめを甘受しているのである。

「畜、畜生！」

とたん、和吉は裾をからげ、禪のなかから

××した××をつかみだすと奮然として、虫の息の千登世の裸身に挑みかかっていく。三度び、四度び、それは、失恋した男が、復讐の鬼と化して、相手の女を罵りぬく凄まじいばかりの怨念であった。

南蛮時計が、九つ、鳴ったとき、やっと、「青蛇さん、穴沢流の捕縄、がんじがらめにかけてやって下さい。この女の汚れっぷりをあの新五郎とか云う野郎に、こつてりと見せつけてやるんでさあ」

「フッフッフ、なるほどなあ。承知しやしたぜ、和吉さん」

和吉のその気持ち、いたいほどわかる青蛇は大きく頷いて、千登世に、猿廻し、縄を念入りにかけていく。

部屋の外には、六月の陽光が、眩しいばかりに照りつけていた。

前後左右を取りかこまれて、贅石づたいに新五郎のいる土蔵へとひきたてられていく千登世の裸身には、太腿と云わず、下腹と云わず、男たちの凌辱の痕が、点々とあざとなつて浮かびあがり、くっきりと庭におちる影までが凄艶な匂いを、ただよわせていた。

お国責め

四谷から、調練場を経て、青梅街道を府中から、八王子へ――。

そのあと、どこを、どう通ったのか、お国にも、文次郎にも、わからない。

ただ、ついた所が、一見、何の変哲もない豪農――代官請負新田か、見立て新田か知らないが、山、また、山の間を、こぎれいに耕した田園の一劃に立つ合掌作りを、いささか変形にした三階建ての表であった。

二つの駕籠が、すうーっと、吸いこまれるように、その平門をくぐる。

夜も九つが近かった。

建仁寺垣のかげから、現われたのは、白綸子の着流しに、献上博多紫地の帯を締め、獅子皮の柄おいた小刀をたばさみ、左手に荒縄の下緒の太刀を無造作に持った二十七か八の貴公子であった。

無言である。

駕籠昇きは、何時の間にか消え、新しい男達が、それに代る。

常夜灯の光のなかで、たにうつぎが紅色の花を咲かせている広々とした庭を、黙々とし

て影絵のように横切り、

「出る！」

と、駕籠^{かご}の垂れがはねあげられたところは二十坪ほどの広さの納屋。薪木やら炭俵やら藁束などが、積みあげられている土間の上であつた。

早縄をかけられ猿轡をはめられている二人が、よろよると転がり出る。

男は四人――

正面、白綸子の着流しの若者だけは素面であつたが、あとの三人は、夫々、仮面をかぶっていた。

と、般若の面が、

「元禄屋は、なぜ小紫のお景殿を掠^{さら}った。目的は何か。また、いま、どこに」

厳しい口調であつた。二人の猿轡だけを、サアッと、ひふつと、こが外す。

「知、知らぬぞ。そんなこと知らぬ」

文次郎が、蒼白な顔で応える。

「云うな！ うぬは、御家人崩れの文次郎。

この女の間夫じゃ。お景殿のこと知らぬとは云わせぬ！」

と、おかめの面。

おかめは、飛香の小式部。ひふつとこは杖舎の茶々丸。そして般若は図書の六孫王。い

ずれも、正面に悠然と坐っている貴公子徳夜叉の配下のなかで錚々たる男達であつた。いま仮面をかぶっているのは、勿論、江戸の町々に暗躍する身、素顔を知られないためであらう。

「文次郎とやら。生命が惜しければ答えるがよい。汝^{うぬ}も他人の妾の間夫になるほどの男、ひとくせもふたくせもあるうが、まだまだ死ぬのは、いやであろうが」

般若の言葉に文次郎は、ぶるぶる震えだしたが、首は、やはり横に振る。

「女、お国とか申したな。答えい！」

般若の手にする馬鞭が、激しく鳴る。

「知、知らないよう。第一、こんな、こんなことをして、あとが、どうなるか知っているのかい。御公儀御用をつとめる元禄屋の旦那が、今頃は必死になって妾を探し出そうとしているのだよ。南北両奉行所が、必ず、あんなたちを、ひっ捕えるから」

「フッフッフ……これはまた、なかなかに威勢がよいのう」

と般若は苦笑する。そばからおかめが、

「文次郎とやら。どうやらうぬはまこと知らぬと見える。知らぬものに用はない、死んで貰おう」

おかめの手が刀の柄にかかる。

「あ、あつしは、な、なんにも知りませんの。た、ただ、このお国さんの」

「お国の何だと云うのだ！」

「お国さんの、いや、ひまをもてあましたこの女の遊び相手にすぎませんので！ お、お許しを願いてえんで。まだまだ、死にたくねえ！ た、たすけておくんなさい」

土間に額をこすりつけて叫ぶ文次郎に、お国が、怒った。

「文、文さん。あ、あんたという人は！ よくも、よくもそんなことが！」

「お国さん！ 知ってるんなら、早く何もかも申し上げてしまいな。もう、あつしは、こんな所は真平だ。早く、江戸に帰りてえ。かんばんしておくんなさいよう、旦那方。ほれこのようにお頼みます！」

文次郎、まるで蝗のように、頭を下げつづける。

「フッフッフ。しからば、文次郎。汝^{うぬ}、この女を責めてみるか。白状させるのじゃ。さすれば、生命までとるとは云うまい」

「ヘイ、有、有難うさんでござんす」

おかめが、文次郎の縄をとくのを眺めた正面の徳夜叉が、すっとたち上がって納屋をで



イメージギャラリー 『身悶え』 小妻容子

ていく。六孫王が、これにつづいた。

残ったのは、ひよつとこと、おかめ。

「頭領が、返事を待っておられる。急ぐのだぞ、文次郎！」

「一刻も早く、吐かせてしまえ！」

と、二人、ゆつたりと床几にかける。

「合、合点です！」

と文次郎、なにさま自分の生命がかかっているものだから、懸命である。縄目のあとをさすりながらお国のほうに向きなおると、

「お国、見てのとおりよ。生命にゃあ代えられねえ。さあ云ってもらおう。早く吐きな！吐きなったら！」

「フン、意気地なしのトンチキ野郎。誰が、

お前なんか！ 見損なったよ、全く。男のくせしてさ！」

ここ半歳、あれほど可愛がってやったのに——とお国、裏切られた口惜しさで、いっぱいになる。

「男のく、ずさな！ お前なんか」

散々、罵倒したものの、蛙の面に水。

「お国さん。ごたくはいい加減にして、吐きなよ。なぜ、そのお景さんとか云う、こっちの方々にとって大切なお人を、元禄屋の旦那は掠ったりしたのだい」

「知らないったら！ もし知ってても、なんでお前なんかに！」

とりつくしまもない。が、

「さうかい。どうしても仰言らねえつもりかい。だが、こちとらもそれじゃあと引き退がるわけにはいかねえ。なにせ生きるか死ぬかの瀬戸際だ。しかたねえ、奥の手を出すぜ。女責めの極意は、素っ裸にむきあげて、赤恥をかかすことだぜ」

文次郎にしてみれば、まこと、生死の境目である。黙って見守っているおかめとひよつとこが誰であるかは勿論、知る筈もないが、どうしても、ここはお国に白状して貰わなくては困るのである。

「どうしても吐かねんなら仕方ねえ。やるぜ。悪く思うなよ、お国！」

と、跳びかかっていくや、毛万小紋を型染めした江戸紫の羽二重の襟に手をかけて、容赦もなく背後にひっぺがし、つづいては、鼠繻子の長襦袢の襟を、肌襦袢といっしょに驚づかみにすると、ぐい、ぐいっと双肌を脱がせてしまう。

胸に四筋廻っている縄目で、素裸とまではいかないが、なみはずれておおきくむっちり凝脂ののった乳房が、ぷりんとび出し、双の腕も肘のあたりまで、あらわになる。

「よ、よくも、よくも文さん！ 人前で、妾を、妾にこんな恰好がさせられるねえ！ 妾は、お前さんの女なんだよ！ ええい、この恥知らず！」

しきりに身を揉むお国の胸元に手を入れた文次郎は、ぐいぐい！ と縄目をひきおろしてまるで小山のような——今様に云うならば巨大なミルクタンクのようなボインを、すっかりと、まる出しにしてしまい、

「さあ言え！ お国。きりきり白状申し上げろ！」

と、壁にかけてあった拍子木をもち出し、その乳房を上下からはさむと、力いっぱい押

しつぶす。いくら二枚目の優男と云っても男は男。激しい力で圧迫されて、お国は堪まらず悲鳴をあげる。

「い、痛いじゃあないかよう！」

「痛けりゃあ白状しな！」

「知らないったら！ しつこい人だねえ」

「フッフッフ……」

文次郎、どうやら嗜虐の快さを感じ始めたらしく、拍子木を捨てると早縄がかかったままのお国の軀から、まず黒ビロードの帯を、シュツ、シュツと、生地が、縄に触れる鈍い音をたてさせながら抜きとると、

「ほんとに、素っ裸にひんむいてやるから、そう思いな！」

伊達締めやら腰紐やらをぬきとると、毛万小紋のすそふきの端、笹の葉形のつまに手をかけて、緋紫の長襦袢もろとも、左、右に押しひろげていく。

「きゃあ、やめてよお！ な、なんするのよお！ 女に、自分の女に恥をかかせるものじゃあないわよう！ 文さんったら、やめて！ アッ！ 見、見えるじゃあないの！」

一体、どこが見えるか云うのか、ともかくも、のしかかるようにして、お国の長着、長襦袢、肌襦袢の三枚を、大きく腋から脇腹あ

たりまで左右に開いて、
「たちなよ。立ちなつてことよ」

ハアハア云いながら、縄尻をとった文次郎は、天井の梁に、その端をひっかけると、ぐいぐいと吊りあげて行った。

「痛！ 痛いしたら、文さん！」

両腕の折れるような苦痛のなかで、お国の軀は、後手のまま天井から吊られ、かろうじて腰をくの字にまげて身をまもる。

「俺だって、好き好んでやってるわけじゃあねえや。お前が、早く吐きさえすりゃあ万事うまく納まるってものさ」

「だ、だってえ、旦那に、旦那に悪いじゃないか！」

このお国の叫びをひ、ふっとこは聞き洩らさなかった。

「やはり存じておるな、この女」

と、おかめと顔を見合わせて頷き合う。

何も気付かぬ文次郎は江戸紫の裾を長襦袢の裾といっしょに持ちあげると、ぱあっと、めくりあげ、後手に縛っている縄目にはさみこみ、なおも、方々を、次々とずらしたり、たくしあげたりしながら、結局、着ているものを、まるで、戦国武者の母衣ほろのように、背中にひとつにして、まとめあげてしまおうと、

「お国！ 云えったら！」

「いや！ いやだよ。悪いから！」

「それほどあの旦那に義理立てしてえか！」

「よし、それなら！」

ここ半年にわたる閨房での情事で、ほくろのひとつまで知っているお国の裸身——その燃えるような緋色の鎖縮緬の湯文字に手をかけると、

「いいざまにしてやるぜ！ ヒッヒッヒ」

下卑た笑いと共に結び目を解こうとする。

「アアッ！ な、なにするのよお！ ほんとに！ ほんとに！ や、やめてよ。やめてったら！ は、はだかになっちまうじゃあないのさ！ 文さん、許してよう！」

さすがにお国も必死である。まさかと思つた文次郎が、こともあろうに人前で、湯文字をとろうとする。

「やめて、お願い！ アッ！」

懸命の訴えも空しく紐の結び目が解けてしまったことを知つたお国は、思わず、眼前でニタニタ笑っている文次郎の股間を蹴りあげた。「ク、クソッ！」転倒する文次郎——。

そのはずみに、緋色の湯文字が、掛燭の光のなかで鮮かな色合いを見せながら、フワリと土間に、舞い散った。

豊満すぎるほどよく肥えた肉体であつた。

ぶよぶよ——とまで云うのは酷であろうがともかくも、贅肉のついた両肩、脇腹。たっぷり凝脂をのせた太腿。いかにも天下の豪商の愛妾に相応わしい豪華な女体であつた。

「よ、よくもやりやがったな、お国！」

地団駄踏んで股間の痛さをやっとおさめた文次郎は、つきたての餅のかたまりのように白く柔らかく輝く尻の肉をつねりあげ、

「この阿魔！ どうするか見てやがれ！」

と、棚にあつた百刃蠟燭を二本つかみとり掛燭の火を移し、それを左右の手に持つと、「この阿魔！ お前の一番大事な所を、じりじりと、てりやきにしてやるからな！」

太腿と太腿の間、くろぐろと……を睨みつけ、もう二度とその手は喰わねえと云うのだろう、真正面を避けて右脇から、

「はれさ！」

懸声もろとも右手の蠟燭を、お国の必死で閉ざしている内股に、ちかづける。

「キイ！ キアッ！」

つんざくような悲鳴があがる。

「こんどは、はれ、こっちだ」

左手が、そおと前にのびて、くろぐろとした……に……。

「ヒイッ！ ヒイ！ や、やめてよお！」

「やめると思ふか、この阿魔！ 男の肝心な所を蹴りあげやがって！」

背後に回つた文次郎。つぎはどこを攻撃されるかわからないお国の意表をついて、右から左から、ときには、下から、両手を栗鼠のように素早く動かして責めたてる。

女のもっとも敏感な秘所を、無抵抗で、焰の攻撃に、さらすのである。

いきな深川鬘を、がっくりと根掛から崩したお国は、咽喉をそらせ、足を踏んぱり、額から油汗をながして悶えつづける。

いつしか、××の毛のやける動物的な匂いが納屋にたれこめてくるころ、それまで、敏感に前後左右に焰を避けていたお国の裸身の反応が緩慢になる。

「しぶといぜ、まったく！」

ひとり言をいいながら文次郎は、散乱している衣類のなかから腰紐と伊達締めをひろいお国の両足首を縛りあげ、左、右と大きく股をひらかせてしまった。

「フッフッ……これから、ゆっくりとあぶってやるぜ。しらねえぜ、お国。肝心要の大事な場所に毛が一本もなくなつて、旦那に叱られても、俺のせいじゃあねえってこと。それ

所か、ひよっとすると、使いものにならなくなるかも知れねえぜ。ええ、お国！」

もう、文次郎は、お国に白状させることよりも、自分が楽しむことの方に考えを変えたかと思われるほど、快楽に酔い痴れる表情で今度は、ゆっくりと両股を開かされたお国の真正面に胡座をくみ、五寸くらい離れた場所から、それこそ一寸刻みに蠟燭の焰を、……に、接近させていった。

閉ざされた貝ならば耐ええたかも知れぬ。が、左右に大きくひらかれきったハマグリ。そこへ青い炎が迫ってきて、

「ヒイッ！ や、やめてえ！ 云い、云います。な、なんでも申しあげますから、もうこれ、これ以上は！ 許、許してえ！」

がつくりとお国は、うなだれてしまった。

そのお国から、徳夜叉たちは、元禄屋が豊太閤五夜のロザリオを探索していること。すでにそのうち、甲夜、丙夜、丁夜と三つのロザリオの謎を解こうとしていると云うこと。小紫のお景が、麻生六本木の別宅に、厳重な警戒のもとで監禁されていることを知ったのである。

「いかがなされます、頭領」

六韜三略を始め、こと学識にかけては随一

の般若の六孫王が徳夜叉を見上げると、

「襲撃いたしましょう、即刻。なあに、ただか、二十人や三十人の警護のもの、この種が島で、目にもの見せてくれまする」

と云ったのは、稲富流砲術の達人、飛香の小式部であった。

徳夜叉は、無言。

短檠が、静かにあたりを照らしている。

杖舎の茶々丸も、小式部に賛成したが、無言の頭領の意を汲んだのであろう六孫王が、

——囚人交換の意見を出した。

元禄屋は稀代の狡猾者。小紫のお景殿を毘にかけた以上、よほどの覚悟があるに違いない。強襲よりも、先ずは、こちらに捕えてあるお国・文次郎と、お景・越中松を交換しようとして提案したのである。

徳夜叉もその意見に、頷いた。

「一刻も早く実行しなくては、お景殿の身が危のうござる」

小式部の言葉を背に、六孫王は、文机に向かって、元禄屋あての書状を認めた。

厳重に錠の施された納屋では、敵・味方に別れていた筈のお国と文次郎が、いつの間にか縫いをもどして、納屋の裏束のなかで本能のまま激しい営みに呆けていた。

その夜のうちに老中領田下野、南、北兩奉行を訪れ、徳夜叉逮捕を強談判した元禄屋は本宅にはもどらず、そのまま麻生六本木の別邸へと駕籠をとばした。

十五人の男たちに鹽廻しにさせた千登世のことには一言も触れず、玄関から、まっすぐ土蔵へと急ぐ元禄屋の胸中は、愛妾お国を奪われた怒りで煮えくりかえっていた。

そこには、徳夜叉の情婦小紫のお景と、子分の越中松が閉じこめられている。二人を責めて責めて責めぬかねば、その怒りはしづまりそうにはない。

夜あけの近い、ひやっとした大気を押しのけるように重々しく銅の扉がきしむ。

裸蠟燭が、いくつもまたたく土蔵のなかに大股で入っていた元禄屋は、羅卒の鞭兵衛たちには言葉もかけず、お景の前に立ちはだかると、

「お国をどこへ連れていった！ 吐け！ 徳夜叉の隠れ家は、どこにある！」

捕われてからというものの、入れかわり立ち代り責め折檻をうけたお景であったが、徳夜叉の愛人であるという誇りは少しも失せてはいなかった。

くずれきったばい。雷をつかまれてひきずり廻されながら、鉄火な啖呵をとばす。

「どんなことがあっても吐きませんよ、元禄屋の大旦那！ このお景姐さん、一度、こうと心にきめたら、てこでも動きやあしませんよ。ホッホッホッ」

一糸も、まともってはいない。その上、穴沢流の秘術で縛りあげられている。その女が、高らかに笑う。

「この阿魔！」

仰向けに引きずり倒した元禄屋は、かたちのよい乳房に足をかけてひねりつける。が、



イメージギャラリー

『誰か来る！』

須坂

旭

「元、元禄屋さん。お前さんも、悪にかけちゃあ、ちよっとばかり名のおったお方のようだけど、女一人、ままにすることができぬとあっては、お顔に泥がつきましようよ。さあ、おやりよ。責めてごらんよ。お景姐さん喜んでお受けしようじゃあ、ありませんか」

紅い啖呵——まったく、火を吐くような威勢のよい啖呵が、陰惨な土蔵のなかにひびきわたり、裸蝟燭の焰が、大きく揺れた。贅肉ひとつないひきしまった小柄な肉体のどこにこのような激しい気性が隠されているのか、その気迫にたじろいだ元禄屋、髪を吊りあげている手が一瞬、ゆるんだ。

「責、責めい！ 鞭兵衛！」

「合点です、親分！ 今度こそ吐かせて見せましようわ、このこづら憎い阿魔を！」

五人の子分たちと何事か打ち合わせをした鞭兵衛は、ニタツと笑うと、

「この阿魔は、十露盤台の上の石抱きも木馬責めにも、耐え抜いた女です。が、旦那、見てておくんなせえ。これに耐え抜いたやつはいまだかつて一人も、いねえんで」

青蛇と黒馬が、お景の縄を、いったん解きにかかると、ほかのものは、太い縄を天井の梁に急がしように、はりめぐらし始めた。

お景凌辱

「姐御、悲鳴をあげるんじゃあねえぜ」

「あとになって泣っ面見せるくれえなら、いま勘忍して青蛇さん！ とその可愛い口でお願いしておくほうが、よかあねえか」

「姐御の子分の越中松さまが、それそこで眺めていらっしゃる。子分衆のまえで悲鳴あげるなんざあ、さまになりますまいぜ」

何重にも縛られた上、太柱に鎖でつながれている越中松の方をニヤニヤ眺めながら青蛇たちは、口々にお景を、いたぶる。

「な、なにをどたくを並べているのさ。早く始めたら、どうだい。ほれ、こうして両手をうしろに回して、縛られるのを待ってるっていうのに」

お景は、脱出も反抗も無駄なことを知りすぎるほど知っていた。第一、越中松を、このままにして逃げだすことはできない。

（あとはもう、妾の躰が、どこまで、もつかだわ。耐えぬこう。耐えている間に、必ず、あの人が助けにきてくれる。助けに必ず、きてくれる……それまで、ほんのちょっとした辛抱なのだ……）

お景は、思わず、徳夜叉の名を叫びたくなかったが、あわてて、ぐいっと押えた。

（あの人、どう云うかしら。よくやったぞ、お景！ とほめてくれるかしら。それとも、こんなに大勢の男たちに馴れものにされた妾を許してくれないかも……。いや、妾は、あの人のためにこんなに頑張ってるのだもの。きつと、きつと許してくれるさ……）

お景とても女である。男たちはみな着物をつけているというのに、ただひとり一糸まとわぬ素裸の身をさらして、羞恥をおぼえないはずはない。それどころか、ふだんは人一倍羞恥心がつよく、微風に裾がめくられて、胫があらわになるだけで顔をあかく染めたものである。

（女って、強い、確かに強い！ あの人のためなら、裸にもなる。水責め、火責めにも負けない……それに、あんた！ 妾、まだ……犯されてはいなくてよ）

なぜ今まで犯されなかったか——理由はわからない。が、ともかくも、まだ、お景の最後のものは、守り抜かれていたのであり、そのことが、今、何かしら、ほおっとする安堵の思いで、お景の胸に、せまってくる。「何を考えてやがる、徳夜叉のことか」

図星であった。サアッと頬があかくなるのを青蛇は見逃がさなかった。

「フッフッ……お前も案外、初心なところがあるんだな。よしよし、その初心な心を俺たちが全部、洗い流してやるからな。じゃあ責めるぜ。ちなよ、ほれさ！」

白豚たちが準備したのは、梁から垂らされた四本の太縄である。間隔は、それぞれ二間ほどもあるうか。

その不気味に揺れている縄の間にお景をたせた青蛇は、柔らかい右腕を付根のあたりから撫でさするようにして手首をとり、ぐいぐいと縛りつける。同じように黒馬が、左手首を縛りあげる。

「な、なにをする気だろう」

お景が叫ぶのも構わず滑車が不気味に軋むと、二本の縄がするするとあがり、お景は、「Y」の字形に、辛うじて両爪先で全体重を支えるところまで吊りあげられてしまう。

手首よりも両腕の付根が、ちぎれるほど痛い。その苦痛から逃がれるためには、脇腹をひねり腰をふるほかはなく、お景は、惨めに恥かしいと———と思いながらも、その動作を繰り返すほかはなかった。それをみて、「どうしたい、お景さん。いやに腰のあたり

を、もじもじさせているじゃあねえか。蚊でも喰ったかい」

何くわぬ顔で黒馬が、お景の腰に、左右から掌をかけると、なやましい曲線に沿って撫でおろす。

ふっくらした胴に較べて、きわ立ってながい牝鹿のようにすんなりした脚を、ぴくぴくくつと痙攣させながらお景は、長い睫毛をしつかりと閉ざして屈辱に耐える。

「おつにすましてるじゃあねえか。おい、姐さん。黒馬の、手伝うぜ」

斑猿のながい手が、ムズツとまっ正面からのびると、すべすべした腹から、へそへと撫でていき、黒い××の生えざわでしばらく遊び、やおら、ふとい人さし指と中指を、濃い紫の菊の花びらのなかへと滑りこませる。

「な、なにをするのさ！ この人非人！」

思わぬ急襲に、ギョツと白く輝く内股を力いっぱい閉ざしたものの、生身の女体である限り、錠のおろされた宝箱のようにはいかず斑猿の二本の指が、三本となり五本にふえて右手が手首のあたりまで、内股のあいだに喰いこみ、反対側の黒馬の眼には、双臀の凹みから斑猿の人さし指と中指がとび出してくるのがよく見える。

「そう締めつけちゃあ手首が痛えぞ。それとも姐御。フッフッ、気持ちがいいとでも」

「ば、ばかおいでないよ。なんでお前たちのような、けだものなんかに！」

「けだものなんかに、どうだとおっしゃるんです」

答えはなかった。けだもの、なんかに、まさか……あとをつづける言葉はない。

「フッフッフ、答えられねえところをみるとやっぱり楽しんでやがるぜ、その阿魔！」

斑猿は、今度は、左手も押し入れようと、もう、うっすらと湿り気をおびてきた……の前に蹲まって、強引に……とした。と、

「斑猿、あとにしな。たっぷり賜らせてやるから。さあ……捕縄術穴沢流弓張月！」

鞭兵衛の声を合図に青蛇と白豚が、右太腿に抱きつき黒馬と赤狐が左太腿をかかえると

「よいか、そうれっ！」

と懸声もろとも、左、右の足首を、天井の梁から垂れる二本の縄にぐるぐると絡ませ滑車を引く。

——ギイ……ギイッ……、

陰気な音をたててお景の両足がひらいたまままで、たかだかと吊りあがっていく。

「ウッ！ ウッ！ 痛い！ 痛いったら！」

畜、畜生！ ウッ！」

鉄火なお景の唇から思わず悲鳴があがるのもかまわず、滑車が軋み、白く輝く裸身が、宙に浮く。両足首と足手首を四本の縄で吊られて、胸や腹を下に、現代風に云えば、手足を『大』の字にひらいてハンモックに俯伏せになったように——勿論、この場合、軀を支える網目などはない——裸身を男たちの眼の高さまで吊り上げられてしまったのである。小柄とは云え十貫はこえよう自分の体重を両腕の付根にうけて、もう骨がばらばらになるような激痛が肩を襲う。

「痛！ 痛いじゃあ……ナイカ！ ク、クッ……痛イ！」

「痛けりゃあ吐くことさ。徳夜叉の隠れ家はどこだ！ 戌夜のロザリオは！」

白豚が、お景の脇腹に手をかけて、前後にはずみをつけて揺り始める。再び現代風に云わせて貰えば、遊動円木のあれである。すうー、すうーと前後に、頭から足の方へと、その逆へと『大』の字と云うより『X』字形に近い態位で、お景の肉体が揺れうごく。

「痛！ 痛い……」

悲鳴が次第に低くなり、とともにお景の紅潮していた顔が、蒼白にかわっていく。丁度

夏の夜の四日か五日の月のような色——。

「弓張月……どうです旦那。形も五日月なら色あいもそっくりでござんしょう」

鞭兵衛が声をかけたが、元禄屋は、ぶすっとした表情を変えなかった。どうしても吐かせたいのである。吐かせて愛妾お国を一刻でも早く救いださねばならぬ。

「手ぬるいぜ、鞭兵衛。まだ、この女、白状する気配ひとつ見せておらぬわ」

そう云われるとそのとおり。穴沢流の縄捌きや、女の責められる美しさを楽しんでいるときではなかった。

「お景！ 吐かぬと、いいか、こ、これを見やがれ！」

鞭兵衛がとり出したのは、たんぼ槍であった。木製の槍の先端が、皮でおおわれている稽古用の槍。その槍先を、乱れた黒髪を押しわけて、苦痛にゆがむお景の目のまえにつきつけると、

「云え、どこだ。山谷か松戸か保谷か、それとも千住のさきかこちらか。云わねえと、このたんぼ槍で串刺しにするぜ」

喰いしばった齒のおくから、こみあげてきた唾液を唇の端から糸のように垂らしながらも、お景は答えようとしなない。

「云わねえかあ！」

一喝した鞭兵衛は、お景の下半身に回り込むと、眼の前に、もうこれ以上、無惨な態位はないくらいにさらけ出されている内股——それは丁度、太股開きにされた女を、下から眺めるのと同じであったが、その白い肉と××××とした××の間の××に、むりやりたんぼ槍をななめ上段から、こじり入れていくのである。

「ムッ……ムムム……」

お景の裸身がふたたび激しく揺れはじめ、たんぼ槍のさきが、一寸二寸、三寸と……に喰いこんで行く。

その槍の柄を両手でにぎった鞭兵衛が、まるで横倒しにした案山子の柄でも握って、ゆさぶるように前後に動かす。

「クッ、クウ！ クッククッククウオ！」

五臓六腑の底からこみあげてくる激痛に、さすがのお景も、必死になる。充血した瞳がかすみ、意識さえも、おぼろになった。

「それさ、よいしょ！」

鞭兵衛にあわせて、青蛇たちが、声をあわせながらお景の肉体にむらがり、前、後にうごかしていくと「ウオオッ……ウ、ウッ」女のものとは、とうてい思われないけど、もの

ような呻きを、お景はあげる。

あげながら揺れる——、

鞆（ぶらんこ）のように、遊動円木のように。

檜の木でつくられたたんぼ槍の柄に、ぬるぬるっと、透きとおった液体がまつわりついているうちは、まだよかった。弾みをつけて鞭兵衛が、槍の柄を繰りだすたびに、その××は、白くねばねばした××状のものとなりやがて、お景の双腕の付根の負担が、限界に達するときがきた。

穴沢流弓張月——五日月のような姿態が、二日、三日の月を思わせるようにふかぶかと腹をしたにして彎曲させていったが、と、

「ヒ、ヒイッ！」

ひととき高い絶叫をほとばしらせたかと思うと、全身の力が瞬時にぬけたように、ぐったりと畜（もつこ）のように、「V」字形にと裸身を陥落させていったのであった。

「や、やめ！ や、めい！」

元禄屋が叫ぶ。殺しては、もともともなくなってしまう。考えると、お景の背骨が折れなかったのが不思議なくらいの、拷問であった。四つの滑車が同時に軋み、鈍い音をたてて白い裸身が床におちる。

——イメージギャラリー——『責め問い』——市原 幸三郎——



「云うのじゃ、お景。徳夜叉の隠れ家は、どこじゃ」

涙か、汗か、お景の瞳がきらりとひかる。が、乾ききった唇は、ただわななくだけ。

「云えというに！」

青蛇の蠟燭が、ひときわ輝くと、もう、これ以上ないくらいにむき出されて、白い××を、くろぐろとした×にひからせ、その名のよう、むらさきいろの×××丘の×××から、桃色の××までも×××××れている……へと、ちかよせる。×が、ちぢれるまえに、ぽたーっと一滴、蠟涙が……。

「ヒャアッ！ 青、青、青梅街道……八、八王子……」

ここで、お景が、白状したことを、責めるのはあたらな。この世の女のなかで、このような拷問をうけて白状しないものが、どこにしよう。これは、お景の意志ではなく、お景の肉体そのものの業のなせるわざなのである。女にとって生命とも云うべき××が、まさに抹殺される、ものの役にも立たなくさるようとするとき、どこの国の、どのような女がよく耐えしのぶことができよう。万一、そのような女があったとしたら——そう、それはもはや、女とはよべまい。

の館の納屋で元禄屋の愛妾お国が同じような

近かった。

責めをうけたが、あのとときの責め手は、間夫の文次郎ひとり。いま、お景に迫るのは、穴

「許して。そ、それだけは許してえ！ アッ アッ、アオッ！」

沢流捕縄術の達者が五人、蠟燭とても十本に

元禄屋の片頬が、はじめて笑った。

「戌夜のロザリオは、あるのか」

「……」

答えの代りに、お景の顔が縦に振られる。

「よし、鞭兵衛、でかしたぞ！」

元禄屋は、額ににじみでた汗を右肘で拭うと、ほおと肩で息をして、床几に腰をおろし、なおも、お景の××を焙りつづけようとする青蛇たちを手で制して、

「青蛇。絶品の壺じゃ。もうそのくらいにしておけ。これからの楽しみが、うすうなるうよ、のう……」

と、満足そうに云い、

「鞭兵衛。あそこの女、小半刻、儼がかりうける。そのあとで、楽しむがよいぞ」

自分でお景の手足の縄をといていったが、ふと、絶望のはて、死んだように、土蔵の太い柱に縛られたままの大蔵の越中松に目をとめると、

「フッフッフ、よそで抱くより、この男の前で抱く方が、よい刺戟になろうて。この周囲にかこいをつくりなされ、鞭兵衛さん」

鞭兵衛を、さんづけでよぶのは、元禄屋の気嫌のよいときの癖である。

「かこいといいますと、幕かなにかで」

「いやそのように贅沢ぜいたくなものあらは不要。ほれ荒

筵むしろで結構。このような女を抱くのは、夜鷹を

買うように、筵のなかの方が味がでよう。儼のあとで、鞭兵衛さんが、それからあとは自由よにされよ。徳夜叉の情婦を惣嫁にできるとは、男冥利につきるといふもの」

黒馬が早速、越中松の柱をかこんで二間四方に荒筵をはりめぐらし、そのなかに真新しい薄縁を一枚。裸蜆燭が、四隅にともされて妖しい雰囲気をもりあげる。

「では、籤でもひいて待っていないなされ」

元禄屋は、お景の躰を抱きあげると、かこいのなかに入って行く。

「越中松さん。よく見ておくことですな。

あんたの親分の思い女が、これからどうなるか、フッフッフッフ……」

お召の羽織を脱ぎ、七子ななこの長着の前裾をひろげた元禄屋は、徳夜叉の隠れ家もわかりあれほど探し求めた戌夜のロザリオの処在までつかんだ喜びを七尺ちかい巨軀にあらわしてお景の上に、馬乗りになる。

元禄屋の唇が、お景の唇に重なる。と、

「キャアッ！」

ものすごい悲鳴をあげたのは元禄屋。

「ち、畜、畜生！ こ、この阿魔！ おい、む、む、むちべえ！」

「旦那、ど、どうなさいました！」

鞭兵衛たちが荒筵をはねあげてみると、唇を噛みきられたのであろう、顔をおさえた元禄屋の指のあいだから血がながれている。

そのうえ、どうやら股間も蹴りあげられたらしく、しきりに地団駄を踏んでいる。

「こ、この阿魔！」

越中松が縛りつけられている柱ちかく、右膝をたて、双の乳房を抱きしめているお景の姿には、凄愴なまでの美しさと女の誇りがただよっていた。

お景は、元禄屋を殺してやろうと思った。

穴焙りに処せられる恐怖から、つい口走ってしまったとは云うものの、身も心も捧げつくしている徳夜叉の隠れ家を、もうろうとした意識の状態にあったとは云え、白状してしまった自分自身が許せなかった。

（殺してやる。舌を噛みきって殺してやるんだ！）お景は、とっさに心に決めた。

（とうとう、白状させられてしまった。どうしよう、徳、徳夜叉！ いったい妾……どうしてこ、こんなことに！……）

ここ三日にわたる折檻に耐えることのできたのは、どんな責苦にあっても、何ひとつ白状してはいないという自負と、もうひとつは

最後のもの——それはほんとに最後の一线であったが、それをまだ汚されていないという誇りからであった。

それが、ついに白状させられたのである。

無意識の状態であったとはいえ、(青梅街道八王子)と口走ってしまったのである。

(徳夜叉、許してえ！ 許して頂戴な！ 妾が、元禄屋をやっつけてしまうから……)

元禄屋を殺してしまえば、隠れ家もひとまずは安心——そんないろいろな怨みをこめての、捨身の攻撃であったが、舌を噛みきることができないで、下唇を傷つけただけ。

それにしても、あれだけ拷問され抜いた挙句、まだこのような氣力を堅持しているということは、その体力とともに驚くほかはなかった。

「悪魔！ 外道、人非人！」

犇々とつめよってくる青蛇たちに、憎悪の瞳を向けるお景に、

「フッフッフ、俺たちが外道なら、男の逸物を蹴りあげるお前さんは売女だろうさ」

からかうように云った青蛇は、さあっと躍りかかって右手首をとらえ、目にもとまらぬ早さで青縄をまきつけると、赤狐の手から殆ど同時に飛んだ赤縄が左手首を襲う。

「お前さんのようなあばずれ女にゃあ、人間よりも、あっしらのような人非人が、よくお似合いだろうよ」

赤狐と青蛇が縄をつめていき、手首から尺余をのこしてひきしぼると、

「ほら！ さ！」

と弱腰を蹴りつけたものだからお景は、よろよろと薄縁のうえに両膝をつく。

「仰向きななんだ！ この売女！」

黒馬が、ばたつかせる足を押えて、くるりと一回転させる。両手の縄が、それにつれて交差され赤狐と青蛇が、場所を入れかわる。

「旦那！ よくみてておくんなせえよ」

斑猿が、下唇に血止めをしてあと、なおも股間を押えている元禄屋によびかけると、越中松の帯をきり裂き、裾を払げて、四十貫はあろう巨体をさらけ出すと、越中禪の紐もきり捨ててしまう。

「あ、ア、アアオ！」

血走った両眼をはりさけるように開いて狂ったように悶える越中松であったが晒木綿をつめこまれた上、幾重にも嚴重に猿轡をはめられていては、呻きを洩らすのがやっとである。それにしても捕えられて三日、殆ど飲まず食わずで、しかも縛られっぱなし。生きて

いるのが、せいっぱいのところであろう。

(姐さん、姐さん、すまねえ！)

血を吐く思いで何百回、叫んだことである。が、姐御のお景を救うことはおろか、指一本、うごかすことさえできぬ。

「ヘッヘッヘッ、越中松か、越中禪か。それにしても、くせえなあ」

鼻をつまみながら布きれを投げすてた斑猿は、あらわれた××を六尺棒でつつき廻す。

と、意外なことであった。

小さかったそれが、みるみる……。

「この野郎！ てめえの姐御の危機だというのに、もよおしてやがるぜ。てえしたものだな」

斑猿はおもしろがって、なおも、ぽんぽんとたたきつける。

(姐さん、すまねえ！ すまねえ！ 姐さんが、あんまり、美しすぎるものだから、俺はつい……)

徳夜叉の子分のなかで、力のつよいことだけがとりえの越中松。廻転のおそいあたまでお景に詫びる。

(姐御をみていると、押さえたって押さえたって、しかたがねえんだ。どうしても、××てしまう。すまねえ！ 姐御！)

猿轡のしたでわめく越中松の足もとでは、女としてのお景に、いよいよ、最後の凌辱が待ちうけていた。

「旦那。旦那の失敗じゃありませんや。この

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売ノ

一月分	1冊	三五〇円(送32円)
三月分	3冊	一一〇〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

番 558
郵便 号

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れた方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○六月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分三十二円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振最

女、なみの阿魔じゃありません。力づくで、四人も五人もでかかっていかねえと、おとなしくならねえ、とんでもねえあばずれで」

元禄屋に同情するように云った鞭兵衛が、

(大阪四二七八三番)のいづれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三八二円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたします。御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

足で、お景の脇腹を三度、四度とこづく。そこには、青蛇たちによって、女体をひらかされきったお景の憐れな姿があった。

荒筵でしきられた薄縁のうえに、逆Yの字

「入」に、はりつけられた、お景――。

両手は、一本の棒のように頭上にのぼして床板の鉄輪に結びつけられ、両足は、もうこれ以上だめだというほど左右にひき裂かれて白豚と黒馬に足首を、にぎられている。

なかば、黒髪にかくれて、しっかりと瞳を閉ざした横顔が、裸蝋燭に、映える。

(徳夜叉さま。ど、どうして、救いに、救いにきてはくださいませね！ 妾は、お景は、あ、ああ！ とうとう、徳夜叉さまあ！)

お景の哀しい訴えにもかかわらず、救いの手をさしのべるものは、いなかった。

怒りにもえる元禄屋のひきつった顔に、鞭兵衛が、油をそそぐように云う、

「旦那。さあ、どうぞ。どこからでも賜って、賜りぬいてやっておくんなせえ」

馥郁と匂う懸崖の白菊のようなお景のあかい唇から、「ア、アアッ！」と、絶望の吐息が洩れたが、それも、男たちにとっては、甘くやるせない女の身悶えのように思われるのであった。

――(つづく)――



— 告白 —

私とプレイした人たち

— 谷山久美子 —

今日は新年号で書きました八木さんとの、二度目の出会いについて書いてみたいと思います。この前に書きましたように、初めて八木さんと逢ったとき、姫路の駅前で映画館へ入ってプレイをしましたが、あのプレイは私にとって大変楽しかったのです、そのことを話しましたら、八木さんが、それではやろうということで映画館へ入りました。

映画館へ入ってみると、中は案外、明るいのです。この前、入っ

た映画館とは大分、違うので今日は、お流れかしらと思っていました。こんなに明るかったら、顔も姿も何もかも、すっかり周りの人に見えてしまうんですもの。

少し失望していましたが、八木さんは、ちゃんと短いロープを準備してきていました。無言で私の手を握ると、うしろへ回し後手に縛っておいて、ロープの残りを椅子の腕に括ってしまったので、私は動けなくなってしまいました。

「今日はストッキングをはいてくるな」と言っていたので、その通り八木さんと逢う少し前、トイレへ行って脱いでおいたのですが、

この前のように、また抓られるんだなあと思
っていました。だけど、今日の抓り方は、こ
の前と違って、手加減してないらし
く、まるでペンチで挟まれてるみた
いに飛び上がるほど痛いんです。

彼の執拗な指は、私の一番やわら
かくて敏感な太股の内側を狙ってき
ます。まわりに人がいますので「痛
い」とか「いや」とか声は出せませ
ん。私は「やめて、やめて」と心の
中で叫びながら、股をすぼめて腰を
浮かそうとするのですが、なにしろ
両手首が背中のでころで椅子に固定
されていますので、自由になりませ
ん。

余りの痛さに、「お部屋へ落着い
たら、どんな責めでも受けますから
ここでいじめるのだけはカンニンし
て」と、彼の耳元へ口をあてて小声
で頼みました。

そしたら、八木さんは手首の縄を
解いてくれて「出よう」と身ぶりで
するので、帰るのかと思って、あと
をついて廊下へ出ました。

廊下へ出ると人気のないのを見す

まして、さっと私の両手を前手縛りに縛り直
して素早く上衣をかけてかくしてしまいまし

た。誰か人が来て見られやしないかと、ハラ
ハラしましたが、幸い映画が始まったばかり
で、廊下で出てくる人もありません
でした。

それでも胸がドキドキして彼のあ
とを追うように再び場内に入り席に
坐りました。席に落着くと、私の両
足も膝のところで縛っておいて、知
らん顔して映画を見ているのです。
一体どんな顔をしているのか見たい
ものだと思ったのですが、恥かしい
のでやめました。

映画館を出てからホテルへ行くと
高くつくので私のアパートの部屋へ
行きましよう誘いました。アパー
トへ帰るとお風呂を沸して彼に入っ
て貰い私は食事の支度をしました。
私の部屋は冷房していないので、
炊きたての御飯を食べると、とても
暑いのです。

「暑い、暑い」と私が言いますと、
「暑ければ脱げばいいじゃないか」
と彼が言います。一旦、言いだすと
聞かないのです。

私がためらっていますと、「脱げ



脱げ。全部、脱いでしまえ」と言っ、とうとうパンティまで取らされて全ストです。

すると、どうでしょう。彼は持ってきた袋の中から犬の首輪とくさりを取り出して私の首にはめると、くさを食卓の脚につないでしまいました。私の内股には、さつき抓られたあとがアザになって残っています。

こんなみじめな格好でお食事の給仕をするなんて、生まれて始めてのことです。うらめしそうに、そっと彼の方を見ますが、彼は平気な顔で御飯をおいしそうに食べています。

自分の部屋なのに、私は下を向いて小さくなっていました。食事の後片づけも首輪をしたままの素裸です。後片づけが終わってから、恥かしくて彼のそばへは行けないので、モジモジしていますと、

「ぐずぐずしないで早く来ないか」

と乱暴に私の首輪についた鎖を引きます。

私が逃げようとし、逃げないように柱に鎖をつないでしまいました。私が解こうとして手を出しますと、ピシッと物差で私の手首を、ぶつのです。そんなことを幾度も繰り返しているうち、

「そんなに鎖がとりたいたなら解いてやるが、この手が邪魔だから」

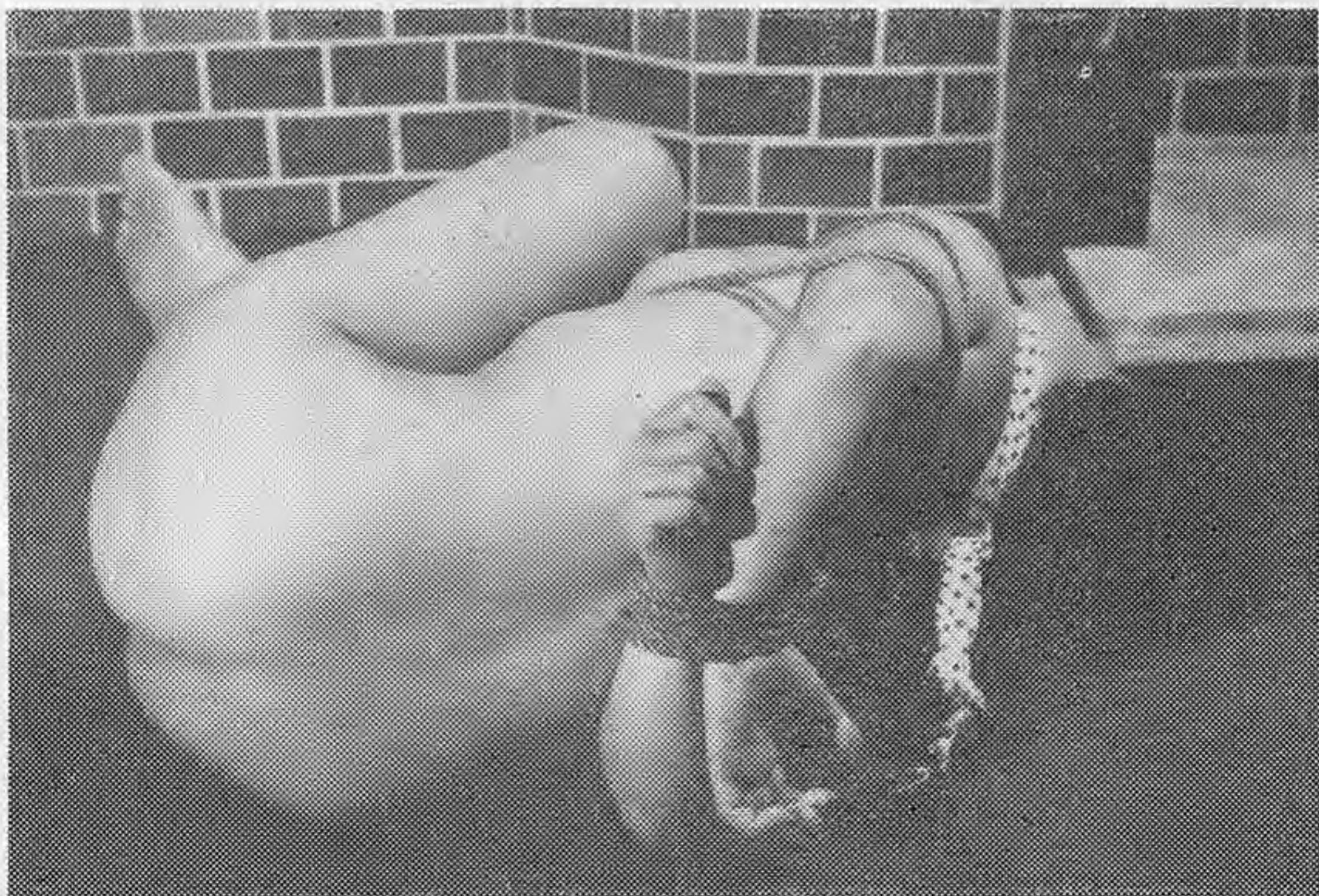
と、そう言っ、両手首を、うしろで縛られてから、やっ

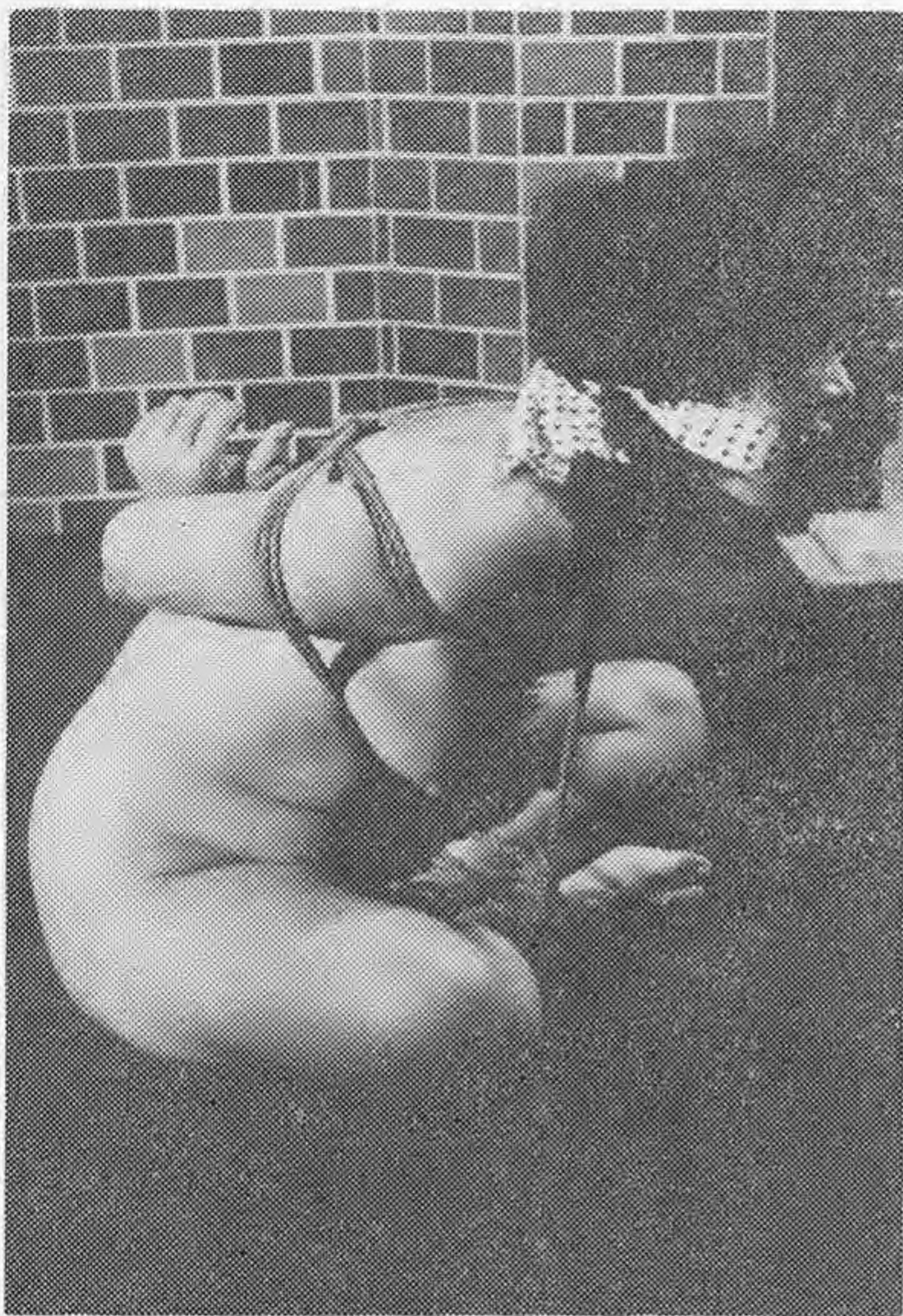
と首輪をとって貰いました。「手紙に書いておいたように今日は逃げだそうとした女郎として、お仕置きをするからそのつもりで覚悟するように――」

そう言われて、胸から二の腕を縛られ、両足首も括られました。そうして、私を前屈みに押さえつけて、背中へ彼が乗っかってきました。「ううう」と呻いて私が必死に耐えていますと、足首の縄と背中

中の縄とを連結してしまいました。

両方の膝が思いきり開いてこれが海老責めというのでしよう。関節という関節が、みしみしと音を立てて泣き出し、そう痛さなのですが、私は辛抱しました。額から汗をたらしながら、うんうん、唸って耐えました。





すると彼は、足を上げて私をひっくり返したのです。二の腕が喰い込むように締め肩口が畳にすれて、うむむ、と私は呻き声を思わず洩らしました。かくしたいところが、いみ割れたように、さらけ出されているのです。彼はニタニタして眺めています。

自分の身体の変化を、彼に見られる恥かし

さ。それよりも胸と腹部を圧迫される苦しさの方が私の身体を、ひどくさいなみました。「どんなことでもしますから、この縄だけはほどこいて下さい。お願いです」

私は、息もたえだえに頼みました。さすがに彼も、脂汗をにじませて苦しむ私を見て、縄を解いてくれました。でも、いたわりの言

葉をかけてくれるどころか憎々しげに「こんなこと位、辛抱できないようじゃ仕方がない。じゃ今度は逆エビだ」

と言われて、手首と足首とが、ひつつくように背中縛られました。両手足が一つになるほど縛られていても、この方は胸やお腹を圧迫しないので苦しくありません。足で蹴られて、ごろりと横だおしにされ、キャンプ用のローソクに火をつけて、先ず脇腹に蠟涙をたらされました。

瞬間だが、ちくちくちくちくとするように蠟のたれた個所が熱い。今まで、いろんな責めを受けているので、これくらいのことでは泣きだすような私ではない。今までの経験では、口ではワァワァ言っているけど、心の中では、もっとも——と叫んでいることが多かったのです。責めがきつければきつい程、快さが身体中を走るのです。

でも、プレイをした責め手の人は、よく言います。責めても黙っておられたのでは面白くもない。思いきり呻いて、わめいてくれた方が責めたらしくてよい——と。

この頃の私は、責められると、すぐエキサイトするので困ってしまいます。責めに対して凄く感じ易い身体になってしまった自分を

持て余しています。一度は、SMの世界から逃げだそうと考えた私ですが、とうとう、それも出来ませんでした。それよりも何人ものよきパートナーを得て、水を得た魚のようにSMの溺を泳ぎだしたのです。八木さんに「あとで倍になってもいいから、一度、あなたを責めさせて——」

と言ったことがあります。そしたら

「バカヤロウ、なんということを言うんだ」

と怒られてしまいました。この頃の私は、一度位は女の人に責められてみたいという気持と、男の人を責めてみたいという気持が入り混じって複雑な心境です。

さて室内でのプレイが終わって、十時半頃散歩に出ました。散歩といっても乳首を細いヒモで括り、禪のように股間縛りにされた縄につながれているのです、その上に浴衣を着せられているので外部からは見えませんが変な気持です。

喫茶店へ入って、お茶を飲んでいても、私は妙な気持で落着きませんが、彼はそんな私を眺めてニヤニヤしています。

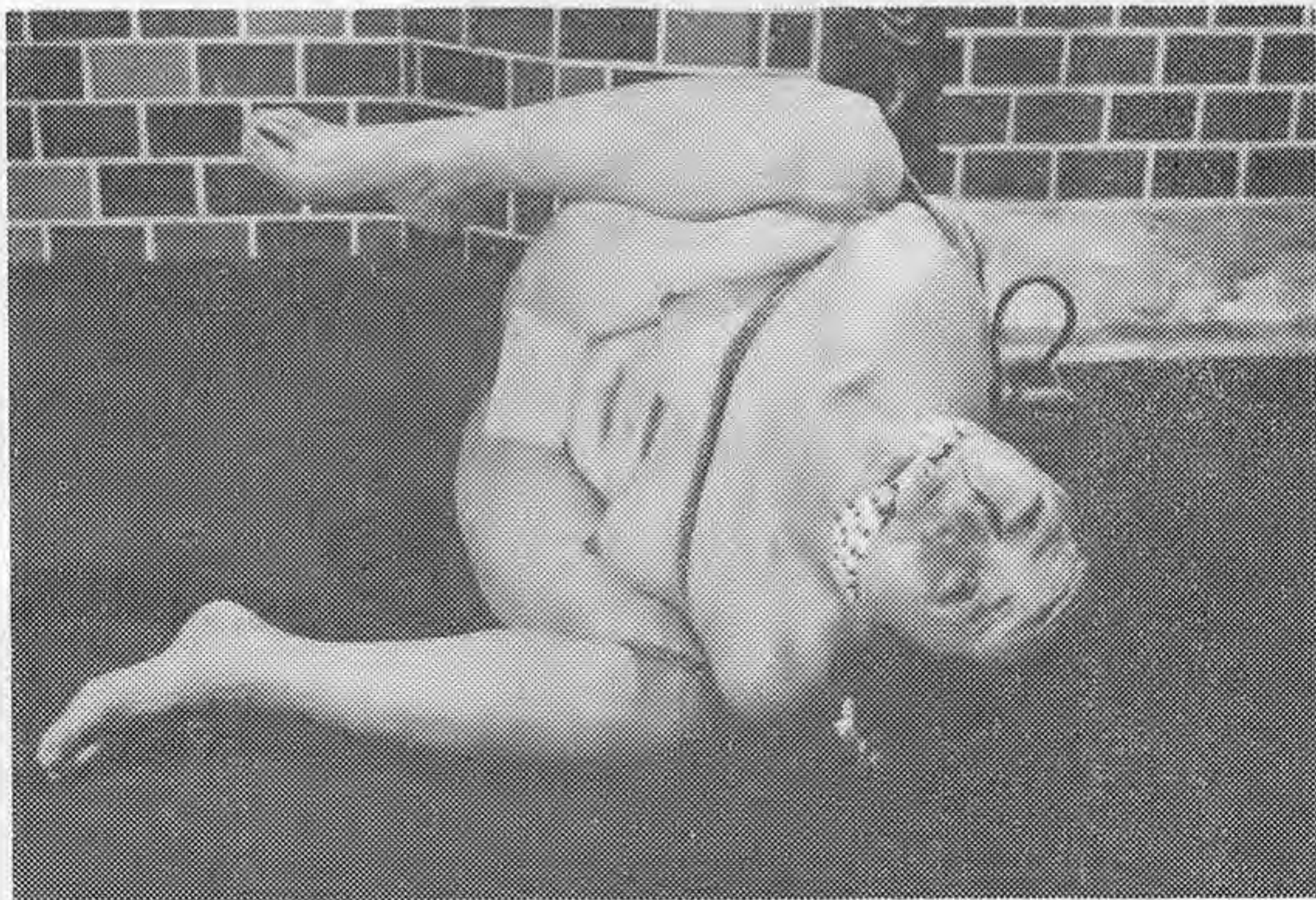
外へ出て人気のない暗いところで、「さあ手をうしろへ回して」と、着物の上からですが後手に縛られ、足の方は脛のところを縛り

ました。「さあ、歩こう歩こう」と縄尻を引っぺりますので、私は彼のあとからヨチヨチと歩きます。車のヘッドライトにおびえながら、人が来ないかとハラハラします。

そんなことをしながら、アパートの近くまで帰ってきてやっと縄を解いてもらいました。「どうだった？ スリルがあったろう」と言っている彼。

疲れきって、部屋の中へ入るなりゴロリと横になってしまいました。そんな私の帯を乱暴に抜きとり、浴衣を剥ぎとり、乳首のヒモと股間縛りの縄を解いてくれました。そのやり方が手荒だったので、「もっと優しくして——」と甘えたら、

「今日は女郎だったってことを忘れたのか。これから二度と逃げないように仕置をしてやる。借金があるのに逃げや





がってとんでもないアマだ。こうしてやる」プレイはもう終わったのかと思っていたのに再び責められる事になってしまいました。

次にやられたのは、お灸責めでした。今まで、いろいろの責めを受けましたが、お灸責めは始めてです。奴さんのように両手を棒で縛られ、足は柱に開いて縛られ、丁度、大の

字のような格好です。お腹の上にモグサを置いて火をつけられました。

「熱いぞ、熱いぞ。それ、どれだけ熱くなるか知らないぞ。そら、だんだん熱くなった」そう言いわれているうち、思わず熱くなって、「ア—ア、アツイ」と叫んで、足をバタつかせてあばれてしまいました。モグサがこ

ろげて、火のついた方が肌にふれて、その方が余っ程、熱かったです。終わってから、「どうだった？ 本に書いてあるようには、うまくゆかんだろう」

と彼が言っていました。本に書いてある小説のようにうまくゆかなくても、私はS Mプレイをしている間は、何もかも忘れて、それに没入してしまえるので、ねっからのM性の女であるのかもしれない。それに、ちよっぴりS性も備えているのでしよう。

『私がプレイした人たち』で書きました小川さんには小川さんの良さがあり、八木さんは八木さんの良さがあります。私はこの二人とも大好きです。一旦プレイが終われば二人とも私に優しくしてくれます。

一生懸命、思い出して書きましたけれど、下手な文章でゴメンナサイ。また気が向いたら書きますので、よろしく。

△編集部注▽

谷山久美子さんからの投稿は、句読点もなく改行もせず原稿用紙にびっしりと書き込まれておりましたので、読み易いように編集部で書き直しましたが、若干の語句の訂正以外は原文通りです。挿入写真は写真部提供のものです。

賢女ロスタン

どんなに夜が遅くても、有明は必ず朝五時になると目を覚ました。これだけは少年の時から交わらない習慣だった。

添寝の女達も眠りを貪っているわけにはゆかなくなる。アッチを触られたり、コッチをくすぐられたりして、結局は有明に起こされてしまうからである。そして、何ということもないイチヤツキに小一時間もかけた挙句、漸くベッドを離れるのである。

後朝（きぬぎぬ）のわかれというが、お伽

に上がった上臈たちにとって、この時間はアツという間に過ぎてしまう。そして、いつ再びお召しがあるとも知れぬ次の機会を熱烈に願いながら、後髪を引かれるような想いで御前を退出して行くのであった。

お伽の上臈も、お枕の中臈も、朝は自ら歩いて帰る。貴妃たちは、有明と一緒に奥で暮しているし、おおむね起居を共にしているから帰る必要がないのだ。その点で、貴位と臣位との差が確然と分かれてしまう。一夜、ベッドの上では、共に語らい睦み合ったグループなのに、朝が来ると身分の差が、このように違ってくる。かくして、奥を去って行く



第四十二回

前号までⅡ有明の独裁する秘密裸女王国の描写が続く。太后貴和を頂点とする数千の美女達は五段七階級にわけられて有明に対する畜従隷従を強いられている星エミー司令を長とする原子力潜水艦ネプチューン号は誘拐した女を地上から、この国へ運ぶ。カンヌ沖で捕獲された大勢の女囚たちのうちに、行方不明になった姉ジョセフィーヌを探し求めている可憐なマリー・フリーエールが含まれていた。今や姉妹ともに有明の手中に入っているのである。

二人の美女は心口惜しく、トボトボと自らの局に戻るのが通例であった。

しかし、今朝の二人は、そうでなかった。お手つきの幸運を掴んだ佐瀬直美は、いうまでもない。これを推挙した夕霧の局にとっても、この上もない名誉なことであった。佐瀬直美が上臈となって局を賜わると、夕霧の局は、お年寄という格式に昇って自分の局ばかりでなく佐瀬の局をも統轄することになる。これは、とりも直さず、宮廷府で持つ夕霧の局の権力が増大したことを意味する。有明の制度は人間の欲望、特に権勢欲を巧妙に利用するように仕組まれていたと言ってよいであろう。

六時を廻った頃、有明は居合わせた貴妃たちとトレーニングルームへ出る。

人工太陽が輝き、生きた芝生がビッシリ植わっている広いグラウンドである。片隅には二十五メートルのプールがあつて、この地下国家では非常に貴重な、清冽な真水が満々と湛えられていた。

有明は美しい女性トレーナーのアドバイスを受けながら、様々の運動に汗を流すのである。貴和や、その他の「家族」たちもこれに

参加する。

スチームバスとマッサージが、これに続くので、終わるのが八時半頃になってしまう。朝食は極めて簡素な朝食食堂でとる。食欲の盛んな有明は、きまってレアのステーキだが、貴和達はセーリアルしか喰べない。

その間に執務室が調えられる。有明の為に例のゆったりした女体椅子第五種（八人組）が中央にデント、据えられる。無駄な装飾は一切なく、最新の技術を駆使した管理機器がビッシリ据えつけられているのが、かえって人間椅子のナマナマしい美しさと思議な調和を示していた。女体椅子は床にハメ込まれた回転台の上に乗っていて、自由に動き廻れるような仕掛けである。

ここで有明はガボンをはじめとして世界各地に活動する彼自身の秘密シンジケート（いや、コングロマリットといった方が、よいかも知れない）からの多種多様な報告を受け、それを決裁するのである。パレスエリアの政務に関しては、文官府、武官府、さらに宮廷府の三府が権能を附与されていて、表（おもて）で処理されるから、ここでは特に高等秘密に属することしか扱わない。又、ポートエリアはドクターウィリーと、そのスタッフに

大巾な権限を任せているし、地上の各機関にも、夫々決定能力のある代理人を指定してあるから、個々の問題について細かく支配する必要はない。ただ詳細な報告をチェックし、膨大な計数を管理し、功績をあきらかにし、不正を糺すことは絶対に必要だから、ポートエリアに独立して設置してある有能な管理ブレーンに審査をさせ、コンデンスされたレポートをここで決裁するわけである。前にも述べた通り、彼の組織の振幅は、地上の小さな国より大きく、それによって、この巨大な浪費を必要とする秘密国家を支えねばならなかったのだ、あらゆる運営について慎重な配慮を必要としていた。

執務室で秘書の役割をするのは賢女サラ・ロスタンである。彼女の頭はコンピュータのようだと有明が評したことがある。それ程頭の回転が早い彼女は、同時に言葉の天才だった。日本とフランスで育った彼女が、この両国語を自由に出来るのは当たり前だとしても、この他、英語、スペイン語、ロシア語そして難解な中国語まで聞き、且、語ることが出来るのだから、正に驚異だった。

有明の指令は秘匿の目的から複雑な手続を

必要としていた。からみ合った事務を、快刀乱麻のように捌いてしまうのも、サラの助けがあつてのことであつた。

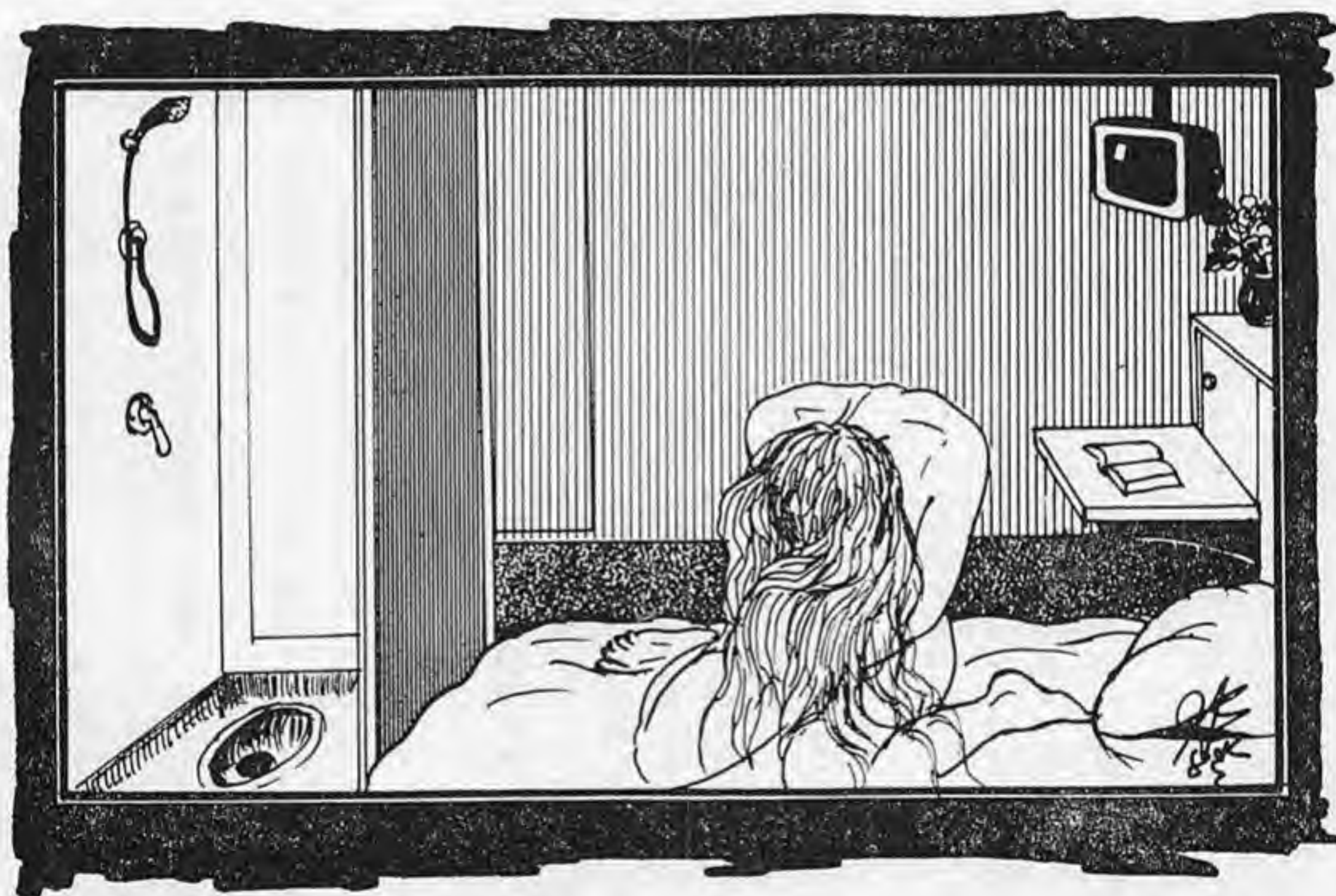
それでも有明は大抵一時間半、乃至二時間近くをこの執務室で過ごすことになる。

十一時になると、再び裸女の肉体家具を調えたサロンで、貴妃たちと一緒に一時間余りを休息するのである。ここでは大概、パレスエリアの出来事が話題とされ、貴和が宮廷府を、星恵美子が武官府を、そしてサラが文官府をそれぞれ担当しているから、女性特有の細かな話題が茶のみ話になるわけである。

有明は笑いながら、それを注意深く聞いて施政の参考にして行くことにしている。

特に赤札のついた女囚、つまり、正規のレセプション手続を経ないで直接宮廷府に送り込まれた貴妃候補者について、は詳しい報告を忘れずに聞いている。

現在、山本百合子、王明齡などが未決のまま、手厚い待遇を受けている。



王宮の一部にエステルの館という一区画があり、特に有明の気に入った外国人（日本人および、特に有明が許した外国人以外）が、規定の段階を経ないで収容されている。

有明の人種差別（日本人選民主義）は今迄、屢々触れて来たことだが、だからといって材質において決定的に優れた他人種を、百パーセント否定してしまうような頑迷さはなかった。但し日本人でなければ、かなりのハンディキャップを負うことになる。ある時、有明は、「サラのように日本語を上手に喋れる利巧な白人は、すこしも差別する必要がない」と言った。これが、今まで外国人差別の基本判例となっている。言いかえれば外人登用の路は狭いけれども残されているのである。

そんなわけでエステルに収容される外人は特にすぐれた材質の者だけに限られている。いや、そればかりでなく、有明の好みになう女でなければならぬ。

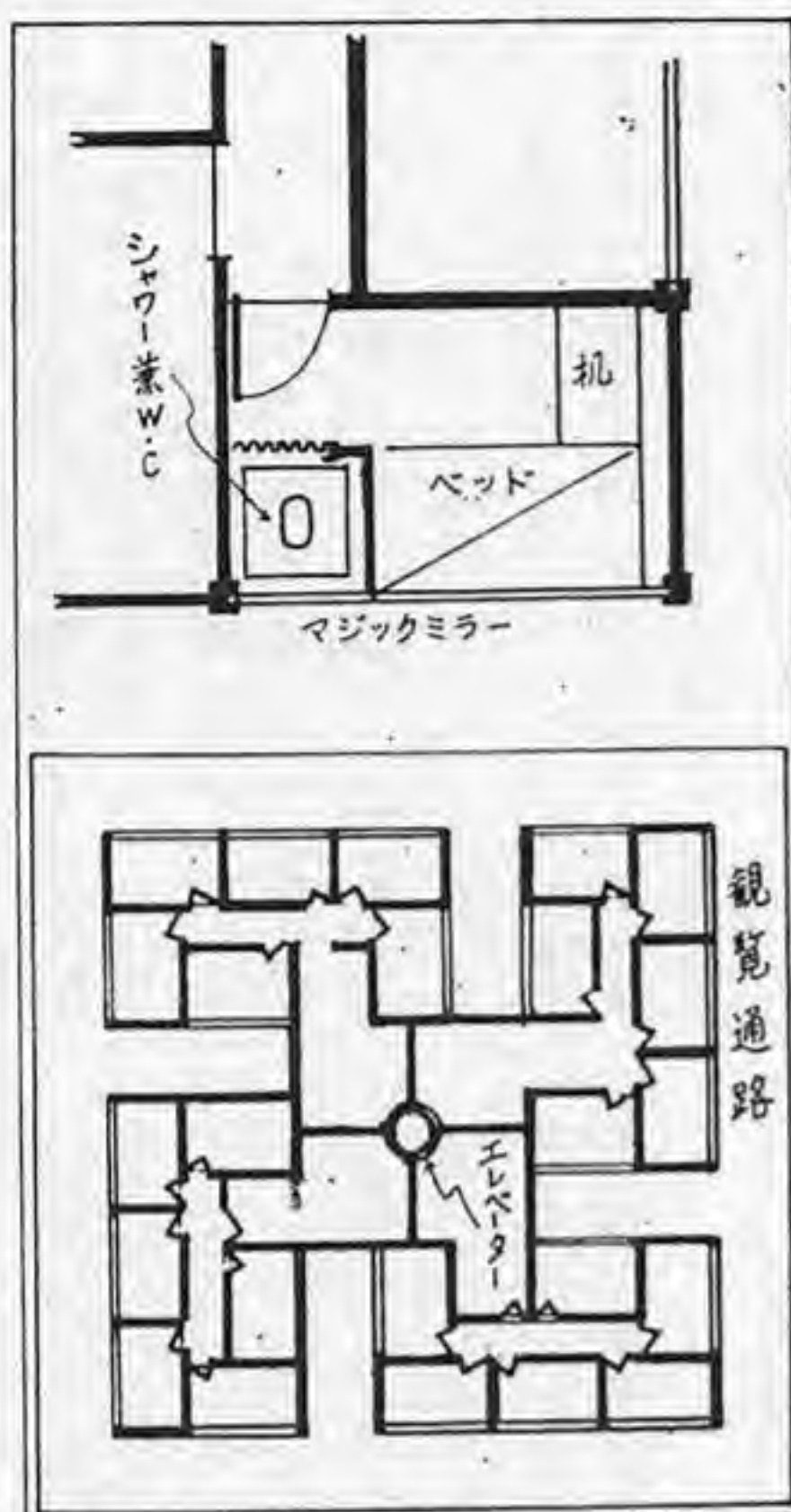
再び有明の語録を引用しよう。

「女性美といっても、美の感じ方に個人

差もあろうし、色々な基準が考えられる。ニグロだって、エスキモーだって、彼等なりの美的感覚があって、恋したり愛したりしているに違いないのだ。この国では、しかし、その物差は一つしかない。つまり、この私が美しいと感じるか否かということである」

エステルの館は美女達のドメトリーであった。クロスする観覧通路に仕切られ、型に展開する四つのウイングから成り立っていた。

一つ一つのウイングには内法二メートル×三メートルの個室が六室ある。一面には全部マジックミラーが嵌め込んであり、観覧通路からは部屋全体を見通せるが、部屋の内側から観覧通路を見ることは出来ない。各ウイング



共、独立した通路がつけてあって、互いに知り合う機会を与えないようにしてある。中央の空間も四つに仕切られ、夫々人工太陽の下でトレーニングマシンが使えるようになっていて、一日一時間の体育が義務づけられているのだ。一人ずつで重複させないから、一巡するのに六時間は、かかる勘定になる。トレーニングルームを四つに仕切る壁の真中に円筒形のリフトがあり、これが唯一の出入口となっていた。リフトで一階、降りると、プール、病室、リクリエーション施設、調理室、侍女の居住区などが調えられていて二十四日に一日だけ、ここで過ごすことが許される。定員が二十四名だからである。

エステルの館は、人種を超えた美女の見本市であった。すでに何度も述べて来たように、この国では日本人以外は差別される。サラ・ロスタンのように日本語が上手な稀に例外が認められるけれども、どんなに材質の点ですぐれていても、な

かなか出世出来ないのが実状だった。しかし特に有明の氣に入った女たちは、日本人以外でも、このエステルの館に収容されることになる。

エステルのメンバーは位階には無関係だから、例の面倒なレセプション手続など、一切とる必要はない。ただ、有明が「コレを」と指定すれば、直接ここへ運ばれてくる。中には激しく抵抗する女もいる。しかし、そうしたジャジャ馬を馴らすこと自体が又、有明の慰みになる。

新入りがアプセットして歩き廻る様子は、観覧通路からは丸見えである。それなのに、中の女は最初、その壁をカガミとばかり思い込む。そして、あとでマジックミラーと知ったところで、四六時中、見られているのを意識していることはできない。かくして、次第次第に鏡の存在に馴染んで行くのである。

個室は狭くはあっても出来るだけ居住性をよくしてある。無官とはいっても、有明のお慰みものであるということはお手つきと同じ格だともいえるからである。

ベッドは和式マットレスで、シーツは毎日変える。床下で操作する特殊な装置がついてるので、剥がして裸身を蔽うということは

出来ない。例によってカケ蒲団は許されないから、素裸のままジカに寝る他はないのである。床は素肌に快い柔らかな化繊カーペットで、ワッシャブルである。備えつけの机も低い日本式で、結局ここでは坐った生活をしなければならぬ。部屋の一隅を仕切って、シャワー兼便所がある。シャワーの一方の壁は必ずマジックミラーの一部となっているから用足しをしている間も観覧通路からの看視を逃がれることができない。

個室の扉は把手が外側にだけついているので、一旦、閉まってしまうと内側からは開けられない。用事は備えつけのインターフォンを通じて行なう。各ウイングに二人ずつ、予備二人を加えて合計十名の黒人女が食事その他、こまごまとした面倒を見てくれる。黒人女は物位、畜位から嚴重に選り抜かれたもので、容姿よりも、性格その他が侍女としてふさわしいかどうか重点が置かれている。手鎖、足鎖は外されない。目、耳は正常に戻されるが、発声機能は依然として啞のままである。

読書や様々な趣味娯楽の類は、自室でやる限り何でも許される。おどろくべき事は、母国のテレビ放送すらVTRで見ることが出

来るのである。言いかえれば、彼女等に許されないのは外出の自由と、そして衣服だけだったといつてよいであろう。

エレベーターを昇ると、中世ヨーロッパ風のデコレーションで統一した書斎、居間、寝室等が連なる一区画があり、有明はエステルやめたの女たちを、ここへ呼び出して、遊ぶのである。黒人女は昇ることを許されていない。

エステル館やめた

さて、この物語の第一回（昭和四十三年十月号）を思い出していただきたい。新津謙介が奇妙な会い方をしたジョセフィヌ・フリーエールは、もう半年以上もエステルの館に閉じこめられていたのである。若冠二十二才で学位を取り、天才的内科医と、もてはやされた彼女が、アルプスの事故で「消えた」のは一九六八年二月十四日のことであった。新津謙介が海水を滴らせた全裸の彼女を保護しようとして失敗したのは三月三日の夜であった。ジョセフィヌは原子力潜水艦ネプチューン号から泳いで脱出を図ったのである。辛うじて埠頭に這い上がって失神しているところを新津に助けられたけれども時すでに遅く

追って来たアマゾン女兵の麻醉銃で新津が倒され、ジョセフィヌの逃亡は敢えなく失敗に終わってしまった。

その後は、お定まりの順序を経て、この国の囚人となったわけだが、その素晴らしい美貌と専門的能力とは、大いに有明の関心を惹きつけたものである。彼女はレセプションの手続を飛び越して、エステルの館に連れてこられた。

しかし、誇り高いこの女性が、そう簡単に有明のいいなりにはならなかったのは当然のこと。有明とて、はじめから想像していたし、簡単に落ちないものを徐々に追いつめて行く事こそ、この道の醍醐味なのだから、決して無理はしない。「諦め」と「馴れ」は、「時」と共に有明の味方だったといえよう。そればかりか、ジョセフィヌに関しては、有明は、もう一つの切り札を用意していた。

ジョセフィヌの二つ下の妹、瓜二つといいたい程、よく似通っていたマリー・フリーエールも、有明の手中に陥ってしまった。彼女は有明が仕組んだ通り、わざわざカンヌまで来て、ヨット「希望」号の遭難の巻き添えになって「死んだ」からである。

マリーの捕獲では、マリーの材質が美事だったばかりでなく、ジョセフィーヌに対する強力な「責め手」としての二重の効果が期待されたのである。

皮肉にも、この二人の姉妹は「北の対（北のウイング）」六室の中、隣合った個室で、壁一つしか隔たっていないのに、互いにそれと知らされずに暮らしていたのである。姉は妹を、妹は姉を、夫々に気づかいながら、突如として襲ってきた不幸を歎き悲しんでいる。一つの扉が開くと、自動的に他の五つの扉はロックされてしまう。黒人娘の侍女も、啞では秘密を洩らす気づかいはない。仮に、モノが言えたとしても、嚴重に口止めされていては、啞と同じであつたであらう。

ついでながら、ここではウイングのことを対（たい）と呼び、東西南北にわかれる。

個室の造作は前に述べた通りだが、北の対だけは家具も調度も備えつけられていない。その代り、畳一枚程の底面積しかない鉄檻がデンと据えつけられている。詳しく言えば三方だけが鉄格子で、マジックミラーの面に密着させてある。

ここは、不服従の女たちを収容する対だった。だから多分に懲治的な意味を持たせてい

る。有明に屈服しないジョセフィーヌも、入国したばかりのマリーも、共に、この住人だったわけが判るであらう。

「コマン・ブ・ポルテ・ビヤン（身体の具合は、どうかね）？」

よくもまあ、イケしゃあしやあと、このような質問が出来るものだ、キリリと柳眉を逆立てたジョセフィーヌは、吐き出すようにただひとつ、

「トレ・アンデイスポーゼ！（けがらわしい）」

それでも答えるようになっただけマシなのだが、自分では、そのような微妙な変化に気づかないのである。

それにしても才色兼備と、もてはやされた若い女医の恰好は、どうだ。

冷たい石の床に赤裸の臀をジカに引き据えられて、しかも羞かしいところをかくすどころか膝を一ぱいに開いた形で蹲まっている。

その細首には金の鋳に飾られた巾広の犬首輪が回され、それに繋がる金鎖の端は有明の手に握られていた。後手錠の肘は夫々の膝と革ベルトによって結び合せてあった。これでジョセフィーヌのとれる姿勢は、僅か二種類

しか、なくなってしまうたのである。すなわち、膝を深く背後に折り曲げたまま丁度、日本式の便器に跨がった姿勢でしゃがむこと。

そして、若し立ち上がろうとすれば、頭を膝の間に挟むようにして、臀部を高々と振りあげなければならぬ。つまり、立っても寝ても膝下の部分だけ百八十度、動かせるというのが、今のジョセフィーヌに許された肉体上の自由の限界だったのである。そればかりか、このような緊縛方式が彼女に齎した苦痛と不安感の最たるものは、自由を大巾に奪われているにも拘らず、肝心のところは全くアケツピロゲだったことである。個室から黒人女に引き出されてきたときも、一人でリフトをあげて上で待っていた有明に鎖を曳かれたときも、まる出しの身体をアラレもなく振り立て、二つ折りの不自由な身体で、ヨチヨチと歩くほかは、なかったのだ。

「アンデイスポーゼ？」

苦笑しながら有明が繰り返した。当たり前だ。誰だってコンナ獣めいた姿勢で括られていたのでは、お世辞にも楽だとはいえない。

その有明は大きな寝椅子に楽々と寝そべっている。深々と柔らかいクッションも、ふわ

ふわのピラーも悉く金糸で縁をとった真白なシルクをかぶせてあり、素肌に快く、あたると同時に、清潔さを強調している。磨きあげ鍛え抜かれた有明の裸身は、黄色人種である事を忘れさせる程、白く、又、遅しかった。あまりに懸絶した立場の相異は、ジョセフィーヌをして医者としての観察眼を持つことを許さない。彼女は、まぶしいものを見るようにして、有明の裸身から目を逸らせるのだった。

ギョッと鎖が引かれた。否応なく、顔をあげざるを得ない。

有明が地上に行っていた何カ月かの間、ジョセフィーヌは檻に入れられていたとはいえ、四肢の拘束を解かれていた。運動も娯楽も、制限されたものではあっても一応は叶えられて来たが、有明が帰国するや否や、待遇は再びモトに戻った。二つ折りにされて左右の肘と膝が夫々連結されてしまったのである。そして今、有明に呼び出されるとい

う怖ろしい日が到来したのである。

特に、今日は恐ろしかった。長い収檻生活に、さしも誇り高く、頑張ってきた彼女の抵抗も、次第に衰え始めていたからであろう。やさしく微笑みながら、見つめる有明の目の奥には、恐怖の念を起こさせる鋭い力があつた。ブルブルと小刻みに震えがくるのを、ジョセフィーヌは抑えることが出来ない。「こわいか。そうだろうな。が、しかし、恐



怖に色づけされると、おまえの美しさは一層深みを増してくる」

ゆっくりとしたフランス語で、こんなことを独語しながら、黄金の鎖を、たぐって行く。足を踏んばって、行くまいとしても、拘束された身体ではタカが知れている。第一、有明の力をもってすれば、この小柄な裸身を、床を引摺ってでも思い通りにすることなど、極めて容易なことだったのである。

そうだ。何でも思い通りに出来るくせに、そうしないところがジョセフィーヌには、たまらなく怖ろしく思われるのである。蟻地獄のようなものだった。有明は、哀れな蟻がモガキ廻りながら自分のところまで落ち込んで来るのをジッと待ち構えている。ジョセフィーヌの方から無条件降伏を申し入れなければならぬという点が、彼女にとって何よりも残酷に感じられる。無知な巷の女なら、とくに白旗を掲げたかも知れない。しかし、あらゆる点で最高の学識と教養に包まれた(と自分で自惚れていた)彼女には、それが出来ない。虐げられ、凌辱されるのなら、殉教者になったようだと、われとわが身を、なぐさめる途があった。自ら屈従したのでは、そうした逃げ道は作れないのである。

ジョセフィーヌは、もう長椅子の下まで来てしまった。身を固くして石のフロアに胸乳を押しつけるように平伏しているのが、せめてもの自己防禦だった。

「顔を見せろ。おい」

グイと髪の毛が引っ張られた。しかし、ジョセフィーヌは、ますます身を固くして跪いている。突然、

「ギャーッ！」

獣が吼えるように絶叫したジョセフィーヌは、亀の子を引っくり返したように仰向けにされてしまった。わずかに持ち上がっていた尻から手を突っ込んだ有明が、下腹部を持ち上げるようにして表に返したからである。

今まで、こんな目に合わされたことがなかったジョセフィーヌは、半狂乱に動転してしまった。膝下だけをバタバタさせて起き直ろうとするが、首鎖のツケ根を有明の左足がグツと踏みつけているので、首をあげることも出来ない。横に張った後手が、かえって突っかえ棒のような作用をして横に転がることも出来ない。その次の瞬間、こんどは有明の右足が、仰向きでもつぶれもしないコリコリと形よくひきしまっている双の乳房の上に、のせられると、

「アッ、アッ、ヒューッ」

背中と床にはさまれた後手が、折れそうに痛んだのである。

「どうだ。少しは、こたえたか。いうことを聞かないと結局は、こういう目を見るのだ」といいながら、ゴリゴリと胸をゆさぶるのだ。その度毎に、ジョセフィーヌは切れ切れの悲鳴をあげた。

日本の女だったら、舌を嚙んで自殺してしまったかも知れない。しかし、キリスト教思想の滲み込んだ欧米人の場合は、自殺の可能性は極端に少ない。そこで、日本人ならとくの前ギャグを喰わせるところを、ジョセフィーヌの場合は口を自由にさせてある。そのモナリザのような唇が、とぎれとぎれに「レ・セ・モア、レ・セ・モア」と、くりかえすのであった。助けてくれと哀願しはじめたのである。

再び便所へ入ったような姿勢で、うずくまらされる。有明の掌が、双の乳をもみくだくように愛撫した。拒むすべもなく、ただオイオイと泣くばかりのジョセフィーヌを抱きかかえるようにした有明が、その耳に口をつけ驚くべきことを囁いたものである。

「どうかね。ここで、もう観念したら。い

つまでも強情をはると、おまえの妹も同じ目に合わせてやるぞ」

「えっ……」

身体を硬直させるのが良く判った。

「マリーまで、つかまえたのですか」

「さあ、それはどうかな」

「ひ、ひどいッ。かくさずに教えて下さい」せきこむように、たずねる。

「ハハハハ。私は知らないよ」

「よかった。嘘でオドかしたのでしょうか？」と独り合点して又カ喜びをするが、すぐに又、考えをかえて、

「いいえ、嘘じゃない。あなたは嘘をつく人じゃないわ。どこに、どこにいます。早く会わせて下さい」

妹への思いが千々に乱れて、ただオロオロするばかりだった。

「会わせるとも、いずれ時が来たらばな。だが、その代り、君は君自らの意思で私の奴隷になって貰わなければならない。どうだ、約束できるかね……」

「ウイ」

唇を嚙んで涙をこらえる、いじらしさ。美花は、ここでも有明に屈服したのである。

(未完)

<手記>

被虐と浣腸の幻想

中^{なか}川^{がわ}英^{ひで}子^こ

中川英子、31才。未亡人。子なし。僅か13才で浣腸による自瀆を覚え、以来、男に責められることを希求しながらその余りの内攻性のゆえに果さず、欲求不満がこうじて、自らの内面を吐露したこの手記一篇を寄せた。



カット・岡 たかし

真赤な火柱が頭の中を駆けめぐり、怒濤のような陣痛が津波のように押し寄せては、また引いて行くのです。もう何分、いえ何十分過ぎ去ったのでしょうか。

私の体の奥深く、ほのかに芽生えた痛痒が時と共に膨張し、そのあまりの快楽の故に私の豊かな叢を、しとどに濡らし、やがて……ああ、もう耐えきれません。ドウツとばかりに押し寄せる巨大な波が！ あああ！ 目の前を黒いスクリーンが滑り落ちました。

○

ふと、肌寒さに私は目覚めました。夥しい黄金の湖の中に全ての力を奪い去られた一人の私。つい先程までは、白濁の食塩水を吸い込んで、臨月腹さながらに見事な隆起を晒していた私のおなか、今はもう踏み潰された蛙のそのように、ペッターと背骨に張りついているのです。

まだ体のどこかで、ゆらゆらと、たゆたう炎の余韻に身を委ねながら、こみあげてくる疼きの切なさ、柔らかな二つの隆起を、そっと抱きしめ、くりくりと揉みしだいてみるのです。グイッと指をめり込ませてみます

と、サツと一条、黄色を帯びた透明な液体が、蕾を破って舞いあがり、空間に弧を描いて、どこやらへ消えてゆくのでした。

おお、こうしては居られません。

彼が戻ってくるのです。

フラつく足に力を込めて、私は立ち上がらねばなりません。

頭の中が、まるでカラッポになってガラんと響き、手足は、まるで私のそれではないかのように、感覚さえも、どんよりとウツロなのです。シャワーを捻り、力なくタイルの壁に凭れかかり、黄汚にまみれた、私の全てを洗い流すのでした。

ドロリと粘り糖蜜や豊かな谷間の奥深くまで入り込んでしまった残滓は、とうてい私の手にはおえません。

「ジョン、ジョンや」

忠実な私のジョン。私の足下に寄り添い、前肢を私の腰にあて、やがてその顔を寄せてペロペロと舌で嘗めとってくれるのでした。しっとりと湯水に濡れた優しい体を、厚いたオルにくるみ、私はベッドに横たわりました。

ああ、彼が戻って来たようです。

私は仰臥し、両足を高々と掲げて左右に開

き、その足首が耳の両側につくまで折りたたむと、彼の前に私の全てを晒し、私は、じっと待つのでした。

ひんやりとした彼の肌が私のアヌスに触れやがて「あっ！」………ゆっくりと「ウッ」

「あああ！」………ゆっくりと「ヒィー」

………彼は、彼は………私………の………腸内へ「ああー！」………侵入し始………めるので「イ………いやあー！」………す。

凄まじい苦痛が私の声を絞り、顔を蒼ざめさせ、やがて、じっとりと脂汗が湧き出てきます。いつのまにやら、それが、ほの赤い蕾とかわり、直腸から結腸へ、やがて回腸へと大逆流の、まったく中で私は眩き桃源郷を彷徨い、我にもあらで、恥かしい言葉を叫びながら、随喜の涙を流すのでした。

五分、時には十分もかけて、ようやく彼は没しきるのです。

開ききった両足を収め、始めて私は、長々と体を伸ばすのでした。

ぐるり、ぐるりと彼は向きを変え始めたようです。今日は少し居心地が悪いのでしょうか。何もかも出し尽し、いつものように、快適な住居を用意したつもりでしたのに。

それでも、ようやく彼は寝入ってくれたよ

うです。

ウトウトと、しばしの、まどろみに陥りそうになりながらハッと私は目覚めるのです。

まだジョンに縋^{ねぎら}いの言葉ひとつ、かけてやっではおりません。うっかり忘れてしまうところでした。

「ジョン、ジョンや」

私は小声で呼んでみました。

「おいで、ここへおいで」

ジョンは、私のベッドにとびのり、まだ、とっぷりと熱い樹液の臭いに舌を近づけてくるのです。

「お坐り。そのまま、お坐り」

私の目の前のそれを、私は口にふくむのです。舌を丸めて優しくくるみ、一転して齒をたて、しゃぶり、呑み込むのでした。

○

陽が昇りはじめ、辺りが緑の熱気にムツとしはじめるころ、彼は朝の挨拶代りにヒョイと顔をのぞかせるのです。

ペロペロと舌なめずりし、やがて、ゆっくりと彼は私から離れるのです。

まるで水銀温度計の水銀が、ゆっくり下がってゆく様に私は自由を取り戻すのでした。

彼は今朝もまた、お隣のカナリアを狙いに

行ったのでしよう。私はといえば、買物に出かけねばなりません。

今夜も又、疲れきって帰ってくる彼のために、快適な寝床を提供するために、ウンと体力をつけておかねばなりません。

そうそう、食塩が、もうなくなっていたのです。今日は、二十パーセントの食塩水に食酢を混ぜてみることに致します。

—△ニ▽—

あなた様に、炭鉱の町の生活が、お解りいただけますでしょうか。

操業短縮—廃坑と、お定まりのコースを辿ってきたこの町に、明日の光など、一体どこにございましょう。土はガラで埋まり、瘦細り、ペンペン草さえも生えません。

若者達は次々に都会へ逃がれ、働く意欲のない老人達と幼な子の群れ。コールタールから粗悪な染料を再生する町工場が一つ。

下水には真黒な廃液が溢れ、凝固し、町全体を異様な悪臭が漂い、小動物の死骸が、散乱しているのです。飲み水さえもドス黒く濁り、体力を奪われた子供達は、忽ち、病の床に伏してしまふのでした。

亡夫は、この町の貧しい医者でした。ああ

！ 日も又、赤い巨大な太陽が、呪いの町に長い尾を引いて、ゆっくりと落下するのです。

「俺には、とても、あの人達から金など取ることはいけませんよ」

そういう私達も、彼等と少しの違いもない毎日だったのです。

○

膀胱ガンって、ご存知でしょうか。自覚症状のないままに、膀胱壁が犯され、その機能を失ってしまうのです。すっかり除去してしまわねばなりません。子宮や乳房は、別段なくとも何ということはありませんでしょうが膀胱となると、ないでは済まされません。生理は一刻一秒も休むことなく繰り返されるのですから。

通常は、小腸の一部を腸間膜をつけたままで十五センチほど切り取り上部を閉じて、ここに腎臓から延びる尿管を接続するのです。

一方、下部は脇腹の皮膚に人工の肛門のように開けた穴に接続するのです。勿論、このままでは、どんどん尿が漏れてしまいますので三十CC用のゴム袋を取りつけて、さらに三百CC用のゴム袋に導いたりするようです。

男の方はズボンの裏側や下着に、女の方はサ

ポーターで足などに取りつけるなど、苦勞していらっしやるようです。とりわけ、人様とご一緒に、お風呂へ行くことのできないのが辛いとか、お聞きしました。

化学染料の混じった水を飲むことが、最大の原因であろうと、夫は申し立てられました。連日、夜中までの手術、往診に体力を消耗し精神的にも、すっかり弱り切っていた夫。何か、強烈な刺激が必要でした。

○

体内に異様な圧力を感じ、私は目を覚ました。朦朧とする頭の中で、私はそれでもフトンを引き上げようと思いました。

その時、私が目にしたのは何だったでしょう。煌々と輝く白熱灯の真下に、何もかも文字通り何もかも剥ぎとられた私の体が、産婦人科用の、あの忌むしい鋼鉄のベッドの上に横たえられ、両足は高く持ち上げられ、左右に直立した鉄棒に、極限まで引き裂かれた状態で縛りつけられ、剥き出しの私の羞恥の中心部に夫が顔を埋めていたのです。天井には、まだ半分ほど白濁の溶液を湛えた巨大なガラス製のイルリガートルが取りつけられそこから伸びる長いゴム管が、深々と双臀の谷間に突き立てられていたのです。

夫はゾツとするような笑いを浮かべ、口からは、ねっとり数条の涎を垂らし、ひたすらに、その部分を見つめていたのです。

「ヒヒ、可愛いなあ。食べてしまいたいほど可愛いなあ」

まるで痴呆のように繰返し繰返しながら。

私のおなかの中では激しい便意が荒れ狂いゴロゴロと鳴り響き、それでも白濁の溶液は止まることなく落下しつづけていたのです。

私は気も失わんばかりに動転し、口も利けない有様でした。学生のころから、手荒な事ひとつ、しなかった夫が、私の体に触れることさえ躊躇^{ためらい}いがちであった夫が、今は自らも素裸で私の上に……。

夫は気が狂ったのでしょうか。そうしか考えられません。

腸全体が今にも飛び出しそうに激動し、頭の中をカアッと熱いものが通り抜けてゆくのです。

「やめてエ！ 何をするのよ。いやァ！」

「やめて、助けてエ！」

私は泣き声をあげ手をバタつかせ必死に起き上がろうと跪いたのです。でも、そんな事より、はるかに激しく強く速く突き上げてくる巨大な力が私の体力を奪い始めたのです。

「お願い！ やめてエ。トイレに行かせて」

「ああ、ああ」

私は哀願し、頬を涙がった落ちました。

トロリと虚ろだった夫の目には、ギラギラと真剣な光が溢れ、キツと真一文字に結んだ口には、全てを拒絶する強固な意志が滲み出ていたのです。いつの間に入れ替えられたのか、太い赤ゴム製の栓がピツタリと噴出口を塞ぎ、彼の手が、しっかりと、それを押しつけていたのです。

数十分も経ちましたでしょうか。顔面蒼白^{おしろ}にかかったようにガチガチと震える私の姿に、はじめて夫は口を開いたのです。

「いいよ。さあ、出してしまおうんだ」

もう何が何だか、判らなくなっていたのです。愛する夫の注視の中で、おまるの中へ夥しい黄金の山を築いたことさえ、私の記憶にないのです。私は、そのまま失神してしまっただけでした。

○

それからの一カ月は地獄でした。医院の門を閉ざし、来る日も来る日も、朝となく夜となく、白熱灯の輝く下で、嫌がる私のおなかの中に石鹼水が、食塩水が、グリセリンが、重曹が叩き込まれたのです。

何カ月かが過ぎ、夫の浣腸責めはパツタリ

と途絶えてしまったのです。浣腸責めもできないほどの激務が再び始まったのです。疲れきって寝入ってしまった夫の横顔を見つめる私の体に、異様な疼きが走ったのです。アヌスを貫いて真赤に燃えあがる火炎が腸を炙^{あぶ}り、ひたひたと切なく脈打ったのです。

「グリセリンを入れて！ おなか破裂してしまふまで。入れて！ 入れてほしい」

始めて私は心の底から希求したのです。自分の手で、そうだ、自分の手で……。私の膝はガクガク震え、音を立てまいと焦れば焦るほど、スリッパがパタパタと鳴るのです。

天井に吊るされたイルリガートルを下ろし興奮に震える指先でグリセリンを注ぎ込んだのです。

ベッドに仰臥し、羞恥のポーズを晒して、エボナイトの黒い嚙管がアヌスに近づき、グッと懐かしいあの感触が腸を潤し、やがて私の、おなか一杯に膨満していったのです。グリセリンの薬瓶のゴム栓を自分の手で押えました。

やがて体の奥深く、いいようのない振動が共振と共振を重ねて成長し、私の全てを、ドロドロに融けた溶鉱炉の中へと突き落として

しまったのです。グリーンという、海鳴りが体全体に響き渡った瞬間、ゴム栓が音を立てて弾け飛び、ギラギラと光る黄金の飛沫が診療室一杯に飛び散りました。でも、それは、ほんの序の口でした。ゆらゆらと燃えさかる飽くなき炎は、更に、もっと別の何かを期待していたのです。

—△三△—

病室の窓からのぞく空が、ガラスのようにピンと張りつめ、キラキラと無数の水晶玉が大气に溢れ、ああ！ もう秋が、やってきたのですね。音のない青い透明さの空間へ、できるものなら、この体を同化させてしまいたいと思っています。

尿の中に不気味な赤色をみとめたのは、ちょうど二週間前でした。

とうとう膀胱ガンに冒されてしまったのです。夫の執刀で三時間におよぶ手術を受け、今日まで、こうしてベッドの上での生活を余儀なくさせられてきたのです。

「何処へつないだの」

夫は笑って答えてはくれませんでした。手術の経過は良好で、傷口もすっかり直り、私は起きたくてウズウズしているのです。貧し

くはありましたが、夫の腕は一流でした。

○

人間。造化の神は見事な芸術作品を、お作りなされたものですね。

膀胱に一定量の尿が溜まりますと、オーバーフローを警告するためのパルスが、ちょうど洗濯器のブザーのように、大腦へと伝わるのだそうです。

生まれて二十数年間、毎日、欠かさず見つめ続けてきた豊かな小水の噴出を、この目でもう一度、確かめようと思っています。夫が便所へ入るのを見計らって見せていただくのですが、どうも機械的で、やはり女性特有の排泄作用が、とても懐かしいのです。

私に新しい日課が課せられたのです。毎朝早く、二百CCクラスのグリセリン浣腸で十分に洗腸を済ませてから、夫がイルリに入れて持ってくる得体のしれない液体を、夜中まで私の体内で丹念に熟成、醸造する事が、それです。夜中に抜いたその液体を、部厚い木製の器につめ、翌朝、再び私の体中へ詰めかえるのです。

一カ月ほども経ちましたでしょうか。夫は水道の蛇口のような金属製の器具を私のアヌスに固定したのです。

「いいかい。できるだけ、ゆっくり出すんだよ」

私は夫のいいつけ通り、徐々に力を入れ始め、夫はコックを捻ったのです。

蛇口の下に置かれたクリスタル・グラスには、女体の妖気を一杯に吸い込んだ見事な琥珀色に輝く液体が充たされていたのです。

「美しい！ 疲労には、これが一番なのさ」

夫は美味そうに、飲みほしたのです。それは灘の清酒でした。

○

妙に乳房が張り出したのは、その頃からで子供を産んだ事もないのに、それは見事に膨張し、光沢さえ放っているのです。もともと貧弱だった私の胸が肉体女優のそれにも劣らないほど隆起し、つんと上を向いていた乳首が、重みのために下を向いてしまうほどでした。

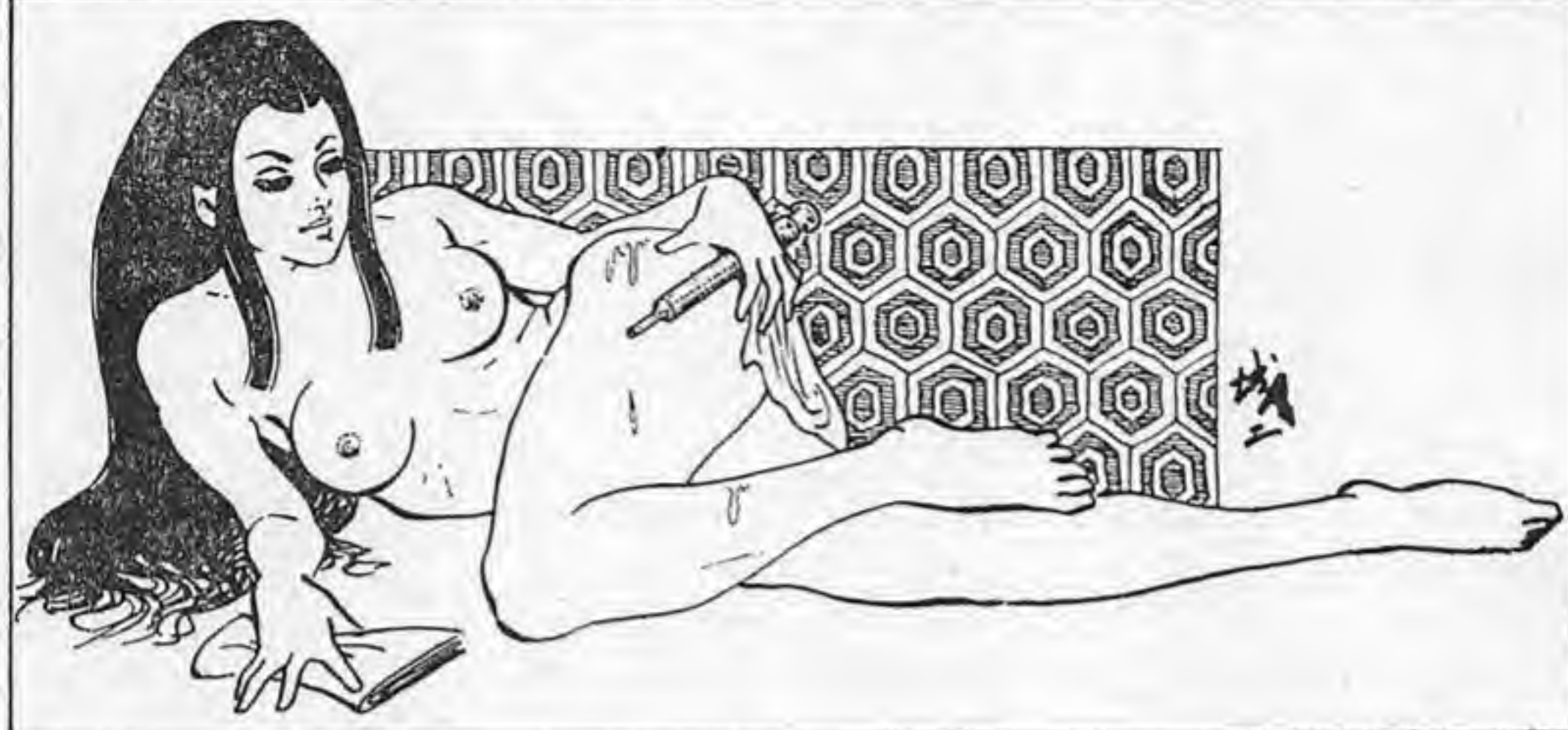
日一日と膨張してゆくのが、はっきりと判るのです。ついには痛みを伴うに至って、私は夫に診察を依頼したのです。

「フフ、やっと溜まったようだね」

夫は、いきなり私の胸を押し開き、グイッと、指を、めり込ませたのです。

「ウウッ！」

Sコレクション ----- ある日の調教『自虐』----- 豪 城 二 -----



あまりの激痛に眉をしかめた瞬間、黄を帯びた透明な液体が、空中に舞い上がったのです。同時に夫の熱い唇が私の蕾を銜えていたのです。両の手で、ゆっくりと揉みしだきながら、ゴクゴクと喉を鳴らしたのです。

赤ン坊にお乳を吸い取られるって、こんな気持なのかしら……ふと私は、そんな思いに耽っていたのです。

夫の唇は、右から左へ、左から右へと忙しく動き、一滴の雫も残すまいとするかのように私の蕾を吸い尽したのです。

「あなた、まさか！」

でも、それは本当でした。

夫は、私の尿管を乳腺に接続したのです。

以来、モーニング・コーヒー代りに、胸を与えることが私の日課になったのです。夫は至極、ご満悦の様子でした。

—△四▽—

ぐっしよりと雨に濡れた衣服が、肌に纏わりつき、骨の髄まで悪感の拡がってゆく夜でした。闇の中に仄白く、あちらに一人、こちらに一人と酔客が、よろめきながら歩いておられます。

私の足が、まるで自分の意志とは反対にス

ツと男の傍へと歩みよるのです。

言葉は不用でした。淫らな目が私の体をねめまわし、不遠慮に伸びた手が、私の胸元にすべりこむのです。

すえた匂いの部屋の中には、そのうえで、痴戯を交わしたであろう幾十人も男と女の汗と体液を吸い込んで、ずっしりと湿っぽい煎餅蒲団が一枚あるっきりです。

裸電球の真下では、肉づきの悪い男の体が私の肉を求めて蠢き、特定部分への執拗な攻撃が繰り返されたのです。

男の気を引く程度に呻き声などあげてみますものの、私のその部分に対する欲情は、とうの昔に消え去り、今はただ、事務的な手続を済ませるための窓口にすぎません。

「今日は、これで五人目だわ。もう、そろそろ引き上げなくっちゃ」

薄汚い壁のしみを目で追いながら、明日の算段を考えていたのです。

と、凄まじい衝撃が、私の体を差し貫き、「あっ！」と声をあげてのけぞり、指が虚空を掴んだのです。

何年間か忘却の彼方に追いやってきた私の古傷は、たちまちパツクリと口を開け、ドクドクと禁断の泉が湧き上がってきたのです。

思わず知らず恥かしい言葉が、空気を震わせギリギリと唇を噛みしめて、私は耐えていたのです。

すべすべと少しの張りも失ってはいない双臀の谷間に、男の体が陥没していたのです。

○

二十五才の若さで、未亡人という悲しい名前を冠され、路頭に迷った女一人。

生きてゆく道は、これより他になかったのです。

体を汚し、心までも汚した私は、ヒロポンを覚え、いつしか密売仲間に引きずり込まれていたのです。

それが特徴の左足を引きずりながら、通称『ボン屋の辰』が近づいてまいります。

「チッ！チッ！」

合図の舌うちが二回。

ブツがあるよ、との知らせなのです。なに食わぬ顔つきで歩み寄り、すれ違いざま、薬の入ったカプセルを手に入れたと思った瞬間「おい、何をしている。ちよっと、そこまで来い！」

しまった、デカだ！

咄嗟に私は、走り出していたのです。

畜生！ のろま野郎め。つけられたな！

私は必死に公衆便所へ飛び込んだのです。

「あけろー！ あけろー！」

ドンドンと戸が叩かれ、更に二、三人の靴音が荒々しく近寄ってきます。

隠さなくては。ええい、早く！

ハンドバッグの中？

駄目！

靴の中？

駄目！

パンティの中？

駄目！ 駄目！ 駄目！

戸がギシギシと音を立て始めました。

瞬間、私の手は、カプセルをアヌスに挿入していたのです。おなかの力を抜き吸いあげるように体内深く潜ませていました。

「何よ！ ウルサイわね。鎌倉入りだって言うのに！」

私は戸を開いて叫んだのです。

○

刑事たちの手によってブラウスが、スカートが、ブラジャーが、パンティが剥ぎ取られました。口の中は勿論の事、男達の注視の中で秘所の中にまで節くれ立った男の指が、さぐりを入れました。

「おかしいな。確かに、こいつが持っている

はずだが」

「知らないよ！ へん、頓馬の助平野郎め。

どうしてくれるのさ！ ええ、どうしてくれるんだよ！」

その時、調子に乗り過ぎたのが運のつきでした。男達の、いやらしい視線を痛いほど体に浴びて、私は逆上したのです。

「何だっていうんだよ！ ケツの中へでも隠したって言うのかい！」

「吐いたぞ！ だれかイチジク浣腸を買ってこい」

私は、あっという間に押さえつけられ、犬のように地面に四つん這いにされたあげく、尻を高くあげさせられたのです。

「二本、一度にやるんだ」

四十CC位で、どうなる私でもありませんでした。

「へん！ なんだよ、こんなもの」

「ふてえ女だ。もう一本、うて！」

もう一本、もう一本と私のおなかの中に十数本のイチジク浣腸が施されたのです。いくら私でも、これでは勝ち目はございません。

べっとりと脂汗が流れ、歯が、ガチガチと鳴り、満身の力が、ただ一点に集中されていたのです。

五分、十分、十五分、二十分。

気の遠くなるような激痛の中から、懐かしい甘い振動が、まるで水面に投げられた小石のように、腸全体に拡散し、体全体を包んでいたのです。

突きあげてくる歓喜の疼きの中で、私は、男たちの目前に、カプセルを浮かべた夥しい量の黄金水を撒き散らしたのでした。

○

暗い独房のベッドの上で、私は一人悶えるのです。一般に囚人達の苦しみは、孤独に耐える事にあるといわれておりますが、私の苦しみは、体の深奥で燃えあがる被虐の炎にあったのです。

指を交互に挿入したり、木片を丹念に削って代用としたこともございました。

私はもう、浣腸プレイ以外の何によっても満足できず、浣腸なくして人生を生きてゆくことなど考えられないのです。

△五▽

うらうらと長閑な日でした。

二年の刑期を終えた今、思わぬ叔母の遺産を手に入れて、何不自由なく暮している私です。

若い頃には(と申しましても、私はまだ、三十を過ぎたばかりですが)随分、無茶な事も致しました。

ヒロポンを密売した事もございましたし、体を売った事もございました。

でもやはり、私は浣腸の魔力から逃がれる事はできなかったのです。

日ざしが随分、強くなってまいりました。庭の草木にも、水を撒いてやらねばなりません。

蛇口に、しっかりとホースをつなぎ、ノズルをその先端に、ねじり込むのです。さて、私は一糸纏わぬ素裸になって両足を開き、ノズルを深々と陥没させ、サッとコックを全開致します。

清水が奔流となって私の体内を駆けあがり胃の下で横に流れ、再び激しく落下するので、みるみるうちに私のおなか膨張し、いまにも破裂せんばかりに張り切ってしまうのです。

私は、いく分ふらつく足で、よろよろと庭へ下り、お日様の光を一杯に受けて、もの言わぬ物たちの、ひとりひとりに水滴を滴らせてやるのです。

だれ一人、覗き見るものもない広い黒い

土の上で、思うぞんぶんに砂にまみれ、草木と戯れ、

「ああ、生きているんだな」

そう、思うのです。

おや、もうこんな時間でございますね。私は、いそいそと台所に立ち、熱湯に食塩をかくすのです。

今でも初めて浣腸をしたあの頃の事が昨夜の事のように思い出されるのです。まだ若うございました。一リットル入りのグリセリンを、そのまま、おなかの中へ、ぶち込んでしまったのですか……

あくる日、患者さん達が鼻をつまんでいらっしやいましたっけ。

もう、良い温度でございますね。

イルリガートルに、たつぷりと注ぎ込み、さあ、彼の帰ってくる前に、おなかのお掃除をいたしましょう。

何しろ、二メートルはあろうかという大蛇のこと、腸内を逆流されます時の衝撃は、大変なものでございますのよ。

老犬のジョンも、こちらを見ながら気持よさそうに日なたばっこをしています。

連載・アブ紳士行状記

M 派 交 友 録

(25)

— 馬 場 庄 平 の 巻 (6) —

鬼 山 絢 策

許 容 の 愛

亭主の見ている前で、その女房とセックスする——というのはSに属する行為であろうか。

恐らく万人が、そう認めるであろう。だが、そこにもニュアンスによって、大きな差がある。

例えば強盗が押入って、亭主を縛って、その見ている前で、いやがる細君を犯す——こ

れは完全なSである。

だが、昨夜の、ひろ美と私の場合は違う。ひろ美の方から私に挑んできたのである。

それが何の理由で、何の目的で、そういう風に出てきたのか、私には、ひろ美の真意を解しかねていた。

「お淋しいでしょう。何なら今晚、女房をお貸ししましょうか」

と亭主の北島が、私に向かって言ったのは冗談だったろう。

それを聞いた、ひろ美が屈辱を感じて、



「そんなら、ほんとにやって見せてやる！」
冗談から駒が出た——という成り行きからこうなったのではないかと推測される。

冗談から駒が出たと言っても、ことによりけりで、まず普通の夫婦では絶対、考えられない行動だが、玉井ひろ美のような奔放な性格の女が、性格どおりの奔放な生活をしている、その殻の中では、このような、とてつもない行為が、いとも簡単にスムーズに行なわれようとしたのである。

北島がM派の人間であり、ひろ美がSの女性であれば、そういうことがあっても不自然ではない——と考えるのは、小説のストーリーの上でのことである。

仮に夫婦の両方が、そういう考えを持っていて——

夫は妻の姦通を願ひ、妻は姦通を夫に見せびらかして夫を苦しめてやろうという気があったとしても、これは空想の上でのことで、実現することは不可能。いざとなって、そこまでは踏みきれまい——と私は思っていたのである。

結局、あとで分かったことなのであるが、それは、ひろ美が東京に出てきて、日劇ミュージックの一枚看板のスターとしてデビュー

した時、私は彼女の出世に驚いたが、それだけの素質のある女だったことを知っていたから当然、誰が袋から頭を出したのだと思ひ、彼女を祝福してやった。その時に

「御亭主も一緒に来たの？」

と聞いたら、

「え？ 亭主って誰のこと？」

「ホラ、北島君さ」

「ああ、あれ。あれ、亭主じゃないわよ」

「じゃ、別れたの」

「どうだっていいじゃない。その話、しないで。ね、お願い」

ということ、東京では北島の話はタブーなのだと思つたのである。

それ以上、立ち入った話は聞かぬことにしたので、これからは、私の勝手な推測によるものだが、私が泊まった、あの天王寺のマンションに居た頃は、既に二人の中に、ひびが入り、夫婦別れ寸前の状態だったのかもしれないと思つたのである。

でなければ、いくらなんでも、あんなハレンチな行動が、いともスムーズに行なわれようとした——ところまでは、行かなかっただろう。

そう言えば亭主の北島の方に、多分に未練

タップリなところが見受けられたことに思いあたる。ひろ美や私が東京の話をすると、彼は暗い、悲し気な表情をしていたのが想い出される。

道頓堀劇場は早晩、潰れる。玉井ひろ美は東京進出に野心がある。それがために唄の勉強をして準備している。北島の方は、大阪のキャバレーに職場があり、東京へ行っても、すぐには職場を見つけないのは困難だし、働きづらい。

そこに二人のギャップが深まって行つたのだと思う。

ひろ美にしてみれば北島は、ただ気の合つた男、自分を一途に慕ってくるのを受け入れていたに、すぎないのではなかったか。

北島は真剣に、ひろ美を愛していたのだと思われる。

その証拠には、女房がどこの馬の骨とも知れない、行きずりの旅の男と一緒に寝るといふ。しかも自分の目の前で。普通の亭主なら拒否するだろうし、怒るだろう。だが拒否すれば、それが夫婦別れの、きっかけになる。

それを恐れていたのではなからうか。

「女房をお貸ししましょうか」と言つたのは妻に屈辱を与えたのではなく、逆に女房の御

機嫌をとる意味で言った——と解釈すべきであらう。

妻の浮気を許容する——そういう態度を妻に証拠立てて見せようとしていたのだ、とか考えられない。

や ど ち ん

私としては、いま思い出しても一生に一度ともいえるような、絶好のチャンス逃がしてしまった。

全く臆病でダメな男だと思う。

ひろ美という女はアツサリしたところのある女で、私に裸で抱きついてキスまでしたのに、私がぐずついているのをみるとサッとあきらめてしまった。私はテレかくしにウイスキーを二杯ばかり飲んだら急に眠くなって、寝てしまった。

翌朝は九時ごろまで寝坊してしまった。今日は用がないという解放感で寝すごしてしまったのだった。

ひろ美の唄声で目をさますとベッドへ一人で寝かされていた。目の直ぐ上に、ひろ美のヌードが、全紙に伸ばされたのが貼ってあって、私を見下ろして笑っている。私は昨夜の

臆病さが、悔まれた。

起きて隣の部屋へ行ってみると、ひろ美が椅子に腰かけて、髪をとかしている。その足もとに亭主の北島が、うずくまって、ひろ美の足にヘアクリームを、すりこんでいる。

ひろ美は全裸の上に浴衣を羽織っただけで前は、あけっぱりのままである。

私の顔を見ると、

「あ、センセ、起きたの。ホラ、これ」

傍にあった新しいタオルをとって立ち上がった。立ち上がる拍子に、目の前の亭主の顔に、デルタがぶつかった。タオルを投げる恰好をしたので、私が両手を差し出すと、タオルを投げてよこした。

「洗面所は、お風呂場よ」

羞恥心も何もない、極めて自然な日常生活の一断面なのだ。

だが、その一瞬の動きを見たとき、私は激しく興奮した。まるで十七、八の頃のような猛烈な猛りだった。

「いまなら、ひろ美の満足するようなことが出来る！」

と思ったのだが、時すでに遅く、あとのまつりである。

「そうだ。昨夜、ひろ美は私にキスしたり、

裸の身体をおしついたりするよりも、いまやったようなことを、ちょっとでもやってくれば、コトは容易に運べたものを。ひろ美も気のきかないやつだ——」

などと我がままな不平もおきた。

「よく眠れた？」

ひろ美は椅子に腰を下ろし、至極無難作にひよいと片足をあげて、北島の肩にかけた。

北島は、またセッセとクリームをふくらませのあたりに、すりこんでいる。

「ああ、前後不覚にね。寝すぎたよ」

ひろ美は私に見せるためにやっているのではない。毛深い方なのだろう。だが、再びハミングを続けながら、夫の頭に手をかけてグイと太股のあたりへ頬ずりさせたりする。そういったしぐさは、猫か犬を退屈しのぎに弄んでいるのと変わらなかった。

いつまでも見ていたいのが、浴衣の前を見られるのも恥かしいし、私は振りきるように浴室へ、とって返した。

洗面をすませ、洋服を着ると傍にあった新聞の折込み広告の中から、裏の白い紙を抜き出し、それに一万円札を包んで、表にやどちん

とペンで書いて、ベッドの枕の下へ突っ込

んだ。

「やどちん——か、ほんとに、やどを貸してくれたはずだったのに、惜しいことをしたなあ。また好意だけを受けとこう」

そんな気持だった。

朝飯をつくるのが面倒くさいから外でトーストでも食べに行こうというので、三人で家を出た。

通天閣の方へぶらぶら歩いて行く途中で、二人に挨拶して行く男や女が何人も居た。

喫茶店に入ってコーヒーを言うと、サービスのトーストがついてくる。

ひろ美は椅子に坐ろうとして、

「あーら、まあちゃん。どうしたのお」

と、やはりストリップらしい女を見つけると、さっさと、そっちのテーブルへ行ってしまった。

北島は昨夜とは打って交わって不機嫌そうにムツツリ黙りこくっている。朝は機嫌が悪いのかもしれない。

「彼女の出てる小屋、もうダメですね」

私が話しかけても北島は黙ってトーストを食べている。

「彼女、ストリップにもどる気は、ないんでしょう」

ここでいうストリップは、もちろんオープン（特出し）のことを指している。

「どこか、いいところは、ないものかなあ」

北島が返事をしないので私は、ひとりごつのように言った。

私の言わんとすることは、ひろ美の働き場所のことを言っているのだ。それも大阪で、彼女の働き口が大阪にあれば、北島にとってこれほどよいことはない。つまり、北島をなぐさめるつもりで言ったつもりだったのが、すべて逆効果となって、ますます北島を不機嫌に、させてしまった。

ひろ美は私達を放っぱり出して、煙草をすいながら、まあちゃんという女と夢中で話している。トーストやコーヒーも、そっちのテーブルへ運ばれて、いっかな戻る気配が見えない。

「やあ、どうも大変、お世話になりました」私は立ち上がった。北島は我に返ったように笑顔を見せて、

「イヤ、何もお構いできませんで、失礼しました。また、寄って下さい」

と、愛想よくなった。私は、ひろ美のテーブルへ行って、

「晩に電話するよ。何時、かけたらいい？」

ひろ美は化粧もしていないが、素顔でも肌がきれいなので美しい。

「八時半ごろが、いいわね」

「OK。じゃ、頼むよ。お世話さまになりました。じゃ、またね」

肉 体 の 門

今日は晩まで、まるまる用がない。久し振りで奇譚クラブへでも電話してみようかと思つたが、このところ原稿を書いてないし、別に差し当たっての用事もない。

それでも一応、電話してみたが、お話し中である。

面倒くさくなったので、やめたのだが、受話器を置いてから、かからなくてよかったと思つた。

大した用事もないのに編集者に会うということは、相手にとって迷惑この上ないことである。暇つぶしの相手にされたのでは、たまつたものではない。こっちも編集屋だからそのへんのことは身につまされて分かるのだ。

パチンコをやって、ストリップの早朝割引ということとで天満座へ入って、かぶりつきから二番目の席へ坐つたが、すぐ眠くなって、

寝込んでしまった。

一時間ぐらい眠ったろうか、隣の男がグツと身体をおしつけてくるので目をさました。

見ると「デベソ」の直ぐ目の前で特出しの真最中だった。臉をショボショボさせてストリップの顔を見上げると「目が覚めた？」と言って、ニッコリ笑った。

オープンしている間は、どうにか目をあけて

いるが、その踊り子が引っ込んで、次のが出てくる。まず顔を見て、次に身体を見て、

「この程度の女か」と分かると、また、つい眠ってしまう。また、隣の男に押されて目を覚ますと、すぐ上でオープンしている。見なくちゃ悪いから、何となくストリップの顔

と目の動きを見る。

また、眠る。「オープンですよ」と隣の男に押されて目を覚ます。実に親切な男がいるもので、お蔭で、よく眠れたし、舞台の方もかんじなとこだけはチャンと見た。

劇場の中の電話で馬場氏を呼び出したが、出かけていて五時に帰ると言う。まだ、二時間ある。受話器をかけ終わったとき、

「よく眠れた？」

ワンピースの女の子に声をかけられた。顔を見ると一目でストリップと分かるメイクアップをしているが、さて何番目に出た子だったか記憶がない。

「ごめんよ。ゆうべ、徹マーやっちゃったんでね」

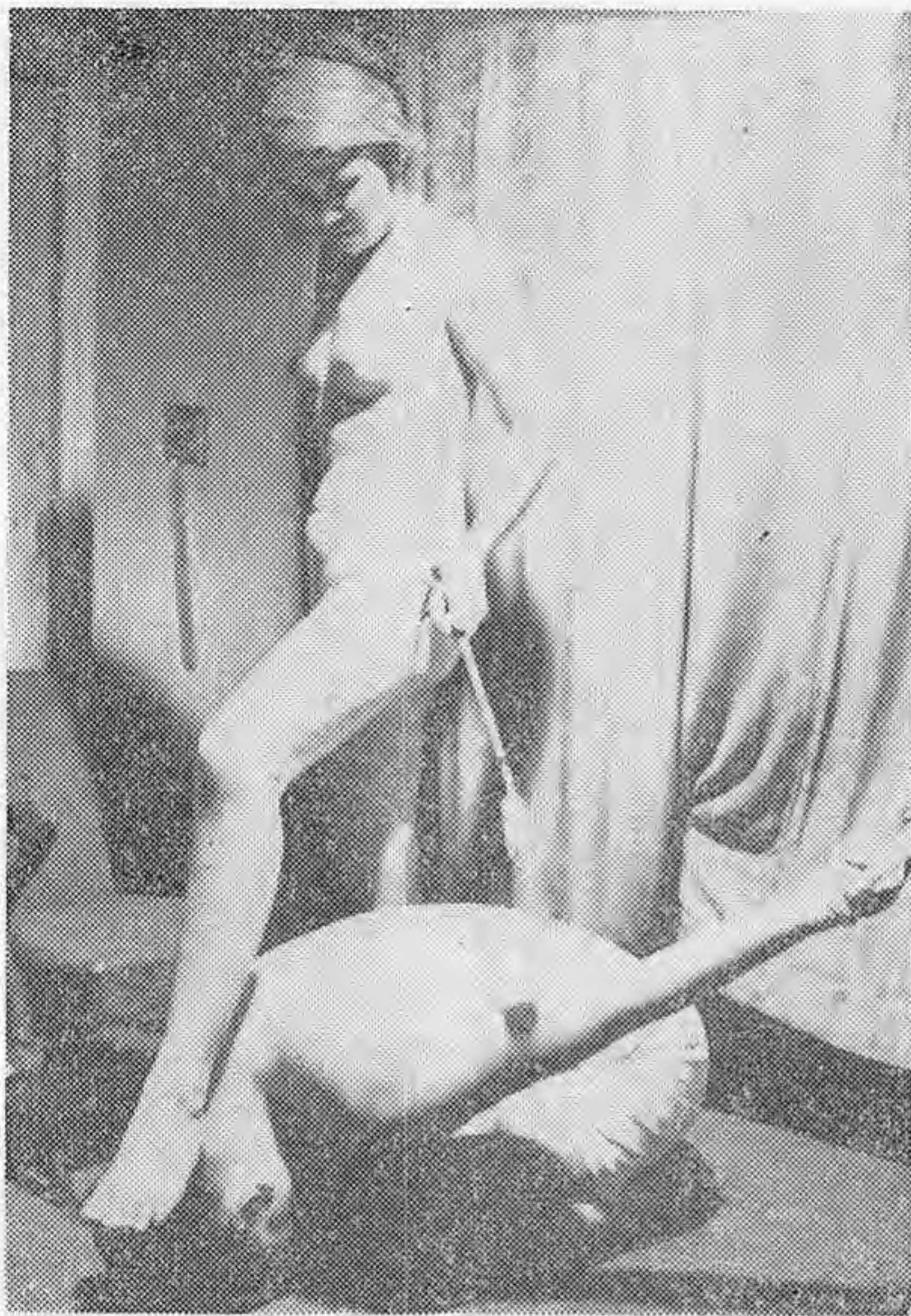
「あら、徹マン？ スゴいわね」

女の子に麻雀は通じない。

「電話、あいた？」

どうやら、電話のあくのを待っていた様子であるが、私が眠っていたのを覚えていてくれたとは光栄である。ストリップとは、こんなにも人なつこい人種である。

パチンコと喫茶店で、ようやく時間を潰した。こんなに暇なものも一年のうちで一日あるかなしかで、全く持てあました。



夕方になって曾根崎の『リマ』という喫茶店で馬場氏とおち合い『武蔵』という変わった料理屋へ案内された。

チャンチャンコを着た親爺が、ろばたのまん中に坐り、そのまわりに客が坐っている。親爺は酒のお燗番をしていて、柄のついた盆のようなものに徳利をのせて客の前に出す。

山菜料理で、ちよっと、いける。

馬場氏は酒が強いからいいが、私は、あまり飲むと仕事？ ができなくなるから、酒は一本でやめた。

私は馬場氏に、ひろ美のアウトラインを説明した。

「いまはオープンはやっていませんがね、彼女はドサのストリップ小屋などを回っている女の子とは、わけが違いますよ。必ず今に名をあげるひとですよ」

私の予言は一カ月後に的中するのだが、馬場氏は目を輝かせて、

「あのひとなら、確かに、そうですね。ぼくも一度しか、舞台を見ていないけど、綺麗だし、演技も、うまかったですね。だけど、ぼくの見た芝居が肉体の門だったので、何かあのひとはM傾向の女性のようなイメージを植えつけられているんですよ」

「いや、完全なSですよ。今夜会えば分かります。そりゃ芝居の役どころは違いますよ」

「あ、そうだ。あの人が人妻に扮した女優をリンチするところが、あったっけ。あの時は凄かったなあ。思い出しました。あとで女達から、あの人がリンチされるので、その時の方が印象が強かったものだから」

「私は大阪公演は見えないけど、恐らく、ひろ美は『マヤ』の役をやったんでしょうね。あの芝居に関東無宿の小鉄というSがかった女が出てくる筈ですがね」

「ああ、その女は辯せていて、小づくりで、ぼくは、あまり魅力を感じませんでしたよ」

「じゃあ、玉井ひろ美が関東小政の役をやった方が、よかったですね」

「ああ、それだったら、すばらしかったでしょうね」

八時半になったので道頓堀劇場へ電話してひろ美を呼び出し、十時にはハネると言うので、例の小屋の前の喫茶店で待ち合わせことにした。

一方、昼間、天満のストリップを見に行っただけで、あたりをつけておいた天満ホテルと言うのに電話して部屋をとっておいた。「では、買物があるから、ブラブラ出かけ

ましようか」

梅田で五百ワットの電球二個と、コードとクリップを買った。

トリオの魅力

十時五分前に喫茶店に着いて待っていると十五分ほどして、ひろ美が、やってきた。

今日は白いドレスに、刺繍をほどこした洒落た服を着てきた。背中が殆ど、まる出しになっている。当時としては素人の女は、まだ着ていないイブニングだった。

すぐ、天満ホテルへ車で直行する。

緑色の電灯のついた連れ込み宿そのもののあくどいホテルだったが、中へ入って見ると部屋の中は、ゆったりとしていて、洋間と浴室がくっついていて、境がガラス張りになっていて、洋間の方から風呂へ入っているのが見える仕掛けになっている。浴室も相当広い間に板の間もあって東京の連れ込み宿と違って万事、おうような間仕切りである。値段も三千円と東京より、かなり安い。

女中にビールと酒を注文して、

「お風呂に入りますか」

「いいわよ。いま入ってきたわ」

馬場氏が、モジモジしている。

「馬場君です。今夜のパートナー」

馬場氏は、ひろ美に最敬礼をした。ひろ美は無言で、ちよいと、えしゃくすると、

「ねえ、センス。あたし、もう、あの小屋、やめるわ」

「そう、どうも不入りだね」

「いや。もう大阪は、いやよ。また、東京へ出るわ。センス、どこか安いアパートを探してくれない。二間ぐらいの」

「いくらでも、あるよ。でも、いま住んでる部屋ぐらいいだと安くないよ」

「ううん。もっと安いとこでいいの」

酒と料理が来たので部屋に鍵をおろす。

「ビールにしますか、それとも、お酒を召上りますか」

「そうね、お酒、頂くわ」

馬場氏が町重に、お酌する。ひろ美はコップで酒を受けると、グイッと、ひと息に飲みほした。

「ああ、もうほんとにイヤなっちゃう」

どうも、ひろ美はクサっているようで御機嫌がよくない。

「あ、センス。今朝ほどはすみません。あんなことしなくても、よかったのに」

と「やどちん」の、お礼を言った。

私は話をしながらも、どこをバックにするかを考えていた。

ひろ美の話が、ぐちゃぐちゃになってきたので「さて、そろそろ、はじめかな」

「あ、そうそう。ショウバイショウバイ」

ひろ美はシャキンとなる。

「この人はね、とてもおとなしい犬のような人ですからね。遠慮なしにやって下さいよ」

ひろ美は自分の相手をするモデルの男には人間としての関心は殆どなかった。

馬場氏をチラリと見ただけで、どこかの会社の課長クラスの馬の骨だらうくらいに踏むと、あとは無視してしまうのだ。

春木君の時もそうだったし、馬場氏の場合も名前さえ覚えていないだろう。

「ねえ、今日は何かストーリーがあるの」

「いや、考えてこなかった。とにかく、この人が、あなたに徹底的にいじめられて見たいと言うのでね。あなたの思うままに、あしらってあげればいいんだよ」

「いいわ。今日は、ムシヤクシヤしてるからね。ちょっと荒っぽいかも知れないけど、覚悟はいい？」

「ハイ、あなたのような絶世の美人の奴隷に

して頂けるなら、どんなことでも御命令に服します」

「ふふ、齒の浮くようなお世辞、言わないでよ。そんなこと言って今に吠え面かくなよ」

「イエ、あなたのためなら殺されても構いません」

「アハハ、オーバーなことやってやがら」

馬場氏は立ち上がった、ひろ美の前にキチンと正座して最敬礼した。

私はカメラの絞りとシャッターをセットしながら、馬場氏も場数を踏んで、よくこれまでにあったものだと感じた。はじめ、由起さんの前に出た時は、コチコチに固くなってろくろく、口もきけなかったし、自分の意思を伝えることさえ、できなかった。由起さんの肉圧に一ぺんにダウンしてしまったのが、二度目には信じられぬ程の頑張りを見せた。そして異常なほどにMの深淵に向かって、追求してきた。私などが何年もかかって、ブレイキをかけながら進んできた危険な坂道を転がるように一気に突き進んできた。私は彼のアまりにも激しい耽溺の姿に、破壊を予感したことさえあったが、その後、何年か経つたいま、彼は極めて堅実に生活している。

生活の基礎も、かたまってきた、毎日、意

慾的に、よく働いている。

一方、Mの方も大阪へ来てからは、トルコ嬢を相手に、相当の経験を積んできている。

大阪へ来るたびに、その経験談を聞かせてくれる。だが彼は私と会うごとに述懐する。

「トルコ風呂の密室で、一対一でやることはMの方も、ひと通りは、やってきました。でも東京時代の、あの由起さんとのプレーほど感激は、わきませんね」

そのわけは、初めての体験ということと、もう一つはカメラという存在が間に、はさまっていたからなのだと彼は言う。つまり、三者関係、見られているという意識、これが強い刺激になっているのだと言うのである。

「今夜は久方振りに東京時代の想い出が再現できるのかと、感激しています」

と彼は、はりきっていた。

「あなたのためなら殺されても構いません」

なんて、とってつけたような言葉をヌケヌケと言えるようになったのも、彼が場数を踏んできたからであろう。

「じゃあ、望み通り半殺しの目にあわせてやるからね。その時になって勘弁してくれなんて言ったらって承知しないよ」

ひろ美も乗ってきている。彼女は平伏する

馬場氏の前に立ちはだかったまま、服を脱ごうとした。

「ちょっと待って。その服なかなか、いいじゃない。その服のままで少し撮りましょう」

ストッキングだけ脱いでもらって、素足で馬場氏の背中や頭を踏みつけるところを二、三カット撮った。

頭を踏みつける時は、

「この野郎、どうだッ！」

と、かなり力を入れて踏みつけたので、

「ウッ！……」

馬場氏も思わず短い悲鳴をあげたほどだった。こういうところで、ちょっとしたアドリブを入れるのが、馬場氏に対しては、よく効いたようだった。

ひろ美に、ヌードになってもらった。

首の後ろに結んである紐を解くと、胸がパツと、あらわになった。ブラジャーをつけていない裸の乳房がプリンと出る。相変わらぬ実に恰好のいい、乳房をしている。

服を脱ぎすてると水色のパンティをはいていた。

「今日は、パンティをはいてきたのか」

一番、最初の時、ノーパンティでやってきたので、彼女が裸になる時は、いつも「今日

は、どうかな」と期待するのだが、それから殆どパンティを、はいてきていた。

そのパンティも脱ごうとするので、「ちょい待ち。そのまま二、三枚、行きましょう。パンティ姿もオツですよ」

「フン」と、ひろ美は苦笑して、二、三、ポーズをとったが、演技はしても、あまり、気のりはしてないようだった。

かつぶしかき

私は、どうもオールヌードというのには興味がない。

丁度、大判の無地の風呂敷を持っていたので、それを腰に巻いてもらった。

ひろ美の足は全く、すばらしい。一メートル六十五センチもある大女だから、全体的に見るとスナナリとして均斉がとれているが、傍へ寄って見ると、実に逞しく、ボリウムがある。内股のあたり、肉がすれ合っているところを見ていると一種の戦慄に似た魅力を感じる。高い所から下を見下ろして、高所恐怖を感じた場合、スーッと吸いこまれるように、とび下りたくなる。

ひろ美の内股が、そうだった。その部分を

見てみると、グググッと吸い寄せる魔力を持っているのだ。

「さてと、どんな風なのを撮るの？」

「そうね、一応、縛りますか」

「じゃあ、こうしましょう」

馬場氏にも、裸になってもらった。

そして、ひろ美は馬場氏の手を片方ずつ、

椅子とテーブルに縛りつけた。これは彼女が荒木高実氏を責めた時にやったポーズなのだが彼女は、それを覚えていたと見えて、迷いもなく簡単にやってしまった。

土間にあった金属製の長い靴べらを鞭代りにして、

「サア、奴隷の最敬礼のしかたを、教えてやる。頭を床に、すりつけろ」

背中へ、デンと足を、のせる。馬場氏の上体が、えびのように二つに折り曲がった。

「こら、頭が高いよ。この横着者っ」

ひろ美は、馬場氏の頭へ足をかけてグイッと思いきって踏みつけた。

「こうするんだよ。分かったか」

足に力を入れて、踏みにじる。今日は芝居でなく、本気で踏んでいるように見える。痛そうな馬場氏のクシャクシャな表情は、なかなかい。

更に背中の上にドシンと尻をのっけて跨がった。

「重い？ フフ、六十キロあるからね。苦しいか。やい、苦しいか」

「く、くるしいです」

ほんとに苦しそうだ。両手が逆をとられているからだ。

「ハイ、その位で、いいでしょう。今度は仰向けに引っくり返しましょう」

私の方が、見ていて不安になってきたので助け舟を出した。

手の縛しめを解いて、ヤッコラショと馬場氏の長い身体を仰向けにして、改めて両手を縛る。今度は両手は楽だ。

「こんなことでネをあげるなんて、だらしないよ。お前もあたしに虐められるのを覚悟でやってきたんだろ」

ひろ美は胸の上に跨がって、両膝をひろげて、哀れな奴隷を見下ろした。

「ハイ、煙草」

私は煙草を一本、ひろ美に渡し、ライターで火をつけてやった。

煙草をくゆらしながら、ひろ美の肉体は、次第次第に前へ、せり出てくる。

「殺されてもいいと言ったのは誰だい」

「どんな苦しいことでも、我慢します」

「よし、こうしてやる！」

ひろ美は片足をあげて、顔を正面から踏んだ。

今日は私としては非常に楽だった。私がポーズを考えなくても、ひろ美が次から次へとポーズを変えて行ってくれるからだ。

ひろ美も、阿麻君、春木君、荒木氏と既に三人も、こなしているから要領は、よくのめこめているのだ。

ただ今日、いままでと違うところは、何となく、ひろ美が荒っぽいことだった。顔を踏むのでも、いままでは足をソツと当てるだけ程度だったのが、今日はほんとに力を入れて踏みつけている。それだけに馬場氏もニヤニヤした、あまい表情はしていられない。両者の呼吸があって、ほんものの写真が撮れた。「ねえ、センス。そろそろホンバンに取りかかってもいい？」

ホンバンときたもんだ。本番にも、いろいろある。映画やテレビの本番、トルコ嬢の本番等あるが、ひろ美の本番は、あれなのだ。阿麻君に対して初めて彼女が本番を試みた時、触れ合った瞬間、スーッと目を細めて、ウツトリとしたエクスタシーに似た表情を想

----- イメージギャラリー『懇 願』岡 たかし -----



い出す。もっとも阿麻君の舌は特別製で、訓練された犬の舌だったから、なおさらジーンときたのだろう。

「いいですよ。OK」

その言葉も終わらぬうちに、丸太ン棒のような太股が、万力のように馬場氏の顔をはさんで自由を奪った。

「ひろ美さまがお情けをかけてやるからね」

確かに奴隷にとっては渴仰の泉を口にするあの瞬間は何とも言えぬ甘美なものだが今夜は今までとは、やはりちょっと違っていた。

アッと言う間もなく、奴隷が舌を伸ばしても、それにお構いなく、鼻に迫ってきた。

グイグイ激しく攻められて息つくひまさえ

与えなかった。

私はこのアクションを「かつぶしをかく」と表現しているが、ひろ美は、これが好きなのだ。

「むかしオープンしてた頃、舞台のデベソでお客様の顔へ、かつぶしかいたこともあったわよ」

と言って不敵に笑うひろ美だが、私の見たうちでは舞台でかつぶしをかけたのは外人のストリップパーグラいのものだったが、それすらタオルでかくしてやったものだ。ストリップ小屋でかつぶしかきを見るなどと言うことは、百回に一回も見られぬことである。何故なら、お客が沈んでる時には、ストリップテイザーの方も乗ってこないから、やらない。

また、お行儀のいいお客さんばかりで、皆ちゃんとお坐りして見ていられたのでは危なくてやれない。一ぺんにあげられてしまう。チップをくれるわけじゃなし、好んでそんなやばいことをやる必要はない。

お客が沸いてテイザーのまわりに十重二十重の人垣を作った時、その人垣の中でやるなら、何をやっても、あげられる心配がないし、お客の熱望に、テイザーも乗ってくるから、即興的に、いろんなことをやるのである。

手帖の暗号

奴隸としては、目の上に敬慕する肉のやぐらが迫り、磯の香に似た、あまずっぱい匂いに半ば、しびれたところで、花びらにくちづけするのがソフトなムードである。

ひろ美のようにドシャーンとおとされて、いきなり目を開けてもいられず、息もできぬくらいに強烈にやられたのでは、もし初心者だったら一ぺんに暴発してしまうだろう。

馬場氏も、こんなにちでは場数を踏んできているから、そそうしてしまうような醜態は、しめさなかったが、初対面で、いきなり、こゝも荒っぽくやられたのには面喰らったらしく、ひろ美が下から上へ、すりあげるたんびに、

「ウッ！ムッ！」

と、うめき声を洩らしていた。

日本にも、そろそろプロのサジスチンが、あちこちに誠生してきているようである。

アメリカやドイツには何十年前前から居たらしいが、現代の日本でも、ようやく誠生し普及されつつある。職業的にはトルコ嬢が圧倒的に多いが、バーのホステスや、ゴーゴー

ガールなどにも居るといふ。

サジスティックなプレーをするにしても、Mのお客に頼まれて「ああしてくれ、こうしてくれ」と言われて、その通りに素直に動くのではサジスチンとは言えない。

女性の方に主体性があり、男性の注文を無視して、女性がリードして行くのがサジスチンである。

馬場氏もトルコ風呂で彼の方から、いろいろ注文してやっているようだったが、今夜のひろ美のように、うむを言わず、だしぬけに猛襲されたのには驚いたらしい。

ひろ美が、こういうことができるというのも舞台や、その他の経験があるからだろう。私も、いつとき啞然として、カメラを持っただけからやめたのでは馬場氏が潰れてしまう、不安になった。

「ちょっと、ちょっと。動きをとめて下さいよ。ブレちまうよ」

ひろ美は我に返ったように、馬場氏の鼻がピョコンと出たところで制止した。そして私の方を見てニッコリ笑い、

「ごめんなさい。フフフ、でも、この人、タフなんですよ」

「まあ、その位は受け止めるでしょうがね。でもシャッターが、きれなくちゃ困るから」

ひろ美がカメラの方を向いて笑ったところと、下を向いて睨みつけているところや、片膝立てたところなど、五、六カットを続けざまに撮った。

今夜は、私にも不逞な野心があった。

昨夜、果たせなかったことを、何度も悔いた私だったが、それを今夜のチャンスに実行しようと思っていたからだ。

馬場氏も、それを好む傾向を持っている。

私が、M派交遊関係の手帳に、馬場氏の項で「M・U・D・P・S」と暗号的なメモをしてあることは前に述べた。MはマゾでありUはウロラグニー、Dは犬派、Pは豚派であることを説明したが、最後のSというのは、複数を意味する略語だった。

本来、複数のイニシャルならPであるが、前にPがあるので、それと区別するために、Sを使ったのである。

私も若い頃、馬場氏と同じ「S」の傾向があった。

二者よりも三者によるMというものが、精神的な屈辱は倍加するものであり、はるかに複雑な屈折を展開することは、若い頃、身を

もって経験したから、馬場氏の心理は、よく理解できるのである。

若い頃は、Aという女性、Bという中間的男性、CというMの男性とあるうち、このCの立場を経験した。

今夜は馬場氏が、Cの立場に居る。そして彼自身、それを願望している。東京に居た頃は、何度も私にその実現を願ってきたのである。

いままでは、カメラという存在が、このB的役割を果たしてきたのである。カメラは、いつでも見ている。永久に見ている。

だが、ただ「見られている」というだけでは、馬場氏の場合は、ものたりなくなったのだ。

私がカメラをはじめた動機というのは、全然、別の意図や興味から入ったのだが、いろいろ撮り続けているうちに、私なりの「S」

つまり三者関係の写真を撮って見たくなったのは、私がCの立場から、いつの間にかBの立場に置き換えられていたからであろう。

果たして今夜、私と馬場氏の共通の慾望が叶えられるかどうか？

それは、ひろ美次第である。

昨夜なら、確かに遂行できた。だが今夜はどうだろう。ひろ美のような、お天気屋の女性、その日の風向きで、急に気が変わりやすいのだ。

だから、昨夜と同じ気持でいるかどうかは分からない。

しかし、今夜のチャンス逃がせば、永久にチャンスをつかめないだろう。

「今夜は、どうしてもやるんだ！」

と私は、ともすれば臆病になり勝ちな心を打ち打った。

だが、心にそう言う邪心があると、カメラの方が、うまく行かないものである。

どこで、きつかけを作ろうかと、その方のことばかり考えて、ポーズをつけることを忘れてボサツとしていることが多かった。

だが私は、やる。きつと、やる。

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	貳万円
佳作	一篇につき	壹万円
可作	一篇につき	五千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

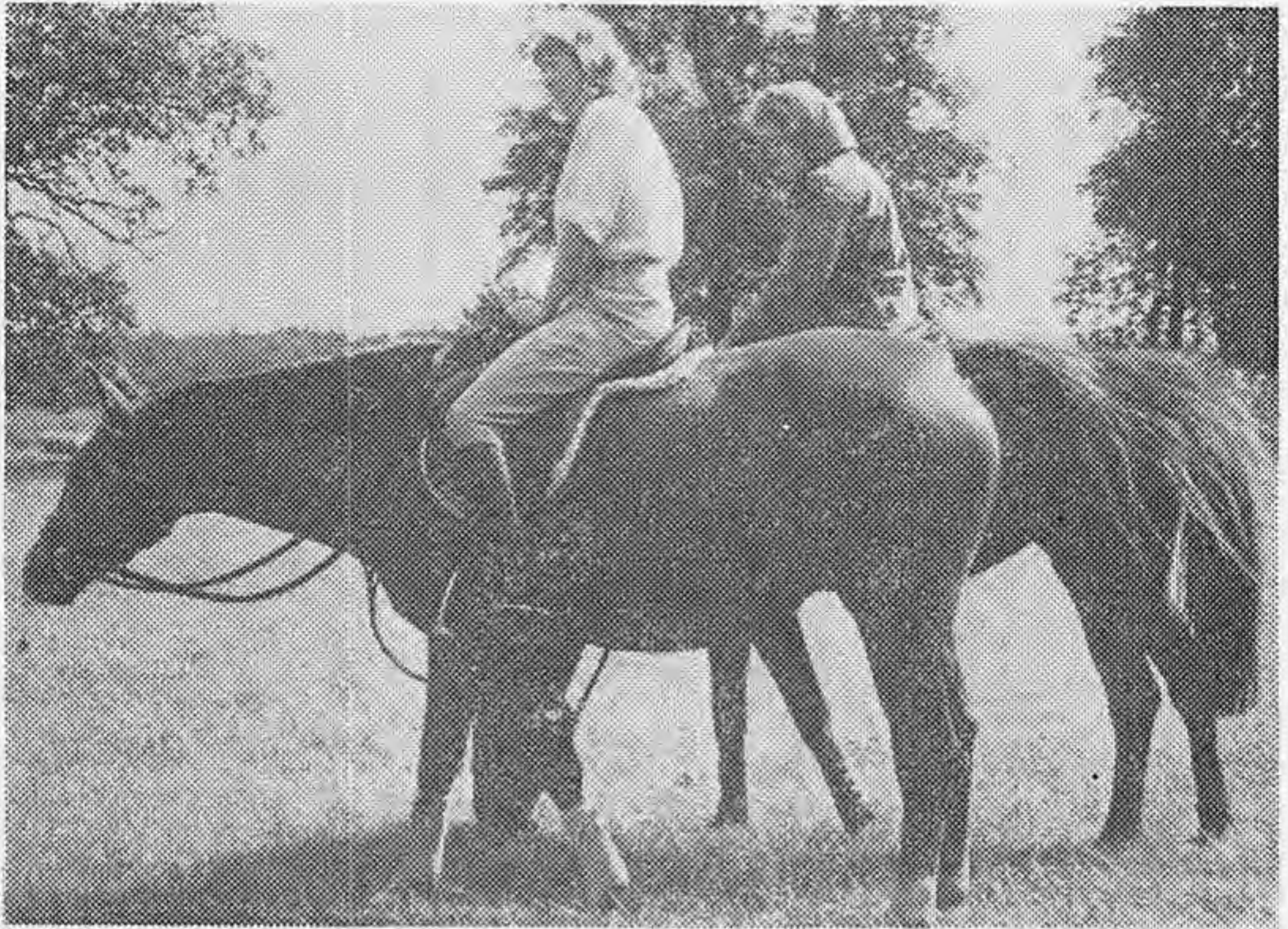
一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさ、求めませんから、実際に体験されたものの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。



大自然の中で馬を御す北欧のアマゾンたち

告白

アマゾン憧憬記

馬 化 開 眼

佐 野 寿

ごく最近、特に数々の女性週刊誌に、かなり度々レジャー紹介の形で、馬術に関する記事があらわれるようになったが、これは我国でも次第に風俗、並びにスポーツ、レジャーとして若い女性の間に歓迎され、ひろまって来た証拠ではないだろうか。

それら女性週刊誌が馬術を紹介、且、普及せしめようとする意図は誠に結構とは思いますが、ただ、あまり感心出来ない

ことが二、三ある。例えば、レジャー大学の中で扱う馬術等は説明が不十分である。内容の突っ込みが不足で、初心者に、いかにも馬術が習得するのに簡単で楽なような印象を与えはしないだろうか、との疑問が起る。

極端な記述になると、わずか三、四回で乗馬感覚の基礎がおぼえられ、十数回で思うよう御せるようになる……云々とあるのを記憶しているが、とんでもないことである。生れつきの運動神経は個々の相異があるが、少なくとも二、三年(鞍数にして百鞍以上)しなければ、とうてい、馬を思うままに御せないであろうことは疑念の余地はなからう。

なるほど、我国の乗馬クラブ等に飼われて
いる馬は、悪くいえば半ば去勢されたような
従順すぎる馬が大多数であるので、指導員が
つきそっていけば、どんな下手な初心者でも
馬場内を一周や二周する位は、なんでもない
ことであろう。それだからといって、直ちに
「王女様になったような」とか「朝風を受け
て、さっそうと……」とか「逆らい難い程の
征服感」……等々のムードに、ひたり切れる
程に馬術が甘っちょろい、楽なスポーツとは
考えられないと思う。若し、本当に十回そこ
そこで馬術が習得できたなら、恐らく日本中
が、あっという間にアマゾンだらけになるこ
とであろう。

残念なことに欧米と違って、真に良心的な
女性にも、よく解る親切な、馬術教本や解説
書が殆ど皆無だからであり、従って、そうい
っては失礼だが、内容貧弱な女性週刊誌で、
しかも半素人の、あやしげな指導手引きぐら
いしか読むチャンスがなく、しかもそれが完
全に正確な知識を提供するものでない所に嘆
かわしさがある。より高度で正確な、且、興
味本位に走らない所の良心的解説書が特に女
性のためにも、一日も早く書店に出現せんこ
とを一マニヤとして切望する次第であるが、

どんなものであろうか。ムードばかり強調し
て、肝じんなテクニックが、いかにも皮相的
形式的な数多くの女性週刊誌で扱う「馬術」
は、いわば「馬術」と呼ぶには程遠いもので
これでは単に未熟練な田舎馬術を紹介する程
度のものだと言主張したら無礼になるであらう
か。

いや、そうではあるまい。西欧の実例を挙
げて恐縮だが、あちらの若いアマゾン等です
ら、乗馬の姿勢と平衡感覚や、はや足での軽
易騎乗を、それも、ごく初歩的なものをマス
ターするのに十カ月以上はかかり、鞍数にし
て平均六、七十鞍以上と言われ、相当にきび
しく、楽しさは勿論つきまとうが、現実には
仲々苦しいもののように聞いている。

彼女等は落馬を、さほど恐れないし勇敢で
しかも馬を御してやろうとする意志が強固な
のである。生傷は、そう深くはないにしても
殆ど絶えないし、中には股間部に出血する女
性も少なくないそうだ。彼女等は早くから野
外騎乗、しかも猛烈なギャップで山野や森の
中の馬道を、つっぱしるせいか、木の小枝な
どで、頬や首すじに軽い生傷を与えることす
ら少なくなく、又、落馬も気にしない。第一
彼女等の、あてがわれる乗馬は、日本の乗馬

クラブ等の馬より野生に近く、はるかに荒々
しい、一見、見るからに怖い馬共なのであり
日本の女性が、いきなり乗ったら恐らく十中
八、九は恐怖のあまり、泣き出すであらう。
元来、しばしば指摘した如く、西洋の若い女
性は「やまとなでしこ」より気性が荒く、女
ながらに戦斗的な性格と体格の持主が多いよ
うである。

私は、かつて西洋アマゾンの極めてサジス
チックな描写を行ない、一部のひんしゅくを
買ったことがあったが、これは、むしろ、馬
の方が手のつけようのない荒馬で野生的であ
り、特に野外騎乗では、女性ながら現象的に
はサジスチンと同一と感ぜられる程、シビヤ
な調教と、場合によっては懲戒の意味も含め
た、荒々しい乗りこなしが必要であることを現
に目撃したからであった。しかし、それだか
らこそ、我国の、なかば去勢されたような従
順すぎる馬は西洋女には物足りず、又、我国
の馬には西洋に比べて真の意味での野性的魅
力が欠如し、従って駿馬、名馬といったもの
は少ないのである。

実例となり恐縮だが、私は、かつてスコ
ーネ地方で、当時二十六才だった女獣医のマリ
ー・ルイス嬢と、ごく短期間ではあったが知

インゲ・ゲルドのりりしい麗姿（エクマン・ルンディン版）



足で立ち上がり、乗り手を落とそうとするのである。

彼女は二、三度、私に鞭を強く馬にあてがうことを命じたが、私には効果ある懲戒が、さっぱりできなかった。マリー・ルイスは、

すかさず自分の馬を私の馬の方に近づけ、美しい顔はみるみる内に、きりっとこわくなる。すかさず彼女は私の灰色馬の頭部のタテガミを、髪がむしれる程に強くひっぱり、馬にバ声をあびせ、平手でするどく数回

パンパンとばかり、馬の頬の辺りを打ち込んだ。馬は奥歯の上を、したたか彼女にはられたので、こたえたのであろう、やっとおとなしくなり、私は、ほっとしたものである。

数十分は、まるで夢のような楽しい遠乗りがつづき、二頭の馬は林や小麦畑、原野、森などスコーネの自然の世界を、くまなく通り抜けた。マリー・ルイスは、はじめは私の先頭に立って馬を進めたが、私の未熟な馬術とやっかいな灰色馬を監視するため親切にも私

の右側に平行に並んで馬首をすすめてくれ、又、こまかい必要な注意や遠乗りのテクニクを細心にわたり教えてくれた。

マリー・ルイスの魅惑的なブロンドの髪はパーマネントがかけられてあり、その上に、型がくずれないようにネットがかぶせてありオーデコロンの香りと馬の汗のにおいが不可思議な程、鼻に心地よくムードを一層、高級なものにしていたが、彼女の小麦色がかった日焼けした、たくましい、しかも女性らしい腕には、茶色の上等な乗馬答がにぎられ、彼女の馬は、その答をふり上げただけで、すでに充分、馬を威圧したのには少なからず、おどろいた。

鹿皮が内股に張られたクリーム色のやわらかいキユロットの上には黒の長靴がりりしく又、かかとは、するどい拍車が銀色にかがやいていた。彼女の長靴の内側は馬術の練習が、ひんぱんで激しいためか、やや白っぽく摩滅し多分、馬腹の汗が長年月にわたり、しみ込んだためか、すれる部位は光沢を失っていた。彼女のプロフィールは、まるで後光がさすかのよう気高く、りりしく、馬を完全に威圧、服従の極に達せしめていたが、それでも尚、彼女は上品な余裕のあるスマイルを忘

己の幸運を得、彼女の田舎のヴィラで三日程遠乗りさせてもらった経験がある。幸い厩舎にはマリー・ルイスの自馬が二頭おり、彼女は、すらっとしたサラブレッド様の馬に乗り私には、やや、ずんぐりした灰白色の乗馬を提供してくれたが、これが、なんと大変なくせ馬で、少しでも乗り手にすきがあったり、なめられたりすると、道端に止まって動かないなり、まわりの草木をかじったり、後ずさりしようとするし、答を使おうものなら、両

れず私に、こう云う。

「あなたは多分、遠乗りは始めてでしょう。私がこうして、ついてて上げなかったら、あなたの乗ってる馬は一人で、さっさと厩舎へ帰ってしまうことよ。わかって。もっと手綱を短くしないと、御せないわ。まるで、あなたったら、馬に手綱を取られてるみたいね。逆よ。もっと体を、まっすぐにして手綱をつめて。そんなゆるい手綱じゃ、馬は言うこときかないわよ。拍車を少し入れてごらんない。そう、もっと強く内側のかかとで蹴らなくちゃ、意味ないわ。あと三、四回、拍車を加えて……」

等々、注意を与えてくれたが、いかにも姐御気質で、私は思わず尊敬の念にかられたことであった。

「さあ、少しギャロップするわ。私の後に遅れないように、ついておいで。私の鞭をかしで上げるから、遅れそうになったら、たえず答をお尻に加えて。いいわね……」

と叫ぶと、白樺や唐松が両側に茂った馬道に、馬を進めた。正直言って私は、スリルとこわさを感じた。

「うーんと手綱を短く、馬腹の前方を蹴っていいわね」

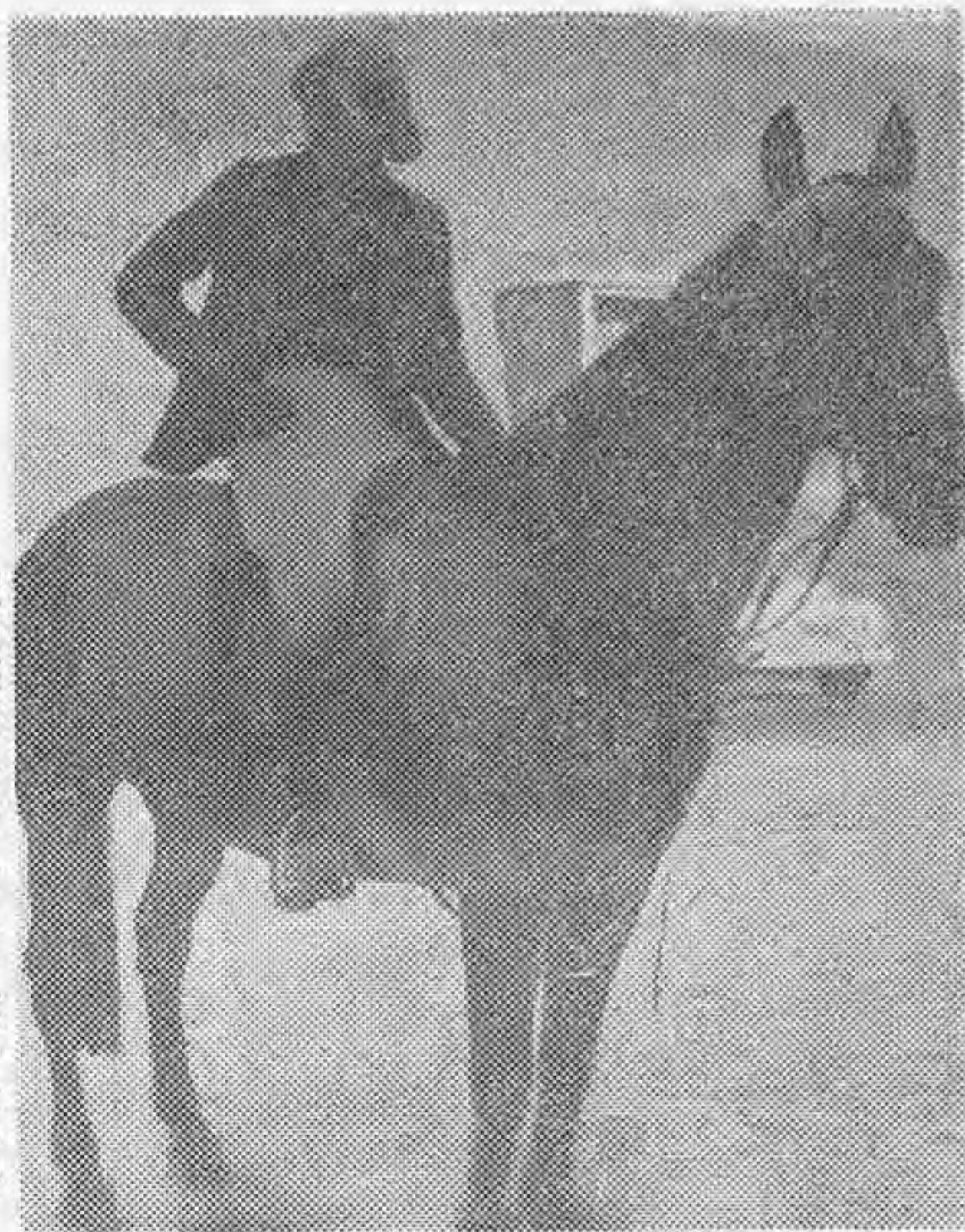
馬蹄の音、高らかにやわらかい木の葉の落ちた馬道をギャロップはじめた。道は、かなり真直ぐであったが、カーブになると心細くなり、若し遅れて先頭を見失ったら、どうしようかと心配になり、懸命に手綱をたぐり、なれない鞭を加えつづけて、かろうじてマリ・ルイスの後に従う。

白樺のこずえが時々頭部にぶつかり、ひやつとして首をひっこめ、上体をまげる。太陽の光が白々と林の木々の葉を通して、さし込んでくる。こずえにたまった

朝つゆが頬を時々冷たく濡らす。我を忘れて数分間ギャロップで彼女に遅れまいと続いて、いつはてるとも知れぬ大自然の森の中を半ば夢心地と多少の恐怖感を抱きながら、つっ走る気持は、とても筆につくせないものがあつた。そうして最中も二、三度、先頭馬を見失いそうになって、ひや汗と泣きたい程の、あせりを感じる。気がつくと下半身は馬もろとも、すっかり

汗で、しめっていた。

やっと彼女の馬に数メートルの所まで追いつく。彼女の馬も特に鞍の辺りから汗をふき出し、喘いでいるのがわかった。私に、もっと馬術の才があつたら、きっと天国にでも昇った、すがすがしい気分が味わえただろうに未だ下手なために落馬の恐怖感が残っていたのだ。こわさのためか、不自然に背に力が入り、筋肉が硬くなるように思えたので、必死でマリ・ルイスに、もうギャロップはでき



征服感溢れるアグネタ嬢の乗馬姿

障害跳びにいとむシャースチンさんの勇姿



敏で、ほとんど扶助なくとも、少しの力で楽に御せるのに驚いた。灰色馬は、それにくらべると骨が太く、駄馬のようであった。

「手綱を引きすぎると、バックするわよ。どう、素敵でしょう」

と後ろからマリー・ルイスの声がする。

百米も行かない内に、見通しがよく草の多い、片方にせせらぎのある空地に、

ないから、と哀願するように叫んだ。それでも、先頭は数十メートル、ギャロップをつづけてから、やっと慈悲深く馬を正常歩にしてくれ、心から有難く感じた。

「どうしても遅れ気味ね。私の馬と交換しましょう。だけど、この馬は手綱を引き過ぎないように注意してね」

とマリー・ルイスは女神のようにスマイルしながら言い、私に彼女のサラブレッドをかしてくれた。馬体が何とすんなりとし、細くひきしまり乗り心地の良い馬だったろうか。カナダ産の駿馬とのことだった。きわめて鋭

に引きしぼられ、女性の意志は、それを通じ命令が伝達され、又、同時に女の体重があるときは重く、又ある時は体を浮かすように千差万別の変化をともなって、神秘的空間を馬蹄もさわやかに乱舞するのを、私はせせらぎのほとりから夢見心地で放心したように、かたずを吞んで見守り、思わず時間の経過を忘れてしまった。

「許して上げるわ、今日の所は。もう耐え切れそうもないから」

とマリー・ルイスは、やさしくほほえんで下馬してやり、小川の水を飲ませ、草をはますのであった。哀れな馬も彼女の調教の激烈さを身をもって思い知らされたに違いない。口中、白いあわだらけで、そのみならず、皮膚呼吸の烈しい馬体は汗で光り、かすかに白あわが濡れた皮膚を被っているように見られ大きな両眼は白黒させているかのようにさえ感じられた。

「本当に可愛いわね、馬は」

と彼女は、やさしく馬首にキッスしてやりたて髪を、いたわるように、かるくたたいてやった。

「どう、私の馬の乗り心地は。振動がやわらかいでしょう。私の馬は皆、蹄鉄は軟鉄製の

の。その代り、へり易いので四十日に一度はとり替えさせるの。鋼鉄のは硬すぎ、蹄にはよくないし、ギャロップの振動が、きつすぎるの」

と言いながら、木のへらで愛馬の蹄の裏の土塊を、ほじくってやり、レザー・バッグからブラシを取り出し、一方向に、くまなくマッサージをしてやった。彼女の汗ばんだ体臭が、ほんのりと微風を受けて薫ってくる。

左側の胴体をマッサージしてから、彼女は



我が国新進スターの見事なクリテリオン

馬の下をくぐって右側の馬胴にもブラシをかける。その手さばきを見るだけでも、正にベテランであることがわかった。しろうとは馬の下をくぐることは、とても勇気が要るものなのである。彼女は、かいがいしく蹄に油液を塗り、白いシャツが、ややまくれ上がりピンクのブラジャーのひだが、かすかに覗いていた。私はそのなやましさに、とても耐え難いものを感じられた。彼女の硬胴の長靴は馬汗と、ほこりで内側が白っぽく、すりへり

後程、私は彼女のヴィラでその長靴をみがくことになった。

夕方おそく、彼女の小さいが、しゃれたヴィラに招かれ、そこで彼女が十四才のときから馬術をはじめたことや、ルンド大学で優等生だったことや、馬場、障害の両試合に何度となく出場したこと、トロフィーや賞品、その他、馬に関する無数の魅力あふれるフォトを見せてくれた。

私が彼女の愛奴となり、

熱烈なキスを以って肉の奉仕をしたのは、それからわずか一時間以内のことだった。

彼女がバス・ルームで体を、きよめている間、私は彼女の脱ぎたての汗の一ぱいしみ込んだ下着に、うやうやしく接吻し、その強烈な臭気が脳天を突き抜けるのに、おろかにも酔いしれたのである。それから、硬胴のブーツの、かかところにある馬毛を取りのぞき、ワセリンとクリームで時間の経つのも忘れてみがき上げ、黒光りするまで、それを続けた。

その夜は、あさましくも一晩中、私は彼女の馬と化して過ごしたのであるが、少くとも私の生涯の内でも、最も幸福な一瞬にちがいなかった。肉食人種としての白人女性の強さに、ただ圧倒され、自分の体力の貧弱さを地獄に落ちるまでに思い知らされたのである。しかし、馬としてさんざんにほんろうされ征服され、失神させられながらも私は、彼女の素晴らしい肉体の重さに酔い痴れ、全く洗脳されてしまったのであった。

私の鼻は今でも彼女の体臭の微妙な違いまで、おぼえている。私は、あわれな男馬なのだ。私はあの幸運な一夜によって、女性乗馬の、きびしいまでの現実感を、ひしひしと、おぼえさせられてしまったのである。



カット・丸鬼怒叉奴

☆小説「拷問クラブ」シリーズ(3)☆

破壊と教育

鶴見浩一

——私は捕われているのだッ。夢ではなく現実……。

昨日の地獄のような拷問が、真理子の脳裏を横切った。

「お早よう、お嬢さん」

覗き込むように、松山老人が笑っている。

「ああ……」

その松山老人の笑顔に、真理子の全身は固くなった。昨日の拷問の苦痛を思い出し、形のよい乳房が、責められた跡から、ズキンとうずいてきた。

新たな不安に駆られた真理子は、あたりに

一

真理子は、ぼんやりと目を覚ました。

重暗い眠気が頭の中に残っていて、現在の自分の立場が、よく理解できない。目をこすろうとして真理子は愕然となった。

——手が動かないッ。

真理子の手首は、椅子の肘に固定されていた。手首だけではない。両足首も、頭さえも椅子に固定されている。

真理子は、はつきりと目覚めた。

目を走らせた。頭は皮バンドで固定されているので、瞳を動かすだけが精一杯である。

椅子に坐らせられた真理子の目の前に、大きなガラスの容器があり、ゴムのチューブが下がっていた。その先に、小さな針と計器が一つ置いてある。

得体の知れぬ器具に、真理子の不安は増した。又、責められるのに違いない……。

「さて、お嬢さん」

松山老人が口を開いた。澄み切った瞳が、今朝は一段と輝いている。

「今日から、あなたは八赤い部屋」という、

拷問部屋に、閉じ込められる。いや、そう心配なさらなくてもいい。肉体的苦痛は、あまり与えないつもりだ。只、あなたのデリケートな神経を、少しの間、切り刻むだけです」

松山老人は微笑を浮かべている。

——赤い部屋……何だろう？

不気味な思いが真理子の瞳を、かすめた。正体が掴めない不安程、恐怖を高めるものはない。

何時の間にか現われた信次が、真理子の腕を取り、チューブの先の注射針を血管に差し入れた。

「な、何をするんですッ」

驚いた真理子は叫び声をあげた。

松山老人は、ふふと笑っている。

「あなたの血を取るだけです……」

「血？」

「そう。このガラスの容器が、あなたの血液で一杯になるまで……」

「そ、そんなッ。な、何故！」

「赤い部屋の拷問は、血液の採集から始まるのです。ほら、あなたの血潮が、このビンの底に溜まってきた……」

松山老人に言われるまでもなく、真理子の目の前に、真赤に染まる自分の血が見える。

真理子は貧血を起こしそうになって、目を閉じた。瞬間、真理子は絶叫をあげ、四肢を突っ張った。あの電気の棒が、真理子の後頭部に触れたのである。

「ギャッ」

強烈なショックである。

「目を閉じては駄目です。大きく開いて自分の血液を見るのです」

松山老人は、真理子の耳に、ささやいた。

「ああ……許してッ」

「駄目ですな。見なければ電気ですぞ……」

仕方なく開いた真理子の瞳に、ポトポトと落ちる自分の血液が映った。真理子は今、はつきりと分かった。何のために頭を固定してあるかが……。

——自分の血がッ……。

その思っただけで、真理子は再び貧血を起こした。若い女性の神経では、耐えられるものではなかった。

意識が失われていく真理子の耳に、信次の声が聞こえてくる。

「今……四百CC……八百CC……」

そこまで聞い時、真理子は完全に気を失ってしまった。

松山老人はニヤリと笑った。

「うまくいったな」

「はあ、本当に自分の血液だと思い込んだようです」

信次もニヤリとした。

赤い血液は真理子のものではなかった。只の水に色を着けたものである。

「さて、準備はできた。始めるか」

「はい」

信次は頷くと、真理子を固定している皮バンドを解き始めた。

これから八赤い部屋Vという神経拷問が始まるのである。

二

意識が戻った時、真理子は世にも不思議な部屋の中にいた。

部屋と言うよりも、大きな長方形の箱状の空間である。頂度、畳一枚を立てた大きさの中で、真理子はふわりと立たされていた。

——ここは……

真理子は、地獄の底にいないかという錯覚に陥った。

無理もなかった。真理子の目が捕え得る全てのものは毒々しい真赤な色に統一されている。

た。四方の壁も、天井も、床も……。

どういう照明か、自分の肌も真赤に染まっている。その上、真理子の唯一の衣類であるパンティも、何時の間にか真赤なものに替えられていた。

全てが赤い部屋であった。

「出してえッ。出して頂戴！」

気味悪さに耐えられなくなった真理子は叫んだ。が、その声は、むなしく赤い壁に突き当たって消滅した。赤に囲まれている真理子にとって、その自分の声すらも赤い響きを持っているように感じられる。

この赤い部屋に入れられて、まだ数分しか経っていなかったが、真理子はひどく疲れてきた。坐ろうとした真理子は、それが不可能な事を知った。人間が立っているのが精一杯の小さな空間であるため、膝を曲げる事はできない。もちろん、寝る事は無理である。

「ああ……」

真理子は絶望の溜息をついた。立ちづくめで、真赤なこの中へ入れられたら、窮屈と疲労と原色の視界に発狂しかねない。

真理子は息苦しくなってきた。ふと、真理子は床を注視した。赤い水がチョロチョロと流れ溜まり始めている。変に生温い、真赤な

水である。

「ギャッ」

狭い空間で、真理子は飛び上がった。生温い真赤な水——先程、抜かれた自分の血ではないか！

それが足首まで溜まった時、真理子は本当に発狂しそうになった。急激に貧血が襲ってくる。が、坐る事も横になる事もできない。真理子はふわりと立ちすくんだまま、意識を失いそうになった。

その時、あの音が聞こえてきた。

「キィキ、キィギイー」

ガラスをブリキで引っ搔くような、あの不快音が、真理子の神経を襲った。

「ウァッ、やめてえッ」

真理子の意識は急激に戻り、思わず声を出して耳を押さえた。心臓を逆撫でされるような嫌な音に、真理子の全身は粟だった。

しかし、その不快音は高く鋭く続く。しっかりと耳を押さえても真理子の脳髓を刺激し全身に嫌悪感を引き起こした。

五分程その音が続いた時、真理子の身体は小刻みにケイレンした。耐えられず目を見開くと、視界一杯に真赤な色が飛び込む。真理子の頭の中は、気が狂いそうな赤色で占めら

れ、全身に大きな粟が生じ、乳首は豊かな乳房の中に埋没した。

何時しか、真理子は油汗を浮かべていた。しかし照明によって、その汗もまた、真赤な毒々しい血の色であった。

胃の中が痛み、泡状の粘液が急激に押し出されてきた。

「ギャッ……」

キリキリと、四肢を突っ張った真理子は、身体全体から獣のような絶叫を吐き出した。

時計の針が十分を過ぎた時、信次はテープレコーダーを止めた。

「凄い効果ですねえ」

信次は耳栓をはずし、覗き窓から中の真理子を見て、そう話しかけた。

ふむ、と満足そうに松山老人は頷く。

「この耳栓がなければ、我々も発狂しかねない音だ……」

「これは、やはり、あのガラスとブリキの効果音ですか」

「ああ」

松山老人は嬉しそうに説明した。瞳がキラキラと輝き、先日、見せた、あの沈痛な表情は何処にも見られない。自分の考案したもの

に対する満足だけが、その顔に宿っている。

「このテープはな、ウチの病院で使用している重症患者用の治療用テープだ。正常の人間が聞けば不快音だが、精神病患者には男女の睦言みたいな、いい音に感じるらしい」

「ほう……」

「逆療法と言つてな、普通の人間が聞けば発狂するが、発狂している人間に聞かせれば、精神が元に戻る事もあり得る。電撃ショックと同じだ」

確かに、この音を十分も聞いていれば神経がやられるだろう、と信次は覗き窓から真理子を見て納得した。

真理子は虚脱寸前の瞳を半開きにして、坐る事も許されない状態で、ふわりと立っている。目からは涙が、口からは泡状の液体が流れ出していた。

——私は氣違いにされる……。

真理子は、そう考えただけで、再び全身に粟を生じた。やっと、あの苦しい音は止んだが、何時また聞かされるか分からない。

真赤な視界、真赤な自分の血液、真赤な鋭さを持つ、あの音……。

真理子は、頭の中と神経を冒していく赤の恐怖に、絶望に近い悲鳴をあげた。

が、本当の恐怖は、これからであった。真理子が閉じ込められた時間は、まだ二十分程度である。松山老人の計画では、飲まず喰わずで丸二日間、地獄の苦しみを与えられる筈であった。その時間は、正常な人間が発狂する限度ぎりぎりの線である。

再びテープレコーダーから音が流された。ガラスとブリキの摩擦音は、真理子の神経を切り刻み始めた。真理子の四肢は鋭い苦痛にケイレンし、その絶叫は外にいる松山老人と信次の耳栓をも通して聞こえてきた。

テープの進行に比例して真理子のきれいな目は吊り上がり、口は大きく開かれ、顔中の筋肉が不気味に歪んだ。

三

男は、まだ来ていなかった。

松山美佐は、男よりも早く何時ものホテルに着いた事を恥かしく思いながらも、その胸は高鳴っていた。二日振りで逢う信次の身体を思い出すと、すでに肉の喜びを知っている女体は、妙にせつない。美佐の若い肉体は、完全に男によって成熟していた。

——風呂にはいつて待っていいようかな……。

裸で出てきたら、信次さん、きつとびっくりするな……。

裸体には自信がある美佐である。自信が羞恥を押しつけ、美佐は脱衣するとバスルームに入った。湯舟につかりながら、美佐は信次の事を、ぼんやり考えてみた。

こういう関係になりながらも、美佐には信次の事が、よく分からない。父が大学から連れてきた書生というだけで、それ以前の過去は何一つ、知らなかった。何時か父に聞いた事があるが、父もよく知らないらしい。それでも父は地下の研究室を信次に委せているのを見ると、信頼は置いているらしい。

しかし、今の美佐には、そんな事は、どうでもよかった。時々逢ってくれて、愛してくれれば満足なのだ。

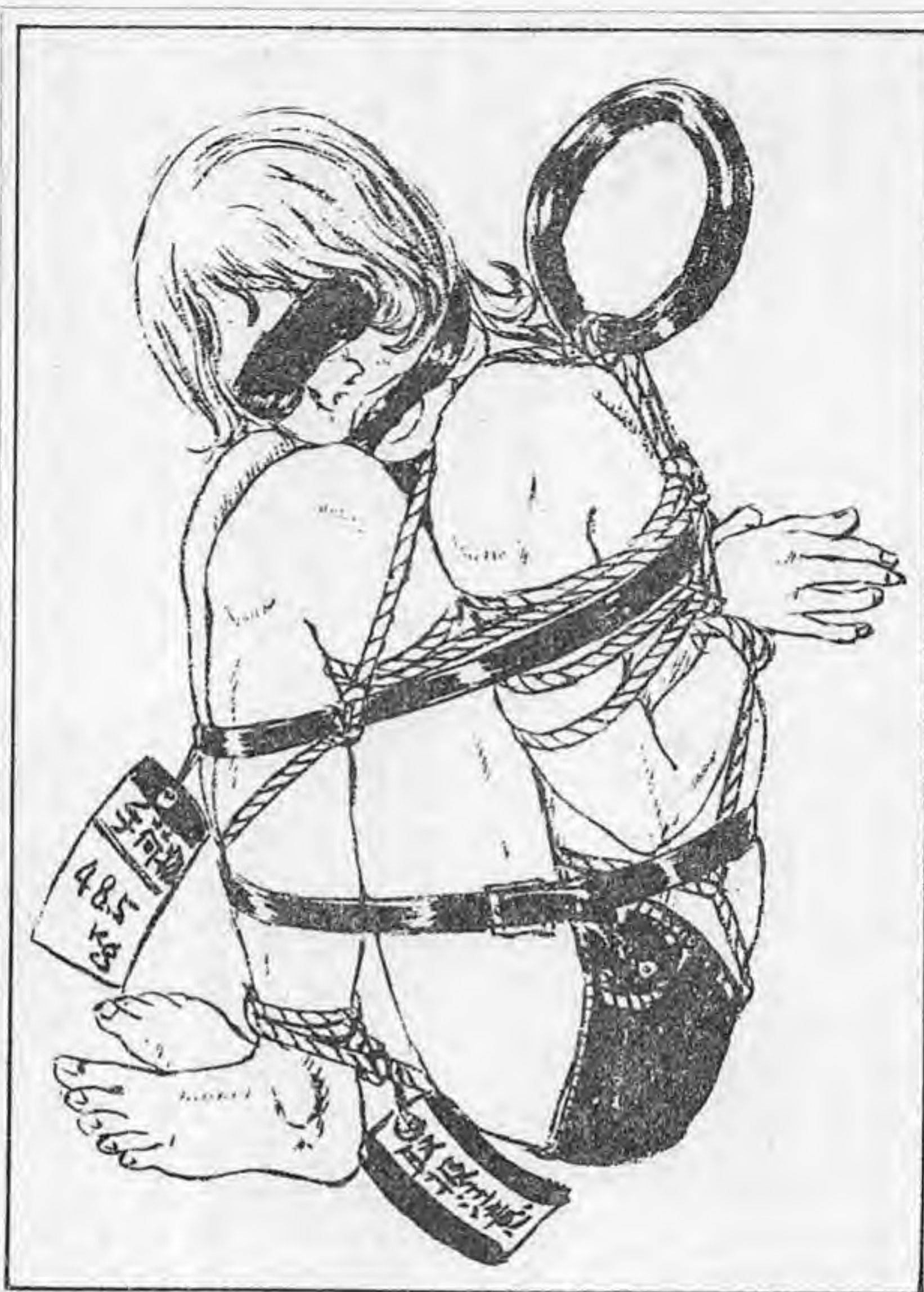
美佐は湯舟からあがると、大きな姿見の前に立った。

——ふふ、きれいだわ、私の身体……。

豊かに張った乳房、なめらかな腰の曲線、スラリと伸び切った双の足……それらの全てが、今から加えられる信次の愛撫を期待して朱色に染まっている。

満足そうに笑って美佐は身体を横たえた。ナルシズムの快感が、柔らかく裸体を、くす

イメージギャラリー 『手荷物用荷造』 志羽利也



ぐっっている。
静かに目を閉じていた美佐は、ふと、先日
の信次の行為を想い出した。カッと頬が赤く
なった。

——あんな事をするなんて……。

小さな針を持って、自分の身体の、あらゆる
所を刺激した信次の格好が目につく。産
婦人科の医者のような態度で自分の足を大き
く開いた信次の行為は、真剣で熱心だった。

そして自分も異常に燃えた、あの感覚が急

に想い出されてくる……。

「ああ……」

美佐は熱い溜息をついた。身体の奥深い所
からズーンとある感覚が湧き上がってくる。

美佐は静かに足を開いた。欲求に自分の細
い指が、忠実に従って這っていく。

——違う……。

いらだたしい気持ちに襲われた美佐は、濡れ
た目を、あたりに走らせた。

——何か鋭く、痛いもの……。

美佐は、まだ気がつかない。肉体の快感が
信次の手によって、少しずつ変化している事
には気がつかなかった。マゾ的倒錯性欲の教
育第一歩として、鋭い針を選んだのは、信次
の成功であった。

小さな、鋭い快感は、すでに美佐の肉体に
経験として残されていた。

美佐は針に代るものがないのを知ると、髪
の中からピン止めを引き抜いた。

「あッ……ああ……」

それで自分の乳房の頂点を責めた時、美佐
は身体を突張った。あの感覚が、よみがえっ
てくる。

美佐は夢中で全身を、つつき始めた。

明るい風呂場の中で、美佐の裸体は、うね

り、波打った。

感覚の追求に、全神経を集中していた美佐は、ソツと信次が、はいってきたのには、まったく気づかなかった。

信次は美佐の痴態にニヤリと口を歪めた。自分の教育が効を奏し始めたらしい。

「あッ、信次さんッ」

気づいた美佐は、慌てて身体を固くした。

恥かしい姿を見られた、という意識が、美佐の全身を真赤に染めた。

「そのまま、続けてごらん」

平然と信次は言った。

「馬鹿ッ」

美佐は飛び起きると、信次の胸に裸体を、ぶっつけてきた。

「今日は変わった方法で楽しもう……」

そう信次が耳元でささやいた時、すでに燃え上がっている美佐は、夢中で頷いた。

美佐はバス・ルームを出ると、柔らかいベツドへ横になった。甘い期待に、全裸の肌が熱く汗ばんでいる。

信次は持参した袋の中から、ビニールの縄を取り出した。

「うつぶせに寝てごらん……」

美佐の肩をポンと叩いて、信次は柔らかに

命令した。

「何をするの……」

信次の手の縄を見て、美佐は少し不安になってきた。

「心配はいらない。変わった方法で楽しむだけだ」

信次の顔は笑っている。美佐は、言われた通りに、うつぶせになった。信次は静かに美佐の両手、両足を拡げると、素早い動作で四肢の先をベツドの足に縛り始めた。

「信次さんッ」

美佐は驚いて、軽い抗議の声をあげたが、信次は構わず作業を続ける。

美佐の裸体は、ベツドの中央で大の字に固定された。

「信次さん、少しゆるめて……。痛いわ」

強く手足を引っ張られているため、豊かな双の乳房が押しつけられて美佐の脇腹からはみ出している。

「我慢するんだ。今に楽しくなる……」

信次は美佐の耳にささやくと、袋の中から鞭を取り出した。

首を曲げてそれを見た美佐は、再び不安に襲われた。

「そ、それで叩くのッ」

「ああ……」

「痛いわ……私、嫌よ」

自由がきかないだけに、美佐は心配になってきた。

「大丈夫だ……」

信次はニヤリと笑うと鞭を振り下ろした。ピシッと軽い音がして、美佐の白い背中にそれが走った。

「痛いッ」

美佐は身を、よじった。我慢できぬ程の苦痛ではないが、頬一つ叩かれた事のない育ち方をしてきた美佐にとって、鞭で叩かれるという事は精神的な屈辱もあった。

信次の鞭は、容赦なく躍った。

「ウッ……ヒイ……痛うッ……」

その度に、美佐の裸身は悶え、突張った。何時しか、美佐の肌は熱く燃え、打たれる度に、ズーンと奇妙な感覚が全身を走る。

美佐は、始めて経験する痛感に、隠された性の衝動が湧き出るのを感じていた。

美佐の身体は、奥深い所まで熱くなってきた。

「ねえ……もうやめて……やめて、抱いて頂戴……」

美佐の哀願は、甘い鼻声と変わってきた。

信次は薄く口を歪めると、鞭を置いた。そして枕を手に取ると、美佐の丸やかに盛り上がった尻の下に、それを差し入れた。

「……?」

美佐は、黙ってされるままに身体を委せている。

二つ折にした枕のために美佐の丸い尻の隆起は高く盛り上げられた。両足も開かれて、その格好は四ツ這いに近い形を取った。

「恥かしいわ……」

無防備な腰を感じて美佐は顔を赤くした。いかに恋人とはいえ、若い男性である信次に見られていると思うと、美佐の身体は固くなる。

信次はニヤリと顔を歪めると、鞭を手にして、ベッドに上がった。美佐の背中を跨いで足の方を向くと、目の前に高くなった双の尻が見られる。

美佐は信次の格好を見て、ハッと悲鳴をあげた。

「信次さんッ。や、やめてッ」

信次の鞭が、自分の何処を狙うか分かったからだ。が、信次は答えないで、鞭を目の前に振り下ろした。

「ああッ……」

鞭の先は、白い腹部まで届き、強烈な刺激を美佐に送った。

「ウッ……」

強烈な電流が、美佐の全身を駆けめぐり、カアッと全身の感覚が熱く燃え上がった。その感覚は痛感ではなかった。始めて経験する溶けるような快感であった。

痺れるような鋭い快感に、美佐は大きく喘いだ。思わず四肢が突張り、裸体が波打つ。

「どうだった……」

信次は同じ姿で、美佐に問うた。

「ああ……す、凄い……」

喘ぎながら、美佐は答える。

信次は満足そうに笑った。

「今のは力を入れていない……。もう少し強く叩くと……」

鞭が再び踊った。

「あッ!……ああッ」

快美な電流が、美佐の爪先まで走り抜け、美佐の身体は大きく、うねった。

鞭が数回、続いた時、美佐の肉体は突き抜ける感覚に翻弄され、気が狂うような歓喜の波に流された。強烈な甘美な刺激に、目から涙が、口からは涎が放出された。

美佐は、もう気が狂いそうになった。

「お、お願いッ! やめてえ……」

身体中が溶けていく感覚のため、その哀願の声も弱々しい。

「よし……これが最後だ……」

低い声で言うとき、信次は力を込めて鞭を振り下ろした。

高く盛り上げられた尻の谷間に、それは鈍い音を残して喰い込んだ。美佐の胎内から溢れ出る液体を吸っている鞭は、重く鋭く命中した。

「ウァァッ!」

美佐は獣のような絶叫をあげた。

快感と苦痛と衝激を合わせた鋭い、びれがそこから稲妻となって肉体を刺激し、発狂するような絶頂感を送った。

信次が重くなった鞭を捨てた時、美佐は口も聞けず喘いでいた。腰も背中も四肢も、大きく波打っている。

ようやく歓喜の衝激が弱くなって、美佐はせつなさそうに、ささやいた。

「もう……私、駄目。気が狂いそうッ! 早く……ねえ……」

信次の身体を捕えようと、美佐の体が動いた。

が、意地悪く、信次は応じない。

のた打ち回る女体を楽しむように、それから暫くは信次の指が動いた。汗ばんだ美佐の全身に、執拗に五本の指が這い踊った。

もうすでに、美佐の肉体はドロドロに溶け落ちた甘美な沼の中にあつた。全身が感覚となつて、甘い信次の指を吸収する。

信次が、やっと抱いてくれた時、美佐の四肢は何度もケイレンをくり返し、突き上げるような喜びに美佐は野獣のような絶叫を室内に響かせた。

四

真理子の絶叫は、丸一日、続いた。

二十四時間が過ぎた時、真理子の神経と肉体はボロ切れのように破壊されていた。

胃がギンギン痛むような空腹と、坐る事も寝る事もできない肉体の疲労で、真理子の頬はくぼみ、つぶらな黒い瞳は真赤に濁った。

その上、あの戦慄すべき不快感は、休む間もなく真理子の神経を襲い、真赤な視界は脳髓を鋭く冒していた。

真理子は真赤な壁を叩き、真赤な天井に向かって絶叫し、号泣した。

全身の毛穴から油汗が吹き出し、口と耳か

ら泡状の液体が流出した。胃も内臓も鋭く痛み、体内の血液が逆流し、巻き踊った。

一日半が経過した時、体内の穴という穴から血が吹き出した。真理子は大きなケイレンを二、三分くり返すと、ふらりと立ったまま地獄の底へ引き込まれていった。

想像を絶する八赤い部屋Vの拷問は、松山老人に満足を与え、真理子は二日目に、やっと解放された。すでに仮死状態の真理子であつた。

真理子に強心剤を打ち、小部屋に寝かせたあと、信次が帰ってきた。

「何処へ行っていた？」

松山老人の口調は鋭い。半日も姿を見せなかった部下に、松山老人は不機嫌である。

「すみません。急に友達が、来たもんですから……」

信次は頭を下げた。

「友達？」

「ええ……もう帰りました。それより真理子は？」

信次は、松山老人の追求を、そらした。万が一にも美佐と逢っている事が露見してはならない。

心の中で、信次は薄く笑った。自分の可愛

いい一人娘が、着々とマゾの教育を積み重ねていると分かったら、このサドの権化である松山老人は、どういう顔をするだろう……。

自分の唯一の宝物であつた清純な恋人を、発狂するまで虐め痛ぶった、この松山老人に對する復讐は、少しづつ着実に進んでいる。

「ああ、今、寝かせた」

松山老人は、すぐに気を変えた。美しき獲物の事になると、何もかも忘れて澄んだ瞳が子供のように輝く。

「赤い部屋は成功だよ。ま、その内に、もつと効果的な部屋を考案しよう」

松山老人は、苦しみのために、つぶらな瞳を吊り上げていた真理子の表情を想い出して満足した顔で言った。

「この次は、どんな責め方です」

すでに女体責めに免疫を持っている信次ではあるが、次から次にと新たな拷問を考え出す松山老人の考えに興味がない訳ではない。

「まず、あの娘の身体の回復を待ってな、その上で一つ、やりたい事がある……」

ふふ、と松山老人は薄く笑った。

「何です」

「先日の新聞で読んだのだが、東南アジアの

僕のイメージ画集……『新妻教育』……室井 亜砂路……

新妻教育

亜砂路 筆



或る国でな、政治犯に対する面白い拷問があるんだ」

「ほう……どういう拷問です」

松山老人は、いかにも嬉しそうな表情をしている。丁度、子供が新しい発見に胸を踊らせているような顔である。

「クレージー・ドクターという名前の責め方だ」

「クレージー・ドクター？ 間違い医者の意味ですか」

「ああ、医者と言っても歯医者だ。歯の中を責める……」

「ほう……」

松山老人は、夢見る表情になった。

「あの電気ドリルでな、まず奥歯に穴をあける。その穴に、細い針金を差し入れる。どう

なると思う」

「麻酔なしですか」

「もちろんだ」

「じゃあ、神経に触って飛び上がる程、痛いな」

松山老人は嬉しそうに笑った。

「そうじゃろう。その針金を差し込んだままグルグル回すそうじゃ。どんな政治犯でも激痛のために、何でも自白するらしい」

ほう、と信次は感心した。この老人は、拷問に関する情報は残らず目を通すらしい。それ故、次から次へと実験したくなるらしい。

サドに対する異常なまでの熱意である。

「それを真理子に……」

可哀想なのは真理子である。彼女は自白すべき何ものも持たない。ただ、その苦痛の表情を見たいがために、残酷な拷問が執行され続けるのだ。

「ああ」

松山老人は楽しそうに頷いた。

「今月の拷問ショウで発表しようと思ったがショウには、別のを考えてある。我々だけで楽しんでみよう」

「何時、やるんですか」

信次も、少し興奮を憶えた。ミイラ取りが

ミイラになつては駄目だと分かつていても、潜在意識としてのサディズムが、体内の奥深い所で首を、もたげる。

サドの魅力は悪魔的な欲求を持つものだ。「真理子の体が回復したら、まず軽い責めをやってみよう。その後だ……」

信次は頷くと、立ち上がった。真理子の状態を見なければならぬ。

彼女は、常に健康な肉体を維持させられていた。彼女自身のためでなく、何時でも拷問の苦痛に耐えられる目的のために……。

真理子の健康管理も、信次の仕事のうちであつた。

五

真理子は、二日二晩、眠り続けた。

△赤い部屋▽による不眠と、肉体の疲労と切り刻まれた神経を休ませるために、睡眠薬と強心剤が打ち続けられた。

三日目の朝、目覚めた真理子には、栄養価の高い食事と、元気をつけるブドウ酒が与えられた。

若い真理子の肉体と神経は、完全に回復した。が——体の回復は、即ち、苦痛の始まり

となる。俗世間と隔離された、この地獄の地下では健康——拷問——破壊——回復——再び拷問、というパターンが決められていた。

非情なその規則は、美しき獲物達の意志をまったく無視して作られていた。

地下の主である松山老人の快楽は、即ち、獲物達の苦痛である。

四日目の朝、すっかり若さを取り戻した真理子は、再び肉体の破壊を強いられた。

「お願いッ。何でも言う事を聞きますから、もうやめてッ」

その朝、あの恐ろしい部屋に引き出され、唯一の衣服であるパンティまで脱がされた時真理子は必死に哀願した。

この二、三日、何もされずにいたために、小さな安心感を心の隅に持っていた真理子は発狂したように泣き叫んだ。

恐い……心の底から拷問が恐かった。もちろん、松山老人も信次も無言で、着々と作業を進めていく。

全裸にされた真理子の、一方の足首に鎖が固定され、それが天井へ引き上げられた。

「あッ……や、やめてえッ」
松山老人は、ふふと笑うと、信次に合図し

た。

鎖が止まり、真理子の裸体は不安定な姿で吊り下げられた。ダラリと下げられた双の手と長い髪が床に触れるか否かの位置に、真理子の身体はあつた。

「痛ッ……」

真理子は悲鳴をあげた。

片方だけが鎖に固定されているので片方の足は自身の重みのために下方へ大きく開く。

気が遠くなるような羞恥の姿態に、真理子は精一杯の力を入れて下がった足をあげようとするのだが、ギクリと股の関節が痛むだけで、思うようにならない。

「ああッ」

激痛と羞恥に、真理子の口から絶叫が洩れた。

「痛いすかな……。これが片足吊りという責めです」

楽しそうに言うと、松山老人は、フツと息を吹きかけた。

真理子の全身が、羞恥のために真赤に染まった。大きく開かれた自分の両足の間に、松山老人の息がかかったからである。

処女の新鮮な蕾が、松山老人の目の前で震えていた。

「お嬢さん、心配そうですな。今日は非道くは責めません。何しろ、明日一日、気違い歯医者という楽しい責め方が待っていますのでな……」

松山老人は、再び息を吹きつけた。けがれを知らない真理子の春草が、僅かにそよぐ。

「信次、こっちの足を床に……」

「はい……」

非情な松山老人の命令は、信次の手によって忠実に執行された。

「グアッ……グアッ」

股の骨が裂けるような激痛に、真理子の身体から異様な呻き声が飛び出した。

『Y』というローマ字の左の部分が下に重ねられた様な姿になった。真理子の形よく伸びた両足が、ほぼ百八十度に引き伸ばされたのである。

「……」

足首から股を通して胃のあたりまで、骨が割られるのに似た苦痛が走り、真理子は絶句した。その上、親にも見せた事のない真理子の内部が松山老人の目の前に露出している。

「ウ……ウ……」

真理子の両眼から真白い涙がこぼれ、口からは逆流した胃液が流れた。

松山老人の澄んだ瞳が、興奮のためキラリと光った。

「信次……」

信次は無言で頷くと、小さな木槌を松山老人に渡した。

ニヤリと口を歪めた松山老人は、異常に盛り上げられた真理子の太腿の筋肉を、それで軽く叩いた。

「ギャッ」

鋭い悲鳴が、真理子の口から洩れた。

強力な電気に触れたような苦痛のしびれがそこから全身に走った。

張られるだけ張られ、可能な限りに伸ばされた太腿の筋肉は、キーンと鋭い感覚を捕える。

五つ……六つ……九つ、と打たれた時、真理子の四肢は小刻みなケイレンを引き起こした。油汗が裸体を這い、充血した真理子の顔が大きく、声もなく歪んだ。

松山老人は、動作をやめると、信次に声をかけた。

「強心剤を……」

非情な注射針は真理子に失神を許さない。

「グアッ……」

強烈な痛感を引き戻された真理子は、苦痛

と絶望と羞恥に唸った。

その表情を見て、松山老人の口が楽しそうに歪んだ。

「まだ、大丈夫だな。次は針を……」

「老人！」

思わず信次は声をかけた。

「何だ」

「針は、やめた方が……」

松山老人は、ジロリと信次を見た。

「わしに意見をするのか」

「いや、そういう訳ではありませんが、耐えられるかどうかと思って……」

ふふ、と松山老人は笑った。

「大丈夫じゃ。お前より、わしの方が経験を積んどる……。黙って渡せ……針を」

言い出したら聞かない老人である。信次は仕方なく、細い鋭い針を渡した。

その針が、大きく足を開かれた真理子の何処を責めるのか分かっていただけに、信次は心配したのである。

「ふふ……」

松山老人は目の前の、まだ男を知らぬ無垢な真理子の部分に笑いかけた。

「アッ……や、やめてえッ」

絶句して苦痛に耐えていた真理子は、針の

という。

最高の記録では、裸身に二千数百カ所も刺され、発狂し悶絶した若い女性もいる。恐らく、ミリ単位の間隔で針の移動が行なわれたのであろう。それも数日間、昼夜の区別なしに続けられた、とある。当然、女性の一番刺激に敏感な部分には、集中的な針の攻撃が執拗に続けられた筈だ。

——それに比較すれば……。

松山老人の澄んだ瞳に、残忍な影が横切った。

鋭い針の先が、松山老人の最終目的である処女の内部に刺し込まれた。女体の中で、快楽の感覚を最高に甘受するその場所は、逆に痛感にも敏感である。

可能な限り上げられ、肉の間に覗いているそこに、細い針がグイと埋没した。

「……」

真理子に、声はなかった……。ただ、凄まじいまでに飛び出した眼球と、のどの奥すら覗ける程、裂き開かれた口が、痛感を超えた衝撃の非道さを物語っていた。

ピクッ、ピクッ……と真理子の筋肉が収縮し、口唇から赤い泡が落ちた。

責め場に慣れている筈の信次が、思わず顔

をそむけた、形容し難い真理子の表情であった。

小さな突起物に刺さっているその針を、松山老人はグリグリと動かした。

「グ……グエッ……グアアッ！」

締め殺される猫の断末魔に似た異様な低音が、形相の変わった真理子の口から洩れた。

「老人！」

耐えられず、信次は声をかけた。

「……」

松山老人は、無言で目を輝かしている。何か、異常な迫力が、老人の表情に浮かんでいた。

松山老人は、酔っていた。

悪魔的なサドの快楽に全身で酔っていた。

久し振りの事である。

「老人！」

二度目の信次の声に、やっと松山老人は気がついた。

「あ、ああ……」

「もうやめないと、発狂します」

確かに、真理子の脳神経は、想像を絶する苦痛の衝撃のために、破壊寸前にまで追いやられていた。

すでに真理子の痛感はずっと普通と違っていた。

部分的な苦痛ではなく、全身の感覚が針の刺激で、燃え狂い、躍り煮えたぎっていた。

身体中の毛穴から、油汗とも血液ともつかぬ液体が、とどめもなく流れ落ちていた。

その上、激痛と合わせて、頭を下に吊り下げられているため、耳から鼻から苦痛に耐えられなくなった血が溢れている。

強心剤と精神安定剤が打たれ、鎖が取り除かれても、真理子の裸体はケイレンを続けていた。

両足は、極度に上げられたためか、しばらくの間は元に戻らなくなっている。

ポロ切れのように床へ投げ出された真理子ではあったが、頭の片隅には僅かな意識が残っていた。

その意識の中に、松山老人の低い声が聞こえてきた。

「明日は、いよいよ気違い歯医者者の拷問だ。

信次、準備しておいてくれ……」

「はい」

真理子の目から血の涙が、とどめもなく流れ落ちた……。

—— 惨酷ショート・ショート ——

K・C 処刑場

小 倉 幸 男



カット・室井亜砂路

先月、私は幸運にも、若く美しい死刑囚専用と、噂だけには聞いていたK・C処刑場の見学許可証を手に入れることが出来た。惨酷愛好連盟の計らいに依るもので、条件は取材レポート提出ということだけであるから、信じられないくらいの思いで出掛けた。同処刑場は、かねて聞いていた通り、マッハ5のロケットで一時間四十五分十六秒飛んだところに、冷然と建っていた。

以下は、その刑場職員を対象にしたインタビュー報告の一部である。

私は、看守です。

ここの特徴は、衣類こそ一枚の半紙すら許されませんが、どんな惨殺刑の女囚でも、冷暖房、バス、トイレ、テレビ付きの個室という、高級ホテル並の待遇を与えられます。

これにもかかわらず、脱走例がありました。が、直ちに捕まるや、首輪をはめて犬小屋につなぎ、食事は残飯、刑も梟首から火焙りと重くされて以来、あとをたちました。

さて、私の話ですが、最初の経験は絞首台のツユと消えた十七才の美少女A子です。

彼女は刑が確定するや、

「吊るし首は、いやよ。うちに帰して」

と、身のおきどころもなくなげき悲しみ、一流コックの腕になる食事ものどに通らず、新米の私には、なぐさめようもありません。

なんらなすところなく過ごすうち、とうとう執行日をむかえ、さめざめとすすり泣きながら、十三階段にひかれてゆく哀れな姿に「さようなら」

と、ようやく一言ささやくと、気持は通じていたのか、コックリうなずき

「ありがとう」

とでも言うように唇をふるわせました。

三十分后、刑を終え、輸送車で帰ってきたもの言わぬ美少女の、白く柔らかい首すじに耳の下までついた赤黒い締めあとが痛痛しく処理室に送るまでの間、けんめいに、さすってやりましたが、どうしても消えなかったことを覚えています。

死刑が好きだ、など言うひとはいないでしょうが、全く平然としていた女がいます。

芳紀二十二才のB子は、顔も乳房も一級品なのに、氷か、或は石か鉄で出来ていたとも言おうか、なぐさめの言葉に冷笑で酬い、処刑までの三日間、一言も口をきかず、電気イス室にも、しっかりした足どりで、ひとりで歩いてゆきました。

処刑係の話では、彼女は最後まで顔色を変えず、末期のタバコをうまそうにくゆらし、吸いながら係の顔めがけて吹きつけてから、従容とイスに坐り、おそろおそろ電極をつけようとする係を、せせら笑いつつ、自ら口と両足をひらいて、これをうけ、いざスイッチ

を入れたら、拍子ぬけのするほど、あっさりと、パツとあがる褐色のケムリと共に、くたばったというのです。

通電時間は僅か二分でしたが、死体をあらためてみると火のようにあつく、電極があたっていた場所は黒く焦げ、頭髮も焼けちぢれており、やはり彼女も生身の人間であった、とわかった次第です。

後日、心音・脈膊・発汗状態の記録が発表になりましたが、その結果、彼女こそ、最も死をおそれていたNO1と評価されました。

○

あたしは処刑係だけど、まだ未熟なので、首斬りがせいぜい。それでよかったらね。

C子が斬首判決をうけたのは十八才のころで、いったん死刑を宣告されたら減刑は絶対はないし、どんな臆病者でも、いさぎよく、むしろ早く片づけてくれと頼むのに、彼女が処刑延期願いをだしたときは、みんな驚いてしまった。

当局も最初は、そんなに死にたくないのかと、むしろいじらしく思って、六カ月の延期を許可したが、期限がきれるたびに再延期を提出し、十回に及んでは、とうとう却下せざるを得ず、遂に執行と決まった時は、もう二十三才。純情をうたわれた面影はなかった。

あきれるほど豊かになった乳房を、誇らしげに示しつつ、処刑室に入った濃艶ともいう

べき美女は、

「さ、早く首を刎ねてちょうだい」

というや、なんとドッカと大アグラ。

「アンタ、いくらなんでもオンナでしょう。」

そんな恰好しちゃ、みっともないわよ」

と注意したが平気なもので

「いいのよ。このまま、首を刎ねて」

とゆずらず。あたしもアタマにきて、そのまま刀のサビにしてやった。

カッと頸骨が鳴る、こころよい手ごたえ。

ドツとあがる血しぶきと共に、美しい首は斜

前方にふつとび、胴体は背後にひっくりかえり、心配したとおり、お行儀のよい恰好とは

言えなかった。

血の滴る生首を、髪の毛をつかんでぶらさげ、斬口を検死官に示し、手押車にのせた胴体の、ひろがった足の間に投げこんでザ・エンド。

もうひとつは、あたしが今まで見たうちでも最高級と言える、二十才の美女D。

シミひとつない雪白の肢体と漆黒の髪をもち、やさしいものごしは、女であるあたしで

さえホレボレとして、なんとか必要以上の傷をつけずにすませたいと思ったほど。

幸い、彼女は毒死刑で、床に正坐したままの姿勢で、与えられた丸薬をのむだけ。

ゴクン、白い咽喉がなる。息をこらして注目すること一秒、二秒、三秒後に、つぶらな

目が膜でもかかったようにかすみ、フーワァリと、腐木がくずれおちるかの如く、身体が静かに仆れ伏し、ハカなくも一卷の終わりと

なっていた。

桜色に染まった死体を、アルコールできれいに、すみずみまでふいてやって、処理室に

送ったが、あとどうなったかしら。鼻と耳をそぎ、歯をくだき、目に針を刺し、頬を裂い

て獄門に梟ける……こんな目にあわしてやりたい気もちよっぴり、わかるでしょう。

若く美しい女性を次々と消せるお仕事っていうのは楽しいわ。こんな話がお気に召した

ら、そのうちに昇格し、惨殺刑も手がけるでしょうから、またのときにね。

○

私は刑死体処理係。さっそく、その話を。

ある日、小型トラックがきて、六人の若い

女性の死体を放りだしてゆきました。いずれも頸すじに締めあとを残し、頸骨はくだけて

首がぶらぶら、鼻汁やよだれが流れ、ひらいた口からはみでた舌などから、一見して絞首

刑をうけたものとわかります。

「オンナって、もろいものね。一本の紐で吊

るしただけでオダブツになるんだもの」

こんな話をしながら、死体の足首をつかんで、処理室にひきずりこむところへ、二台目

が到着、四人の女体をおいてゆきます。

「全くね。ちっぽけな鉛のかけらを、たった

ひとつ射ちこまれただけで往生よ」

かわいらしい左の乳房に、ポツンと一カ所だけ、弾痕ののこる十六才位の美少女です。

「こっちは射ちこたえあったでしょうね」

残りは、いずれもバスト九十はあると思われる、見事な乳房を右側だけ示しています。

左側は、おそらく十発以上、射ちこまれたのか、あとかたもなく粉碎されていました。

三台目は六つの生首と同数の胴体。これは説明の要はないでしょう。

「斬首だと手数が半分、はぶけるわ」

最後の大型は実に十六人で、両脇腹に無惨な穴のあいたもの、下半身が黒焦げのもの、目鼻口にドロのいっぱいつまったもの、さては股裂きやら解体やら、潰れていたり煮てあったり、惨殺刑の女体でした。

私の仕事は、これらの首を斬り離し、心臓をえぐりとることです。御承知のように、若く美しい女性のそれは高く売れるのです。

死体をギロチンの首穴に嵌めこみ、テコを引くと、なにしろ硬直が始まっていて、轟音ならぬ、にぶい音がして、首がはずれる。或は斧でたたき落とし、押切機でザクザクと刈り取る。短刀でゴシゴシと骨を断ち、皮肉を裂き、最後にフツと軽い手ごたえと共に、首をもぎとるのです。

片っぱしからチョン切った生首を、お風呂に投げこんで血のりを洗い落とすうち、私の

親友のクビを発見したので、特別ねんいりに洗い、髪もなでつけて香水をかけ、蒼ざめた唇に口紅をさしてやりました。友情にあついでしよう。

キレイになった三十六個の生首を、テーブルの上にタテヨコ六個ずつ並べ、次の仕事にうつります。

乳房にそってメスで一線を入れ、皮膚をすこしずつ傷つけぬようにはがし、肋骨を断ちきって胸腔を大きくひろげると、その奥には弾力ある柔軟な肉塊が、愛らしく存在しているのです。

手ぎわよくえぐりととり、ついでに乳房をもぎおとし、残りを無価値の物体とします。

生首と心臓は、アルコール漬として売りましたが、羽が生えたようでした。

○

あたいは雑役婦。首はなく、乳房その他をえぐりとられた、つまりカスを、焼却炉で灰にしたり、埋め草にする、つまらん仕事を。それにさ、刑死女体の脂肪をとり、石鹼を作らされるってんだから、女工なみさ。

大型メスで四肢をつけねからはずし、更にブツ斬りにして、ズタズタに刻んだ胴体と共に、大釜でグツグツ煮るわけさ。

異臭をたてるのをかまわず、三日間、煮つめたら、骨が底に沈んだだけで、あとは形もとどめず、きれいに煮えくずれ、三分の一

位に減った湯の表面に、あぶらが厚く浮いているって寸法。

冷凍室で急激に冷やし、固まった脂肪をとる。三十六人の女体、首はなかったが、一トンは半はあるだろう。それが八十キロの粗製脂肪と変わったわけ。

この女体脂肪十に対し、水を二十、苛性ソーダーを加え、更に三日間、煮なおし、再び固めたやつに塩と少量の香料を足して、三度煮つめる。全部で八日かかった。

出来あがりのドロドロした液体を、型に流しこんで、これが固まれば、いよいよ女体石鹼の完成さ。結局、三十六人の美女が、二十五キロの石鹼になっちゃった。哀れというるか、すばらしいというるか。

なかなか高級品で、ヴィーナスと名づけられ、洗顔用に使われることになったので、まづもって冥すべきだね。

○

△筆者より▽ この話を、してくれたE嬢は、次の仕事中に足をすべらせて、大釜のなかに転落、おり悪しく誰もいなかったの、そのまま煮られ、発見されたときは半分とけており、遂に彼女自身が「脂肪の塊」となりました。石鹼にしたのかって？ いや、一人分で量も少ないし、ローソクの材料にまわしました。これが、その女脂ローソクです。案外、明るいものですよ。

／＼カメラ・ルポルタージュ／＼（深田菊子の巻）

水車小屋緊縛記

塚 本 鉄 三



十一月二日と三日の両日、芸者福竜（松本たえ）の第二回目の責めを敢行したことは、二月号に間に合うように、一晩で一氣に書きあげて編集部へ速達で送っておいた。

この原稿を書いているときは、まだ二月号が発売になるには少し早いのだが、福竜を撮影した緊縛写真も急拠現像して三十数枚同封しておいたので掲載されたことと思う。

福竜からは一週間ほどして手紙が届いた。

もう一度、大阪まで出向いて責めて頂きたいのだけど、丁度いま忙しい最中で、とてもお座敷が休めないのです、道後まで一泊の予定で来て頂けないかしら——という文面であった。夜の十一時になれば、お座敷がすむので

それから直ぐ貴方のお宿まで出向いて、翌日の昼すぎまでだったら、ゆっくり、お相手出来るから——というようなことを、くどくどと書いてあった。

白い裸身を高手小手に縛り上げられた福竜が、畳の上を芋虫のように、うねりまわっていた、あの光景がまざまざと私の目に浮かんできて、私も、もう一度、是非、福竜を責めてみたい——と、そう考えていた。

だが、年末を控えて、のんびんだらりと、温泉遊びをする時間的な余裕は、今のところ私にはなかった。

残念ながら、忙しくて行けぬ——と電文のような簡単な手紙を出しただけで、それなりになっている。彼女もまた年末のお座敷で、さぞ忙しい毎日を過ごしているのだろう。もうそれっきり、手紙も来ないし、また電話もなかった。

そんなとき、本誌の五月号の読者通信で初登場して、その後、編集部へしげしげと連絡をしてきて、私のハカメラ・ルポVにも協力してくれた深田菊子さんから電話があった。

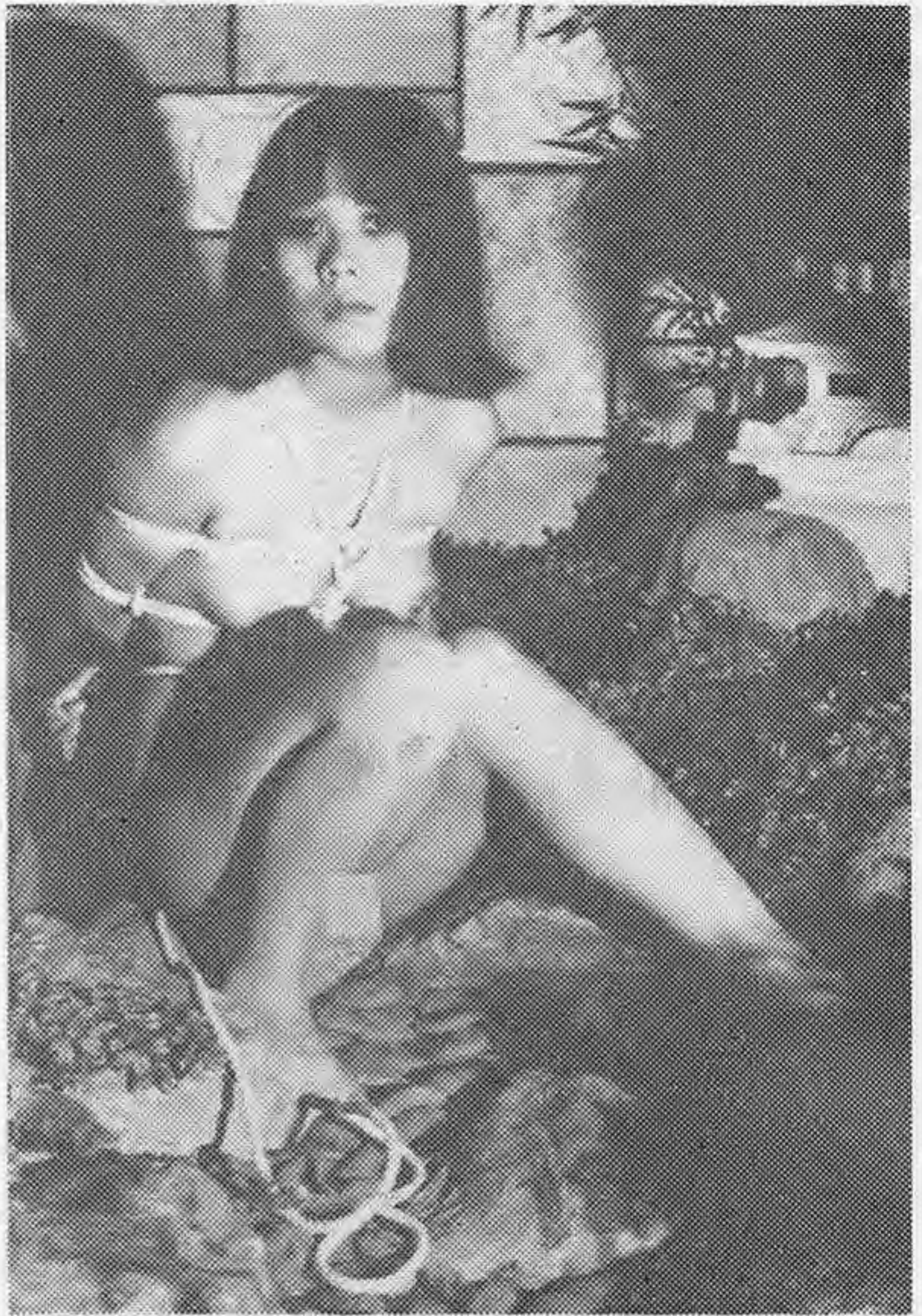
彼女のことは、本誌八月号で、私はカメラ・ルポとして『Mの天使とその瞳』と題して一文を書いたことがある。暫く執筆を断って

いた私に再びペンを持たした魅力が彼女にあったことになるが、あの写真を撮影した最初の頃と、六カ月経った今とでは、彼女に対するイメージが違っていたことを正直に言って私は痛切に感じている。

八月号に書いたハカメラ・ルポVの中の深田菊子は、それなりに私が、その時に感じ、

肌を受けとったものを、そのまま書いたのであるが、それから幾度となく彼女に逢っているうちに、私が深田菊子に対して持っていたイメージが徐々に変化してきたのは、いらない。八月号の『Mの天使とその瞳』の文章の末尾では、いづれ次の機会に、詳細なルポルタージュを書く機会があると思うので、そ





のときを期待して頂きたい』と書いておいたが、案外早く、その機会が来て、十月号では『深田菊子のSM生活について』と題して、続篇めいたルポを書いた。

そして、深田菊子が私に対してイメージ・チェンジしてきた変貌の有様を、私なりの観察で書いたつもりである。

逢って話していて、なんとなく可愛くなる女——深田菊子とは、そんな娘である。

運転免許証でも定期乗車券でも、或はハンドバッグの中味でも平気で見せるかわりに、なにかしら、未知の謎を身体の中に秘めている魅力的な女。こうだと思っていたのに——今度逢ったときは、こうでもない女。

底抜けに明るく、そして、その容貌が示すように超近代的な気持の持主。勿論、SMには、普通以上に関心を持っているばかりでなく、奇クなんかもよく読んでいて、SMに関連した言葉もよく知っている——となれば、果しては彼女は何者なのか、と、疑いたくなるのは、あながち私ばかりではないだろう。

といって、私も、深田菊子というMがかった娘は、これこれしかじかだ、ときめつけて書き切ってしまう自信もないし、また手腕もない。だから、十月号の『深田菊子のSM生活について』という一文も、いわば七月初旬の或る日、深田菊子連れて琵琶湖へ遊びに行った時のことを、ありのまま、出来るだけ客観的に書いただけのことである。

今度、彼女から私に電話をかけてきたのも車でドライブに連れていって——という誘いであった。

十一月二十五日、全国的に高気圧に掩われていて、小春日和の上天気であった。硝子越しに射し込んでくる日ざしも初冬のものとは思われない暖かさである。

私と一緒に郊外へ出る。そして、人里離れたところで彼女がハンドルを握る——。勿論彼女は教習所に通って、立派に普通免許証は

持っているのだが、人通りの多い雑踏では、一寸、心もとない。それで車や人の混雑していない郊外で、スピードを満喫してみたいというわけである。その点、私の車はボルグワーカーのオートマチック付きだから、もっとも婦女子向きということが出来る。

だが、折角の誘いだったが、二十五日は、私は来客があつて外出できなかった。それで二十六日の午後、身体をあけることにした。

十一月二十六日。

この日も快晴で暖かった。

私は深田菊子のM性を、更に引き出して白日の下にさらけ出してやりたいという探求心にかられていたが、彼女の方は無邪気に、むしろ自分で車を運転する楽しみを味わいたいと考えていたのかもしれない。

大阪市内の雑踏から逃避するのは、高速道路で一っ走りするに限る。三十分か一時間突っ走れば、京都府か兵庫県か、奈良県か、隣府県の人や車の少ない郊外へ逸脱することが出来る。今のところ和歌山に対する目下建設中の阪和道路が未完成なので、こちらの方は無理であるが、とにかく、都座を離れるというだけであつたら、そう時間をとらなくとも、いいわけである。

それに、好都合なことに、高速道路沿いの郊外には、雨後の筍のように、至るところにモーターが濫立している。西洋のお城のように豪壮なのから、バンガロー風のしゃれたのまで、いろいろとりどりである。

SMの道具を取り揃えたSMの邸というのが、埼玉県の方にあるということを週刊誌か

なんかで見たこともあるような気がするが、関西では、今のところ、そんなSM好みのモーターは存在しないようだ。もしご存知の方があつたら、お知らせ頂ければ幸いである。

私としては、出来るだけ早く、深田菊子を格好のモーターに連れ込んでSMプレイをやりたいと思っているのだが、天真爛漫な彼女



は、そんな私の心の中を知ってか知らずか、この百何十馬力かのエンジンをフル回転させて、自らの手でスピードに酔ってみたいと考えているに違いない。

三月号に、短くてもよいから一篇は書けよと編集長から言われているので、まあ、忙しいところを半日つぶして出かけてきているのだ。いつまでも、お嬢さんのお遊びにつきあっているわけにはいかない。

一〇〇キロばかり、そこら中を走りまわった挙句、目星をつけておいた豪華なモーターの中に車を乗り入れさせた。

郊外だから、こんな贅沢なことが出来たのだろう。周囲にクリークのような壕をめぐらし入口には橋を渡してある。橋を渡り終わるとそこは広場になっていて、人影も車の影もなく、森閑としている。一戸一戸が二階建てで先の尖った西洋のお城のような造りである。

シャッターが下りているのは、客がいる建物なのだろう。十数軒の中で来客中のものは三軒あまり、まあ、余り繁昌しているともいえないが、また考えようによっては、周囲が山や林ばかりの、こんな人里離れたところへ物好きにも、よく来たものである。

バックでガレージの中へ車を入れる。車が

完全に中へ入った途端、自動的にシャッターががらがらと閉まりだしたのには驚いた。一切、人の応待を受けないのだからこりゃSMプレイには持つてこいというものだ。車の中に責道具一切積込んでおいたら——と、つまらないことを考える。

今日は勿論、そんな準備はしていない。それどころか、照明道具を入れ忘れてきているので、どうやらストロボの一発勝負でケリをつけなければならぬ——と、いささか憂鬱なのである。

そんな私の気持もお構いなしに、深田菊子は、さっきからのドライブで御機嫌なところへ、この変わったモーターが大いに気に入ったらしく大仰に感心していた。

全く無邪気なものである。



車や人の往来も少ないので、私はモーターに入る少し手前で深田菊子に運転を交替していた。万一のことを思って私は助手席でサイ

ドブレーキに手をやっていたのだが、なかなかどうして、ハンドル捌きも鮮かに、バックで、うまく車庫入れを完了した。

合オーバーを、さっと脱いだ彼女の今日のいでたちは、グリーンのスラックスに、グレムのローヒールの靴を穿いている。上衣はスラックスと友色で、胴のところできゅっと引

きつぼってバンドで止めて、軽快なジャンパースタイル。左胸には石油会社のトレードマークが赤色で刺繍してある。

ガソリンスタンドで、パンク修理剤の宣伝販売のアルバイトをしていたときのユニホームだということである。深田菊子のようなカワイコちゃんが、腰の線もお尻の線もぴった

りと出た制服を着て、ガソリンを補給に来たお客にパンク修理剤を売りつけたら、さぞよく売れたことだろう。

二週間、ガソリンスタンドに勤めている間に車運転の腕を大分、上げたそうである。

若い子はいい。どんな服装をしても綺麗に見えるものである。

さて、一階のガレージから階段を登って二階へ上る。上ったところが玄関になっていて靴を脱ぐ様になっているのだが、そこで上り框へ腰を下ろして、びっくりした。丁度、江戸時代の茶屋の風景になっているのである。旅をしている旅人が、ちょっと休ませてもらうかといって腰を下ろす様になっている。

玄関から上がった四帖半ばかりの部屋は、まるで時代劇にでも出てきそうな茶屋風景なのだが、その隣のトイレやバスは勿論、超近代風になっている。モーターも、こんな風に変変わった造りになったのだなあと感心したり驚いたりする。だが、それくらいで感心するのは、まだ早やかかった。

向こうの部屋へ通ずる入口には、古びたように造った杉の板に『水車小屋』と書いてあるので戸を開けてみると、部屋の半分の床はガラス張りで、その下を水が流れているので



ある。右側の築山に小さな寛があつて、さらさらと、勿論水道の水であろうが、植込みの間から、床の下へ流れ込んでいる。

そして入口の表札に書いてあつた水車小屋の名の通り、古びたようにしてあるが、実はまだ、ま新しい水車が置いてある。花崗岩の軸受けで心棒を支えているので、水道の栓をひねって水を出すと、くるくると軽快な音を立てて廻りはじめる。

今日は快晴で走っている車の中でも汗ばむくらい暖かだったが、この部屋も何度くらいか知らないが、床の下を水が流れていても不自然に感じない程の室温である。予報では、日中の温度が十七度から二十一度位まで昇るといっていたから、きっと二十四、五度の室温でもあろうか。今日はひとつ、この水車を背景に縛りを撮ろうと思いたち、深田菊子には早速、入浴するよう、すすめる。

というのは、この部屋へ入ってくるなり、彼女は面白がつて、ズボンを脱いで、泉水の中へ入って金魚を追いまわしたり、寛の水を出したり止めたり、水車を廻したりして、中々上がってこないの、カメラの準備をしていた私も、とうとうシビレを切らして「お風呂に入ってきたら、どうだ」と言葉をかけて

既成されたM感覚に戸惑いを覚えさせられた関谷富佐子の緊縛取材



しまったのだ。

怪まで水に漬かっていた深田菊子は、そのまま濡れた足で岩の上にあがつて「タオルとってエー」とせがんでいる。バスタオルを投げつけておいて、私は畳の部屋に敷いてある蒲団の上に、ごろりと横になった。

最初、逢った頃からくると、この頃は

彼女も大分、私に慣れてきたようだ。一寸、

見ているだけでは明るく朗らかで、M女なんてイメージは、どうしても浮かんでこない。

読者のS傾向の人たちが、中々マゾの女性はいない——ということをよく言われるが、

真実、深田菊子のような女性を喫茶店なんかで見かけても、まあ殆どそれとわからないで

関谷富佐子は上品で淑かなM女である



あろう。とすれば、如何に街の雑踏の中を探して「マゾ女性やーい」と叫んでみても、「ハイ、ここにおります」と答えてくれない限り、中々見つからない筈である。

人が手塩にかけて飼育済みのM女性を譲り受けるのであったら、或は比較的容易であるかもしれない。手垢で汚れていない無垢のM女性となるとこれは自分で育てるより仕方がないであろう。自分より先に誰かS人士の責めの洗礼を受けたマゾ女性であれば何らかの癖を持っていてる筈である。その癖を自分なりの枠の中にはめ込んでゆく努力も、また楽しい一つの作業ではあるのだが――。

数度にも亘って責写真を撮影したことがあった。彼女はムチ打ちに対して素晴らしい感度の持主で、私は彼女によって、ムチ打ちの妙味というものを知らされた。

関谷富佐子の白い肌を皮のムチで思いきり打ちすえることによって引き起こされる絶妙のポーズと表情。これはあながち、Sファンならずとも、極度のセックス・アピールを受けることは必定である。元々、Mの素質があったのだろう、彼女自身が、「私はマゾ女性です」と自称しているのだから、それは間違いないだろうが、一体誰が、このような素晴らしいムチに対する感受性の持主に彼女を飼育したのだろうか。

私は関谷富佐子取材の記事を幾度となく誌上に発表したくらい、非常に氣にいったM女性ではあったが、彼女の強い個性というか、既に形成された枠の中に、どうしても自分が入りきれなくて齒搔ゆい思いをしたことがある。彼女の肌身に接してみても、はじめて自分の領域外のある彼女なりの堰のあることを、はじめて思い知らされた。

上品で淑かで、M女性としては最高にランクされてもよい関谷富佐子であったが、既に形成された型は、容易なことで打ち破ること

三木敬子に縛られる浜本喜美



は出来なかった。

その点、この深田菊子は、ノーマルな女性ではないかと疑える程、M性についてもアクの強い個性は持ち合わせていない。これから飼育のしようによっては、どのようにも仕込んでゆける無垢に近いM女性のように思える。年令的にも若いし、第一、素直な性格の

持主だから、どのようにも今後、変化してゆける余裕がある。

今、私の手元にある昭和三十四年六月に発行になった奇クの口絵に、三木敬子と浜本喜美という二人コンビの写真が載っているが、この中で責められている方の浜本喜美というのは、当時二十二才といていたが、まこと

に眼と足の綺麗な女性であった。

私はこの浜本喜美という女性の裸を始めて見たとき、これはマゾ女性だなあ——とすぐに気がついた。私が直接縛ったのではないが相手役の三木敬子が縛ってポーズをとらしたとき、始めてなのに、ほんとうに涎も垂れんばかりの見事な責められ姿をしたのだ。

後手に縛られて上半身を捻じった身のこなし方、前に伸ばした脚の軽い曲げ方なんかも愈々以て、堂にいつている。足先の指が紅をさしたように赤くいろづいているのなんか、生れつきのM女性としか思えなかった。といって、この浜本喜美という女性は、私が直接知りあったというのではなかった。

建売住宅の宣伝パンフレットに写真版として載せるので、完成間際の建物の写真を撮ってほしいと依頼されて三脚を据えてカメラを構えているとき、私を建売住宅会社の人と思っただか、言葉をかけてきたのが三木敬子であった。すらりとした長身を水玉模様のワンピースに包んでいる彼女を見て、清潔な感じのする美人だなあ、とそのとき思った。

年令は二十四才、ファッションモデルをしているのだが、建売住宅を買いだいたいと思っ母の代りに見に来たのだということだった。

私は建物の写真を撮りながら彼女を案内して回り、フェンスをバックに彼女のポーズを一枚フィルムにおさめた。いろいろ話を聞いてみると、ファッションモデルといっても、クラブからの仕事は毎日あるわけでもなく、それに服装なんかにもお金がかかるので、キヤバレーとか喫茶店など、アルバイトをしている人も多いとのことだった。自分は別にアルバイトをせず、ファッションモデル一本でやっているのです、とても苦しい。今は両親と一緒にだからいいのだが——と言っていた。

それでは、アルバイトに緊縛モデルになってみてはどうか、と私は詳しい説明をしてやったところ、熱心に聞いていた三木敬子は、それだったら、私と一緒にファッションモデルをしている子で、丁度いい子がいるので、すすめてみる。その子だったら私より二つ下の二十二だし、私よりずっと綺麗だから、きっと貴方の気に入るだろうと言った。

次に三木敬子と逢ったのは、七月半ばの暑い日であった。たしか阪神の地下の喫茶店で外気が三十数度の炎暑なのに、室の中は肌寒いくらい冷房がよく効いていたのを覚えていた。今は高速道路が出来たり歩道橋が出来たりして、すっかりあのあたりも変わってしま

ったが、当時はたしか附近に車を駐車出来たように思う。昭和三十二、三年頃は大阪市内の中心地でも殆ど駐車禁止というところがなく、御堂筋でも四つ橋線でも、どこへでも車は止められた。一寸コーヒー一杯というときでもその喫茶店の真前に駐車出来たのだから至って便利だった。まだまだ乗用車は少なうラビットなどのスクーターがやとと出初めた頃だから、大丸とか、そごうの百貨店の前でも車を駐めることが出来た。

三木敬子は浜本喜美と一緒に連れてきていて私に紹介した。そして緊縛モデルになることを承諾したので是非使ってほしいと言った。浜本喜美は只頬を赤らめてうつむいているばかりで一言も喋らなかったが私は一目見るなり、その初々しい風情には、すっかり気に入ってしまった。身体は三木敬子と違って色白で少し小肥り気味なのに、な



気の合ったプレイ振りの三木・浜本コンビ

よなよとして、今にもくずれてしまいそうな頼りなさがあった。三木敬子は如何にもファッションモデルだといったヤセ型の長身で、むしろゴツゴツとしたボーイッシュ的な感じのする女性であった。

この方だったら、私も大変気に入ったと返事をする、そこで三木敬子は二つの条件を持ち出してきた。撮影には必ず二人一緒に呼んで貰いたいということ、従って当然ギャラは二人分支払ってほしいということが一つと浜本喜美の緊縛は是非自分にやらせてほしいということが、もう一つの条件であった。

私はこの二つの条件を快く諒承して、その日から一週間ほどして再び阪神地下の喫茶店で落ち合い、その頃、臨時のアトリエに借りていた羽衣の家へ向かった。

三木敬子は私の渡した縄を巧みに操って浜本喜美を後手高手に縛り上げていった。初めてであったら、なかなか、どうして、このようにスムーズにゆく筈はなかった。縛られた浜本喜美の方も、うっとりとした表情で三木敬子の膝の上で身をくねらせている。

私はこの二人のSMプレイを眺め、ファインダーを覗いてシャッターを切っておればよかった。どうも、この二人の女性のびったり

と合った息の具合は只ならぬものがあった。今でいえば、さしあたりレスボスというのであろうか。三木敬子が男役で浜本喜美が女役——。三木のSに対して浜本のMという役割りがはっきりしている。責めている三木敬子も若くて美しいときているから、この二人の女性同志のSMプレイは一幅の絵になりそ

うな名コンビのSM場面の展開であった。

私は三脚にすえたカメラの後へ椅子を置いて腰を下ろしシャッターのゴム球をただ握るだけで直接手を下すでもなく、ポーズに対する助言をするでもなく、只、呆然と、浜本喜美の被虐味に溢れた表情と肢体を、うっとりとして鑑賞していた。猿ぐつわに口を掩われ



たときの涼しい瞳が美しく、うるんだように見えていたし、被虐の果て、ケイレンしたようにふるえている素足の指も美しかった。

腹部にも腰部にも、ゼイ肉というものが、いささかもなく、真白い肌が絨のように電光に映えて輝いているように見えた。三木敬子に依って完全飼育された浜本喜美の既成の枠

の中に、私の入り込む余地はなかった。蒲団の上に横になりながらの、私の長い回想の夢は一瞬にして破られた。

深田菊子が浴室から上がってきて、バスタオルを腰に巻きながら、

「どうしたの？ 気分でもわるいの？」

と、ぐったりと蒲団の上でのびたようにな

って回想に耽っている私を気づかって心配そうに覗き込んでいる。

「いいや、どうもしない——」

そう答えて、私はやおら立ち上がった。

女性には母性本能があるように、男性には幾つになっても、女性にすがりつきたいような気持になるときがある。心配そうに私を覗き込んだ深田菊子の瞳の中に、私は今の自分の心の中の淋しさを救ってもらいたいような気持を抱かされた。

これから、深田菊子を縛り上げて責めようというとき、なんたる弱気なことであろう。こんなことでは、これから厳しいSMプレイが果たして出来るだろうか。しかし、私の心の中は索莫として心淋しく、何かにすがりついて安心立命を得たい気持で一杯だった。

私は屈み込んだ深田菊子の右腕をとって引き寄せ、激しくかき抱いた。菊子は何の抵抗もせず、くなくなと私の腕の中にくずれ折れてきた。温かい肌であった。湯上がりの石鹼の匂いのする新鮮で初々しく、そして柔らかくて吸いつくような餅肌であった。

深田菊子は全身の力を抜いて、私の両腕の中にあった。

柔らかい——なんという柔らかさであろう





か。私は女神をかき抱いているような、生仏^{いきぼとけ}様を抱擁しているような気持であった。

バスタオルがぱらりとはずれて、白い肌がむきだしになっても、深田菊子は何のためらいもなく全身を投げだしてきた。

田圃の真只中に忽然として建っている、この真新しいモーターは至って静かである。

小春日和の昼下がりが、一瞬、全世界の動きが止まってしまったかのように思えた。電灯が瞬いたように感じたのは、私の目の錯覚であったのだろうか。

静かだ、静かだと思っていたが、簀を流れる水の音だけが、耳の近くで、さらさらと間断なく響いてくるのが唯一の音であった。

私は深田菊子は本当は極めてノーマルな女性ではないかと思う。しかも非常に抱擁力のあるSMに理解を持った女神のような存在ではないかと理想像を描いている。そこで、以前、8月号の誌上でいみじくも、Mの天使と名づけて『Mの天使とその瞳』と題してルポを書いたことがある。

嘗て本誌上を沸かした古川裕子なんかは、代表的なマゾ女性のように思えるが、そのイメージは陰惨で暗く、絶望的な感じさえ与える。それに引きかえ、深田菊子なんかは底抜けに明るく、しかも、古川裕子のように、猿ぐつわとか、ゴムとか、汚臭とかいった固定されたパターンというものを持っていない。

古川裕子が前時代的なマゾ女性とすれば、差し当り深田菊子は、超近代的なマゾ女性とってよいだろう。そこには二十年近い時代の流れの差というものが如実に感じられる。

さて、話が横道へそれてしまったが、いよいよ、今日の本題である深田菊子の水車小屋での緊縛に着手することにしよう。入口の表札には「水車小屋V」とは書いてあったが、この部屋の造りというものは、小屋というものではない。床の下を流れている水を居ながらにして眺められるように、ガラス張りの床に

してあるし、簀を受けた築山には、生駒石の自然石を用いているし、植込みに使っている庭樹や下草も自然木である。といっても、所々に香港フラワーを巧みにあしらっているのはあるのだが、こんな部屋の中に泉水をこしらえてあるのも、まことに手がこんでいる。

さすがに背景は柚木を使ったりして如何にも自然らしく見せているが、それでもタイル張りが随所に顔を出してくるのは、いささか御愛嬌である。そして、水車も古びた木のよう造ってあるが、真新しい杉の木を材料に使っているのは近寄ってみるとよくわかる。

ガラスの床の端は敷居になっていて、そこにはガラス戸がはまっているのだが、その戸は全部左右に開け放っている、敷居からすぐ泉水の水の中へ入ることが出来る。

私は深田菊子を麻縄で後手高手小手に縛り上げて縄尻を持って引つ張りつつ泉水の中へ入らせようと追い立てた。形のよい可愛いお尻を見せて敷居のところに屈んだ彼女は、全身のまま嚴重に縛られた自分が、一匹の觀賞的牝獣として、これから、あらゆるポーズを窺視されるばかりでなく、カメラで撮影までされるのを十分承知していながら

「ここへ入りますの？」

一瞬のためらいを見せて私の方を顧った。彼女が躊躇するのも当然のこと、床から水面まで相当の距離があり、しかも更に水の深さがある。足の長い深田菊子ではあるが、両手の自由を奪われているので、自分一人で下りるということは不可能ではないにしても極めて困難であった。

「さあ、下りるんだ。下りて向こうの築山まで歩いて行くだッ。さあ行け」

私は縄尻を持ったままで追いたてた。彼女のお尻が複雑な動きを見せて右足がするすると伸び、縄尻を持つ私の手にピンと手ごたえがあった。足が水中に入った途端、金魚があらわて、床下や泉水の隅の方へ逃げてゆく。



縄尻を持ちながら私も泉水の中へ入り、彼女を築山の笥のところへ追いやってポーズをとらす。三〇〇Wのフラッドランプに照らしだされて、深田菊子の白い裸身がくっきりと浮かび上がる。私は彼女をそこへ置いたままカメラをとりに戻る。バスタオルで濡れた足を拭いて座敷へ上がり、白い牝獣の見事な肢体をじろじろと、ゆっくり眺める。

数百人の観賞者というか見物人というか、その視線にも代る二台のカメラが好奇心に満ちた冷徹な眼で、そこに屈み込んだイケニエを捕捉している。

「これから、お前は私の言う通り素直にポーズをとるんだヨ。いいかね」

「ハイ、旦那様」

深田菊子は私に教えられた通り、素直に返事をする。満ち足りた彼女は、もう私の言いなりになり、そして、心身共に私にまかせ切っているところに喜びを感じているようだ。私は見物席の座敷にカメラを構えたままで、言葉だけの命令を与える。

「お尻を岩の上におろすんだッ」

両足を揃えて屈んでいた彼女は、お尻をじかに足もとへつけるのには、後手に縛られているだけに全身の安定をとりかねて苦勞をし

ている。右足をピンと伸ばしてお尻をつけようと必死になっている白い裸身の要所要所が妖しい動きを見せている。私はショットガンでも射つように二台のカメラを操って白い牝獣の動きを捉えてゆく。

やっと笥の上の築山に腰を落ちつけたところで、次の命令が発せられた。

「両足を思いきり開くんだッ」

「いやーんそんなの恥しいわ」

「馬鹿、奴隷がそんな言葉を吐いては駄目じゃないか。言い直すんだッ」

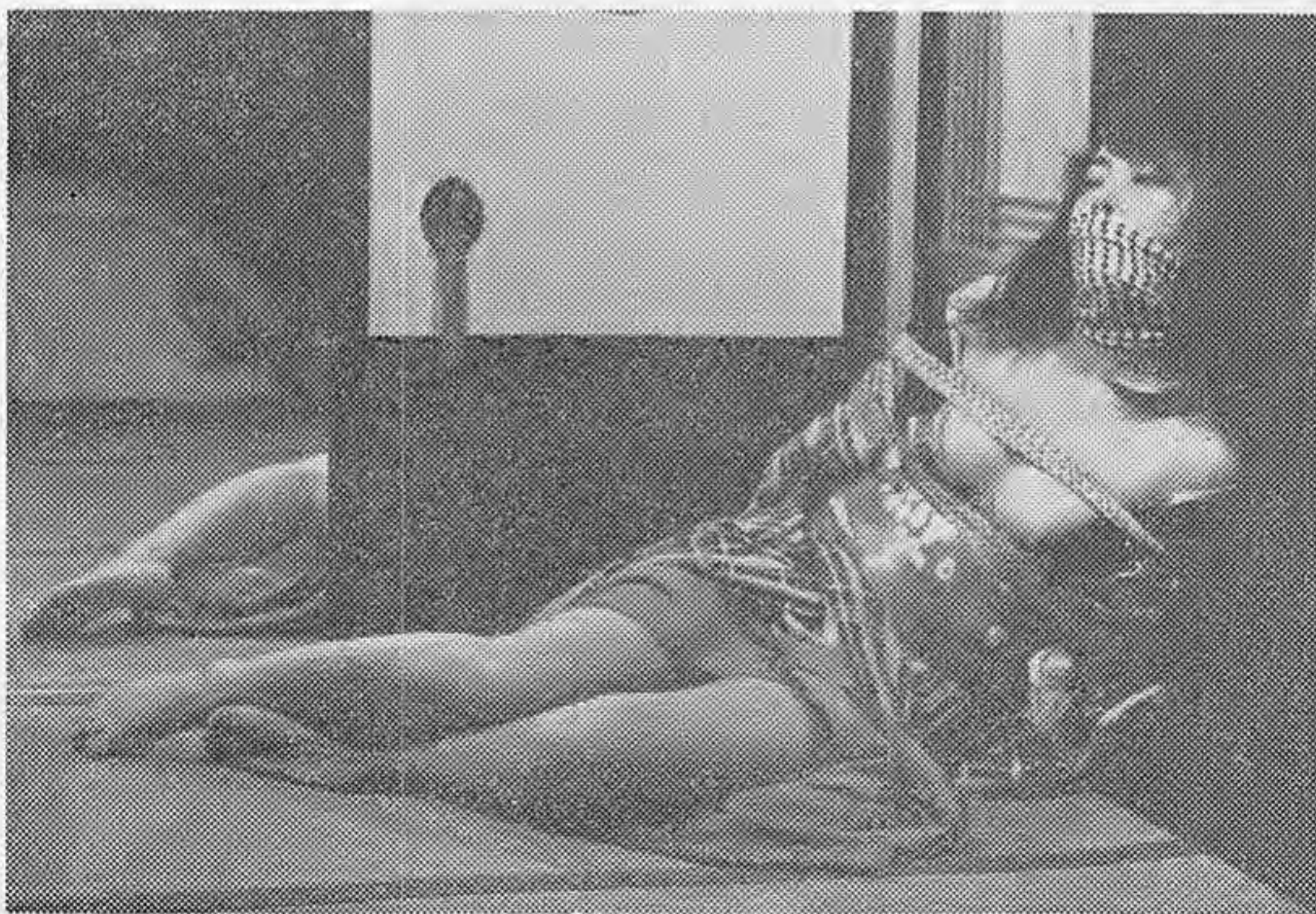
「あら、ごめんなさい。ハイ、旦那様、こうでございますか。」

どうかごらん下さいませ」

彼女は恥かしげに徐々に股を開きだした。私はストロボを閃光させておいてから、

「もっと、もっと大きく開くんだ」

矢つき早やに命令を下す。深田菊子はもうすっかり観念した



妖艶な姐御カラーを発散する絹川嬢

しなやかな動きをみせる絹川文代



ように、私の言葉に操られて無言で両股を開いてゆく。左右のカメラのシャッターが切られる度に、一瞬、一〇〇〇分の一秒の雷光のような閃きが目を射、そのあと静寂だけが残ってゆく。

「もっと膝を立てて、お客さまに身体のスミズミまで十分に見ていただくんだぞ」

「ハ、ハイ、旦那様、こうでございますか」
私はエプロンステージの縁で御開帳をしているストリッパーのようなポーズを要求したのだが、一旦両足を左右に思いきり開いて尻を落ちつけてしまっているの、急に膝を立てることが出来ずに、まごまごする。深田菊子は踊りなどの経験のない、どちらかといえ

ば、そういった点では身体の固い方である。

私は以前、絹川文代というナイトクラブの踊子をモデルに使ったことがあるが、流石に踊りを商売にしているだけあって、いろいろと変わったポーズを柔軟な肢体でとった。

私がベッドの上で横になって頬づえをついて見物している前で、絹川文代に御開帳をやらせたことがあったが、見物人が私一人とあっては、反って恥かし気であった。スポットライトを浴びて何百人もの見物の中でやる御開帳も、一人の見物人では勝手が違うのだろうが、私は全裸での踊りや自分自ら行う剃毛などを目の前でやらして楽しんだ事がある。

さて、まごまごしている深田菊子に、次の命令がとんだ。

「そこを下りて水の中へ入れ」

「ハイ、旦那様」

といっても両手の自由がないのだから動作は極めて、にぶい。さんざんストロボの閃光を全身に浴びながら、のろのろと築山をすべり下りて泉水の中に、すっくと立つ。

「なにをボヤボヤしてるんだ。早く歩かないか。早く水車の方へ行くんだッ」

「ハ、ハイ、わかりました、旦那様」

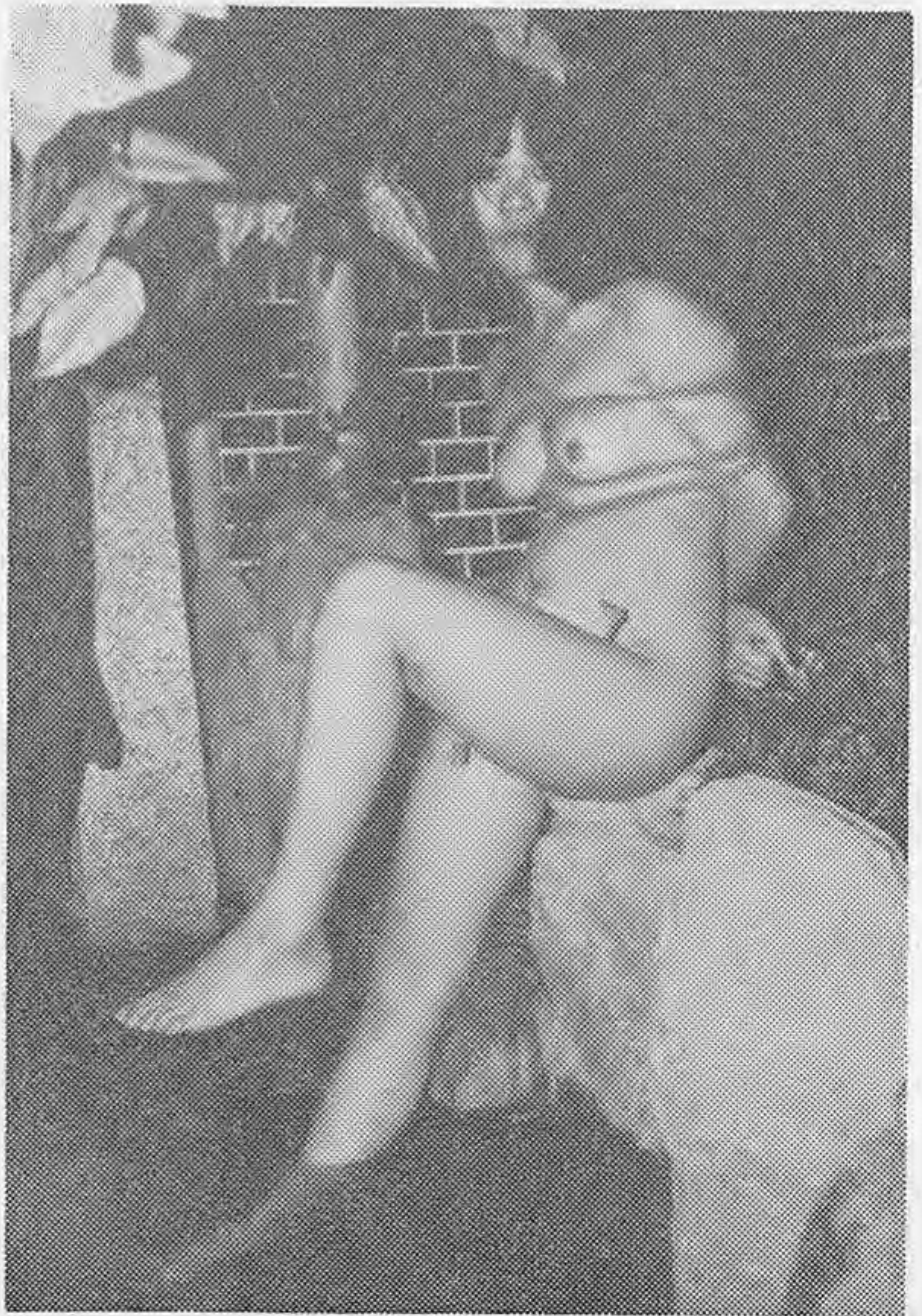
寛のところから水車まで大分の距離があり

しかも途中に、ゴムの木の植込みがあって、それが邪魔になってスムーズに行けない。そこで停滞したところへ、更にストロボの追い打ちをかける。彼女の位置が変わるに従って私はフラッドランプの照射角度も変えるので深田菊子の白い裸身が闇の中に消えてしまうということとは絶対にならない。いつも、見物人の視野の中に完全に捕捉されているのだ。

白い肌のヒダの微妙な動きの一つ一つさえも、三〇〇Wの電光の中に掴まえられるのは、かくすことが出来ないのである。ざぶざぶと深田菊子は水の中を歩いている。やっとゴムの木の間を抜けて水車のあるところまで辿りついた。木の枝や葉に邪魔されながらも、私は深田菊子の白いお尻の動きを追って幾度となくシャッターを切った。せめて四灯ぐらいストロボを使えたら、背景まで確実にキヤッチ出来たのだが、二灯しか準備して来なかったで、バックがどうしても落ち込んでしまつて、心もとなかった。

水車のある手前の石に腰をもたせて休んでいる深田菊子の二の腕には、麻縄がぐっと喰い込んでいる。もう三十分か四十分は経っているだろうか。私は怒声を浴びせる。

「誰がそんなところで休めと言った。その水



の中へお尻をつけてみる。早くッ」

「ハ、ハイ、旦那様、こうですか？」

深田菊子は屈み込んで金魚のいる泉水へお尻をつけた。暖かいといっても十一月の末である。風呂から上がって、もう相当の時間が経っているのだから、さぞ寒いことだろう。

だが彼女は一言も寒いなどとは言わない。私

に命令され、その命令のままに動くことが当然の使命でもあるかのように易々諾々として操り人形のように動いている。

私は少し可哀いような気になって、彼女がお尻を水へつけて水中の石に腰を下ろしたのを見はからって立ち上がる様に命じた。お尻からポタポタと水滴をたらしながら深田菊子

は水車の方へ近寄ってゆく。見ていても如何にも寒むような風景である。

私の今までの経験では、案外女性は寒さには強いようだ。皮下脂肪が厚いせいかもしれないが、マゾの女性を縛り上げてMの昂揚状態にしておいたときは、驚くほど寒さにも耐えるし、また風邪なんかもひかないようだ。



水滴がお尻から太股をつたって脛へ、そして再び泉水へと返ってゆく。大体、私は深田菊子については、厳しい責めを加えて凌辱するというよりも彼女の美しい緊縛姿態を美しく撮影してみたいと心掛けていた。嘗て本誌に於いて八美しき縛しめVというグラビア写真集を刊行した事があるが、写真的な美しさ

プラス被虐の哀しさというものが現われてくれたら——と願って構成した。

明るい被虐美というものが、あるかどうか知らないが、出来るだけそういった感じに近いムードを出したいと思っていた。八美しき縛しめV写真集は第一集から第十二集あたりまで刊行したが、それ以前にもコロタイプ印刷で二回、割合豪華な女体緊縛写真集を出したことがある。その時も相当厳しい責めや縛り、羞恥責めを加えたが、あくまでも女体の美しさを強調することを忘れなかった。今から思えば二十年近くも以前になるが、この基本方針は変えないでいる。

さて、深田菊子は下半身を冷たい水に漬けたことで全身が冷えたのであろうか。

「ねえ、お願い。トイレへ行かせて」

と哀願しだした。深田菊子に初めて逢った日にも、逢うなりトイレへ行きたいと言いだして、モーター探しに困った記憶があるのだが、大体、彼女は尿意が近いようだ。

「まだまだ、その水車のところで写すんだから辛抱するんだ。辛抱出来なければ、そこで立ったままでやるんだな」

口では無茶なことを言いながら、私はあわてて撮影を続行しだした。十一月も末という



この寒空に、室内とはいえ、私に命令されるままに水の中に足をつけたままで動き回るのには、彼女もいささか、うんざりしたことだろう。それでも露骨には嫌な顔も表面には出さず、怨めしげな目で私の方を顧ったまま水車の前でポーズをとっている。

「よし、それじゃ、こっちへ来い」

私は水車の前に立っている深田菊子を引き寄せた。冷えきった氷のような肌である。両

手首は血が通わず紫色に変色している。私は縄も解かずに横抱きに彼女の身体をガラスの床の上に引き上げ、ずるずると座敷の方へ引きずってきた。これから、座敷の蒲団の敷いてある部屋で思いきり羞恥責めを加えてやるという楽しみが残っているのだ、ここで縄を解いてしまうことはない。深田菊子もまた、その限らない悦虐を心待ちしているのかもしれない。いわば、今までの緊縛写真の撮影は

序の口の責め、そして、或る意味の前戯であったのだろう。

冷えきった身体を、座敷の上へ引き上げられてしまうと、深田菊子はもう二度と尿意を訴えなかった。深田菊子が果たして、どのようなM性の持主であるのか、その本領を発揮するのは、愈々これからである。

「どうだ、これでもトイレへ行きたいか」

「いいの、そのまま責めて頂戴」

「そうか、それだったら、お前が辛抱できなくて進らせてしまいうまで責めて責めて、責め抜くから覚悟しろよ」

私の吐いたその言葉で深田菊子の全身に、ほのぼのとした赤味がさしてきた。もう冷たさも尿意も感じないのだろう。ぐったりと力を抜いて裸身を投げだすように、私の両腕の中にゆだねながらも、肌には、ほのかな温か味を感じてきた。

私はゆっくりと深田菊子を蒲団の上へ運び仰向けに寝かせておいて、別の麻縄をしごいて白い膝頭へぐるぐると巻きつけていった。私が別に何も命じないのに、彼女は縄を掛けられた脚を大きく開いて、爪先をピンとはねあげ私が縛りよいように胸のところに太股がつくように、かい込んだ。



靄で薄ズミ色のかかった山の彼方に、汚れなき丘陵の起伏が見えかくれしているのを、私はワクワクする気持で眺めながら、彼女が「読者通信」で述べていた好きな単語というのは、思い浮かべていた。それは仰臥、嗜虐、哀願、進る、芳香。そして好きな言葉の羅列は、新鮮な尿の匂い、甘い快美感、ふくよかな

腿の内側、厚い牛皮の褌、自分の示す数々の反応——たしか、そんな文章だったようである。私はじっと可愛い深田菊子の顔をのぞき込んだ。彼女は円らかな瞳を閉じて、次に加えられる責めを期待しているようである。今——彼女の好きな単語の通り、蒲団の上に「仰臥」させられているのである。そして

「ふくよかな腿の内側」には、トゲトゲとした新しい麻縄が、むごたらしく掛けられている。私はその縄を背後の縄に通して、ぐいぐいと締めつけ縄尻を残った脚の膝へ掛けて引き寄せた。

深田菊子の両脚、両股は、もうこれ以上はとも開ききれないという位、大きく開ききっている。これは縄で体の両側へ引きつけたことにもよるが、どうやら、彼女自身が自分の意志で開いているような気配がする。

「進る」という単語が示すショッキングな場面が果たして、これから展開するだろうか。私は次に起こるであろう、彼女の肉体的変化に大きな興味を抱きながら、ゆっくりと縄止めをした。

その時である。私は咄嗟に、何も施す術もなく、その水晶以上に美しい水玉を「あっ」という驚きと共に、凝視した。なんという綺麗な宝石であろうか。あとからあとへ、とめどもなく溢れて出て、その水滴は蒲団へと吸い込まれていった。あとから、あとから、それは間歇的に溢れて、とどまるところを知らなかった。



—— X氏夫人と ——

「妻と……」

とX氏は私にいったのである。

「寝てもいいのですよ」

「えっ」

突然いわれても、意味がよくのみこめないことがあるものだ。私の顔は、きつと当惑し

いった。

「かまわないって……」

じれったい。

X氏のいつていることは、はっきりわかっているのである。

M的人間であるところのX氏は、私とX氏夫人を関係させて、妻を寝取られた男、というM的感觉を味わってみたいのである。

夫 婦 交 換

…… M 的 ポ ル ノ 紀 行 ……

…… 芳 野 眉 美 ……

ていたのに違いない。

「かまわないですよ」

一寸、間をおいて、X氏は私の顔をうかがうようにして

だが、面と向かって、不意にいわれても、

「はい、そうですか」

といえるものではない。

「どうですか」

「どうって」

話は、なかなか進まない。

「妻と、ネ、いいですよ」

X氏の言葉も歯切れが悪くなる。

「かまわないのですか」

「かまいませんとも」

おかしい会話だと思う。

妻の姦通を、夫が計画し、相手の男をみつ

けて、くどいているのである。

「御主人は、いいとしても……」

私は、ちらっとX氏を見た。

こういう話は、M的人間であるところの、夫の、ひとりよがりだが、えてして多いものなのだ。うっかり信用すると、とんでもないことになってしまう。

「奥様は御存知なのですか」

「芳野さんが遊びに来るのを楽しみにしていますよ」

「奥様は承諾なさったのですね」

「ああ、妻は大丈夫です」

「それなら……」

そういったものの、私はX氏の話を、半信半疑で聞いていた。X氏は、奥様には何も話をしていないだろう。

「たぶん……」

と私は、ひとりごとをいった。

「えっ」

「いえ、別に」

「さあ、ウイスキーを飲んで下さい」

今夜の計画が成功したかのように、X氏の口調が急に、ほがらかになった。

サラリーマンでにぎわうスナックで、私たちは、ひそひそと、この妙な会話をしていた

のである。

X氏宅についたのは、かなり遅かった。

東京からしばらく国電に乗らなければならなかったし、バスの時間が終わって、タクシー待ちの長い列にも並ぶというハンデがあったからである。

交通は不便だったが、新興団地の一軒で、新しい家に迎えられるのは気持が良かった。

私は、そこで、X氏夫人のほかに、高校生のお嬢さんと、中学生の坊ちゃんの歓迎を受けなければならなかった。

スナックでの、よからぬ計画を実行できるムードではない。健全な団地の核家族を探索しているようなものである。

ウイスキーが用意されて二次会になった。

二人のお子さんは父親の友達という、父親よりずっと若い男を、不思議に思ったのに違いない。話がはずんで、なかなか席を立とうとしなかった。

ようやく両親に追いたてられて、二階の自室に去ったのは、十二時近かった。

一家で歓待されては、X氏夫人を、SEXの対象としてみるのは、むづかしくなる。

ウイスキーに酔って、このまま寝てしまいたいと思った。

X氏夫人のものの静かな態度から、今夜の計画が、すべて、X氏一人の一人芝居であることが感じられたからでもあった。

どうして、M的人間であるところの、中年の夫たちは、自分の妻を、ほかの男と寝かせたがるのだろう。

空想が、エスカレートして、空想と現実がごっちゃになり、やがて、現実へと発展していく。その過程において、妻と寝る男にちようどいい、私をみつけたというわけなのである。

二階が子供たちの部屋。一階を夫婦で使用しているらしく、客用に使った部屋に二組の布団が敷かれ、その隣室に、夫婦の布団が二組、ならべて敷かれたもようであった。

私は、そそくさと布団にもぐりこんだ。

X氏の計画がこれから始まるのか、それとも、計画だけで終わってしまったのか、私は、さっぱりわからない。

X氏夫人が寝室にもどってきたのは、かなり時間がたっていた。あとかたづけをし、明朝の仕度をしてから、居間にもどるとすればこれは当然のことであった。

私は、半分眠ってしまった。

隣室の、なにやらあらそっている声に、私

は、はっとして眼をさました。

X氏との約束が頭にこびりついて、完全には寝ていなかったのである。

「だめです」とか、「隣に……」とか、ときれとぎれに聞こえてくる、X氏夫人の声から判断すると、主人のX氏が、夫人に夫婦の行為を強いている気配であった。

「いいから」

「――」

「もう寝てしまったよ」

隣に客を寝かせておいて、羞恥で抵抗する妻を、無理におさえこんでいるならば、X氏は、M的人間でなく、かなりサディスティックな夫といわなければならない。

「さあ、やすみましよう」

かなり強いX氏夫人の声がして、静かになった。X氏は、どうやら、夫人の激しい抵抗にあつて、あつさり、行為に移ることを中止してしまつたらしい。

X氏は、私のことを、どう夫人に紹介してあるのか、ふと疑問に思った。

X氏夫人が、私の珍小説を読んだという話は聞いていない。

階段に足音がして、子供さんの誰かが、トイレに起きてきた様子であつた。

私の興奮は、すでにさめていた。

階段に足音が登っていく。

しばらくして、すつと廊下側の戸があき、

「芳野さん」

とX氏が私の肩をゆすつた。

「えっ」

「行って下さい」

「――」

「隣に行つて下さい」

「まさか」

「妻が待っています」

これはうそ。X氏のつくり話である。

「早く」

だまっている私に、X氏は促した。

私は、そつと布団から立ち上がった。

いきなり隣室のさかいの唐紙をあけるのではなく、いったん廊下に出て、隣のX氏夫妻の寝室に入った。

暗い。

小さな電灯もつけていないのである。

横になって、夫の布団に背を向けているX氏夫人の布団の盛り上がり、暗い中に、ぼんやりと、うかがえる。

外灯が、窓のカーテンを通して、寝室に薄く灯りをこぼしているだけなのである。

私は、X氏の布団に横になった。

急に、息苦しくなった。

X氏夫人に対する期待が、重圧になつて襲つてきたのである。が、この夏、H氏にそそのかされて、H氏夫人に理不尽な行為をいどんだときのような、苦しいほどの胸さわぎは不思議なほど静まっていた。(四十六年十一月号・M的ポルノ紀行参照)

この奇妙な計画がX氏の一人芝居であること、X氏夫人は、どうやら雑誌を読んだこともない様子であること。したがって、私が神酒拝受の強烈な願望を、はっきりと捨てることができたからであつた。

H氏夫人の場合は、こうはいかなかった。

H氏夫人の前で、かつて、私は、サディステインの女王から、神酒拝受をやらされた経験があり、H氏夫人は、私の性癖をよく知っていたから、H氏夫人に対する私の神酒拝受の願望が、誰よりも強かつたため、苦しいほどの胸さわぎにどうすることもできなかったのである。

隣室では、X氏が、部屋のさかいの唐紙に耳をそばだてて、こちらの様子をうかがっているのに違いなかった。

布団からななめに上体をずらし、私は、X

氏夫人のあたたかい背中に顔を埋めるようにしてささやいた。

「奥様」

一瞬、肩がぴくりとしたが、それだけであつた。

「奥様」

「――」

「御主人のいいつけで参りました」

「――」

「御主人から、私のことを聞いていらっしゃいますか」

あたたかい背中にひたいをつけたまま、私は、ゆっくりといった。

「何も聞いていらっしゃらないのでしょうか」

かすかに、X氏夫人が、うなずいたようであつた。

「どうでしょう」

妙な質問であつた。

私の左手がそろそろと、X氏夫人の下半身にのびていった。

その手が、ぎゅっとつかまれた。

「いけません」

かなり、はっきりした声であつた。

「御主人のいいつけに、従ったほうがいいのか……」

私はX氏夫人の背中に唇をつけていった。

「それとも……」

「――」

「奥様のいいつけに、従ったほうがいいのでしょうか」

いきなり、X氏夫人をうしろから抱きかかえるようにして、右手を胸に差し入れると、X氏夫人のふくよかな乳房を、ぎゅっとわしづかみにした。

「あつ」

つかんでいた私の左手を振りはなして、X氏夫人は私を押しつけようとした。

「いけません」

自由になった両手で、すんなりしたX氏夫人をうしろから抱きしめるのは簡単なことであつた。

荒々しいほどに、力強く私を拒絶したH氏夫人とは、体格の差も、その気性の差もあるのかもしれないが、X氏夫人は、私が考えていたより、弱々しかった。

うしろから抱きしめたまま、私は、X氏夫人のつめたい耳たぶを唇に含んでいた。

人妻の香気がどつとあふれて、抱きしめる両腕に力がこもった。

「痛い」

X夫人の上気した頬に唇が触れ、X氏夫人の顔をよじるようにして、私は強引に唇を奪ってしまった。

「むっ」

眼を閉じ、齒をくいしばり、全身に力をこめて、X氏夫人は、私の無遠慮な舌を拒絶していた。

「もっとやわらかく、力をぬいて」

硬直したX氏夫人に私は、ささやいた。

「唇を半分ひらいて下さい」

「――」

「これじゃ、つまらない」

と、ずっとX氏夫人の全身から力がぬけて唇が、ゆるやかになった。

舌が、X氏夫人の熱い舌をさぐりあてた。力強く唇を吸った。

「うっ」

X氏夫人の舌を、もぎ取るように吸った。隣室とのさかいの唐紙が、少しあいたようであつた。

聞いているだけでは、がまんできなくなつたのか、X氏が覗いている気配であつた。

X氏夫人は眼を閉じたまま、私の顔を見ようとはしない。

私はX氏夫人の小さな乳房にむしゃぶりつ

いたものの、どこまでX氏夫人を自由にしたいのか私はX氏にきいていない。

「妻と寝てもいいのですよ」

とX氏は私にいった。

それはいい。

私がいいたいのは、どこまで荒々しく自由に、X氏夫人をあつかっていいのか、ということなのである。

私流にまかせてくれるならば、私はすぐにも電灯をつけてしまおう。

私は、X氏夫人の顔をはっきり見たいし、X氏夫人を全裸にして、すみからすみまで見てしまいたい。

そこまで、X氏は許しはしないだろう。

M的人間にも限度はある。

「電灯をつけてもいいですか」

と私はX氏夫人に、さぐりをいれた。

X氏夫人が、いやいやをした。

当然であろう。

私の唇は、少しずつX氏夫人の顔から遠ざかり、下へ、下へとずり落ちていった。

夫人との姦通を勧めてくれるのなら、気ままに、自由に夫人と遊ばせてほしいと思うのである。

限度を考えて行為にうつしていくと、なん

となくどこちなく、リズムにのれないで、中途はんばな行為に終わってしまう。

夫にきがねして、夫人も自由にふるまえない。殺しているから、燃えてこない。

燃えたとしても、自分から、すぐ消してしまふ。

不協和音が鳴りっぱなしでは、美しい行為がつかれるものではない。

私の意志に反して、萎えていく身体を感じても、どうすることもできない。

夫の眼の前で、その妻を犯しているというサディスティックな感興だけでは、興奮はすでに遠のいているのである。

だまったまま、X氏夫人は、私のなすがままに、身体をこわばらせている。

X氏夫人の反応が、私の唇にひしひしとつたわってくる。

が、それだけであった。それ以上はどうしても進展しないのである。

「もうかんにんして」

私の両手をつかんで、X氏夫人がいった。

「やすみましよう」

行為は、終わってはいなかった。しかし、それまでであった。

これが限界であった。

私は、X氏夫人から、はなれた。

寝室から廊下に出た。

X氏とまた入れかわらなければならない。

私がX氏にきがねしX氏夫人が夫にきがねしたとしても、それは当然のことであった。

きがねしないで、初対面の私とX氏夫人が荒々しく行為をし、燃えてしまったなら、M的人間であったはずのX氏は、完全に単なる男にもどり、単なる遊びですまされない、妙な重苦しいムードになる危険性は多分にあるのである。

その線を見つけ、その線から越えないほうが、M的人間の、ソフトなM気をこわさないとは私思うのである。

そこが、むづかしい。

自分の欲望を殺してかかるのだから、さっぱりしないこともあるだろう。

それがプレイだと思えば、いいのである。

X氏と私がいれかわったのは、X氏夫人はすぐわかったそうである。

夫の足音、夫の体臭、夫の気配に、妻は敏感なのである。

「つまらない、なんていうものだから、急に力がぬけてしまつて……」

翌日、わかれるとき、X氏夫人は私にこう

いったのである。

夫が計画したアブノーマルな行為に、妻として、やはり従わなければいけないと思ったのか、夫以外の男と浮気をしてみたい気持ちがあつたのか、それとも、つまらないと私にいわれて、急におかしくなってしまったのか、私にはよくわからない。

X氏と連れだって、私も出勤した。

休んでもよかったのだが、X氏は、残って遊んでいらっしやい、とはいわなかったのである。

たとえ勧められても、ことわるのが、エチケットだろうし、私も会社を休む気もなかったし、寝不足で、くらくらする頭をたたきたき、満員電車にゆられたのであった。

SMプレイのルールは、いろいろあると思う。そして、そのルールは、相手の気持になつて考え、気がねするところに、はじめて成立するように思えてならないのである。

「いかがです。少しは、M的満足を感じましたか」

吊りかわにぶらさがりながら、私はX氏にいった。

「久し振りに興奮したよ」

とX氏はいった。

「今朝、古女房が、とても綺麗に見えた」

私は、うなずいた。

「また遊びに来て下さい」

「有難う御座居ます」

「妻も、芳野さんなら、いいらしい」

「光栄です」

朝から、妙な会話だが、こればかりは仕方がない。

「だけど、芳野さんは興奮していなかったと妻はいつていたよ」

「えっ」

「可愛いかったって」

「いや、参ったな」

X氏夫人のしなやかな、やわらかな指の感触がよみがえった。

プレイのルールに忠実なもの、あまり面白いものではない。

十一月四日のことである。

Y 夫妻と

もう書いてもいいだろう。

バーをしていたから、私の妻は比較的、自由な考えを持っている。

私が書いているものも平気で読むし、夫婦生活に神酒拝受を取り入れたこともある。

布団の上で飲ませるのが器用なのである。

私のバーの常連であつた誌友の方は御存知だろうが、やせているほうではない。

夜の生活が続いていた頃、昼からでも、アパートに遊びにくる客がいた。

あまり親しくなりすぎて、客とはいえない仲になる。

「ダンナに悪いな」

といいながら、妻のところに遊びに来るものもある。

「このひとが気にするものですか」

と妻は笑う。

「だって、ヤキモチを焼かれちゃ困る」

「ヤキモチを焼く人ならいいのだけど」

客は信じない。

私は二人を置いて、さっさと外に遊びに出してしまう。

昼まで、客とつきあって、気がねなどしたくはない。

本来、客商売にむいていないのである。

妻と客が、どんな関係になろうと私は気にしたことがない。

気にするくらいなら、妻と二人でバーなどやっていられるものではない。

どうやら、そんな性格があるらしく、気に

ナミオ M 画廊 『散歩後の御礼』 春川 ナミオ



しないことが冷たいと、いわれる。

どうやらヤキモチを忘れてきたらしい。

M 的人間とすれば、こんな性格は、あまり面白くない。

やはり、ヤキモチを焼いて、M 的感興に浸ったほうが、Mらしくていい。

不意にアパートに帰って来た時、とんでもないシーンに、ぶつかったことがある。

遊びに来た男の顔の上に、パンティを下げた妻が、坐っているのである。

男は完全に、妻の尻に圧殺されている。

顔が、ほとんど見えない。

「飲ませてくれって、うるさいのよ」
振り返って妻はいった。

この男も、私の珍小説に毒されたのかもしれない。しかし……

「あまりヘンなことを教えるなよ」

「教えないわよ」

「おまえが無理に飲ませたのところがうか」
「へ、へ」

「しょうがねえなあ」

どうやら、妻のいたずらのようであった。

「かわいいそうに」

「喜んで飲んでるわよ」

男の口に放尿しながら、妻はいった。

妻の尿を飲みにくる男に、奇妙な親愛の情を感じたから、これまた不思議であった。

「うまいかねえ」

「おいしいです」

と真面目な顔で、その男はいった。

「人妻と思うからだろう」

「――」

「俺も人妻なら、それだけで、おいしいと思うな」

「ねえ、ダンナ」

と、またまた真面目くさった顔で、男はいった。

「本当にヤキモチを焼かないのですか」

「ああ、焼かないよ」

「そうかなあ」

「おかしいか」

「そりゃあ、おかしいですよ」

「おかしいね」

あっさりしすぎて、M 的人間から失格しそうな気配である。

「まあ、女房なんてものは、空気みたいなものだからな」

「あら、おトイレ、来ていたの」

買物から帰った妻が男にいった。

Y夫妻との結びつきは、私が、Y夫妻に招待され、てつて的にY夫人の便器にされたことにある。

Y氏に飲ませているので、Y夫人は慣れているのである。

飲ませることが、かなり普及していて、現代では、もうアブノーマルなどといえないのかもしれない。

夏だったから、冷たいビールで雑談していた。紗の着物に、アップのY夫人は、私の好みであって悩ましい。

私はY氏にヤキモチを焼いた。(私がヤキモチを思い出すのは、こういう場合である)

ほっそりした、柳腰もなよなよしたY夫人が、中年肥りのY氏に抱かれるのが、なんとなく、いたましい。

Y夫人にY氏は、せつせとビールを注いでいる。

「まだかい」

とY氏が夫人にいった。

「まあだ」

甘い声でY夫人が答えた。

ビールを注ぐ。Y夫人が、おいしそうに飲む。酒に強いらしい。

「まだかい」

「まあだ」

まるでカクレンボである。

また、Y氏が夫人にビールをすすめる。

そのうちに、

「あなた」

とY夫人が夫にいった。

「おまたせしました」

とY氏が私にいった。

「えっ」

「妻のを飲んでいただきます」

「はあ」

「どうやって飲みますか」

「飲むって、ここですか」

「そうですよ」

「今」

「勿論」

おかしそうにY夫人が笑った。

「さあ、どうしましょう」

Y氏が椅子を持って来た。

坐るところが洋式便器と同じ型になっている。病院の外科病棟などでよく見られる、便

所用の椅子である。

「廊下に寝て下さい」

とY氏は私にいった。

「芳野さんがいらっしゃるといいうので、朝から、がまんしていたらしいから、こぼしてもいいところで、やりましょう」

「うそ」

とY夫人が笑った。

ひやっとする廊下に私は寝た。招待されたら、素直に指示に従えばいいのである。

便所用腰掛け椅子が顔の真上に置かれた。

Y夫人が頭のあたりに立った。

紗の薄物の裾が、ひるがえった。小さなお尻が、すっぽりと椅子におさまった。

目にしみるような真っ白なお尻であった。

「お口を、お開け遊ばせ」

とY夫人が私を見下ろしていった。

口を開けるのも忘れて私はY夫人のあまりにも美しい、お尻にみとれていたのである。悲しくなるようなほのかな繊毛であった。

私は、ただ口をあけて、のどを鳴らし、息をはずませて、飲み続けるだけであった。

「さすが、上手だ」

とY氏が感心していった。

「ちっともこぼさない」

「お上手だわ」

とY夫人が甘い声でいった。この甘い声には弱い。

こうもほめられては、ますます、こぼすわけには、いかなくなる。

これも手なのかもしれない。

またビールを中心に、雑談が続く。

しばらくして、また、

「あなた」

とY夫人がいった。

「うむ」

とY氏が唸った。

「今度は、どういうスタイルが、いいかな」

庭を見ていたY氏が、

「ちょっと庭に下りて下さい」

と私にいった。

縁先の手水鉢の側に立ち、掛樋から落ちる

水を指さして、

「これにしましょう」

掛樋の水をとめ、Y氏は夫人に、めくばせ

した。

自然石でつくった手水鉢に、竹の樋で水を落としているわけだが、その竹の樋の上の方にY夫人が姿を消した。

ちよっとした植込みの繁みにさえぎられて

Y夫人の微笑を含んだ顔しか分からない。

「さあ、水口に口をつけていて下さい」

あわてて水口に顔を寄せ、口をつけようとすると、ささやかだが、竹の掛樋に、すっと流れてきた。

「早く、口をつけて」

とY氏が叫んだ。

竹の掛樋をまたいで放尿しているであろうY夫人の、ころころと、ころがるような笑い声が耳に、とどいた。

水口に口をつけて、一生懸命に飲んで私の姿が、おかしかったのかもしれない。

そのY氏から、

「夫婦交換を試みませんか」

と誘われたのは、翌年の夏である。

夫婦二人だけの別宅で遊ぶのだから、誰に

気がねするわけではない。

妻に話をしたら、

「Yさんなら、いいわ」

という。

妻の好みにあったわけである。

妻を連れてY氏の別宅におじゃましたが、私一人で遊びに行った場合と、Y夫人の態度が、まるで違うのである。

妻もなんとなく、ぎこちないが、Y夫人は

それ以上に緊張しているように、見受けられるのである。

口数が特に少ない。

Y氏も妙にテレている。

「では始めましょうか」

「やりましょう」

てなぐあいには、いくわけがない。

妻がそこに居るというだけで、なんとなく遊びづらいためである。

妻を意識しないわけには、いかない。

気軽にY夫人にも冗談が、いえない。

妻の前では、一人でY夫妻のところに遊びに来て、気軽に裸になるというわけにもいかないためである。

気分を、ほぐす手段が必要であった。

「何か、いい考えがありますか」

と私はY氏に聞いた。

Y夫人一人なら、Y氏と私と二人で、さっさと裸になれば、自然にプレイが始まってしまふ。それが、私の妻がいるというだけで、

Y氏も私も、どうしても不自然で、裸になれないのである。

裸になる、きっかけをつくらなければならぬ。

「意外に、むずかしいですな」

とY氏が唸った。

「異分子が一人いますからね」

と私はいった。

「いやいや、せっかく奥さんが、いらして下さったのだから、このまま、お帰しはできませんよ」

私だって、Y夫人と愛しあう機会をなくすわけである。

とりとめない世間話が続き、酒席が、ゆっくりと時間を経過していく。

「私の秘書を呼びましょう」

とY氏がいった。

「秘書」

「Mの女でね、たまに家に呼んで、三人で遊んでいる女ですよ」

Y氏が会社に電話をしたようであった。

「すぐ来ます」

とY氏は私にいった。

美人秘書というわけではなく、若い女性でもなかった。

「知り合いの未亡人でね、相談を受けたので仕事を手伝ってもらっているのです」

とY氏は紹介した。

手伝ってもらっているのは、仕事ばかりでなく、Y夫妻の夜のSMプレイにも、刺激剤

として、たまには登場するようであった。

「脱ぐんだ、恵子」

とY氏は秘書の未亡人にいった。

Y夫人の前なら、裸を見せたことがあるとしても、今日は、前に見知らぬ客が二人いるのである。

ためらうかと思ったが、背を向けて、Y氏の命じるままに、ブラウスを脱ぎ、スカートをとった。

年令のわりには、若い人好みの下着で、電話を受けてから、新しいのに着替えたのかもしれなかった。

身体を、こごめたまま、パンティをとり、胸を両手でおおったまま、背を向けていた。ほっそりした身体だが、裸になると意外に肉がついている。腰骨が見えるほど、やせているわけではない。

「芳野さん」

とY氏がいった。

「相手をして下さい」

私は、うなずいた。

妻の顔を見ないで、恵子と呼ばれた、初対面の、それも、全裸の女に近寄った。

「隣に行きます」

そうささやくと、恵子を両腕で抱きかかえ

た。Y氏が立ち上がって、隣室の境の唐紙をあけた。

夏支度だが、夜具が二組、夫婦交換のために用意されていた。

裸になるのに、何のためらいもなかった。しばらく抱き合ってから、

「顔をまたいで、しゃがんで下さい」

と私は恵子に、いった。

唐紙は、あけたままである。三人の視線は無視しようがない。

少しは、刺激的な態位、プレイが必要であった。

夜具から、のろろと立ち上がった恵子はなんとなく、やりにくそうであった。

ただ抱き合っているだけならば、他人の視線も、さほど気にならないのだろうが、顔をまたぐという行為や、顔にしゃがむという行為は、あまりにも羞恥にみちた態位といわなければならぬのである。

顔をまたいだ恵子の両足をにぎって、私はさすっていた。

「しゃがんで下さい」

恵子の位置が、三人の観客の真正面になるように身体をずらして、私は恵子にいった。

うつむいたまま、恵子はしゃがんだ。

わりに、濃いほうであった。

そして、わりに、多汗であった。

恵子の吐く息が荒くなった。

「苦しい」

と私は恵子の尻をつかんで持ち上げるようにしながら、恵子を上目使いに見た。

「もう少し、お尻を浮かして下さい」

「――」

「そう圧迫されては、窒息してしまう」

恵子の上半身が、私の顔に坐ったまま、がくりと前に折れ、両手を前についた。

心持ち、恵子の尻が浮いた。

私の顔は、すでに恵子の汗でびしょびしょであった。

「オシッコ、できますか」

と私は、恵子にいった。はっとした様な顔で恵子は私を見下ろした。

「飲みたいです」

と私は、ささやいた。

「恵子さんのオシッコを」

「――」

「汗はもう吸ってしまった」

私は、恵子の尻に、ちよっとキスをしながら言葉を続けた。

「もう、同じことですよ」

恵子が、うなずいた。

恵子の下腹部が急に脈を打ち始めた。

恵子は声を殺していた。

ただ、息を吸い込むときと吐くときに、なんともしえない呻きが洩れていた。

「もう少し、お尻を持ち上げて」

観客を忘れるところだった。

吸いついたままなら、こぼすことはない。

夜具の上では、そのほうがいいが、それでは観客が、何をしているのかわからない。

恵子は、四つ這いになって私の顔を、またいでいる恰好になった。

雫が現われた。

私は、口を開けた。雨雲が、急速に拡がった。

すすっと、一条の尿流が、私の口に流れ込んだ。

隣の夜具で、Y氏が裸になっていた。

が、相手は、妻ではなかった。

Y氏は、Y夫人を丁寧に裸にし、まるで宝物でもあつかうように、静かに愛撫し始めたのである。

妻だけが、二組の狂演を、酒の肴にして、ビールを飲んでいた。

私は、恵子を顔にまたがらせたまま、うしろむきにさせ、Y夫妻の行為に顔を向けていた。

ろむきにさせ、Y夫妻の行為に顔を向けていた。

Y夫人の、か細い両足が、Y氏のがっしりした肩に持ち上げられていた。

殺していた声が、少しずつ高くなり、Y氏の舌技が好妙になればなるほど、Y夫人の上半身が、ひくひくと蠢きを増していた。

私は身体をずらして、Y夫人に近づいた。

恵子をまたがらせたままの行動は不自由だがそれだけに刺激は強かった。

Y夫人の手を、腕をのばしてにぎった。

やわらかな小さな手がにぎり返してきた。

Y夫人の指の感触が、Y夫人に対する思慕を、つのらせた。

私は、ここでまた、Y氏にヤキモチを焼いたのである。

Y夫人のしなやかな指を、私は口にふくんだ。恵子が、溜息をついて、立ち上がった。

私の顔に背を向けたまま場所を替え、腰を落としてきたのである。

「うっ」

私は驚いて呻いた。

瞬間、まいってしまいそうであった。

初対面の女というだけで、興奮度は増している。それに、Y夫人の指をいじっていると

いう刺激も手伝っているのである。

まいてってしまったては、せっかくのムードに水をさす。生理とは、いやなものである。

女は、そういうことがないから、男より女のほうが快楽の持続性が強いことになる。

男は、とにかく、がまんしなければならぬ。

「痛い」

とY夫人が私に、いった。Y夫人の指に齒を立ててしまったようであった。

Y氏が立ち上がった。Y夫人が、身をひるがえして、私の顔にまたがった。

Y氏から、バトンタッチしたことになる。「がまんできないの」

私の顔を熱いやわらかい柔肌で密閉したまま、Y夫人は私を見下ろしていった。

「主人の口にしてしまう習慣がついているで

しょう」

「――」

「だから、してしまおうよ」

私は、うなずいた。

私の口に、なまあたたかい奔流が、不意にひろがった。

Y夫人がY氏からはなれて、私の顔に跨がったのは、放尿するためであった。

「うっ」

思ったより激しい尿流を注ぎかけられて、私は首を振った。

布団の上であることを忘れそうであった。妻が、Y氏に抱かれたようであった。

「恵子さんのを飲んだわね」とがめているようなY夫人の声であった。

「誰のでもいいの」とどまることを知らないY夫人の尿流に、

私は返事をするこもできずに、Y夫人を見上げていた。

Y夫人が恵子と交代した。

二組の夫婦が、相手を違えて、二組の夜具の上で脈動した。

恵子は、だまってビールを飲んでいた。

「パイプカットしてあるから、大丈夫ですよ

奥さん。ですって」

帰路、妻は私に笑いながら、いったものである。

子供が生まれて妻は、女より母になったようである。

子供が生まれたのを機会にバーをやめ、生まれてはじめてのサラリーマン生活を、私は楽しんでる。

が、私の性癖は余り変わらないようだ。

誌友の奥様から神酒拝受を受ける光栄があるのは、年のせいかもしれないと思うようになった。

夫婦交換にせよ、夫婦ぐるみのプレイにせよ、それがM的発想であるにせよ、子供の遊びではない。

すべてが大人の遊びであり、それに関連したトラブルがあつてはならないのである。

天星社刊

△限定版グラビア写真集▽

在庫案内

山原清子『刺青の魅力を探ぐる』一部一〇〇〇円（送共）略号「美7」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集『女王様に飼育される日々』一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生体のかずかずを網羅した写真資料。

◎この写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。



△M女通信▽

私は誘拐されたい

高^{タカ}村^{ムラ}浩^{ヒロ}子^コ

私の今住んでおりますアパートは、郊外電車の駅から、私の足でゆっくり歩いて約九分ほどですから、余り不便ではありませんが、勤めております市内の繁華街へ出ますのにはやはり、小一時間はかかってしまいます。車でこの前、お店から送ってもらった時には、二十分程で来れた距離ですが、この駅からターミナルへ出て、そして、もう一度、地下鉄に乗らなければならないからです。

アパートから歩いて五分位で市バスの停留所があるのですが、交通停滞で遅れることが多くて、乗り換えの手数は省けるものの、余り利用したことはありません。

私の住んでいるアパートは文化住宅と呼ばれる軽量鉄骨の二階建てで、建ってから、まだ一年ほどだそうです。もう五年も六年もたったように古びて、いたんでいます。一階は10号室から19号室まで、二階は20号室から29号室まであります。がたびしの硝子戸を開けて入ったところが三平方メートルあるかなしの狭い玄関で、いつも泥がざらざらして、はき古した安もののスリッパが、二、三足、ぬぎすててあります。

階段を上って、端から三軒目が私の部屋です。靴を玄関でぬいでおくわけにいきません



ので手で持って部屋へ入ります。手に荷物のある時などは、一旦、部屋へ入って荷物を置き靴を取りに下へおりののですが、その間にも靴が盗られはしないかと心配します。でも私の靴なんか、誰も取ったりしませんわね。失くしてしまったら、私にとっては大変なことなのですが。

部屋は四帖半が一間しかありません。廊下に面した硝子戸の前に、猫の額ほどの台所があります。台所といっても水道の蛇口が一個ついていて、流しがあるだけです。人が二人すれ違えるくらいの板の間の向こうが、四帖半の畳の部屋です。私の前には、どんな人が住んでいたのか、とどこどこに、煙草の火

の焼け焦がしのような穴が、ぽつんぽつんと残っている畳が薄汚れたままです。

台所の板の間とお部屋のあいだに私は花模様のカートンを吊っています。そうしないと換気のために硝子窓を開けると、廊下を通る人から部屋の中が、まる見えになってしまうのです。勿論、トイレもお風呂もついていません。裏の硝子窓を開けると、玩具のような手摺がありますが、向こうもアパートのような建物らしく、手の届くほどの近さに目かくしの板塀がありますので、昼でも光線がさしませんし、曇った日は薄暗いです。

冬は寒々として、うすい硝子一枚を通したいてついた外気が身にしむ思いがしますし、夏は、蒸し風呂に入ったような暑さで、扇風機一台を買うお金が惜しくて、ずい分、汗を流したものです。お風呂は、まあ近くのお風呂屋へ行くとしても、トイレが離れていて、破れたガラスがそのまま、夜なんか、寒い風に思わず、ぞっとします。

貯金を全部、下ろして権利金にまわしたらもう少し、ましなアパートへ移れるのですが荷物も何一つない私ですから、これぐらいの所が適当かもしれません。来春、妹が上阪してくると言っていますので、そうなれば一緒

に出し合って、もう少し便利で綺麗で、せめて二部屋はある、アパートへ移りたいと思っ

ております。

今までお手伝いさんでりましたお家は、



立派な本建築で私が一日中、ずっとお掃除しておりましたから清潔で美しく、住み心地も満点でしたが、今、一人で自由に暮らしてみても自由というものは有難いけれど、一人暮らしは佗しいものだ、旦那様や奥様は、今頃どうしておられるだろうかと考えることが多いのです。女木島の故郷からはじめて大阪へ出てきた時は、当座の間、故郷の両親のことや姉妹のことが思い出されて仕方がなかったのですが、今は、その方は遠く霞んでしまったようで、むしろ旦那様や奥様のことが懐かしく思い出されてならないのです。

お別れするとき、困っ

たことがあったら、いつでも又おいでなさいよ——と言って下さった奥様。もう一度お逢いしたい。でも、二十一才の一人の娘が、大都会にぽつんと暮らしていたら、誰でも淋しいんだわ——と思い直しています。

このあたりは夜になると真暗で、ほんとうに淋しいです。でも私は、お勤めが余り晩くならないので、そんな真暗な夜道を歩かなくても済みます。部屋の両側は壁でお隣に挟まれています、人が住んでいるのか、いないのか、いつも静かです。

夜は私は一人で本を読んでいます。テレビを持っていませんので本を読んでいるより仕方ないのですが、私はテレビを見るより本を読んでいる方が好きです。そして時折は日記を書いたり、このように原稿を書いたりしております。

一人暮らしの夜というものは淋しいもので、全世界に自分が、たった一人だという気持がひしひしと迫ってきて、自由に何でも自分の好きなように出来る筈なのに、何一つ自由に出来ない自分を見つめております。いつ何どき、御用を言いつけられるかしれない、あのお手伝いさんのときの方が、もっと自分の思い通りにやり、もっと自由な空想を働かせて

いたように思います。

一人になったら、ああもしよう、こうもしよう、考えていたことが、何一つ出来ないのが淋しいです。

今、私は一人暮らし。二日でも三日でも、いや一週間でも十日でも、私を連れ出して遠くへ旅行して閉じ込めてでも、責め続けて欲しいと思います。夜毎に、私を襲い、そして迫ってくる被虐の念は、私の心の隅を攻めたててマゾの血を沸き立たせます。

△私をどこか遠くへ連れて行って、何日でも何日でも監禁して責めて下さい▽

そうお願いしましたが、今は忙しくて駄目だと断られました。

ああ、力強い男性の手で私の全身が、くたくたになってしまふまで責め抜かれてみたいと思います。どんなひどい責めでも、どんなみじめな羞恥責めでも、喜んでお受けしたいと思います。

どうか、この私を、このお城から連れだして、人目のつかない牢獄にとじ込めて下さるプリンスは、いらっしやらないでしょうか。

私は今になって、自分が、今までの自分が至って我ままだったということを反省しております。マゾにしたって、自分の空想や夢ば

かりを追っていました。今までだったら、自分の前に現われる男性を、私なりの空想で理想を描いておりました。決して、誰だっていいということはないのです。私がこの人こそと思っている方は、忙しくて、私ばかりを相手にはして下さらないのです。

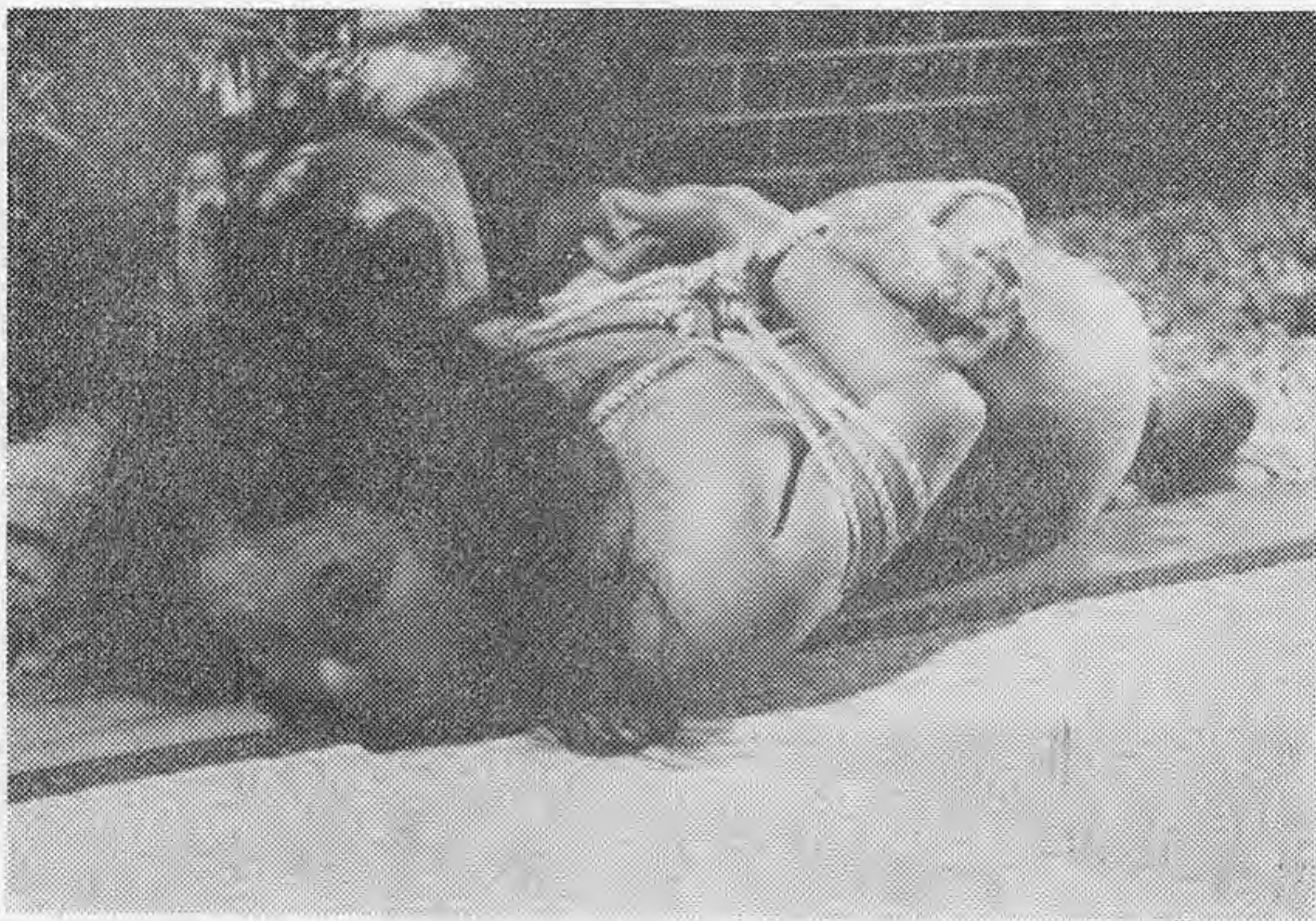
だから私は、空想の中の理想ばかりを追

わないで、△誰でもいい。私を責めて下さるという方なら、私を責めて下さい▽と、お願いしたくなりました。

S男性の方に、お伺いしたいと思います。

貴方がたは、若い女性であつたら、誰でもいいから責めてみたいと思われませんか？ よく読者通信で、『何才から何才までの女性の方





に責めさせて下さい』という
ような文面に接しますが、女
性でさえあれば、誰でも彼で
もいいのでしょうか。

私は違います。私はやっぱ
り、この方にだったら、どん
なひどい羞恥責めを受けても
どんな責め折檻を受けても本
望だ。いや、身も心も捧げて
も悔いないという——理想像
があります。ですから、こん
なにマゾの炎に身を灼いてい
ながらも、嫌だとなれば、途
端に冷えきってしまったて、ど
う心の中で炎の火を燃え立た
せようと思っても駄目なので
す。

こんな私って我儘なのでし
ょうか。努力しても本能的に
駄目なのです。嫌な相手にだ
ったら、手を握られるのだっ
て、トリ肌が立つようで、と
てもたまらないのです。好き
な相手の人にだったら、たと
え、どんなにいじめられても

構いません。普通だったら、痛くてたまらな
いようなことをされても、それは痛いどころ
か、最大の愉悅を私に与えてくれます。羞か
しめを受けても、それは私の心の奥底から湧
き上がってくる熱い炎を益々燃えあがらせ、
とても聞くにたえないような言葉でさえ口に
出して絶叫します。

たとえ、汚れた素足の指を口の中へ押し込
まれても、いや、押し込まれなくても、舐め
よと命令されただけで私は嬉々として足の指
を、しゃぶりに行きます。ですが、嫌な人と
であつたら、私はお喋りするのにも耐えられず
無言の行を続けます。私がM女であるのか、
そんな人は不思議に思うでしょう。無口で、
しかも決して愛想もよくない、とっつきが悪
い娘になってしまふからです。

それは私の我儘からかもしれませんが、如
何に努力しても、心が燃え上がってこないの
ですから、どうしようもありません。逆に努
力すればするほど、嫌悪の感じがひどくなっ
て私のマゾ心は不感症になってしまいます。

好きな人にだったら、あれほど熱狂的に燃
えあがったM心理が、どういうわけで、こん
なに冷却してしまうのでしょうか。それは、
何故だか、私自身にもわかりません。私は男

性のSの方にも、きっと、こんな心理がおありだと思うのですが、もしないとすれば、これは私だけの我儘でしょうか。

お仕事が終わって、人の気も火の気もない自分のお部屋へ帰ってきますと、冷々として寒さが身にしむようです。ガスストーブがないので台所のガスコンロを部屋の真中へ持ってきて暖をとります。頭から毛布をかぶってラジオを聞く時もあります。食事は外で済ましてくる時もあり、自分で料理して食べる時もあり、半々ぐらいですが、冷蔵庫を持っていませんので、保存しておくことが出来ず、少食な私の一回分一回分を調理したり材料を買ったりするのが面倒なので、デパートの食料品売場で、つい買ってきたりします。

二十一才の青春を楽しむといっても、一人暮らしは佗しくて淋しいものです。

奇クの五月号で、始めて自分の書いた告白『被虐こそ私の夢』という文章を載せてもらった頃は、まだまだ幼いながらも夢があったような気がします。生まれて始めて出てきた大都会に接して、今はこうだけれど、いずれはこんなになるという、大きな夢が胸いっぱいにふくらんでいました。その時に書きましたように八山の彼方の空遠く、幸い住むと人

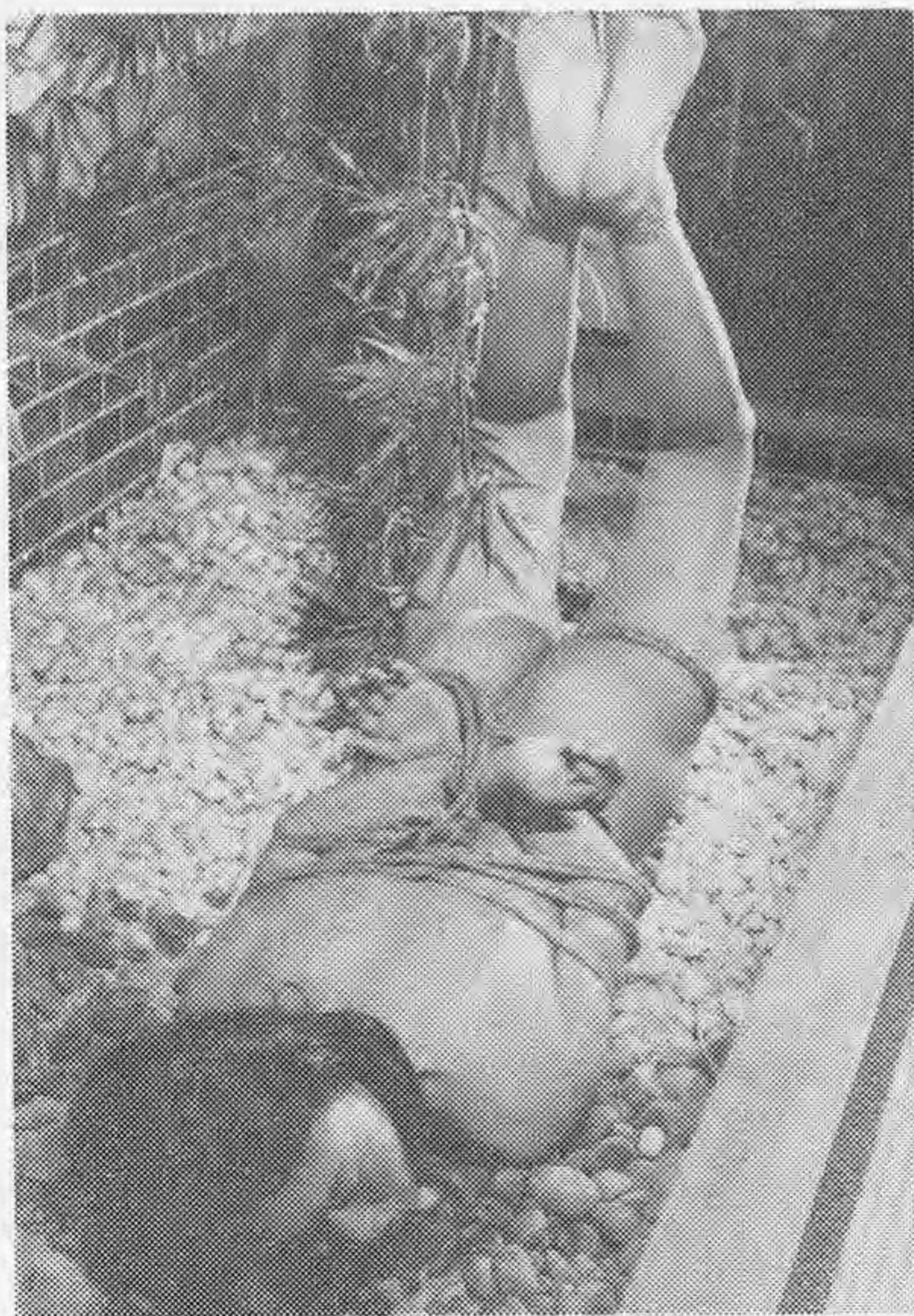
の言うVという詩を誦んでは乙女心を、いたく揺り動かされていました。

山の彼方には、私を幸せにしてくれる人なものVかがあるという漠然とした期待と空想が虹色のベールに包まれながらも、私の夢の中にあったのです。

でも私は、空想癖の強い、またそれだけ、

好悪に対する識別反応も非常に強い乙女でした。しかも、空想と妄想の中に生きるマゾ癖が少女時代から私の心の中に芽生えていたのです。こんな二十一才の女性を幸福にしてくださる方って、いらっしゃるでしょうか。

二月号では『プレイに徹したい』という大変、思い上がったような題で告白を書かせて



いただきましたが、この一年間で、私はいくらかでも成長しましたでしょうか。三年半もお勤めしたお手伝いさんをやめて、一人でアパート住居をしてみても、今までの自分は本当に温室暮らしだったと思うようになりました。休みも余りなかったせいもあって、歩きまわるといふことも殆どなかったのですが、この頃は、お友達やお客さんと一緒に、京都や奈良それに神戸あたりまで、よく行くようになりました。先日、神戸のさんちかたうんへ連れて行ってもらって賑やかだったのに驚きました。神戸って、大阪とは空気も人種も違うのかと言って、一緒に行った人たちに笑われました。都会へ出てきて、もう足掛け五年になろうというのに、私はまだまだ田舎者なのでしょうか。

小さな机に向かって蒲団をかぶりながらエンプツを走らせておきますと、指の先が冷たくなって、時々胸の間にに入れて暖めないことには、手がかじかンできます。薄いガラス一枚をへだてた外は、ひゅうひゅうと夜の寒い風が吹き荒んでいます。

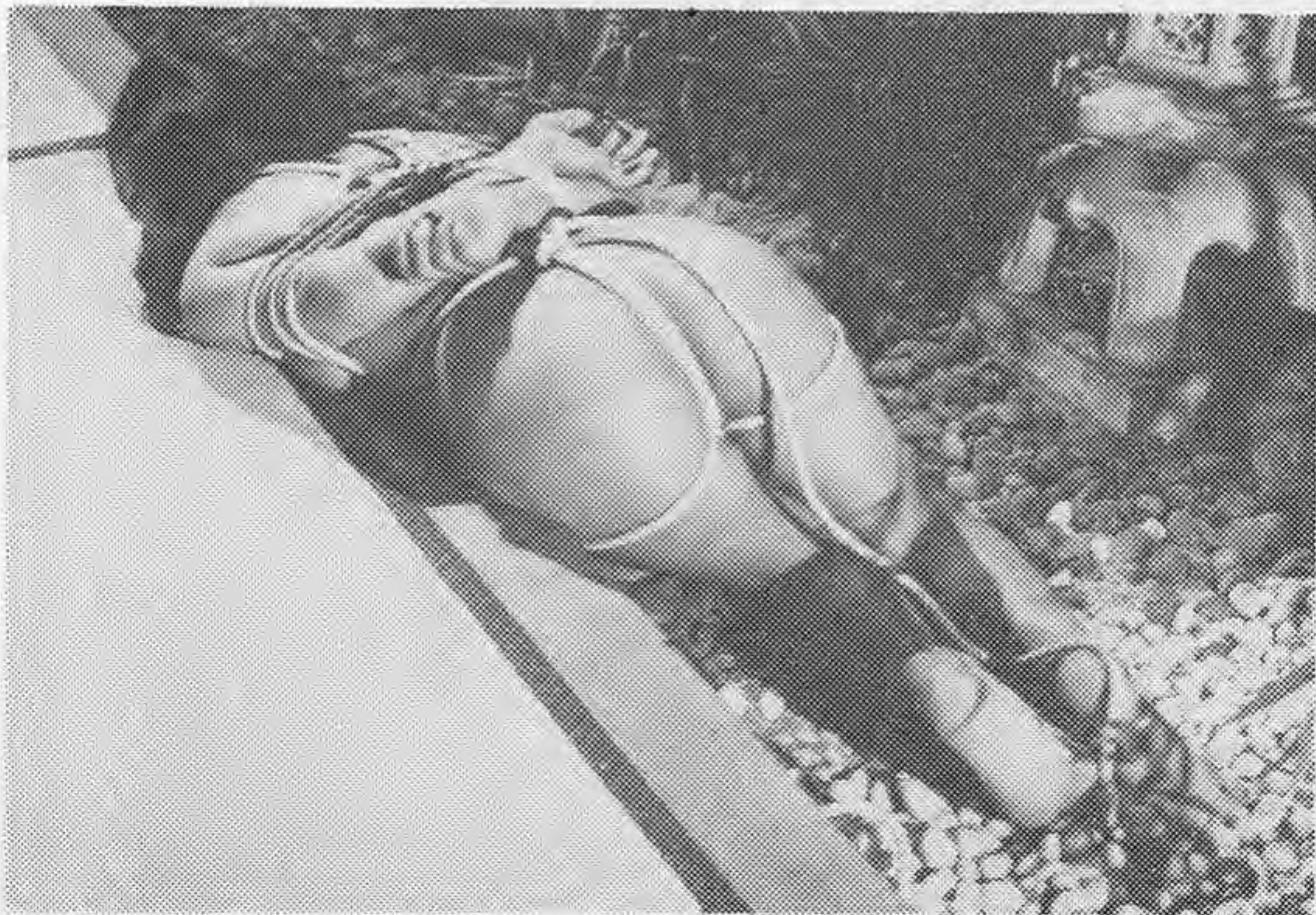
十二月も半ばを過ぎて、街にはジングルベルの歌が響いています。私には明るい年の暮ではなさそうです。せめて、この原稿を奇

クの編集部へ送って、もし載せてもらえるものなら、いくらかの原稿料が頂けるといのが楽しみです。果たしてこのような二十一才の娘のエンプツ書きの世迷言など、真面目に取り上げて頂けるものやら自分では、さっぱり自信はございません。

先日届けて頂いた二月号を読んでおきますと、読者通信で（神戸市・責め男）様のお便りが目にとまりました。

「M女通信を拝見し早速にペンをとりました」と書いておりましたが、私に対してお書き下さったのでしょうか。もしそうだとしたら、神戸市という地名と共に、非常に懐かしく、股間縛り、開股縛り、ムチ打ち、パイプ責め、浣腸責め、剃毛などの文字も、非常な感動を以て読ませて頂きました。

空想力の旺盛な私は、こん





な開股縛りとかパイプ責めとか、流腸責めという文字を読んだだけで胸がわくわくし、妄想が雲のように、もくもくと湧いてきて、自分自身がそのストーリーの中のヒロインになってしまうのです。ですから、どうぞ、ひどい責めは好みませんか、体に傷あとの残るような責めは嫌いですとはおっしゃらずに、私の心も身体もメチャクチャになるまで責め抜いて下さい。

ただ、さっきも書きましたように、私のマゾの心が燃え上がるような、お膳立てを是非して下さいませ。私がそのムードに酔ってM心が最大にかき立てられておりましたならば噛みついて下さって歯ガタをつけて下さっても、ムチで血のにじむ程ぶって下さってもいいのです。そうでないと、折角の私の大好きな流腸責めやパイプ責めも、私のM

心が燃え上がっていない時でしたら、とても愉悦に、つながらないのです。

私の我儘かもしれませんが、どうか私の夢を、かなえてやって下さいませ。

神戸——は、私の故郷である女木島からは高松へ出て、高松港から神戸港まで関西汽船や加藤汽船の船便が通じております。私は乗ったことはありませんが、只今はフェリーや水中翼船が出ているそうなので大変早く便利に行けるそうです。

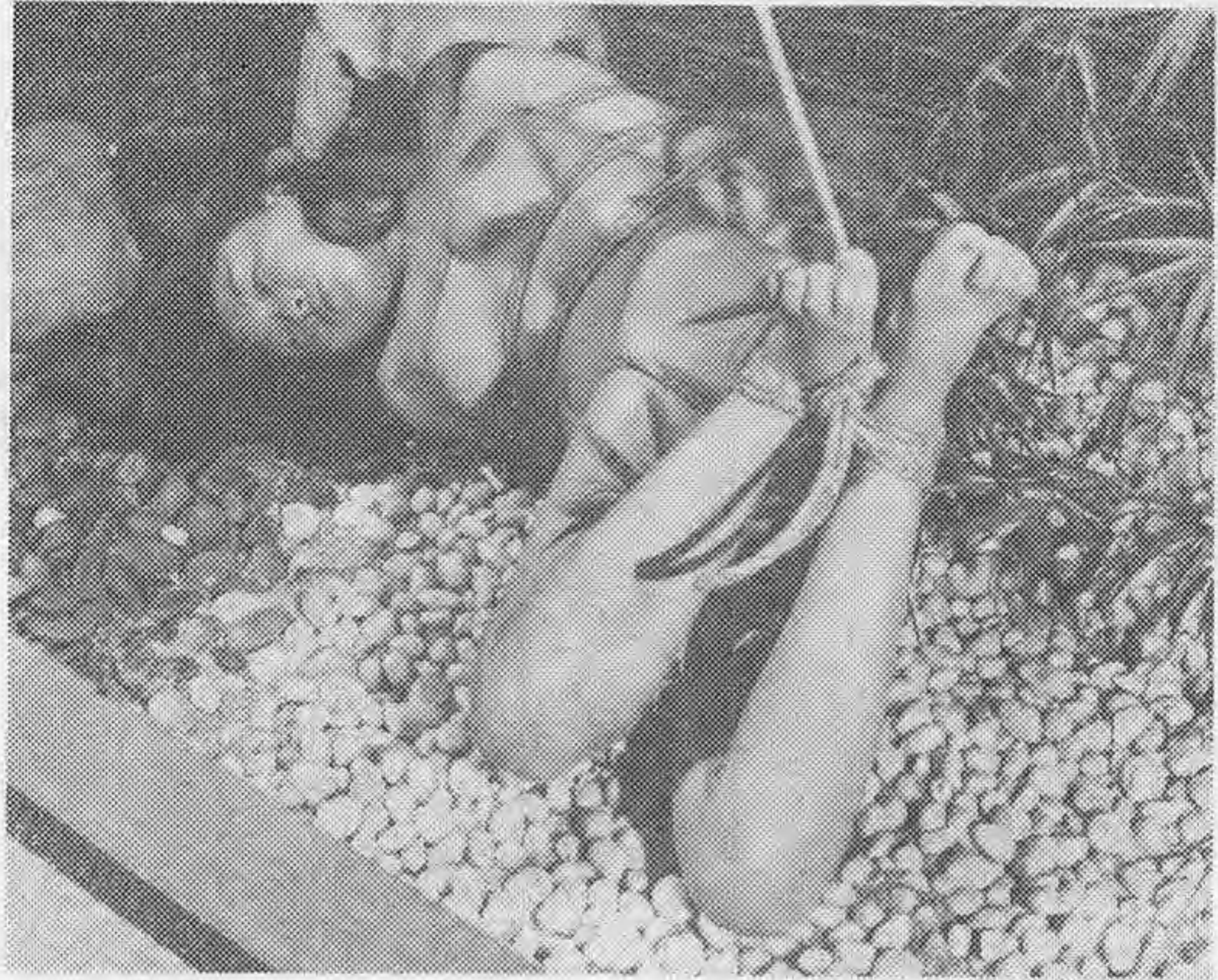
女木島で少女時代を過ごした私の夢の中には神戸という街の響きは、遠くて近い、遥か彼方の華やかなお伽の国のような印象が残っております。その頃、まだ見たこともない神戸の街の印象がエキゾチックに夢の中で描かれたということは、やはり家庭や学校で聞く話が、いつとはなしに私の耳に入り、それが乙女心に美化されて夢想の材料になったのだろうと思います。

それで、この間、神戸の街をはじめて訪れました時は、見るものが皆、珍しく、私にはまるで外国へでも来たような気持ちになりました。車で摩耶埠頭へ出て、ずらりと大きな倉庫が建ち並んでいるあたりは、まるでアクション映画のロケ地のようなでした。有料の摩耶

大橋を渡ったところで、税関の人の検査を受けたのも、私にとっては、なんだか外国へ旅

行しているような錯覚にとらわれました。

大橋の入口で三十円の料金を支払っている



のも、私には珍しかったのですが、橋の上から見下ろした港には大きな外国船（私にはそう見えましたが、あとで聞きますと、日本船の方が多かったそうです）が、ずらりと並んでいるのを見て、私はあっと驚き、「素敵だわ」と大きな声を出して皆に笑われました。

それからポートタミナルへ行きました。外人目当てのおみやげ物店がずらりと並んでいて、店員さんは多くは綺麗な外人で印度系の娘さんが向こうの服装で商品を買っているのが珍しかったです。色は黒いのですが、鼻が高く彫りの深い顔立ちで、ほんとうに綺麗でした。丁度、観光客の

いない日でしたが、それでも、可愛い白人のお子さんを連れだ夫婦連れの外人も時々見受けました。

その食堂がまた、私には珍しく、うっとりと外国へ来た気持を味わいました。食堂の中全部が丁度、船のようになっていて、マスケットや舵輪などもあるのです。隣のテーブルでは外人が英語で食事の注文をしていますし、ボーイも英語で応待しています。でも、私を混じえて四人で食事代が一万六千円程、支払っているのを見て、びっくりしました。なんでも、サービス料一割に、その上、税金もついているそうです。私が空想を逞しくするひまもなく駐車場へ戻って、次はポートタワーを訪ね、そして、次はフラワーロードから市役所横の駐車場へ車を入れて、さんちかたうんへ向かいました。

私には、只、見る物、見る風景が珍しく、うろうろ、きょろきょろしているばかりで、地名やなんかは、どこが何やら、さっぱり、わかりません。余りやたりに聞いてばかりしているとは田舎者扱いされるので、黙っておりましたが、私はやっぱり田舎者です。

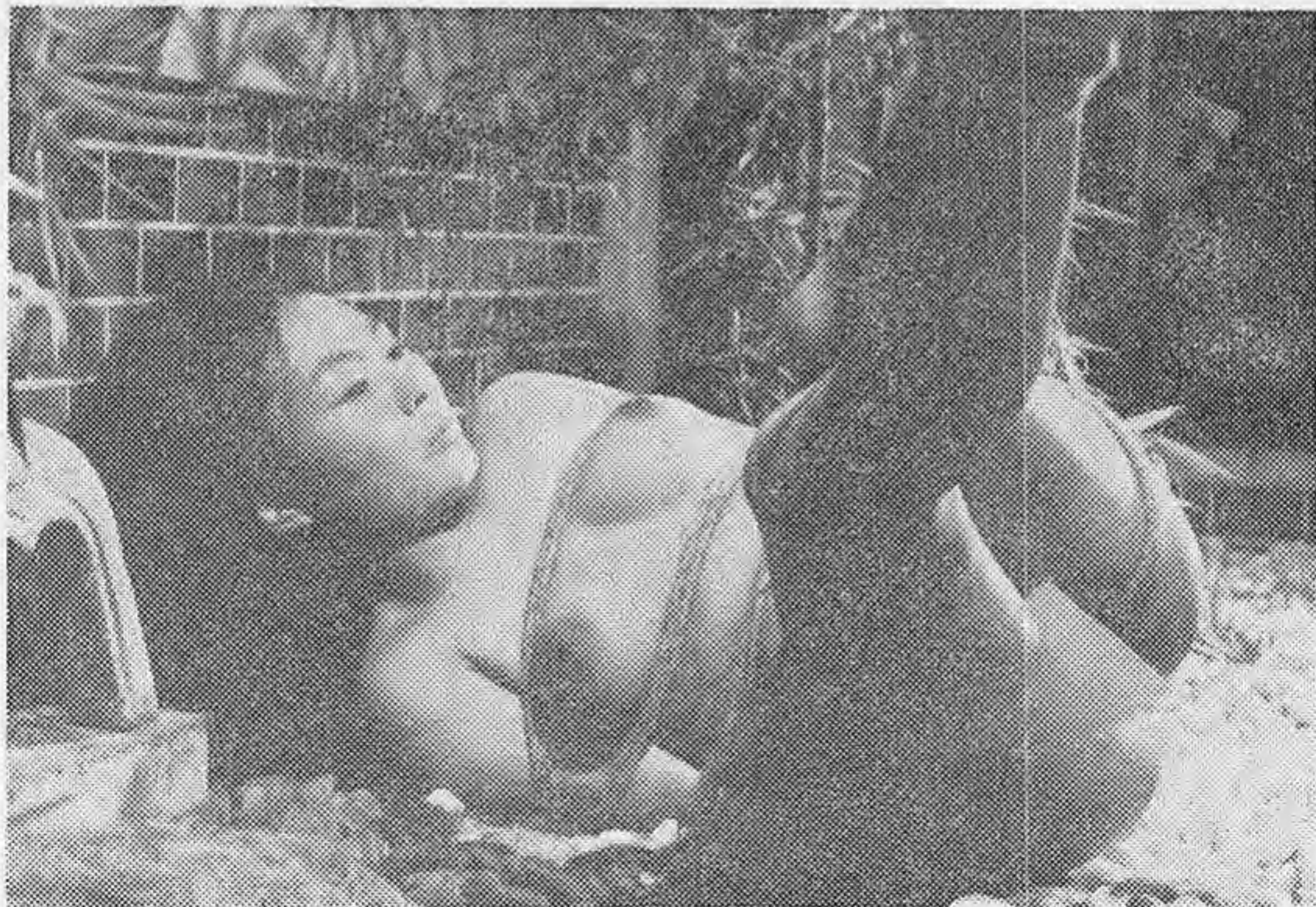
私は誘拐されたい——という一つの夢を持っております。

その夢がかなえられるかどうか、わかりませんが、今の私の心の中で描いております被虐の妄想を書いてゆきたいと思います。神戸の街が大変、気にいりましたので、舞台は、やはり神戸にしたいと思います。それで、私は神戸の街を知るために、ワンダフル・コウベという本を買ってきました。写真と地図が豊富に入っていますので、私の夢を育ててくれるのに役立ちますが、何しろ、この間、始めて一回、連れていってもらっただけなのでその時、通った個所だけが、ぼつんぽつんと印象に残っているだけで、それを地図の上で追ってゆくに過ぎません。

その時、一緒に行った四人というのは、私とお友達の敏子、それに男性は敏子のボーイフレンドの隆（タカシ）さん。それに隆さんの友人の森さん。この森さんが車を持っていて自分で運転してきました。敏子と隆さんがうしろの座席でふざけたりキッスしたりしていますので、自然に私は車を運転している森さんの横に席をとるような格好になって親しくなりました。森さんが若しSMに関心があるのだしたら、よろしいのですが、彼の話ぶりからは、少しもそういう傾向は考えられませんでした。

そこで私の妄想は、読者通信で寄せられた神戸市の「責め男」さん（二月号の）が、森さんに変わってしまいました。敏子と隆さんと責め男さんの三人が私を車で誘拐して神戸の港から外国へ売るという手筈で、埠頭へ隣して連れてこられ空倉庫の中へ監禁されてしまいます。敏子と隆の二人は立ち去り、後には私と「責め男」の二人が残ることになります。外国人に売る前に、この誘拐してきた小娘の味見をしようと、S好みの責め男が、人気のない倉庫の中で私を責めにかかります。

いたぶり責める事の大好きな責め男が、先ず私を素裸にして、開股縛りにします。私は必死に抵抗し、大声で助けを求めますが、がらんとして人の気のない空倉庫ですから誰も助けに来てくれるわけはありません。長時間放置され





て眺めまわされた上で、助けを求めたといつて激しいムチ打ちをされます。

両股を思いきり上げた格好でバイブ責めにされた私は、とうとう屈服して責め男の言う通り自由になります。そのあとは、操り責めや流腸責めを施されて私は悦虐の咽び声を挙げます。縛り方も、股間縛りやあぐら縛りに

縛り直されて、その度にいろいろの羞恥責めを受けます。

こんなことを空想するなんて、ほんとうに変わっている私です。

今、私は一人暮らしですので、三日でも四日も、ぶっ続けで力強い男性の手で責め抜かれないと思います。来春になって妹と同居す

るようになったら、夜、部屋をあけて外泊することなんか出来ないと思いますが、今でしたら、たった一人ですから、どんな遠い所へでも連れて行って下さっても構いません。私を心ゆくまで責めて責めて、責め抜いて下さるのだったら、どこへでも参ります。

私を一旦責めだしたら、決して遠慮や手加減はなさらないで下さい。激しく責められれば責められるほど私は嬉しいです。相手の方の年齢とか容貌やスタイルなんか、全然問題にしません。只、男性的で攻撃的なS好みの方が好きなのです。逡巡や躊躇、ためらいなどをなさる方だったり、そういう素振りを私の繊細な神経が感づいたら、一遍に私のマゾ心理は冷却し、萎縮してしまうのです。

責められる方は御主人様であり王様なのですから、堂々と何のためらいもなく、私をいじめることが当然のように振舞って下されば私のM心は燃え上がって、歓喜の叫び声を、きっと挙げることでしよう。

それは何故なのか自分でもわかりません。私の我儘であることも、自分勝手であることも、よく承知しております。でも、理屈ではどうしようもないのです。一旦、冷えきってしまった私の心は、自分で燃え立たせようと



努力すればするほど、反対に益々冷えきってしまい、逃げだしたくなるのです。そして自分でも、そのような自分になさけなく、苦痛で仕方がないのです。

私は誰にでも、マゾ心を芽ばえさせることの出来ない女であるということを、この頃になって、始めて気づきました。空想ばかりで独りよがりの夢を追っていた時には、そんなことは少しも考えなかったことなのですが、現実はそのようにはいかないものですね。

私は奇巧の誌上に掲載されているSM小説を読むのが大好きです。自分のこんなM性向を数少ないお友達に話し合うという勇氣ありませんしまたお話したところで、とても理解して貰えるとも思えません。それよりも誌上に載っている告白なり小説によって

SMの知識を得ているのです。そして、時には責められている主人公を自分に置き換えて自分なりの空想の世界に浸って楽しんでおります。

例えば二月号の巻頭にあります浦紗登子さまの告白『夕陽よとまれ』なんか、私とは異質のものながら、非常な感動を以て読ませて頂きました。私なんかより、もっと繊細でデリケートなM感覚をお持ちの浦紗登子さまのお気持が私の心に痛いほど迫ってきます。実際は私のようなMよりも、むしろ浦紗登子さまのようなMの方が本当なのではないか、と思って淋しくなりました。

その点では「縄に恋した女」の主人公である松本たえさまの方が、より私に似ているタイプのようにお見受けしましたけれども、私はこの写真を眺めルポを読んでいて、言いようのない嫉妬心にかられました。いや、松本たえさまが羨ましいといった方が私の気持をよくあらわしているかもしれません。

私も、この方のように没我的で献身的なM女性になりたいものだと思って居るのですけれど……。

私のような気ままな娘では、とても松本さまの足もとへも寄れないような気がします。



昭和四十六年度刊の奇クを回顧して

随 想 と 私 見

大 西 弘 明

座右の書として愛読する奇クの数、着実に毎月増えていく。SM気皆無の妻が、私が突然に死亡でもして蔵書入れを明けければ、私の隠れた一面を知って腰をぬかすかも知れない。それにしても一年分十二冊の月刊誌がたまるのの早いこと、私も同好同感の誌友におくれず、早々にSMプレイ・メイトを積極的に探さねばと、気ばかり焦る次第。

儒教思想の栄えた醇風美俗の国には裸さえ異端視されたこともあり、まして云わんや、その生まれたままの姿に縄がけするというのだから異風の定式、つまり異様な風俗としてSMが、幾多の難関に遭遇して当然なるを配

慮しながら、SMの真実の美しさ、理想像を探究する奇クの労苦と功績に頭を下げたい。

さて、多くの先達の師をさしおいて厚顔にも評を弄する許しを乞いながら、四十六年度を思いつくままに回想し私見を述べるにあたり、先ず冒頭に私は江口淑子、辻村隆両SMプレイヤーに、四十六年度貢献賞の言葉を贈りたい。なるほど公表をはばかったの無残な白線は太かったけれども、辻村隆が真のプレイなくして書きえぬ人であり、江口淑子がまことの被虐願望の麗人であつたればこそその甘美な雰囲気、十分にフォト、内容ともにあふれていたと思うのである。

被虐願望女性として忘れてはならないひとに「谷山久美子」がいる。四十六年二月号に片足逆さ吊り、十二月号で東映「性倒錯の世界」に被虐歓喜の裸身を悶えさせたのは、単なる金銭づくではないであろう。二月号での丸い双臀に蝸燭を支えたフォト。彼女の表情姿態の耽美さは、これに尽きると思った。

八月号で、初めて美しい姿を誌上に現わした読者通信女性・深田菊子は、正に四十六年度の嚆矢と嘆ずるに価した。五月号読者通信欄で「新鮮な尿の匂い、甘い快美感、厚い牛皮の褌などが好き」と述べて、「私を素っ裸に縛り上げて」と、はっきり求めた被虐願望女性。数人の男性マニヤと良識のもとに相互プレイを結実させた様子。

その菊子を最初に縛り、八月号、十月号と二回にわたってレポート共々に発表した塚本鉄三のフォトは、辻村隆とまた違ったカメラ技法で影を上手に使った丸味のある柔らかな女性美を演出しており、最高の出来栄であったが、菊子にふさわしい排尿ショーが彼一人のものに終わったのは遺憾であると思う。「次に浣腸しているところや、排泄しているところを撮ってもいいわよ」と云った、この読者通信女性の羞恥責めが、誌面を圧するこ

とを祈って止まない。

M女性が多いがS女性は貴重な存在。ましてM気三分にS気七分を想像させる美しい女性性はマニヤ垂涎的。四月号の薊魔子を、もう一度鑑賞させて欲しい。一五〇頁の黒いナイロンストッキングの魔子は、今迄に記した素人女性にないSの美しさが滲みでている。魔子のハルンなら、辻村ならずとも、殆どの愛読者が喜んで飲むのではなからうか。

流暢なペンさばきで心境を告白する荒尾慶子の美文体に、あふれでるSMに対する情感がしつとりと感じられ、発表されているフォトの彼女も、ただひたすらに甘くせつない感じの女性であった。十一月号の告白で鑑賞できた慶子は、おとなしく素直な新妻（実際は未亡人と聞くが）を想わせ、私を加虐願望に悶えさせた。このおしとやかな女性が、誌上にて最高の羞恥責めに涙を流す日を待ちたいと思う。

女性の裸そのものは現実の存在そのものに他ならない、裸イコール羞恥の美しさは現在の風俗習慣では過去の産物化してしまった。内面のない物的女性は本当の美しさとは云えない。縄は全裸女性のアクセサリでもデザインするためのものでもない。荒尾慶子の二

月号のフォトの一部に、その問題を解決してくれるものがあったと思う。慶子は裸にされたというよりは、最初の全裸それ自体を志向するものであるに違いなく、この裸が縄によって、更に状況を脱いだものと化していたと思った。

一月号「腹裂き妄想」、羽鳥水江、七月号「新鮮なメロン腹」、高野原美、九月号「紅絹地獄秘図」、南彦造、十二月号「外国誌から妊婦フォトを拾う」、松本一彦等々妊婦ものが登場していた。妊娠腹に情熱を燃やし続けている羽鳥水江ならずとも、私も前記文献を何度も熟読するほどのマニヤであるが、ここで述べたいのは、高野原美がズバリ論じた富田由美子の丸々とした若々しい初産腹の羞恥美である。五月号SM・カメラ・ハント富田由美子「あどけなきニンフ」の美しさは昭和四十六年度フォト中、最高の作品であったと私は思う。

特に後手に縛られての、洋式トイレの一枚は、困惑と羞恥の表情が美しく捉えられていた。払拭してやった程度のプレイに終始したのが淋しかったが、考えようによっては、かえって羞恥を着せることに役立ち、他のフォトを凌駕しえたのかも知れない。

十一月号で初めて姿をみせ、続けて十二月号に成熟した肉体を晒した福井桃子と、同号に艶姿を公表した森川美紗。共に美しすぎるほどの女性ゆえ、まだ日浅くして親しみは薄い、今後、エスカレートしていく成熟女性の耽美さを誇示してほしい人達である。

どうもフォトの回想に片寄りすぎて申訳ないが、ピンク映画シナリオが四十六年度では皆無というのは、少し淋しかった。団鬼六脚本の女優谷ナオミの緊縛写真など嬉しいものであったのだが……。

○

三月号から六回にわたって連載された藤見郁氏の「パノラマ島秘譚」はなかなかの力作だった。発端の三月号で利尿剤を飲ませておいて四月号でオシッコ消火器の屈辱行為。更に五月号でも花羞かしい少女をオシッコオシッコで責めたてのめす犬なぶり。六月号ではもっと甘美に盛り上げてのオシメ遊び。七月号はオシメの中にまっ赤になって用を足す美香のその後を描いて最高のフェチ編。完結の八月号はさすがに絶頂に達した感深く、オシッコ責めから肛門責めに交じて、私を魅了してくれた。長編を期待したい人である。

十月号は悲報とも云うべき『花と蛇』終篇



の報である。私は悲しい。人工受精、ニグロ香港犬など、まだまだ素材にはこと欠かないと思うのに……。しかし、考えようによっては、これほどのSM耽美文学は未完に終わらせた方がよいと思う気持でもあり、惜しまれる間に……。という気持でもある。

が反面、九月号、十月号、そして十二月号に掲載された山光純氏のパロディ「花と蛇」に期待する気持が強く、これが私だけでないことを知ると、やはり静子夫人がマニヤの恋人であったことを、いやが上にも知らされて淋しい気持というのが本音である。

四十六年度の懸賞入選作品は、概して緊張しすぎたような乾燥的なSM小説が多く、柔らかな丸味に欠けて、少し読みづらい気持がした。その中で万丈の気を吐いた感を受けたのが五月号、内海実「変身」でストーリーも長く私の好みからみた秀作であったと思う。気どらない素直な描写なのに、ぐっとひきつける情感が見事で、露出狂のナルシストの妹が姉に悟られサディスティックな姉から徐々に羞恥責めをエスカレートされながら快感に

悶える。そして、果ては義兄と実姉の前で洗面器にオシッコをしてみせるまでになっていくさまを、憎いまでに甘く叙した筆力は素晴らしい。

○

次に、耽美画の多かった昔日の夢を追いなから、イメージ・ギャラリーを中心とした本年度の秀作を回想してみたい。

二月号の、豪城二「快楽への招待」が好ましい。私好みの主題が多いせいもあると思うが、この人のSM画は、羞恥責め被虐女体の運命を甘くせつなくとらえ、それをねっとりとした情感で、屈辱と羞恥の極致を詩的主題として生かしきり、語りかけてくれる思いがする。

三月号の春川ナミオ「準備OK」が、お得意の人間便器ものだが実に良い。春川の描く女性は皆一様にグラマーで美女である。美しい容貌の中に秘められた自己顕著を根幹とする責めの快楽。ヘテロ・セクシュアル（異性愛）が、美に対する畏敬と崇拜によって変奇な性的嗜好と変じた男性情念の行為「神酒拝

受願望」。美女の膝下に口を開く男性に対し美女は、パンティを半分ずらせてほほえむの図。ズリ下げられたパンティが両者に生命を与え、SMの情感を、まろやかに比喩する。テーマは平凡だが、表現上の素朴な良さがあと思う。

七月号、宮城昌子「荒れ部屋の珍客」は佳品。縛りの情感を描いては彼女の右に出るものはないのではないだろうか。厳しい縛りに悶える美女から、何故かそこはかと漂う恍惚と陶酔の悦楽の情感。それを描き出せる宮城昌子の筆力に頭を下げるのみ。

八月号、須坂旭「デート？」セーラー服を脱がされて全裸後手縛りの少女が足首を短い紐で結び合わされ、跨ぎ縄でヨチヨチ歩きを強要されている構図。部屋の端から端へピーンと強く張られた縄で、彼女の羞恥と屈辱を表現する着想のうまさ。彼独得の素直なタッチで、悩ましく描かれた秀逸といえそうに思う。

九月号、府和糸男「不安の蹴き」は、単純な構想であったが何ものかが感じられる絵画だった。ねっとりとした筆力である。

十月号、岡たかし「夏の夜の夢」四つん這いに固定された可愛い甘い感じの美女の双

臀に蠟滴をたらす小男の図。この人の絵画は童話的な夢があつて楽しめるものが多いが、特にこの画は楽しめたと思う。

十一月号のカット絵、緑JOE。女学生がイチジク浣腸を自分の手で施している図が見事である。この人は本年度に到って三度目の女学生浣腸図発表だが、三度目の正直とでも云うか、最高の出来ばえであつたと思つた。

十二月号、室井亜砂路「伝説」に、凄まじいばかりのSM情念の迸りを見たといえる。心からのマニヤでなければ、ここまで描ききれなかつたと思つた。オシメのまん中にタマゴが一コのつかっているのが総てを語り、甘くせつなく、ねっとりとからみつくようなSM情念の世界だ。

十二月号読者通信に於いて神戸市の国川栄一氏がグラビヤ復活とSM劇画掲載の希望を述べていたが、私も全く同感である。真面目な雑誌ゆえに他誌以上の制約を受けるといふならば、ゆきあたりばったりでは本誌を読み切れぬものだということ、高度化された趣向の書であるということ、再認識してほしいものだと思う。劇画掲載が夢ならば、せめて挿絵を復活させて夢の中の夢を咲かせていただきたい。

○

最後に、愛好同性向の読者が切々と訴える真実の場たる「奇ク・サロン」をひもとき、貴重なSM風俗資料としての存在を再考してみたい。

一月号 「女性でない口惜しさ」中村純。

奇クは他誌と異なりホモ気はない。したがって私の如き同性（男同志）プレイの嫌いなものでも安心して読める。が……である。中村純の女装はホモ好みでない別のものを感じるのである。女になりきっている純であり、被虐願望の女性、純である。縛り上げて女性なみに責めたくなる万人に一人の人だ。

二月号 後日、創作入選した内海実が、M女性を求める切々の情を訴えている。

あれだけの作品を書き上げる人だけに、さすがにその真情は凄まじい。努力してもM女性がいられない場合は一生独身も辞せず、安易な妥協はできないと明言する氏の真情を、私はじつと噛みしめてみた。そして安易だった自分を恥じた。

三月号「仲間入りさせて下さい」土田純一

夫婦でのSMプレイの発表フォト。前記の内海実ならずとも羨ましい。夫婦SMプレイ夫婦交換SMスワッピング。数年後の奇クの

歩むべき道であると信じる。

四月号 「夫婦プレイ、マンネリ打破について」今田雄三。

マンネリ化に対し、交換プレイ、複数プレイ、夫婦交換等を提唱。二十六、七才とみうける今田夫人の股間縄姿の艶なること。

加賀まり子の私生児宣言？ 要するに、性に対する考えは文明国ほど変わってきた。繁殖だけが性であるという原始的観念が脱皮されるに違いない。美しい今田夫人が全裸で縛られて数人の同好愛読者の手で性感を奏でられて歓喜の声をあげ、それを今田雄三が眺めて相好を崩す。ベトナム戦争なんか、すぐにこんな時代には終わってしまうのではないだろうか。繁殖を思考するにしても育児力さえあればいいじゃないか。子供の方にしただって親を想う概念が次第に変わって来ている。のんだくれのかいしよなしの父親なんか、ということにもなりかねない。古い既成観念に縛りつけられて、法律を作ったお偉ら方が一人の女性で満足なさらずに、「英雄いろを好む」とかウソブいて、二号やその他いろいろとお考えになっているのに、しかめつらしく抑制されている俗に云う中産階級インテリ族が奇クの読者の大半だと思う。今田夫人のフ



オトをつくづく眺めて考えた。こんな美しい妻女を交換プレイに提供したいと考えている人がいるのに紹介の道がないとは我国は不自由な国だと。全裸で縛られた今田夫人が小用をしてみせてくれ、食欲なまでの跡始末でもされたら、どんなに美しい雰囲気がかもし出せるかと想い、残念のきわみであった。

五月号 ある願望「フォト羞恥プレイ」東京・Y Y。

夫婦交換や複数プレイに願望を燃やしながらい実行の難関にためらい、SMプレイ・フォートの交換に切々の想いを訴えている。フォートは半分黒い布で顔をおおってあったが、乳房や体の線から二十才代前半の媚目麗しき若妻が想像された。そして、この想像が適中したことが後日、八月号サロン、「妻をお貸し致します」の再度発表フォートで明確化されたのだが、一度目のためらいは二度目には、すっかり影をひそめて、ズバリ真情を明言したY Y生の心境は、痛いほど同志なら理解できるのではなからうか。

六月号 「交換SMプレイ初歩者の願い」

兵庫H H。

夫婦交換SMプレイの体験フォト提出と共に、先輩に対する呼びかけをされている。

文中に今田雄三、野村忠に対する指導依頼があったが、当の野村忠が同号のサロンで、「スワッピングとSMプレイ」と題して、SMプレイ夫婦交換のSとMの心理状態を思考したのちに、誌上で呼びかけあい求め合いながら果たせぬ夢をなげいていたのは、俗世界の無惨な姿の浮きぼりといえよう。

本当に現実を厳しく、良き伴侶にめぐりあえないものだ。しかし「努力は万事を征服する」という格言が語るが如く、奇縁に恵まれることを念じながら努力することだと私は思っている。最近においては乃美対造が深田菊子を縛ったそうだし、過去においてもオシメ好きの某女が読者通信で結ばれたと聞き及んでいる。私ごとで失礼だが私も神戸市生田区に住む二十三才のSM気（本人自身はSMを知らないが）のある娘に接し、オシッコを戴いたりしながら飼育中だ。数年前からの知り合いで、奇縁とは云えないが、努力の賜もの

と知っているし、野村忠や今田雄三、東京Y Y生、兵庫H・Hに偶然、親しくなれるかも知れないと思ったりしている。

七月号「夫婦プレイとマンネリ」阪東太郎誌上に妻の被縛体が載ってから一年になると語る阪東太郎の告白と願望。

全裸緊縛の妻女のフォトを発表することによって、マンネリ防止プラスアルファとか。M女を妻に得られたことの幸福であろうが、ここまで飼育調教なされた努力の程を、詳しくお教え願いたいものである。妻女の妊婦緊縛フォトは貴重な資料として、末長く、同好者たる私の書庫に保存されることだろう。

同号サロンの別項についてだが、「みさ子の五つの誓い」佐野みさ子は、夫婦プレイが話題の種であるサロン欄に新風を吹き込んだといえそうだ。

夫婦SMプレイはナルシスに陶醉する、ご夫婦の満足の場であり、且、万が一を夢見る夫婦SM交換プレイ願望者の想いの場であるわけで、私とてその発表を双手を挙げて讃美するものではあるが、M女に恵まれない者にとっては夫婦者ばかりのサロン欄は、ひとしお、わびしい。その点、佐野みさ子は夫婦ものであってそれではない現代妻の先端をゆく

ような美女の感深く、私の夢の人である。S Mに理解のない夫が不満というみさ子は、相当回数、自分の意志で夫以外の者とS Mプレイを実行したらしく、その上、貪欲に新しいS男性を常に求めているらしい。云わば数十年未来のS Mをさきどりしているような、ナルシストと見うけもするが、この美しい体なら当然である。読者だけが許される自由でもって奇ク文献に大いに功績を残してほしい美女である。私が本心から現在交歓したい一番の女性には佐野みさ子であると云いたい。実に耽美である。

八月号 フォトの思い出「妻とのプレイ」

小田原一郎。

股間縄を愉しむ見事な夫婦プレイフォトであった。初めての時に逆らって縄ずれができ以後おとなしくなったとか。夫婦プレイらしい思い出話で、ほほえましい。

九月号 「屋上での戯れ」野津敏生。

全裸の緊縛モデルにない耽美さが感じられた。洋服をつけたままのおとなしいポーズの縛りだったがモデルの良さが甘美を生んだ。裸そのものに羞恥を着せる意味で着衣は有効だと、つくづく感じさせられる一コマであったが、願わくは再度、このモデルを使用して

羞恥を盛りあげてほしいと思う。いいモデルだ。惜しい。

十月号 団鬼六先生への公開状、西宮MK生「花と蛇に寄せて」日和見。

「花と蛇」のマンネリをなげきながらも、静子夫人の縄を解き、敗残の姿を曝させよと叫んだ西宮MK生も、町陽一の「花と蛇」終了論に反対して八月号の乃美対造の論を、またまた反論した日和見も、総べて奇ク愛読者の想いの代弁と私は見た。しかし、喧々轟々のサロン欄をどう思い、どう迷うか、団鬼六、随筆にて終焉を唱える。

十一月号 「静子訣別の手紙」小杉千恵。

『花と蛇』に魅せられて本書の愛読者となったという現在二十六才とかの小杉千恵。憧憬と願望から静子夫人に化身する想いで綴ったという寄稿は、甘く、せつない。

私の記憶では、小杉千恵の名前が誌上に現われたのは、たしか二年前である。この二年の間に十回を越す通信欄への公開文をはじめ「お風呂のできごと」というのと「ジャグル風呂の想出」という告白文を甘くせつなく、歌い上げるが如く発表していた。だが、読者通信の中に彼女に対するたよりが散見できるのは、その甘い叙述力にあるのであって、彼

女の映像そのものではない。二年間の歳月の間に千恵は、云い換えれば姿をみせなかったと云えるのである。

しかし、私は近い将来に千恵がおそらく、裸身を現わすのではないかと思う。と云うのは、自らの性倒錯を、ここまでも露呈した彼女が、このままではこれ以上、自分自身を抑制できまいと想像できるからである。彼女は美しい女性らしく、ナルシスをも持ち合せていることが文面から十分にうかがえるから、何か、佐野みさ子に通じるものがあるように思えてならない。

十二月号 「M女通信」高村浩子。

縄だけでは満足できなかったとの告白。

短信往来で、荒尾慶子へ苦木桃太郎がお小水浣腸をと切願し、佐野みさ子へ山田正輝がヒップに……と哀願するやとみれば、かたや大谷美子へ橘三樹が浣腸責めが羞恥責めの極致と口説く、S M願望の渦。真面目真剣ゆえの社会的制圧の苦しみ、今後とも続くに違いないと思う。私も真面目に絶叫しよう。M女と交際したい。多くのM女と接したい。オシッコが見たい、飲みたい、浣腸したい。縛りたい、鞭打ちたい、羞かしめたい……たいたいづくしのS Mプレイ憧憬である。(終)



SMカメラ・ハント

とう

すい

いざな

陶 醉 へ の 誘 い

野村信子の巻

辻 村 隆

ごく最近オープンした、大阪ミナミの地下タウンの虹の街を、雑踏にもまれて歩いてはみたものの、独りあるきの佗しさに、千日前から地上に出ると師走中旬すぎの黄昏の風は、やけに冷たく体の中を吹き抜けていった。そぞろに人恋しくなる、夕暮れ刻である。空しく脾肉の嘆をかこつ、シヨルダ一バッグの、カメラや、プレイ道具が自棄に重い。

久し振りに、ピチピチした若い娘のハントが出来ると、気負いこんできただけに、空振りの落胆は大きい。

今にして思えば、どうも話がウマすぎた。まあ聞いて下さい——こういうワケなんです。

編集部へ、一昨日電話がかかり、奇クの大ファンで、K大生と称する、Sなる男曰く、(十七才の女子高校生が、映画『性倒錯の世界』をみてスゴく感激し、是非カメラ・ハン

トされたいと希望している。鳥居恵子そっくりの瓜実顔の美人で、学校の授業が終わった午後四時過ぎからなら、いつでもいいと言っている。この様なチャンスは又とないから早速、辻村に連絡して欲しい。彼女はガールフレンドであるが、自分を信用しきっているから、反ってプレイは口説きにくい。ベテランの辻村なら、きつとうまくハントしてくれるだろうと確信する。冬休みに、一緒にスキーへ行くつもりであるが、彼女は、その費用の捻出に苦しんでいるので、今なら絶好のチャンスである。水木金の三日間、午後四時より三十分、戎橋筋の喫茶Hの、入口近くで、テーブルに雑誌装苑を置いて、待っているように手配する。自分の努力の期待を裏切らないことを切望する。彼女の氏名は飯田清美。

という主旨の、性急な電話であった。

箕田氏より私へ、大体右記の如き内容が、電話で伝えられる。

「どうする、行ってみるかいい？」

「話がホンマだと、放っておくてもないね。欺されたとしてもコーヒ一杯。一応、当てにしないで出掛けてみますよ」

「チト話がうますぎる気もするがね。近頃はこの種のイタズラ電話が多いんで、信用しに

くいんだなあ。ところで、わたしは最近の若いスターなんて皆目、知らないんだが、彼のいってる、鳥居恵子ってどんな娘なの？」

「テレビの『ああ結婚』で、原作者の森村桂に扮して出ている主人公だけど、逆三角形の下がり眉だが表情の豊かな、若者に人気のある娘ですよ。コマージュにも時々顔を出している」

「あんだ、精しいね」

「彼女と同年代の、私の娘が、その番組ずっと見ているので、何となくつき合って、みていますがね、あのスターとそっくりな娘なら可愛いですね」

「それに、女子高校生なんて、珍しいじゃない。一寸、信じられないくらいだ」

「近頃の女子学生は割切っていますからね。スキー代目当てる、アルバイトみたいな軽い気持なんですよ」

「うまくハント出来たら拾いものだ、まあ成功を祈るよ」

とふって湧いたようなハナシ。

眉唾のハントも、いい方へいい方へと解釈して、親娘みたいな、十七才の高校生に心ソワソワ走らせて、久方振りに、若鮎の如き、潑刺たる裸身に接しられるわいと、年甲斐も

なくその気になって心躍らせ、気の変わらぬうちに善は急げとイソイソと約束の午後四時に、目指す喫茶Hに出掛けたのが、外ならぬ木曜日の今日のこと。

待合せの場所が、ミナミの盛り場の中心なので、車を諦め、縄なども、すべて細目にしめて、ショルダーバッグに、詰め込めるだけ詰め込み、重い鞆を肩にさげて、ノコノコやってきた次第である。

扉を押してグルリとティールーム内を見廻す。目指すそれらしい娘は忽ち確認出来た。入口近くのボックスに、紛れもなく装苑をテーブルの上に置いて、うつむき加減に、何となく物思いに耽った態である。

つかつかと近寄ってゆくなり、彼女の前の席に腰を降ろす。ハッとした娘の瞳が、私をみつめる。

「飯田清美さん？」

「ハイ、そうです」

淑かに応えた、娘の瞳は、真珠のように澄んで、美しい。あの電話にウソはなかった。確かに鳥居恵子によく似ている。制服の胸の膨らみが、私の眼に眩しかった。化粧せぬ素顔が微かに赤らみ、軽い愧らいを泛かべて、娘はそっと眼を伏せた、鼓動が思わず昂まり

柄になく顔が火照り、ゴクリと生唾をのむと口を切った。

「S君から聞いて来たのですが——」

「私も……」

「そうですか。じゃあ、すべて御存知なんですね。説明の手間が省けました」

「あとう、オジサマ、誰方でしょうか？」

「えッ、彼から伝えていないのですか？ 辻村というのですが……」

「辻村さん？」

不審げに眉をひそめ、警戒心を含んだ娘の視線が私に流れる。

ハテ、可怪しい。どうなっているのかな。

「私の出演した『性倒錯の世界』の映画を御覧になって、その内容に興味を持たれたのでしょうか？」

「いいえ、日本映画は、最近、もう半年以上も見たことがございません」

良家の子女か、言葉つきが礼儀正しい。いよいよ、ハナシはヘンである。

「変ですね。S君は、今日のことを、貴女にどう告げたのですか？」

「年末のいいアルバイトがあるから、紹介するって……」

「それだけ？」

「ハイ」

「アルバイトが、どんなものか、知っているの？」

「全然、存じません。出会ったら精しく説明して下さるって聞きました」

ヤラレタと感じ、思わず苦笑を泛かべた頬が強ばってゆく。賽の目の出たところ勝負で、この私に、何もかも言わせるつもりだったのか——。

世俗にまみれぬ無垢の女子学生相手に、S M談義は、余りにも住む世界が違いすぎる。

近頃の女子学生で、かなり奔放に走る者もあるが、懼らく、単なるヌードすら、彼女は許容しない清潔さを湛えていた。内心の落胆を隠して、さりげなく、

「S君とは、どんな間柄なの？」

「兄の友達なんです。チヨクチヨク家に遊びに来ます」

「あなたのボーイフレンド？」

「そんな仲じゃありません。家で時々、少しお話する程度です」

「確か高校三年生とか」

「ハイ、I高校です」

私はもう、それ以上、喋る気がなくなってきた。Sという大学生が、陰湿な興味にか

られ、あわよくば私と、この女子学生をうまく結びつけて、彼女のS M性の有無を、秘かに探究しようとたくらんだことは、もう歴然としていた。

「どうやらS君が貴女をカラカッタらしい。

貴女のような純潔な娘さんを、とても私のアルバイトには使えませんよ」

「あとう、どんなお仕事なんでしょうか」

「お仕事というほどの事じゃない。すべては心の問題の、プレイ、そう、プレイなんですよ」

「私じゃダメでしょうか？ 実はお友達と、スキーに行く費用をつくりたいんです」

「若し、S君と二人でゆくのなら、およしなさい、と忠告したい。私の娘が、貴女と恰度同じ年頃で、娘持つ親のアドバイスです。S君は余り、いい青年じゃない」

「スキーは、私達の学校のお友達、五人でゆくのですね。Sさんは関係ありません」

「よかった。御両親に相談してごらん。その費用ぐらい、出してくれるでしょう。独りで心配しなくても……。そうそう、こんな言葉知ってる？ 『S M』ってこと」

「……………」

首を振って娘は澄んだ眸で私をみつめた。

「知らなければ、それでいいんだよ。いつか分かる時もあるでしょう。今日は、折角ここまで出てこられたのだから、食事でも奢りましょうか」

「有難うございます。でも結構ですわ。じゃあ遅くなりますから、私失礼します」

伝票を、そっと握って立ち上がったその手を、あわてて押え、奪いとるようにしてレジに向かったが、これでよかったのだと思う反面、私の心は空しく冷えていった。

清纯そのものの、飯田清美を、プレイの対象にしたハイド氏の良心と、純粹無垢の処女を、甘言でSMの道へ誘い込みたくない、親心めいたジェキルの良心が交錯して、結局私は後者の心に従って、潔く、喫茶店を出ると左右に別れたのであった。

彼女の姿は、雑踏にまみれて、須臾にして見えなくなった。

何事もなく別れた私達を、どこかの物蔭で観察する、Sの眼を咄嗟に感じたが、最早そうした、卑劣な若者の工作に、立腹するほどの年令でもなかった。

私の氏名を詐称して、若い女性にアンケートを求める人間。

私の行動を観察して、オナニズム的、悦に

いる人間——。すべては空しい虚名の産物のように思えるのであった。

慌しく往来する、師走の盛り場の人の流れの中で、ポツンと独り立ち止まり、今更この尽帰る気にもなれず、さりとて一人で呑む気にもならず、さて進退如何せんと、しばしの物思いに耽る胸裡に、さながら天啓の如く、浮かび上がってきた女人の陽炎があった。

野村信子こと、愛称ノンコ——。

あの物分かりのよい人妻なら、今の私の空しい心を、ほのぼのと温めてくれるかも知れない。既に幾度か会っていつか、未だにカメラ・ハントらしきフォトをとってはいない。

寂寥の心を慰めてくれるには、恰好の女人であるように思えたものの、今、唐突に電話をしても、果たしてうまく会えるかどうかの自信はなかった。

そのくせ私は、まるで何かに惹きつけられでもしたかのように、最寄りの赤電話に近づき、ポケットのメモ帳をとり出して、彼女のTELを求めて、ダイヤルを廻していたのである。

× × ×

ノンコの声が、人懐かしさにかり立てられる私の胸に、甘く伝わってくる。

「突然だけど、今から出てこれない？」
「こんな時間に、どうしたの、急に——」
「精しくは会って話すけど、カメラ・ハント空振りで、独りボンヤリ途方に暮れているんだよ」

「じゃあ私、振られの当て馬ってわけ？」

「そうじゃない。何だか急に会いたくなったんだよ、とても……。旦那いるの？」

「いつもながら御不在。彼のこと気にかけていいわ。すぐに支度するけど、何処へ」
「今、ミナミ。夕飯まだなんだ。一緒に一杯呑もう。千日デパートの喫茶で待っていますよ」

「急いで準備しても、これからじゃ小一時間先よ。待っててね。丁度、食事前でもよかったわ。私も実はセンセに相談したいことがあるの。まるで待ってたみたいね」

電話をきって、二人だけのこれからの時間を胸に描くと、俄にネオンまでが、バラ色に輝いて見え、先程までは身に泌みた師走の風が、快く頬を撫で過ぎるように、思えるのであった。

SMに共鳴する相手が、矢張り私には一番ふさわしいようである。待つ間の一時間を、近くの書店にでも入って、新刊書を、ゆっく

り眼さぐってみることにきめて歩き出す。

野村信子ことノンコは私をセンセと呼ぶ。

彼女の呼称に従って、センセと書く、おこがましき、どうか御容赦、願いたい。

鮮かなるS性を発揮し、時に応じて、さらにM性に転化し、SMの快楽を知るノンコのことは、既に私の「サロン楽我記」欄や、『性倒錯の世界』の映画ルポにも登場しているが、改めて、彼女の全貌を纏めてみると、こういうことになる。

野村信子始めて知ったのは、M派の雄、新宮の東氏の紹介であった。

例の、東映ドキュメント映画『性倒錯の世界』で彼を全裸にむいて、コテンコテンに責め抜いた、二人の女性のうちの一人が外ならぬノンコである。もう一人の女性は、ノンコが、ピンチヒッターとして連れてきた人で、こんなことは今日が始めてというわけで、専らノンコがリードして、東氏を、被虐の悦楽の境地へと誘導していったのであった。

映画を御覧になった方なら、よく御存知の通りで、あの映写時間の約十数倍、ノンコ達は東氏を責め抜いたのである。

ノンコの度胸は大したもので、絞った人数ながら、十人近いスタッフの眼前で全裸にな

り、連れてきた女性をも督励して全裸にさせて、左程、スタッフもカメラも恐れずに、堂々とS女性をやったのだからエライ。

嵐山でのホテルの、このシーンを撮り終えて私の車で京都駅まで送って出て、その日はあっさり別れたものの、私は彼女に興味を覚え、後日を約したのであった。

夫を通じて奇クのファンでもあり、それだけに、私の書くカメラ・ハントも読んでいたから、ノンコも又、私に興味を抱いていたことは確かであった。

そんな機縁で、夫の野村氏とも、二度ばかり出会ったが、彼は、私さえよければ、カメラ・ハントの対象に、ノンコを使って貰っても差支えないと、その都度奨めて呉れ、私を感激させた。

私の方からノンコに電話したのは、思いがけない小川宏ショウ出演の話があり、M女性の人妻二人ばかり紹介して欲しいという、フジテレビ局の要望で、切羽つまったの時であった。

野村氏の許容があったとはいえ、やはり人妻。一抹の危惧を感じて、何となくそれまでは躊躇っていたが、急なハナシでは致し方なく、渡部好美も、三浦純子もダメだっただけ

に、ピンチヒッターめいたものであった。

野村氏の許諾もあって、ノンコはあっさりと応諾したが、映画、テレビにわが妻を平然と提供し、かつては東氏とのSMプレイにも協力させた野村氏に、私はその時、フト直感めいた、夫婦の不自然さを覚えた。

所詮SMプレイは隠花的なものである。夫婦プレイも公然性のものではない。しかるに彼の場合、むしろ進んで妻を、そうした公共の眼に曝せるところに、奇妙な不自然さを孕んでいた。非常に開放的である渡辺光雄でさえ、M性の妻という点で、公共のテレビにこだわって断わったのである。

それには触れず、翌日、急拠ノンコと二人で上京し、M氏の愛人、森川美紗さんに頼んで三人でテレビ局を訪れ、打ち合わせをすませて、テレビ局指定の旅館に三人で宿泊したのである。

二人の初対面の女性同志、互いに牽制して私は宝の山に入って、二兎を追って一兎をも得ず、その夜、ついに何事もなく終わったけれど、帰阪の新幹線の車中、私達は、すっかり胸襟を開いて語り合う仲になっていた。

M女性としての出演を、彼女があっさり承知したのもムベなるかなで、野村氏が相当S



性の持主で、夫婦のプレイは、いつもノンコが被虐の対象となつて行なわれ、S女性にM性を語らそうとした苦肉の策が、思いもかけぬヒョウタンからコマの真実で、彼女は、S性をよそおうより、M性になる時の方が愉しいなどと、告白するのであった。

事実、小川宏ショウで丸山明宏さんから、夫婦プレイのM性について、いろいろ質問されても、それが日常の生活だから、彼女は意外なくらい核心に触れた応答をして、私をホ

ッとさせてくれた。東映撮影所へ現われた時とは、まるで別人かと思われるような、野暮ったい服装をし、碌すっぱ化粧をしなかったのも、テレビを意識しての、わざと平凡な人妻風の演出を凝らしていたことを、私は車中できかされ、ノンコに、やはりそれだけの才覚があったのかと、改めて見直した、思いであった。

先月号の、「サロン楽我記」欄のフォトで私と丸山明宏さんと並んで撮った背後に、森

川美紗と並んで立つ彼女は、およそ野暮ったく見える。森川美紗が、派手に粧おってきただけに、尚更その対照は顕著であった。

賀山氏の招待で、帝国ホテルの地下で食事をしたあと、私とノンコは、彼の外車で東京駅まで送って貰う。

目立たないノンコに、賀山氏もM氏も、余り関心を惹かれないようであった。

新幹線で帰阪の車中、好色の思いにかられひとつはノンコに、真実M性があるのかも確かめたくなり、熱海で下車を勧めると、彼女は案外にも、あっさりとうなずき、

「でも今からじゃ、今日も帰れないのじゃない？」

と眼尻に微かに猥らさを漂わせて、その気になっていた。

「まあ、出たとこ勝負で、いこうや。旦那にいいのかい」

「何とかなるわ。そのことは気にしないで」そんな雰囲気、喋っているうちに、緊張の解放からか疲労がどっと出て、加うるに昼酒の酔いで、いつの間にやら、ついウトウトと眠り、ハッと気がつけば、熱海駅は、とっくに通過していた。

口先だけの誘惑と、とったのか、ノンコも

いい気持そうに眠り、到頭新大阪駅まで眼をさまさなかった。

三度目に会ったのは、ドクター氏に誘われて『性倒錯の世界』を見ることになり、私にとっては、試写を見ているから二度目であったが、彼の提案で、映画に出たノンコを呼んで、一緒に見ることになった。彼女も関心があったから、快くミナミまで出てくる。

既に一杯、入っているドクター氏は、私の出演シーンやノンコのシーンになると、大声で、あれこれと註釈を求めてくる。辺りの観客は、振返って私達に視線を送り、ハズカしい映画出演の私はヒヤヒヤし、ノンコは小さくなって、顔を伏せる。

エンドマークの出る前に、くらがりの中を遁れるようにして、私達は、千日前の国際劇場を飛び出していた。

「気付かれやしないかとハラハラしたわ」

ノンコはホッとした口調で私にいう。それはプレイした当事者にしか分からない感懐で私も同意見であった。

映画の興奮の余波からか、ドクター氏はいつになくよく飲み、バー、クラブなどを、次々梯子して廻る。ノンコも意外にのめるクチで、結構調子よくつき合うのであった。

もう、彼も私もグダングダに酔っ払っているクセ、その俛では素直に帰れない雰囲気であった。

大人の玩具店へ立寄り、ドクター氏は酔った勢いで、二万円近い買物をして、ノンコに手錠を嵌める。挙句の果てに、三人でホテルへ転がり込んだのであった。

壮烈に意馬心猿の、心のみはハッスルしても、正体もなくては肝腎の肉体がいうことをきかず、裸身にむいたノンコを、男二人が挟んで、おどろおどろな闇雲の乱交状態と相成り果てたが、乱交といっても、ドクター氏も私も、滅多矢鱈にノンコの肉体を觸りつづけたのみで、正に「觸る」という字、そのままに当て嵌まる状態で、果てもせず、酔余のひとときを過ごしてホテルを出たのであった。

そして、今宵、四度目の正直――。

正気である私には、カメラがあり、細縄があり、プレイ道具が揃っていた。

女子学生に肩すかしを喰らった余勢もあって心期するところがあって、今宵こそ心ゆくまで悦虐に耽溺せんものと、只管逸り立ち手ぐすね引いて、美しき獲物を待ち受ける状態にあったのである。

直感であるが、私には、野村夫妻の在り方に、一抹の疑問を感じていた。かなりのS性の彼が、妻を独占せず、いつも快く提供する恬淡とした心理が、おかしい。

そして、いつも不在勝ちである。ノンコ自身も、あっさり誘いに応じて出てくる。

どうもこの夫婦には、何かが介在しているうである。

今夜その疑義を、SMプレイに名を藉りて剔抉してみたい思いにかられる。

本を追う眼も上の空、心、紙面にあらず、ひたむきにノンコに思いをはせる私だった。

可憐な女学生、飯田清美のことなど、とくに、うたかたの如く脳裡から消え去り、むしろ、ノンコとプレイする機会の、ふんぎりをつけてくれた、Sの工作に、感謝したいような気持にすら、なっていた。

こんな機会でもなかったら、或は、そのうちに、そのうちにと思っている、なかなか、ハントの気構えは、起こらなかったかも知れない。

正直いって、ノンコのカメラ・ハントは、遅きに失する位である。上京したあの頃、すぐさま短兵急に、彼女を求めていたら、もうトックの昔に、奇ク誌上を賑わせている女

性である。

映画、テレビと、一緒に行動し、ドクター氏を交えて、三たびも出会っていながら、今日までハントらしきこともなかったのは、いつでも誘えるという気安さが、反って禍いをしていたようであった。

ほぼ一時間、貴重な刻は経過する。腕時計を覗くと、もう午後七時に近い。

買い求めたい新刊もあったが、荷物になるので、日を改めることにして、一冊も買わず

書店を出ると、千日デパート一階の、千日前の通りに面したパーラーへと入る。

待つ程もなく扉を開いたノンコの姿が、始めてみる和服姿なのに、まるで別人を覚えて思わず、まじまじとみつめ、視覚の新鮮さが一入、私の心を愉しくさせていった。

しっくりと落ち着いた和装に、人妻の妖しい魅力がこぼれて、眩しい気持で、鼠色のふっくらしたオーバーコートに上半身を包んだ彼女に、私は思わず手を挙げて、笑顔で招いて

いた。

×

×

×

「センスでも、振られること、あるの」
「どうやら、一杯、マンマと喰わされた」と、先刻のことの顛末、かくかくしかじかと述べる。

「フフ、若い女子学生なんか、ヘンな気を起こすからよ」

それが癖の、軽く唇を歪めて笑い、その笑いの翳に、微かなゼラシーが流れた。

「でも、それが反ってよかった。でないとノンコと会う機会のフンギリがつかなかった」

「私なら、いつも空き家よ」

「れっきとした旦那がいるじゃないか」

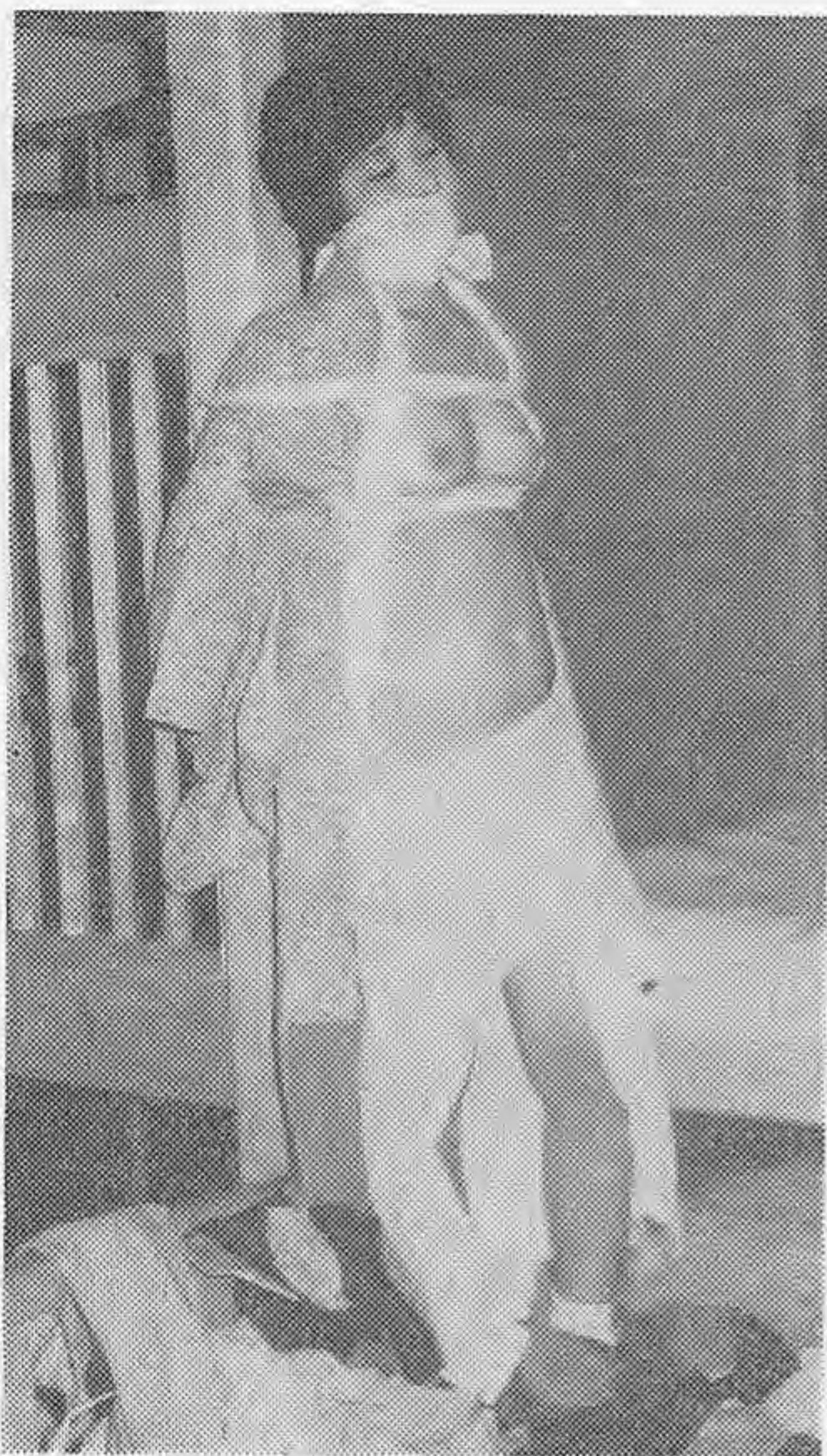
「名ばかりの旦那がね。実はそのことで聞いて欲しいことがあるの」

彼女はいきなり、私の疑問の真相に、みずから触れてきた。

「仲のいい、SM夫婦だとばかり思っていたんだが……」

「彼には、奥さんも子供もあるといったら、ビックリする？」

「そんな予感、しないでもなかった。それじゃ、小川宏ショウで、東京で出会った、森川美紗さんと、御同様ってわけ」



「皮肉ね。人妻のMの性態に出演した女二人が、揃いも揃って愛人関係だったなんて……今迄隠していて、御免なさい。別段センスを欺す気じゃなかったんだけど、本当のことをいいそびれてしまったのよ」

「だから、いつ電話しても、旦那不在ってわけだ」

「彼ね、ドル・ショック以来、商売の方がうまくゆかないの。今正に倒産寸前で、年末の手形を抱えこんで、プレイどころじゃないらしいわ。悪いけど別れてくれっていうの。仕方ないわね」

「そりゃ大変だ」

「私、どうやら、自活しなくちゃならなくなりそう。お母さんの面倒もみてゆかねばならないし——それで、働きに出ようと思ってるの」

「ドル・ショックで、ノンコの身边も又、多事多端なんだなあ」

「センス、どこか、いい働き口ないかしら」

「さあ、急にいわれてもネ。ノンコ何か特技あるの？」

「SMプレイの特技では役にも立たないし、別段これといってないわ。高校卒業ぐらいなら、事務員程度かしら……。美川憲一の唄じ

やないけど、『おカネをちょうだい』なんて言えもしないし、弱ってるのよ。いっそ思い切って、水商売にでも入ってみようかしらなんて、覚悟しているんだけど、崩れてゆくでしょうね」

「人手は足りないから、どこでも働けるようなものの、今からじゃ、生活が大変だろうしね。何とか心掛けておくよ」

成り行き上そう応えたが、急の話で、当てもない。

反面、私の直感が、余りにも当たっていたので、我乍ら感心する。

ノンコも又、愛人関係であったのか——。

だからこそ野村氏は、案外易々として彼女を映画やテレビに出演させ、私にも暗黙のうちに、プレイの対象として許容していたのだ。

森川美紗とM氏の関係において、彼も野村氏と同様、プレイの対象として、私に美紗を与えてくれた。

この二人は、一脈相通ずるものを持っていた。お互いの相手の男性も私に対して、符牒を合わせたようにSMプレイを許容した。

違っている点は、美紗はあくまでM氏に操を立て、ノンコは割切って、SMプレイに耽溺しようとしていた。

野村氏とノンコの最初の出会いなど、今更追及しても始まらない。

男女の機微は、フトした行きずりにでも、実を結ぶ時すらあるのだから。

「センス、今夜は、モヤモヤしたものを全部吐き出してしまいたい気持なのよ。吞ましてくれはる？」

「ああ、大いにのもう、うんと……。しかしこの間、調子に乗って、吞み過ぎたよ」

「そうよ、あんなにへべレケになっちゃ、何も出来やしないわ。御一緒だった先生、手錠を買って、私に嵌めて歩かせるんだもの」

「案外、平気そうだったじゃないか」

「私自身も酔ってたらしいわ。通る人が皆、ジロジロと私達をみていたの、覚えてる？ホドホドにのんで、何もかも忘れて、センスとうんと楽しみたい」

「心の憂さの捨てどころか」

「フフ、古い文句ね。センス、今なら、何処へだって、何日でもお供が出来ましてよ」

じっと、艶な流し眼を送られてゾクツとしてそれこそ、数日間何もかも忘れて蒸発し、ノンコと耽溺の旅が出来たらなああと、フト思っても、日々の生業い、家庭のこと、愛する妻の憂慮を思うとそうもならず、願ってもない

据膳喰えずに、ホンのつまみ喰いしか出来ない、生活の型に嵌まった自分が情なくなるのであった。

自分でいうのも可笑しいが、私の日常性はみかけによらず健全であり、真面目人間の方であった。それだけに、さしたる馴染みの料理屋もなければ、穴場も知らない。

呑みたくなれば行き当たりばったりで飛込み、それもどちらかといえば、色気に乏しい料理専門の店が多い。

だから今こうして、ノンコとのみに行こうといつても咄嗟には行く先の当てもなく、底冷えのする宵闇の巷に出ると、ぶらぶらと法善寺横丁に足を向けていた。何処でもいい、免も角、飲んで、喰えたらいいぐらいのことであった。

てっちりの鍋をつつき、燗酒が五体にしみ渡ってくると、仄々としたゆとりのある気持ちになってくる。

ノンコは日本酒のいけるほうで、くすぶる悩みを振り払おうとでもするかのように、積極的に、よく飲んだ。

瞼の上を赤く染め、トロリとした眼許が妖しく崩れて、

「ねえセンセ、今夜は私につきあって……」

と、既に酔いの回った口調で、粘つく絡みつくように訴えるのであった。

「いいとも——。その代り、今夜は思いっきり苛めてやるぞ。覚悟はいいな」

酒の力で私の語気も、つられて勢いづく。

「いいわ、いいわ。何もかも忘れるぐらい、私をメチャメチャにしてほしいの。何でもセンセのいうこと、きくう」

彼との仲に、心ならずも出来た別離の断層を、利那的にも埋めたい女心が熾烈に燃え、女の全身から、欲情の炎がメラメラと発散している。

「まるで私を待っていたみたいだな」

「そうよ、もう電話したくてウズウズしていたの。でもこちらから電話するのハシタないように思われて、じっと我慢していたのよ。分かって、この気持ち」

「旦那の当て馬か」

「いやッ、センセはセンセ。私こそ当て馬に呼んだくせに」

酔いしなだれて、いつしか酒つぐ手付きもあやしくなっている。

ムラムラッとしてS気が顔を覗かせてくる。

突起つきの革T字帯を嵌めさせて、雑踏の中を歩かせてみたくなった。このシロモノ、

同好のY氏がマルゴで手に入れたのを、先日贈呈してもらったのである。もう一つの、増田喜代司からもらった、VとAへの、太細二コの突起のついたT字帯とは別もので、これが、十七才の女学生には嵌められないシロモノにしろ、それを見せて、SMの眼学問をさせてやるつもりで持参したのを、ノンコに実地応用する気になったのである。

仲居や、間切りで隔てられた隣客に気付かれぬよう、辺りを見廻して注意を払い、シヨルダーバッグを開いて、底の方からゴソゴソとその一物を取り出す。

素早くノンコに手渡すと、ワケの分からぬ俤、彼女はさりげなく、巧みに袂へ押し込んで隠した。

「何なのこれ？」

そっと、声を潜めて聞く。

「それをトイレへ行って嵌めておいでよ。見れば分かるシロモノだから……。身につけてこれからホテルまで歩くのさ。感じるぞ、きつと」

「まあ」

二の句がつげず、今更のように彼女は、慌てて辺りを見廻すのであった。

はてった頬を両手で押えて立ち上がると、



トイレの方へ消える。

土一升、金一升の場所柄の狭いトイレで、着物の裾をまくりあげ、突起と取組んでいるノンコの、あられもない姿を想像して、嗜虐と好色の血は、激しく五体を駆け巡る。

ノンコは思ったより平静な足どりで戻ってきた。努めて平静さを装っているものの、酒

のせいだけではなく、真赤に顔をほてらせ、微かに息が弾んでいる。

「嵌めてきたわ」

言い終わって、両袂を振ってみせ、肉体の一部に装着したことを示してみせる。

じんわりと腰をひねって坐り、ぎこちなげに双臀をくねらせて、そっと着物の上から手

を当てて押え、熱い吐息で喘ぐのであった。

「どう、感じる？」

「生まれて始めて——口でいえない気持よ」

「じゃあ、そろそろ出よう」

うなずいてソロリと立ち上がるノンコの眼は、あきらかにうるんで、光っていた。

しきりに、確かめてみたい欲望にかられたが、そうもならず、並んで道頓堀を歩く。

堺筋をわたりきると、もうホテルの灯が、またたく。

どこでも、いい。いつときも早く、密室にもぐり込み、T字帯の嵌め具合を、この眼で確認したかった。

「たまらないわ」

女は、しなだれかかって呟き、語尾は乱れていた。

「前に歩いた時は手錠、今夜は革バンド——いずれにしろ、タダじゃすまないね。早くこの眼で確かめたくなかったよ」

「いいわ、見せたげる。その代り今夜、帰さないから」

腕に縋りつくノンコを胸に抱きよせ、ぐつと寄りそって、私達は堂々と悠揚迫らず、アベックホテルの暗い扉を開いて、玄関に立ちはだかつていた。

机に寄りかかる私達を、セルフタイマーで数枚うつす。ノンコは二人でうつしたフォトを送って欲しいといった。

その時点では、まだ、突起付T字帯は、ノンコの深奥を完全に保護していた。

肩に手をかけ引き寄せると、裾を分け入って、片手を滑り込ませる。

反射的に腿に力を入れ、ノンコは羞恥に体をねじりくねらせ、突起物に現われた、快楽の反応をみられるのを懼れるかのようにヒタと私の胸に顔を埋め、堰をきったようにムシヤぶりついてきた。

汗と脂肪と愛液で粘つく柔らかい革の感触の奥に、突起は紛れもなく陥没し、しっかりと閉塞していた。

どちらからともなく近づいた唇が、激しく吸い合って、口腔に甘い蜜の味が交錯し、一挙に私の大脳神経を膨張させていった。

ミナミに近いアベックホテルだけに、流石に部屋の内装は凝っていて、控えの間と間の間に、欄干のある繡洒な小橋をかけ、五重塔の大きな置物に銘石を配して格子づくりの居間のたたずまいは、これからの緊縛のプレイに、さまざまな変化を与えてくれそうであっ

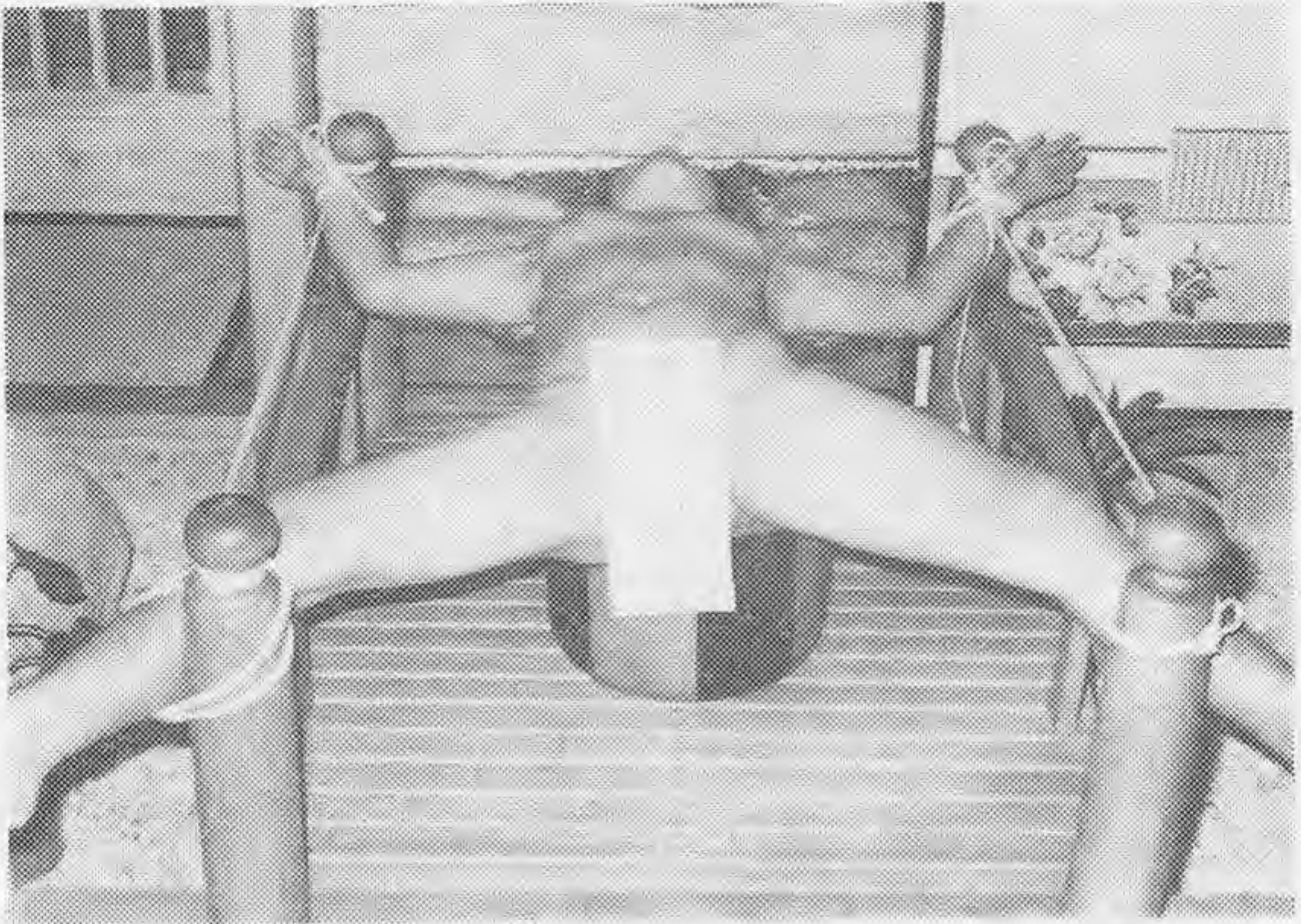
た。お誂え向きの縛り柱さえ、ちゃんと、しつらえてある。

胸中に身を投げ出した女の着物を一枚一枚はがしてゆくのは、心倫しい作業の一つでもある。数本の帯紐をとけばムッチリとした裸身が覗け、湯文字の乱れに心はささら立ち、もう待てしほもなく、ノンコを柱に引き立

ててゆくと、帯あげなどでソソクサと柱に縛りつけ、崩れた着物姿に、私の嗜虐心は昂揚していった。こぼれる色気が、和服のはしばかりのぞけ、全裸よりむしろ、乱れ崩れた着衣に、そこはかとなき、爛熟しきった女の情欲を感じるのであった。

湯文字を剥ぎ、薄いパンティを脱がせると





革のT字帯が、官能の疼きを押えるかのように、しっかりと桃泉を蔽っている。

T字帯を外した時、ノンコは声ならぬ声をあげて腰を引いた。突起に強い抵抗を感じて力をこめて引き抜くと、ノンコは大きく呻いて体を震わせた。

待てしばしもなく、突起にかわる五指が、巧みに女心を、操り始め、喜悅の呻きは、急速に昂まっていった。

「ああ、センセ、やめてエ分からなくなりそう……」と唇震わせ、忽ちに恍惚の眼の色に変わってゆく。

T字帯を装填して歩かせた効果はテキメンで、指頭がそれを一番よく、知っていた。

既に心を濡らせ、歓喜の昂ぶりを求めて女は陶酔し没我の境地に入りたがって

いる。性急にコトを運んでは、これからなにも出来ない。私は手を抜くと、ノンコの体を柱から解き離してやった。

放心の瞳は肉欲にうるみ、着物を腰の辺りまでずらせた後、彼女は上体をゆらめかせて突っ立っている。中断された快楽の行為に、彼女はとまどい、咄嗟の判断がつかないかのようであった。

敏感な反応に、私の嗜虐心は猛然とハッスルする。むしりとるように、彼女を素裸にむくと、風呂場へと連れていった。緊縛のプレイには、少し冷却時間が必要のようである。

「センセも一緒に入ってエ」

「ウン、入ろう。あの尽快感に酔われちゃ、ロクロク緊縛フォトもとれやしない。こりゃうかつには触れなくなったよ」

「イヤーン、あんなものの嵌めさせて、歩かせるからよ」

「ノンコの体は、すごく欲んでいた」

「生まれて始めての経験だもの、気が遠くなくなりかけたわ。さあ、下着、脱がしたげる」

いそいそと、彼女は私の下着に手をかけ、裸になると絡みついてきて、湯をかけた。

ノンコは実に奉仕精神に徹している。湯舟から上がった私を坐らせ甲斐々々しく背中を

流し、前へ回って、オスぺまがいの手付で、全身隈なく洗ってくれた。まるで世話女房振りである。洗うに任せて私は誠にいい気持そのものである。このサービス精神旺盛のノンコを、如何にして燃え立たせてやろうかと、プレイのポーズの構図は、淫らで大胆な、強烈な露出めいたものばかりに走る。

斟酌ぬきで、どんな羞恥のポーズをとらせても、懼らくノンコは拒まないであろうと、そんな確信めいたものを感じるのであった。それ程に、彼女の態度は献身的であった。破局の訪れた愛人に、はかせぬ愛情を、ひたすらに私に吐露して、自らを、燃えに燃えさかる、愛欲の炎の中に投げ出そうとしていくのかのようにすら思える。

恰度二人、入れる湯舟に体と体をピッタリ密着させて、向かい合わせにひたると、私の手は、ごく自然の成りゆきで、ノンコの鋭敏な個所をまさぐり、乳房に伸びていった。

鼻を鳴らし、大きく喘いでけぞり、甘いところけそうな愛叫が、忽ちに狭いバスの空気を派手に震わせて、ワーンとエコーする。

触れなば落ちん、熟し切った女体に、いつしか誘いこまれ、ノンコの五指で把握されたスタミナ（註、ラテン語で雄しべのこと）は

充血を自覚して、鼓動は躍り始める。

かくすればミイラとりがミイラになりそうである。

強い自制で体を離し、湯を出ると女の顔近く、声を殺し、

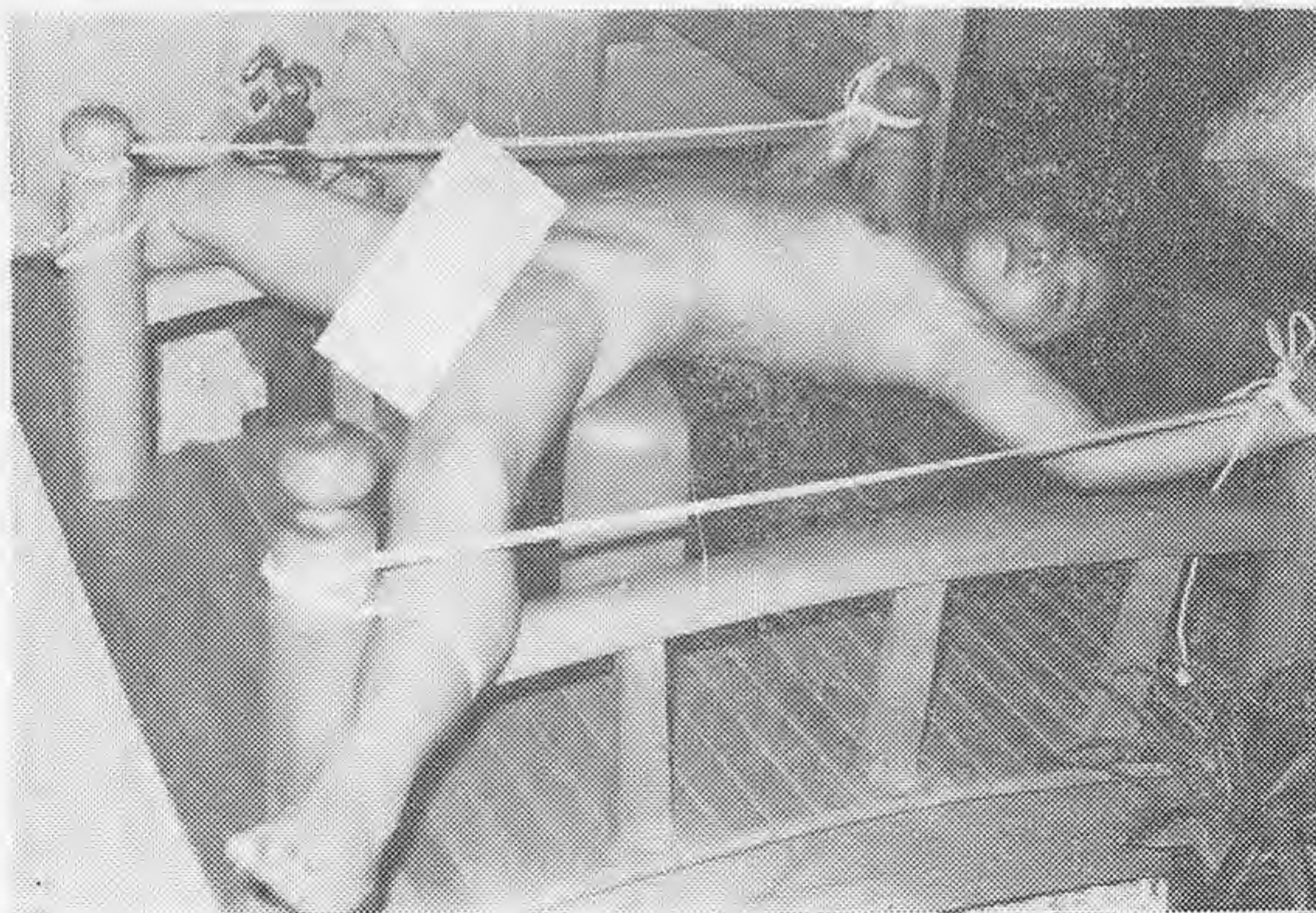
「思いきり愧かしいポーズを、とらせてやる」

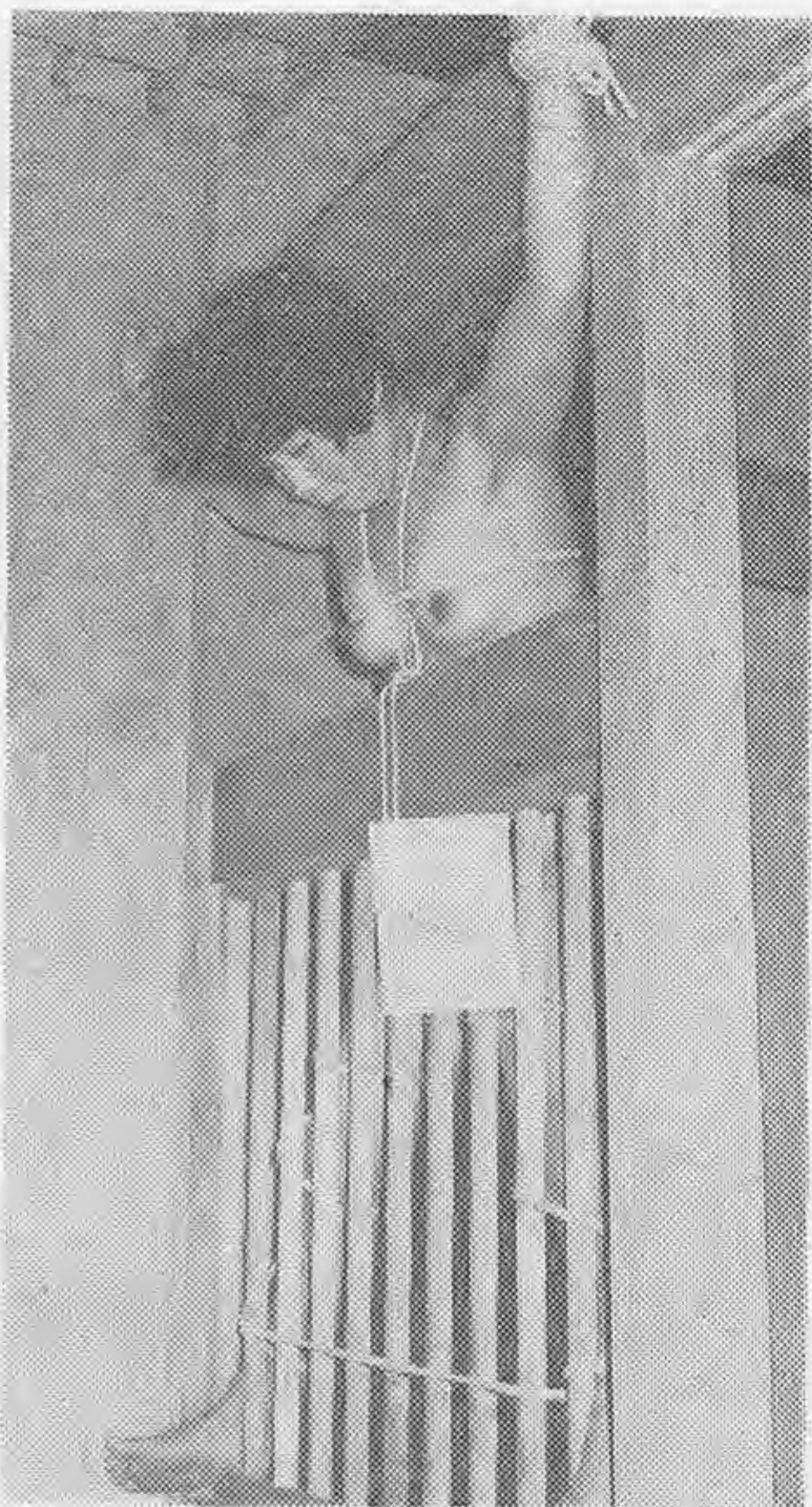
「センスの好きなようにしてエ」

ノドをならして、ノンコは、しがみついていた。

温かく濡れた裸身の、体のぬくみを、じかに感じて私はその時ノンコに愛情を覚えた。

部屋に戻ると、闇の襖を開け放ち、ミニの小橋の凝宝珠の頂点に両脚を大きく拡げて立たせる。部屋の装置を考えての、第一の構想は、躊躇なく、ノンコをそこへ追いやっていた。凝宝珠の尖端が、足裏の土踏ま





ずをつつく痛みも、今の彼女の燃えたぎる官能には、むしろ快い刺激にすら、なっているようであった。大の字に高々と立ちはだかって、差し上げた両手で、太い鴨居を確りと、掴む。

欄干の凝宝珠に、両足しっかり縛りつけ、開いた両手を鴨居に縛り終わって見事に開いた女体大文字に、忽ち数発のストロボが集中する。

ヴィーナスの蒼丘は面積広く、味わいを湛えた黒い絨氈で蔽われている。

小橋に坐り込んで、仰ぎみる直角の接点は爛漫と開花し、媚を含んだ果汁の露が絢爛と光っていた。

愛玩用の、紅白の玉子形を手にして戻ってくる。抵抗もなく滑り込んだが、ノンコは駭きに似た声を立てた。

二米ばかりの極細の線が、私の掌中のリモコンケースに直結している。

ボタンを押すと、空間に五体が硬直し、絶叫めいた叫声が、こらえようもなく部屋一杯に響きわたった。

余りの声の大きさに驚き、ボタンを押す指を離すと、慌てて猿轡を嵌める。この程度の布では、遮りようもなくとも、幾分、声は籠ることだろう。

見事に開花した桃源のはなびらは、リモコンの操作によって、あきらかに蠕動し、収縮した。ノンコは息もたえだえに、猿轡の奥からキレギレに叫ぶ。

「ああ、センセ狂いそう……やめてエ、ああ気が遠くなるウ」

と、逞しい腰をグラインドさせて、双眸に放心のいろが流れていった。

さっと縄を解き放って降ろし、ぐったりした体を休ませることなく第二の衝撃の態位に移ってゆく。鏡台用のスツールを小橋の中央に据え、ノンコを仰臥させ、頸筋に脇息を当てがい、正に解剖学的ポーズをとらせると、両手足を欄干の凝宝珠に縛りつけたのであった。

どうしようと、すべては私の自由の俤に、ノンコは易々として甘受している。

この究極のポーズで、万人の等しく想像するところの行為を、私も又、誰しもが行なうであろう手段で、慇懃無礼に責めたて、翻弄し、ひたすらに女心をかき立てていったので

ある。

小型の、愛玩のプレイ道具が次々と登場する。最早、詳細に書くまでもなく、すべては女悦、歓喜の極みをエンジョイする、^(秘)製品であった。

キリキリと奥歯を噛みならし、奔り抜けるショックで、ノンコは動転し、硬直する。

突如として、激しい痙攣が、ノンコの全身をつらぬく。

女の魂は宙に飛び、失神に似た忘我の境地に到達して、それは正に、陶酔の極み、恍惚の極致に見え、私は作業を休めず、息を嚥んで、余りにも強烈そのものの、恍惚境を彷徨する女体を、瞬きもせず、みつめていた。

ノンコの様相は変貌し、無我をさまよう。

ピクン、ピクンと、裸身は依然として痙攣を続け、悦楽の叫びは、高く、低く、嚙言はさながら巫女の呪文のように、聞こえるのであった。

余りの凄まじさに気をのまれ、手を引いても、一旦欲情の神経を刺激された女体は、容易には平静に還元せず、双眸は空間に、むなしく浮遊して焦点を失い、間歇的に襲う痙攣に、裸身おりおり震わせて、自己を喪失した恍惚状態の尽、悦楽の花園を、いつまでも彷徨しつづけてゆくのであった。

愛欲の声は、いつしか弱まり、声は哽れてきれぎれになっていった。

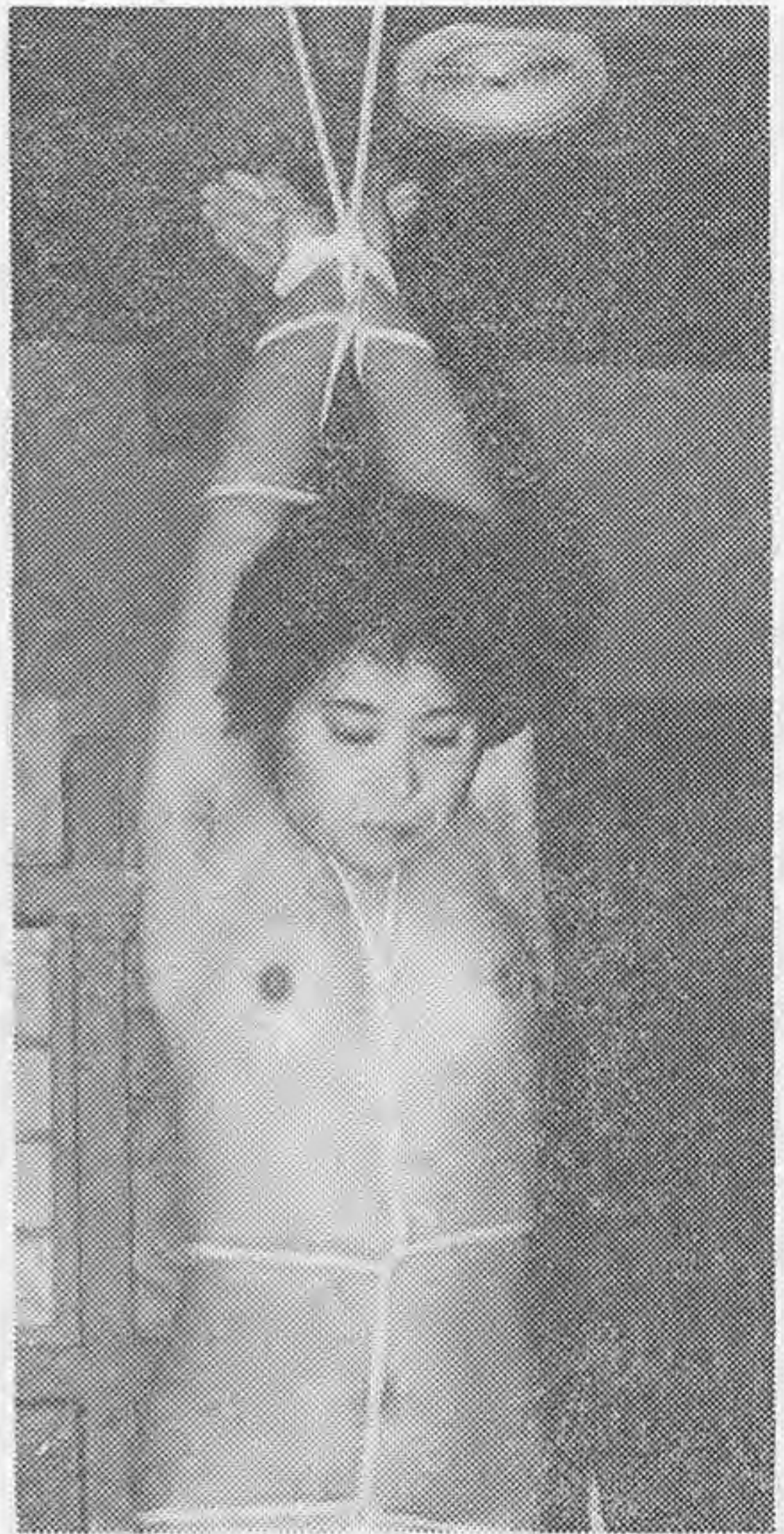
絶えまなく絶頂感を去来した挙句、もう声すら出なくなっただのであろうか。

驚愕に眼を瞠る私を尻目に、自己喪失の陶酔はつづく――。

試みに、T字帯の、ねっとりしたうるおいを帯びた突起を、猿轡代りに口腔に押し入れても、何の抵抗もなく、息苦しげに胸の隆起は大きく喘いで、今も間歇的に、ピクピクと小刻みの痙攣は、つづいていた。

宗薫氏たりとも、季之先生なりとも、かくの如き女性に、真実遭遇したことがあるだろ





うか——、

事實は小説よりも奇なりである。ハント女性を数多く知る私にとっても、野村信子は、正に稀有の女性であった。

ノンコのどこに、このような魔性が潜んでいるというのであろうか。この程度の刺激、この程度の接触は、未だ序の口に過ぎない。ノンコの心のバランスが崩れ、愛人を失った苦しさに、自らそうなりたいと希う心が、かくも早く、失神状態を誘導したとしか思えないようがなかった。

私の驚きは、そのみではない。更に倍加

する強烈極まるものが、も一つあった。

桃泉を求めて闖入した指頭が、痙攣につれて激しく締めつけられ、微かな痛みすら感じたのである。

これは梶山季之氏の、冗句的な名称かも知れないが、彼の謂う名器「みみず千匹」"かずのこ天井"云々の、最高の順位からゆけば紛れもなくノンコは、第二位の、"かずのこ天井"に、ドンピシャリ匹敵する名器の持主でもあった。

ケイレンに伴って、間歇的に起こるワギニズムス——。

それが、私の指を、切々としめつける。

数多くの女性の、それを知っている私にして、ノンコの如き、砂漠の波紋に似た、猫の顎うらに似た、ざらつく、かずのこ天井の締めつけは、始めての経験であった。

一見平凡、さして特色ありとも思えぬノンコの、どこにそのような、強烈極まる秘性が隠されているというのであろうか——

噂に聞く、名器の数々を耳学問しても実際のコトに当たって生々しくじかに感じたことは、或る程度ひとさまより経験豊富と自認していた私にとっても、全く予想だになかった、感激すべき収穫であった。

未だに失神めいた恍惚の没我にあるノンコの縄を解き、そっと横たえると、軽く数度、平手で頬を叩く。

激しく豊胸を起伏させて、時たま言葉にならぬ、嚙言めいた呟きが洩れ、かたく閉じた瞼、冷めたい感触の五体は、さながら夢遊状態か、催眠術に深々とかかったかのようにあった。譬えようもなく気分を昂ぶらせて、私はノンコの裸身を熟視する。復元しない自己喪失の肉体は、何をされても分らないと思われるのであった。しかし、うかつに触るとこの夢遊状態は延々と続きそうなので、うっ

かり触りも出来ない。ノンコの鋭敏な性感帯は、他の女性に比して抜群に多い。

努めて敏感な個所を避けて、私は優しく女体を抱いて、背を撫でていた。

五分近くもそうしていたであろうか。

まるで夢からさめたように、一刹那、ノンコはフツと正気に還った。

大きく肩で息をして閉じていた両眼をうつすらと開き、急に激しい羞恥を顔一杯に泛かべて、私の胸に犇と縋りついた。

「驚いた——いつもこうなるの？」

そっと優しく訊ねる。

「自分で自分が分からなくなるの」

「知っていたんだね、そのコト」

微かにうなずいて、パツと両手で顔を蔽うと、蚊のなくような声で、

「すごく恥かしいとこ、みられちゃったわ。

こんなになる私、キライになった？」

「きらいどころか、俄然見直したよ。それにもう一つ、素晴らしいところがある」

「何？」

「すごく締めつけられた」

「まあ——」

「ドクター氏と三人で、あんなことになり乍ら、全然気付かず迂かつだったよ。懼らく彼



も気付かないだろう。メラメラに酔っ払っていた証拠だ。梶山季之という作家は、ノンコのような持主を、「かずのこ天井」と呼ぶんだ。しかもノンコの場合、プラス巾着、プラスアルファの、世にも稀なる女性ということになる」

「あの人も、よくそんなことを言ってたわ」

「旦那かい？」

「ええ」

「知っていたんだね、そのことも」

「何となく……彼から聞くだけで、私、夢中で分からない」

「だろうね。万難を排しても泊まる気になつた」

「嬉しいわ、可愛がって……」

唾液の嗔れ果てた、女の唇が私に迫ってき



た。実に久し振りに、SMプレイ抜き、単なるセックスのみの興味だけでも、ノンコに惹かれていた自分を見出していた。

× × ×
性感帯を、なるべく刺激しないように、つとめて、緊縛にこそしむ私――。

鴨居につながる格子ごしに、へばりつける

ように大の字に縛りつけ、細縄が深々と、鼠蹊に喰いこみ、縄目は没するまでに引き絞っている。

刺激しないつもりでも、いざ緊縛となるとそれを避けるのは、どうも、やり難い。

股縄が、かなりの陶酔を五感に伝えているようであったが、この時点では、ノンコは、

まだ正気であった。

SMカメラ・ハントに憂身をやつす人間のサガとでもいおうか、一つのポーズを変える毎にカメラは、まるで私の半身のように、被写体に向けられていた。

近頃、うつすことを、いちいち書く煩わしさを、私自身が一番感じることである。そこにフォトがあれば、書かなくても、撮った立証になるとすれば、唯文章の煩雑さを招く、カメラ云々は、もうここらで省きたいと思う気持ちしきりである。だから、今後は、是非ない限り、カメラ云々には触れないつもりである。

のどの渴きを覚えて、冷蔵庫からビールをとり出してくると、この曝し者を肴に、ミニ小橋の欄干に腰を降ろして一気にコップ二杯を立てつづけにのみ、格子にへばりつく裸身を愉しげにみやるのであった。

おもむろに煙草に火をつけ、紫煙をくゆらせながら、

「どうだ、タバコを吸わせてやろうか」

と声をかけ、それは、悪戯な欲望に繋がっていた。易々として縛られたノンコに返事はない。

深く吸い込んで火勢を強くし、ノンコに近

よると、強くしまった二本の股縄を押し拡げ挿み込む。

下向き加減のタバコは、微かな煙をあげて静かに燃えている。

再び手にすると、ノンコの閉じた唇を指先でこじあげ、しっとりとした濡ったフィルターをさし込む。

煙が眼にしみるのか、彼女は眉をしかめ、それでも一息大きく吸い込むと、鼻腔からケムリを吐き出して、タバコを唇から離した。

半分に燃え尽きたタバコが、足許の、敷きつめた白い小石の上にポトリと落ち、微かに燻ぼっていた。

コップ一杯のビールを唇に当てがうと、ノンコは美味しそうに呑み乾した。

一息ついて立ち上がり、そそくさと縄を外すと、私は辺りを見廻す。部屋に変化があるから、縛り方にも、いろいろと創意工夫が思いつかれる。

両手を甲で合わせて犇と縛り、天井から突き出た梁に縄をかけ、爪先立つまで引き絞って吊り上げる。

首縄をかけた細縄を胴で一巻きして、例によって深く股縄をかけて、背後で止める。

ノンコは神妙に、私によく協力して、イヤ

な顔もせず、緊縛のポーズを続けていた。細縄を束ねて、試みに、パシリと臀部を打つと、

「あッ、痛いわ、センサー」

と、腰をゆすって、甘えた声を出した。正気のシルシであった。

「鞭打ちされたことあるの、旦那に？」

「縛って、時々はぶつこともあるけど、痛いっていうと、すぐやめるわ。でも、気が遠くなってる時は分からない。気がついたあとでおしりが真赤になってヒリヒリしてることもあるの。長い間、痕型がつく程噛まれても、その時は分からない」

「失神状態なら何をされても分からないのだ



ろう、きつと」

「らしいわ。センセ、ぶちたかったら、余りきつくない程度なら、少しぐらいぶったっていいわ」

「快感につながらなくちゃ、愉しくもないだろう。こうしてやろうか——」

乳首を揉むと、忽ちノンコはもだえはじめた。パイプを当ててみる。もだえは激しさを増して、愛叫が唇をつらぬいて流れ出す。

抱くようにして、乳首を揉みながら、片手

に握った細縄の束で双臀を撃つ。

「あっ、いい。ああ、もっと、きつく、ぶつて。センセエ……」

けたたましく嬌声をあげて、女は快楽の淵に溺れてゆこうとする。

「雁字搦目に縛り上げてやる」

「ええ、縛って……思い切りきつく縛って。センセエ、もっと虐めてエ」

口をつく言葉は、赤裸々に被虐の悦楽を求める。甘い欲望を、むき出しにしたものであった。

肉に犇と喰い入る細縄が、ノンコの軀を隈なく締めつけてゆく。

既に、被虐の悦楽に酔い痴れた女体は、この強烈な緊縛を甘く受けとめて、うっとりとしたような眼付は、私の嗜虐心に油をそそぎ、一層激しさを、つのらせていった。

巧芸品の五重石塔の傍で——。

小橋の欄干に開股して坐らせて——。

突出した壁間の、モザイクの角木に跨がらせて——。

半円を描く小橋の中央に仰臥させて——。

机上に立たせ、深々と股覗きさせて——。

私はしばし、緊縛ポーズに憂身をやつす。

易々としてノンコは、私のいうが尽に体を運び、私が氣に入るまで、長々とそのポーズをとり続けていた。

ギリギリと双胸をしめ上げて、乳首がピョコンと反り返っていたが、ノンコは、この強い縛めにも平然として、むしろ、緊縛に伴う肉体の苦痛を、快感にすりかえているかのようになされた。

ために、そのそり返った乳首を、キュッ



と摘むと、ケタタましい欲びの叫びが、忽ち唇をついて、ほとばしる。

彼女を、タタミに仰臥させ、小型パイプが一個、姿を消す。

急いで両股をしめつけて、足首まで縛々と細縄で肉をしめつけ、縛り上げてゆく。

二の腕や臀肉も細縄のきつさにくびれ、ノンコは、五体を貫く電撃に、こらえようもなくのけぞり、芋虫のように転がり始める。臆面もなく猥ら声を立てつづけて、奔り抜けるシヨックに酔い痴れ、満面に快楽を泛かべて転々反側し、自己を忘失した、没我の境地へと急激に傾斜していったのであった。

肉体は既に、頂点の快楽に麻痺していた。抱きかかえ、壁間の出張りにのせても、ノンコの五体は硬直して痙攣し、囁言をまき散らして、恍惚と陶醉の谷間を、激しく往来していた。

SMプレイの真髄を究めるべく、私は縄束を握りしめる。

快楽の旨酒に酔い痴れた女体は、再度、失神の夢遊状態を、眼の辺りに現出した。

唯、没我——唯、恍惚——。

最早、この状態では何をされても分からう筈もない。試みに、頬を抓ってみたが、反応

はない。

俯伏せに転がし、くびれて、ポックリと突き出た双臀を、縄束のムチで、叩きのめしたが、喜悅の声は昂まる一方であった。

徐々に力を増し、果ては力任せに尻をうって、ビクともしない。平手で掌が赤くなる程叩いてみたが、苦悶の反応はなかった。

思い切って、ズボンの革バンドを引抜いてくる。ダチョウの皮の、イボイボの出た、かなり厚めの、かたい革バンドである。

短かいめに握りしめ、二度、三度、発止と打ち下ろす。

みるみるうちに、バンドの当たった臀部の肌は色づき、鮮かな条痕を浮彫りにさせる。レリーフはピンクに交錯し、うっすらと血をにじませていた。

どの様に扱われ、如何に烈しい嗜虐の責めを受けても、夢遊状態のノンコは恍惚境を、さ迷って快楽の花園に遊び、その表情に、苦痛の色は微塵もなかった。

この状態の続く限り、懼らく彼女は五体を切り刻まれ、傷つけられても、

何ら痛痒を感じなかったに違いない。

絶え間なく襲いくる絶頂感——。間歇のケイレンを続けて性の最高の法悦境で酔い痴れ



ているノンコを眼下に眺め、私の嗜虐の血は雄叫びを挙げて咆哮する。

もっと烈しくやれ、もっと、もっと——。

それでいて、現実の私は、いたわるようにそっと緊縛の女体を掻き抱き、夢遊の根源を両足を高々とあげて、とり出していた。

× × ×

性の夢遊状態から醒めるのを、凝っと手を束ねて待つ時間は、やけに長く感じる。

再度、無我の境を、さ迷うノンコを抱いてもうこれで幾度目かの頬打ちをくらわせ、しきりに醒めるのを待っていた。

まるで死んだようになってるノンコの、雁字搦目の細縄を解くのは、随分と重い、手間のかかる仕事であった。

濡れにぞ濡れし、かずのこ天井は、まだ弛緩していかない。指の進入すら拒んで、かたく収縮しきっている。

うっすらと唇を半開きにし、豊かな胸は、激しく起伏して喘いでいた。

既にオルガ幾度ぞ——。果しても果しても襲いかかる、骨の融けそうな快楽に、ノンコの肉体の疲労と消耗は、かなり激しいようであった。それでいて始めてから二時間ぐらいしか経過していなかった。この調子でゆくと

明日の朝までにどうなることやら——。

私は、この超人的な性感の持主ノンコに、内心フト狼狽して、若し仮に、何かの機縁で彼女と同棲したら、到底、私の体が持たないように思えた。

男性に対し、凡そ献身的で奉仕的で従順で肉愛の奴隷になる、文句なしのノンコであるが、対する男性は、よくよくコントロールしないことには、とてもついてゆけそうもない気がする。

或は野村氏にしても、ノンコの余りの肉愛の激しさに辟易し、この稀有の名器に心残しつつも、去っていったのではなかったであろうか。

さらに穿った思考をすれば、M性の東氏や私にノンコを紹介して、プレイさせたのも、彼一人の手に負えなくなった挙句の、逃避の一つの手段ではなかったか——。

あらぬそんな穿索を続けながら、私はぼんやりと、ノンコが正気を取り戻すのを待ち兼ねていた。

何かの刹那に、息を吹き返して、正気に戻るノンコであったが、それには、どのような手段を構じたらいいかは、SMプレイが今夜始めてだっただけに、皆目見当がつかない。

しかし、失神が、ノンコの心の持ちようにもあることを私は感じる。

先夜のドクター氏との三人の場合、こうしたノンコの法悦境は感知出来なかったからである。男二人が泥酔で、ノンコが案外判つきりしていたのも原因の様であるが。

そうしたノンコの、敏感な性感帯に、二人とも気付かなかったのは、確かに迂かつであった。懼らくあの夜、彼女は満たされぬ思いで帰ったに違いない。

「センサーエ、センサー」

尾を曳いて、まるで黄泉の国から息を吹き返したように女が、私を呼ぶ。

「おお、気がついたか」

「ああ、センサー、オシッコ、おしっこした——い」

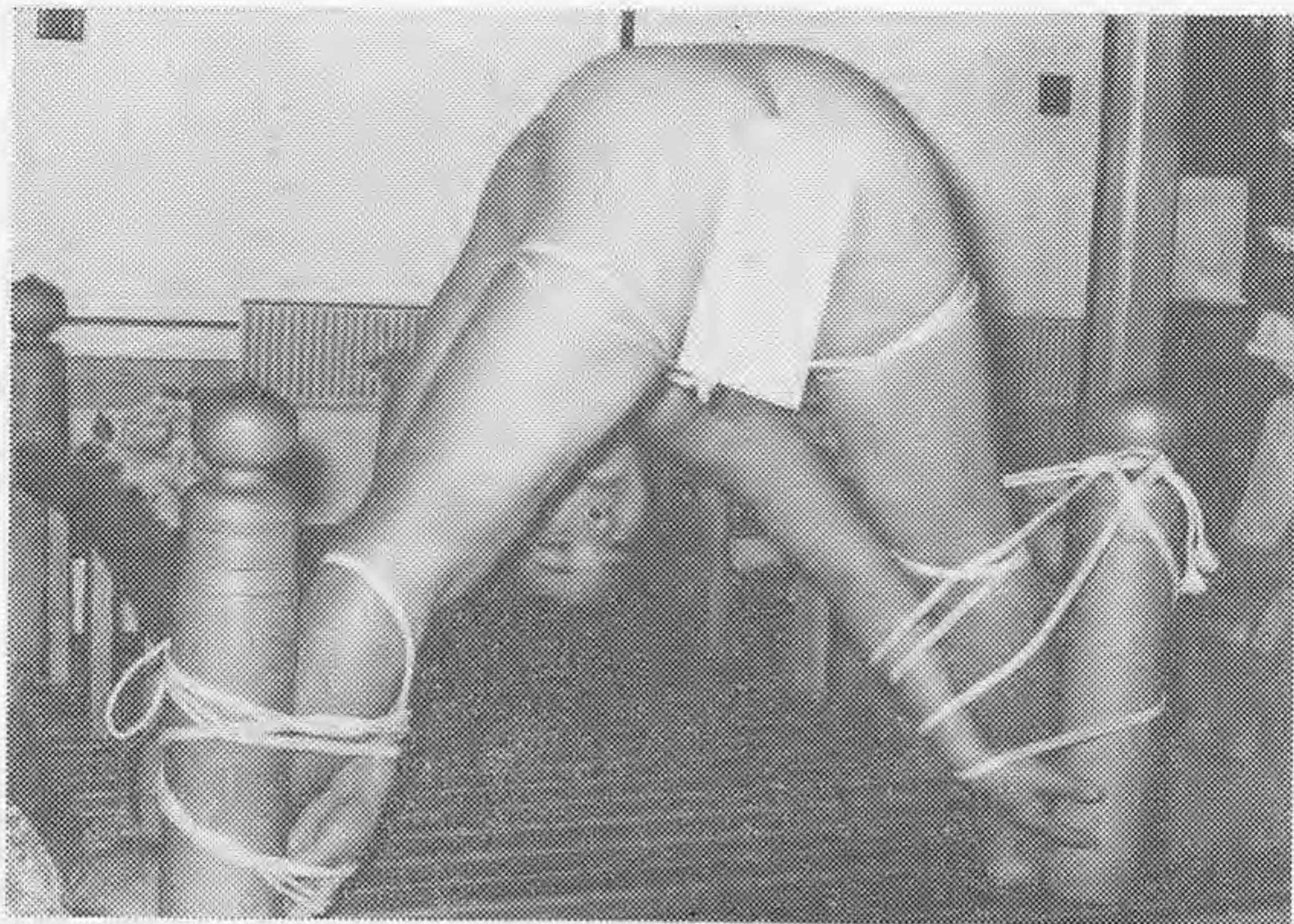
瞳孔の空ろな、醒めやらぬノンコの唇から洩れた言葉に、私の頬は思わず、ゆるむ。

無我の境地をさまよっていても、尿意の覚えは自覚するらしかった。

「独りで起きられるか？」

「ええ」

少しさめかけている。私の膝から体を起こし、たたみに両手をついて四つ這いになって体を起こして、やっと立ち上がったが忽ちに



ゆらりと上体が傾き、よろめいて、その場にバツタリと倒れる。

「ああ、出そう。センセエーおシッコ」

苦しげにタタミをつかみ、ノンコは夢うつつで叫ぶ。

「よしよし、連れて行ってやろう」

やれやれと思い乍らも、願ってもない好色のシーンに出くわして、慌てて抱きかかえて起こし、意志を喪った重い体を引きずるようにしてトイレの扉を開く。スリッパを履かせ、倒れ込むようにのめるノンコを、やっとこさ、白い陶器に跨がせる。

私の直視に、羞恥の意識もなく彼女は、かなりの大量を勢いよく、はかせた。

ペーパーをきって拭いてやり、部屋に抱きかかえて連れ帰る。

ゆらりゆらりと上半身を、

ゆらめかせて今にもバタリと横倒れそうになりながら、辛うじてノンコは坐っていた。

「センセエ、寒くなったあ」

「風呂へ入るか」

「いれてえ」

「よしよし」

大きな駄々子抱えて、この中年のフェミニストは結構その痴態に眼を細め、裸身にじかに纏った浴衣を脱ぐと二人でバスへ――。

熱湯のみを出して急激に温め、未だにフラつく女体をつけてやると、やっと判っきり正気が蘇ってきた。

「センセー、ごめんね。私、本当にダメ」

「いや、そうさせたのは私だ。いいんだよ」

「こんな私をキライにならないで」

「又、言う。好きになりこそすれ、キライになるなんて……」

「嬉しいわ」

湯を掻きわけて犇と縋りつき、女の指が下半身に伸びてきた。これが精一杯の愛情の表現なのであろうか。

「ノンコは浣腸はキライかい？」

「余りされたくないの。オシリの口に、ポツリとイボがあって、それが時によって、出たり入ったりするの。そんなおしり、センセに

みられたくない」

「そうきくと尚更、見たくなった。その出沒自在のイボを」

「いやーん、みせない」

「みてやる」

「ウーン、意地悪う」

湯の中の、ノンコの指に力が籠り、指先が既に求めていた。

よく温まり、ノンコは、かなり氣力を恢復する。

バスタオルで体を拭う彼女を、私はもう、もどかしげに、細縄たぐって待っている。

アヌス責めの、羞恥のポーズを否応なしにさせるには、ミニ小橋の、四本の短い凝宝珠の柱が、誠に都合よかった。

「橋の上で四つ這いになるんだ」

「どうしてもするの。センセ、もうカンニンして」

ノンコは正直、それを見られるのが羞かしいらしく、

「ねえ、外のことなら、何でもセンセのこときく。だから、これだけはカンニン」

と、嘆願する如く訴えるのであった。

「いいじゃないか。その気なら、失神させて何だって出来るけど、それは、したくない。」

浣腸に対するノンコの反応がみたいんだ」

「浣腸されても、何されてもいいのよ。唯、オシリのイボをみて、イヤにならないかしらと、気になるのよ。いつだったかセンセは、カメラ・ハントの中で、オシリの汚い人はイヤだなんて、書いてたでしょう。だから……」

よく覚えていてる。確かに、私には、その傾向があった。緊縛するM女性が偶々、いぼ痔や、脱肛であったりすると途端に興醒めになった。キュッと締まったアヌスの美しさそれは、たとえようもなく私の神経を、かき立てた。

両手足を、凝宝珠柱と一緒に括りつけ、天の橋立股のぞきのポーズをつくり上げる。

否応なく眼前にアヌスが展開する。

ノンコのいうイボは、私に遠慮してか、顔を引っ込めて





いて、思ったより、かたちのいい菊座が、私の心をクリスタールへと逸り立ててゆく。洗面器に湯を汲み上げてくると、シヨルダ―バッグから、エネマシリンジをとり出す。嘴管を滑らかにして、そっと挿し込んでゆく。

「あっ、センス、もうカンニン」

開いた両股の間から、快楽のきざしをみせて、ノンコは悩ましげに拒む。羞恥する心の果敢ない抵抗の言葉が、反って私をエスカレートさせる。私は黙々と、強く力を入れて、嘴管を一杯に押しこんだ。

エネマの球を握り、グググと温湯の吸い込む音と共に、グルグルグルと、ノンコの腹腔

に流れ込んでいった。

「ああ、センス、もうやめて……」

「いやっという程、注入してやる」

「ああ、もうダメ」

「まだ、まだ」

一リットル足らずの湯が、チュルチュルと最後の液まで綺麗さっぱり吸い込まれて、彼女の腸内に移動し終わる。

苦しげな息を吐いて、ノンコは股ぐらごしに、恨めしげに私の作業をみつめている。

嘴管を抜くと、微かな残滴が、ポトポトと菊座から、こぼれて肌を伝う。

ノンコは喘いでいた。赤裸の羞恥を曝しての行為自体に、ノンコは意識している。

飼育すれば、彼女は第三の性に、快楽を覚えることは、先ず間違いないまい。

「おなかが痛くなってきたわ。ウーン、早く解いてえ。ああ、早く、早く」

「まだ、まだ。五分くらい、こうして放っておいてやろう」

「ああ、出そう。汚してしまうわ。センスエ助けてえ」

その時、私は見た。必死にこらえる括約筋が、いきもののように蠢いて、押し出されるように小豆粒大のイボが、ポクリと顔を、の

ぞかせたのを——。

さながら菊花の中心の雌しべの様に——。
ノンコは、腰を激しく振ってもだえ始めた。
けんめいにこらえても、既に腸内で汚染され
た液体が、チヨロチヨロと、したたり落ちて
いる。この女の、すべての羞恥を剔抉して、
嗜虐に君臨したい欲望にかられる。弱者に対
する強者の、もっともっと虐めてみたい心理
であろうか——。

「次に会う時は、大小、ニコの突起のついた
丁字帯で、両方に嵌めこんで、街を歩かせて
やろう」

「もう、オシリは、いや」

「そのうちに分かるようになる。知らないん
だ、A感覚のよさを」

「分からない——。ねえ、早くほどこいてえ。」

もうダメ。あつ、もうダメよ」

もう、このあたりが限度と、ゆるゆると解
き放すと、もう待てしほもなく、矢庭に走
り出そうとする。

オツとどっこい、そうはさせじと、片手を
掴んで引き寄せ、素早く一本の細縄で両手を
背後に縛り終わると、

「さあ、連れて行ってやろう」
と引っ立てる。



「愧かしいわ、みないで……」

「だって、さっきオシッコさせてやったじゃ
ないか」

「本当に？」

「ああ、本当だとも」

「ちっとも覚えていない」

苦しいのか地団太踏みながら、顔をパッと
赤らめる。

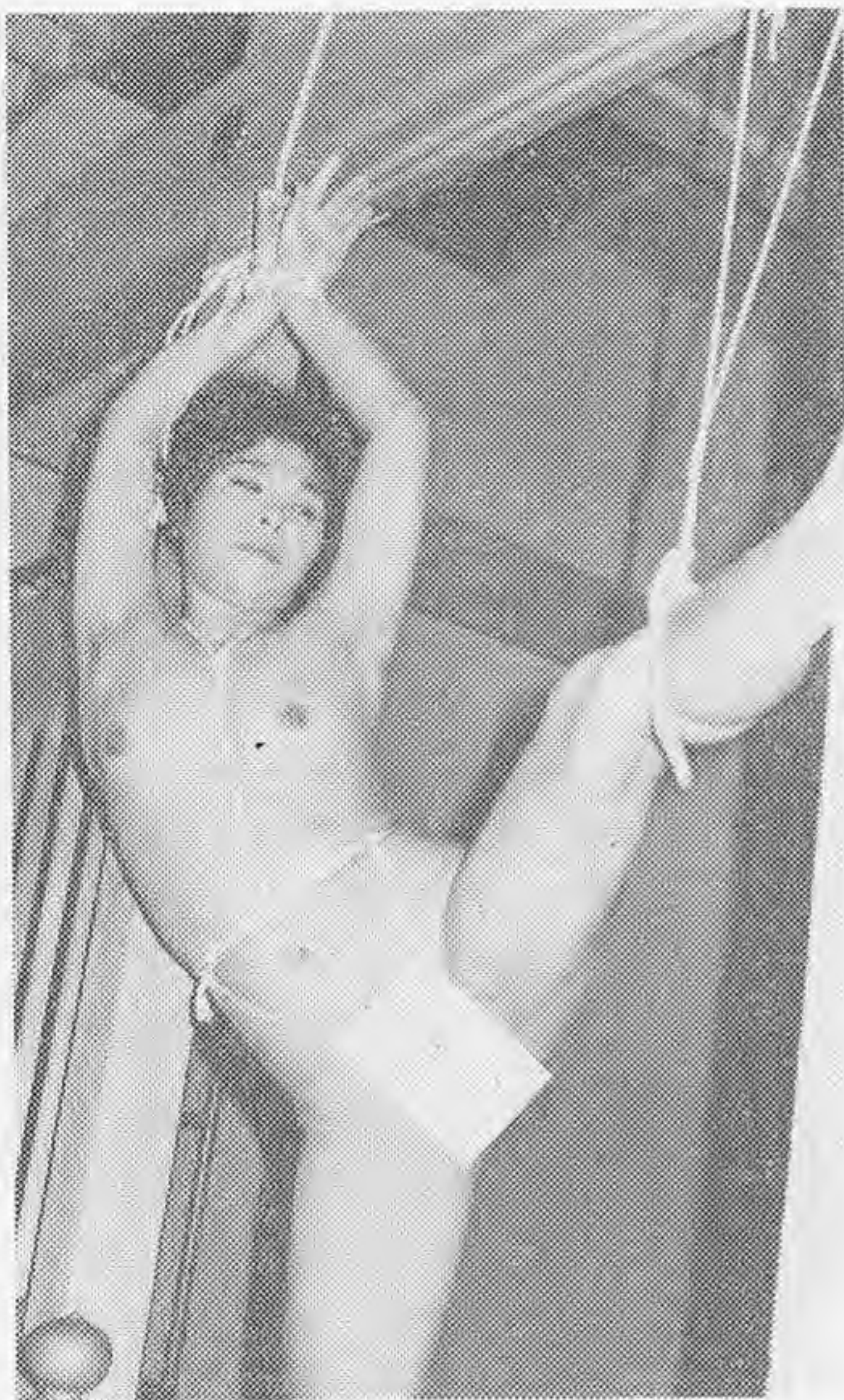
「夢うつつだったからな。後始末までしてや

ったんぞ」

「愧かしくて、センセの顔みられない。ああ
もう我慢、出来ない。早くして……」

予定の行動で、縄尻をとって、再び便器に
しゃがませる。

今度は私の眼を意識してか、噴出しそうに
なる奔流を、ぐっところえていたが、腹腔の
痛みに耐えかねて、今はもう、見得も外聞も
なく、一挙に激しく吐き出し始めた。



特有の臭気が飛散した排泄ぶつから立ち昇り、人間くさみが鼻をつく。

奔流の勢いの間に間に、気愧かしい撥音が奏でられ、彼女は顔も挙げ得ず、しきりに力んで残液を絞り出そうと努力していた。

「もう出ないわ」

微かな声でノンコは終焉を告げる。

再び、ペーパーを手にする私。

部屋に連れ戻すと、間髪を入れず、柱に添

わせて、両手を高手を挙げさせて鴨居につなぐ。

「センス、よくよく縛るの好きねえ」

あきれたという口調で、彼女は私をマジマジとみつめた。

「こんな私がイヤか？」

ノンコが私にきいた様なことをいうと、

「いいのよ、いくらでも。そんな意味じゃない、妙に感心してるの」

「もうこれで最後にしよう」

「早く横になりたいわあ。何だかスゴク疲れちゃった」

寝たいというところを婉曲にいつて、チラツと猥らっぽい眼差しになる。

股縄かけて片脚を吊り、水平にしたり、高々と掲げさせたり、屈曲させてみたり。

そこに、時に応じてカメラが働いていたことは論を俟たない。

股縄二本の間隙にプレイのバイブが唸り、指先が働けば、又ぞろノンコは痙攣を起こして、先程の二の舞——いや、三の舞になることは分かりきっていた。

究極の欲びを彼女は柔らかいベッドで求めている。彼女の場合、前戯的な行為が、すべてオルガの頂点に到達してはいても、女性本来の欲求の、骨の髄までも融けそうな、激しい愛撫と抱擁によって、貪婪な性本来の欲びの淵に、ひたりきろうと希んでいた。

代替物ではない、正真正銘の男を待ち望んでいるのは、数度のアクメの時、きれぎれに口走る、猥らな囁言で、あきらかに証明されていた。

歪曲して吊り上がった片脚の下から、私の指が一寸働くと、ノンコは大袈裟に喚き、擦



れば、更に淫らに叫び声を挙げた。

柔軟な肢態は私の思うが儘になっている。

桃源は振れ、妖しく歪み、片脚吊りの縄の位置に応じて、様々に変貌する姿を、まざまざと私に見せつけてくれた。

冬の夜長――。

既に泊まるつもり腹をきめた私に、慌しい時間の制限はない。

こんな機会に撮れるだけ撮ってやれという

気持が、日頃の私にも似ず、緊縛のプレイを執拗にしている。懼らく、ノンコのカメラ・ハントのフォトは、かなり多くなることであろう。フィルムは既に三十六枚撮り四本目にかかっている。若しこのフィルム、全部撮り終われば、今夜だけで百四十枚近い、あからさまなポーズが、私の手許に永久に残される

ことになる。

単なる緊縛モデルなら、とっくに音を上げていであろう私であるが、失神・痙攣・夢遊・名器・流腸と、こう盛沢山の要素があったのは、私のハッスルするのも又、ムべなる哉であった。

加えて、ノンコは、私の意に添って、延々と続くSMのプレイ、緊縛に、実によく協力してくれていた。

縄を解いても、彼女は私の次の行動を待つて、じっとその場に佇んでいた。

「寝ようか？　かなり草臥れた」

「もう、いいの？」

「有難う、行こう」

手をとって掛布団をまくり、裸と裸でやっとな転がる。ここまで時間を持たせるのに私はかなりの理性を働かせて、行動してきた。ベッドへ転がれば、どうしようもなく、緊縛のフォトは、すべてがパアになることを恐れたからである。

ノンコにとって、やっと許されたベッド・タイム。

掛布団をまくり上げたまま、白いシートに長々と寝そべる彼女の頬に、ホッとした安らぎと、鴛鴦戯の好色の期待が、ありありと泛

かんでいた。

いよいよ男と女の、本命の時間——。

私は、この強烈極まる性感の持主に、単なるピストン運動の繰返し、平凡なセックスでは終わりたいくない気があった。

サジストらしく、やはり縛りを伴った快楽に持ってゆきたかった。

一条の縄を握ると、両腕を深々と胸で組み合わせ、肘にかけて縛った。乳房を圧する前手縛りである。

「センセ、抱きつけない」

恨めしげな声で、ノンコは眼をうるます。

「心配するな。少ししたら、ほどいてやる」
乗りかかって、体ごとぐっと抱きしめると熱いくちづけ。

ノンコは既に鼻を鳴らし、甘い蜜をしたたらせて、呼吸を弾ませていた。

「センセ、あれ、持ってる？」

「何だい？」

「かぶせるもの」

「要るのか」

「妊娠したら困るもの。始末するのイヤ」

「そうか、分かった。百円、はり込もう」

苦笑して立ち上がり、いざとなれば、それに気を配る女心も当然と、硬貨を入れると、

自動販売機から「愛情交換」のしるしが一塊おちてくる。

恋の手ほどのきのカード、コンドーム、塵紙

——。それを握って戻ってくる。

これがトドメのつもりなのを、顔色で窺って、女は流石に用心した。

前戯の玉子形が陥没すると、ノンコの表情は、忽ち一瞬にして変化した。

陶醉と恍惚の坂道を、全速力で駆け昇ってゆく。

女悦を昂揚させて有終美を飾りたかった。

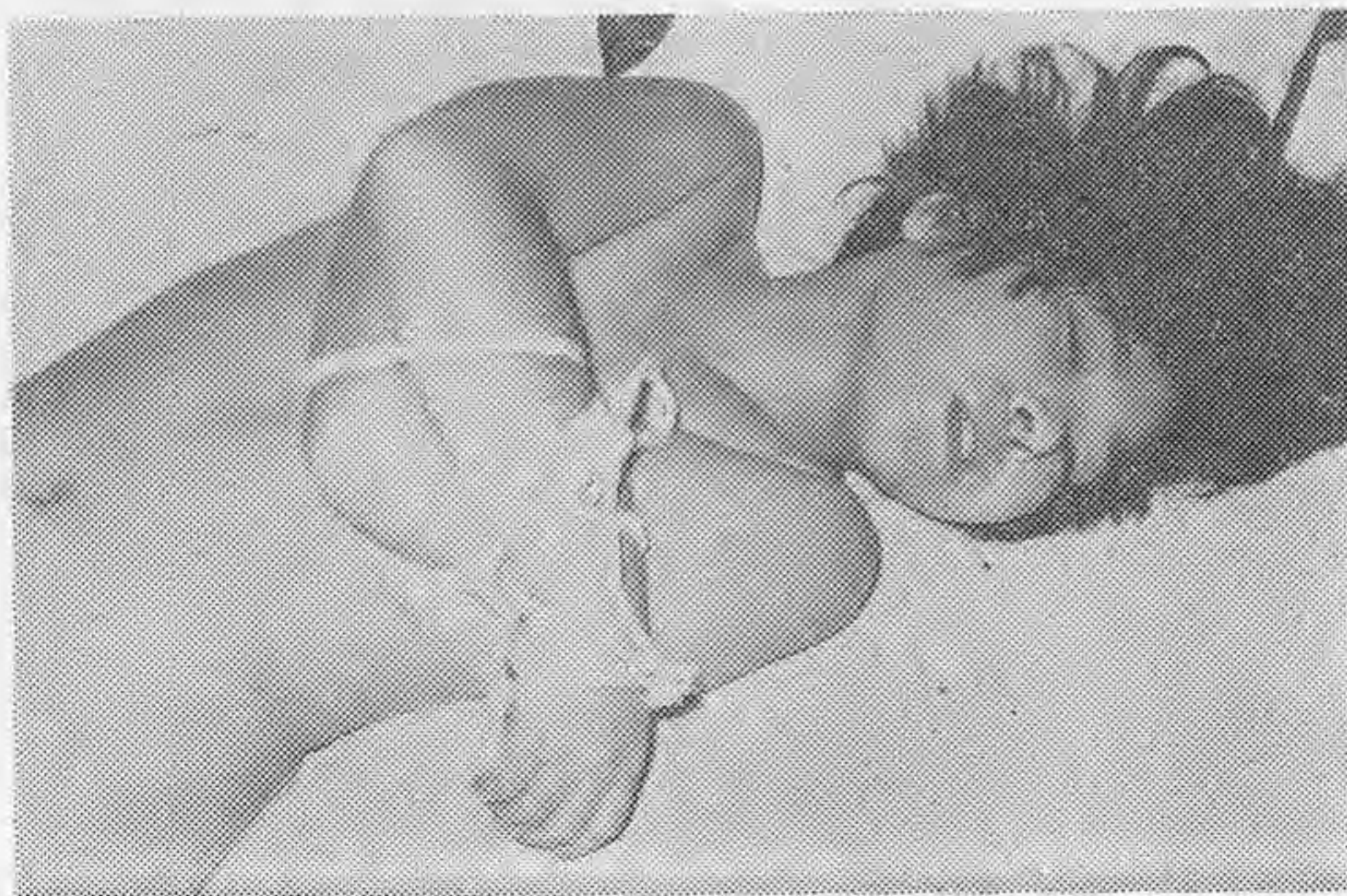
後手に縛って仰向けにした場合の、両手の痛さを考えて、前で組ませたがやはり何となく邪魔になる。恍惚の夢遊状態に入れば、そんな配慮など無用と思っても、どこかで私のフェミニストが顔を覗かせるのであった。

枕元の腕時計の針は、いつしか午後十一時半を指している。もうこんな時間だったのか——。それにしても冬の夜は長い。

ゆっくり愉しむべく、私はノンコの傍に寝そべり、リモコンのスイッチを押してみたり、止めたりした。スイッ

チの入るごとに、彼女は見得も外聞もなく、大きく歓びの声をあげ、激しく悶えた。

枕元にあるスイッチを入れると、電動で、



ベッドの腰の辺りが巧みに上下動し始める。上下の波にのって、ノンコの瞳孔は開き、放心が始まる。

掛布団を、ふんわりと掛けると、私は手探りで縄を解いた。

辛うじて、ノンコの意識は残っている。

ガムシヤラにしがみついてきて、背中に、女の爪が喰い込む。

痛い——。私は未だ正気なのだろう。

五感を痺れさせる痙攣が起こる。喜悅の極みの叫声が、静まりかえった部屋の空気を激しく震わせる。

もう私は腹を、きめていた。口を塞げば自由がある。どうせ、セックス専門のアベックホテル。近隣へ洩れ聞こえようが、お互いさま。ままよと腹をきめ、しめつけられた玉子形を、線が切れはしまいかと思うほどに引っ張ってとり出し、収縮しきった、かずのこ天井に、指が働き出していた。

私の上体に、ノンコの恐ろしい二本の腕の力が加わる。間違っても、のどもとへ手は、やらされない。

「センセ、センセエ……」

と、それ以上は書けない、エクスタシーの猥ら語が、嚙言となって吐き出され、私は必

死で、収縮を、弛緩しようと焦っていた。

あとは蛇足。同じような、否、更により以上の激しさで、ノンコにとってもうこれで幾度目かの、恍惚無我の、夢遊状態が訪れたのであった。

私のハナシもいよいよボルノそのものになってきた。大いに愧じ入っているが、事実だから仕方がない。

× × ×

ノドが渇く——。

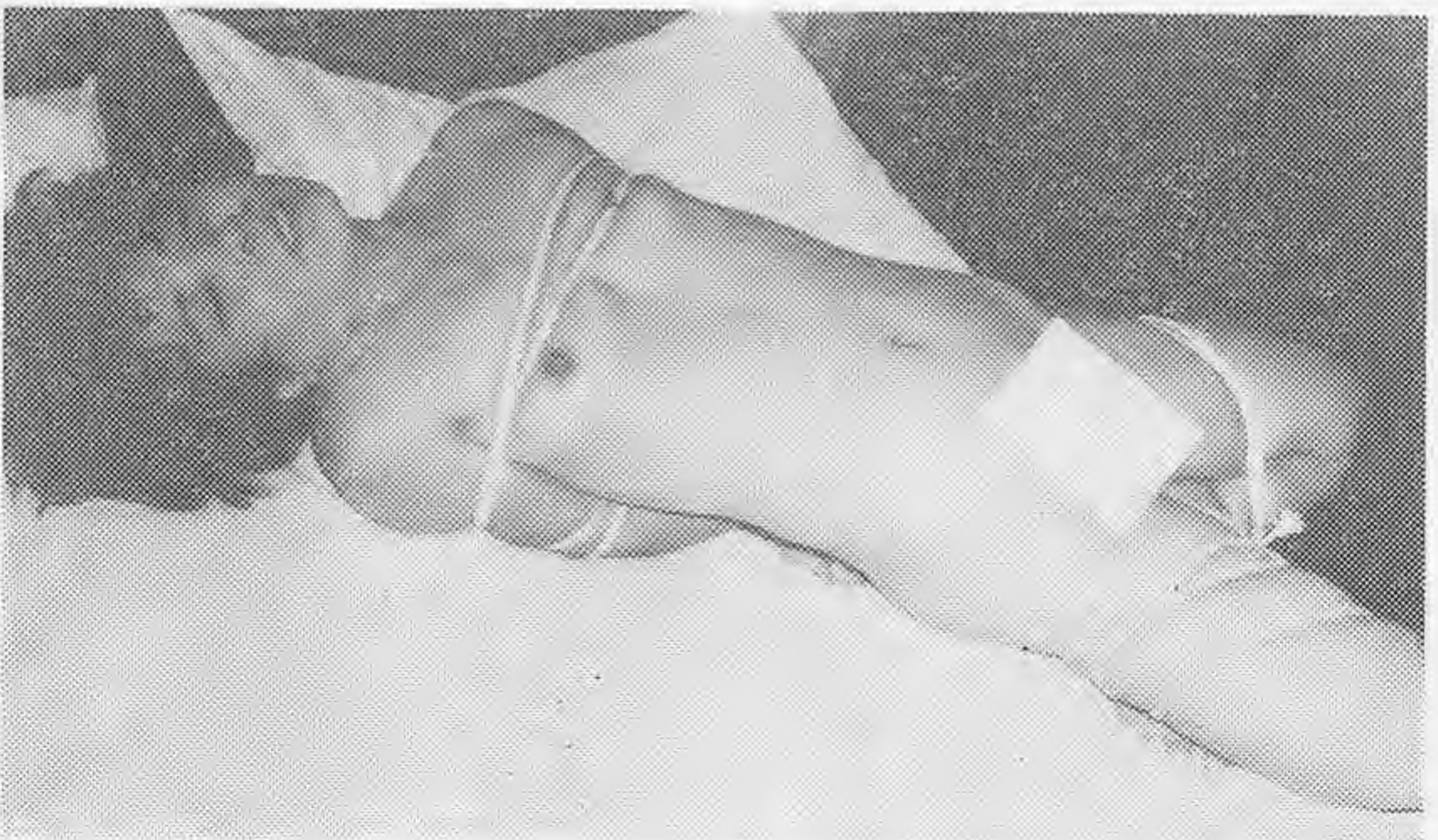
夢の中で、糖尿のせいだと思い、年甲斐もなく、そんなに無茶をすると体に悪いぞと、もう一人の私が、叱っている。

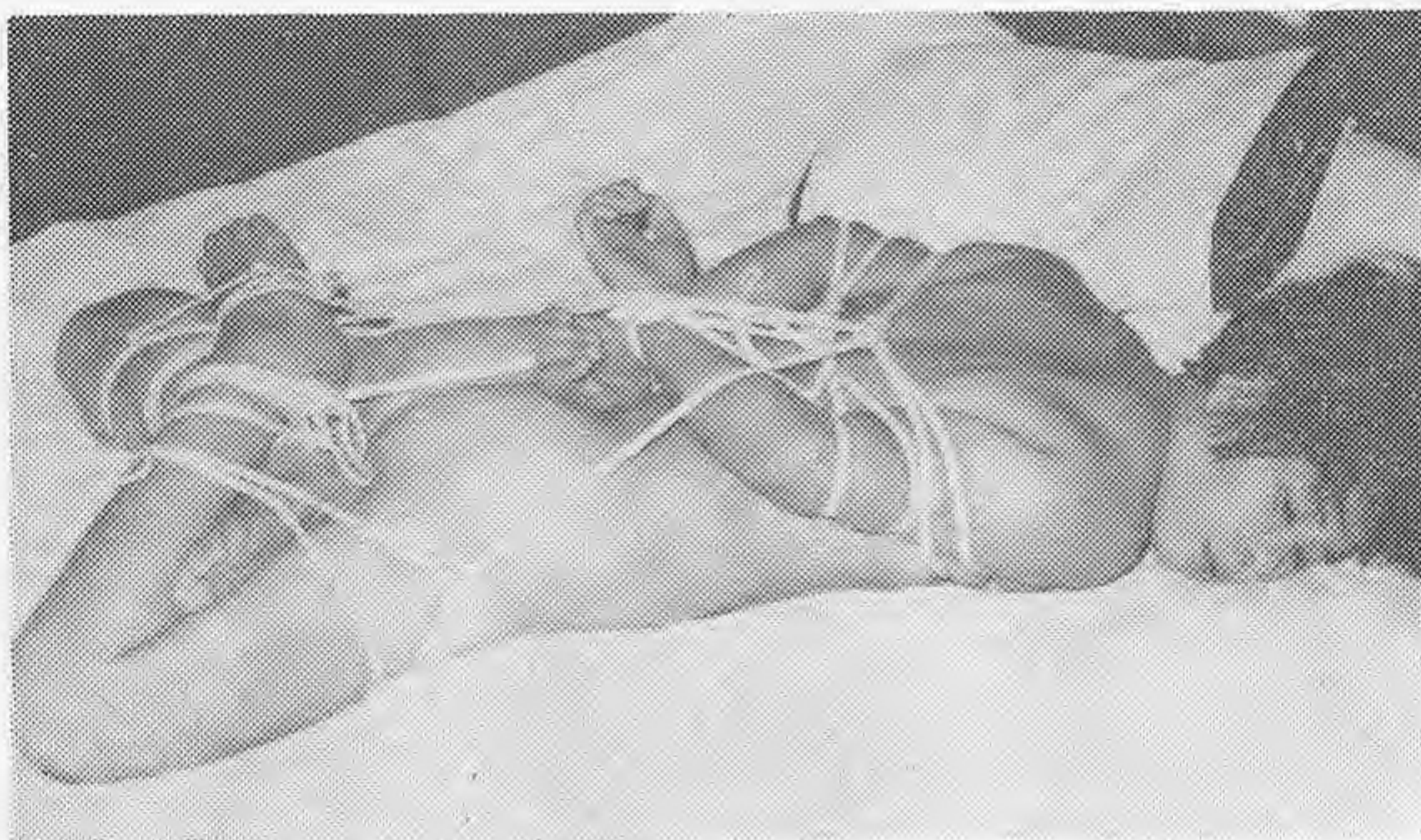
叱られている私が、うすら寒さにハッとして目醒めると、掛布団を蹴落として全裸で眠っていた。

時計を覗きこむと午前三時——。

ノンコは仰向き加減に裸身を丸め、何の意味か、右手で蒼丘を押えて正体もなく深々と眠りこけていた。

激しく挑んだかずのこ天井に、やっと思いを果し、行為のあと、疲れがいつときにドッと出て、その昏眠ってし





まったらしい。

三時間ばかりの熟睡の間、布団をはねのけて、私達は奇妙な態位で絡みついた儘、ぐっすりと仮初めの夢路を辿っていたようであった。

全裸の儘そっと起き上がって隣室へ立ち、冷たい残り茶をのむと、トイレへ行く。

ゴムの残骸を始末して長々と排泄して戻ってくると、ノンコが微かに眼を開いて、物頼げに私をみつめた。

冷えた体を掛布団でくるみ、そっとノンコを抱きよせる。

「今、何時？」

「午前三時を少し廻ったところだ」

「そう、真夜中なのね。何も知らずにぐっすり寝込んでしまったわ」

「布団も着ずに裸で眠っていて、寒いので眼がさめたよ」

「何だか私、魂が抜けたみたいで、フラフラ」

「少し激し過ぎたようだね」

「でも、よかった」

女は言い終わって私の胸をチクツと噛んで、顔を埋めてきた。

熟睡が私にスタミナを取り戻させていた。

深々と布団をかぶった儘、ノンコを強く抱きしめると、甘い鼻声が、クスンクスンと胸を擦り、いきなり粘ついた女の唇が私を求めてきた。

唇を離すと、矢庭に、もぐり込んだノンコの頭が、掛布団を起伏させて、足許へ這っていった。

巧みな口腔が、舌端が、私を擦り、シャンとさせてゆく。

疼くような男の欲望が、深夜のしじまの中で再び湧き上がってくる。

それに伴って、ムラムラと嗜虐の欲望が並行線を辿って、私の充血した大脳神経を掻き立て始めた。

両手で女の顔を離し、いきなり俄破と起き上がると、獲物を見失って途迷う女体を捻じ伏せ、シーツの上でもつれている一本の縄を手早く取り上げ、後手に縛りあげる。

私の攻勢に、意図を知ったノンコは、早くも欲びの呻き声を洩らしていた。

果てしもなく淫らごとを求める女に、私は挑戦する。

ガムシヤラの縄がノンコの肌に蛇のように絡み、気がつけば、両足を組ませて縛り上げ

背後ばかり犇々としめ上げていた。俯伏せにして縛っていたので、ゴロリと仰向けにすると、僅かな胸縄と腿の縄とが、みえるのみであつた。

両足を組み合わせて縛つての仰向けの姿は苦しい。にもかかわらず、この唐突の緊縛がノンコの刺激の琴線を掻きならして、快い被

虐の願望に繋がるのか、のたうちもだえる女体は、あえてこの究極の緊縛を甘受して、「センセ、いじめてえ。もっと強いいじめてえ」

と、被虐を求めて甘く訴えるのであつた。ノンコの虐めてという言葉は、この場合、セックスしてくれという言葉に外ならない。

私に対する時、虐めてくれというのは、セックスの陶醉に繋がることを、ノンコは一番よく知っていた。

悶々とするノンコの体を、もとの俯伏せにして、双臀より進入する小型パイプ。

必然的に起こる夢遊の恍惚と痙攣――。

その状態を追及するカメラ――。

真夜中の狂宴をうつすハント根性は、我乍らイヤらしいと思うほど貪欲であつた。

かずのこ天井を求めて、私は、意馬心猿になる。

人呼んでスーパーマン、或る時はこれを和合リングとも謂う。

充血を誘う補助具を装填して、私は、勢いを盛り返すと、収縮のかずのこ天井に挑戦する。

猫の口腔のようにザラつく感触に、ひたすら溺れて、私は激しく求め、正に一匹の野獣と化して、ノンコを奪いつづけた。

肌と肌で感じるスキンシップ――。

しかし、私には今、防禦のスキンのいとますらない。

恍惚の頂点で悶える、ノンコの念頭にも、そのことに、思いを致すだけの正気はなかった。



極致に到達せんとした刹那、辛うじて理性が蘇り、私の体が矢庭に浮上するとみるや、齒を喰い縛る唇こじあげ、血液三ccに匹敵するエキスを進らせていたのである。

陶醉の極みの女に、栄養を与えるべく、男は、それを女の顔に塗りたくる。

西欧ポルノ映画の一シーンである。

ヘタヘタと崩折れた私は、やがて体を起こすと、ポルノ映画の一シーンの再現を始めたのであった。

.....

精根果てて眠り、再び自然にめざめたら午前十一時——。

慌しくノンコを起こす。アベックホテルでこんな遅くまで寝込んでしまったのは始めてのことである。

昨夜来の奮斗のあとの、縄やプレイ道具、カメラが辺りに雑然と転がり、密室には、男と女のセックスの匂いが微かに漂っている。

びっくりしたように起き上がったノンコの顔は、奇妙な強ばりをみせている。

知るや知らずや、彼女は裸身で立ち上がり浴衣を素肌に纏うと、満足しきった眼を、こすって気愧かしげに私から顔をそむけ、洗面に立った。

カーテンの隙間からさし込む薄陽が、白いシーツに、細長いスポットの光を投げかけ、アベックホテルのひる前は、何となく味気ない。

余りにも激しい耽溺の一夜——。

カメラ・ハントの女性で、かくまで私を狂わせた女性は少ない。

年甲斐もなく中年男が、二度の精根使い果した朝は、流石に重苦しい蓄積の疲労が、のしかかっていた。

腰が痛む——。

年のせいであろうか。

ノンコが着物を着終わるのを待って、ホテルをあとにしたのが恰度、正午。

年の瀬、半ばにしては珍しい暖かい陽ざしを受けて、雑踏の人並に紛れ込む。

行き当たりバッタリのコーヒショップに入ると、煎りたての豆をサイフォンで入れた良心的なコーヒーを運んできた。

「センス、私、自分で仕事を探すから、気にしないでね」

「ウン、でも心掛けておくよ」

「今のアパート高くつくから、替わるかも知れないけど、替わったらお知らせします。又会って下さるでしょ」

「会いたいよ、忘れられない」

かずの这天井を思い出して、そうしたら嬉しそうに笑って、声を潜め、

「センスに一生、付き纏うかも知れないわ。

あんなに愉しかったこと始めて。外のハントの女性とプレイしたら、ゼラシー起こすわ」と、色っぽい眼で、にらむ。

「今年中には、もうダメネ」

「あと、半月もないからね」

「お正月は？」

「さあ、一寸、分からない」

「薄情ね。いいわ、気の向いた時、又会ってね」

ノンコは、早くも次のデートに心を走らせているかのようであった。

コーヒショップを出た路上でタクシーを拾い、ノンコを送ったあと、年の暮に無断外泊したこの弁解を、愛する女房に何とのおうかと、善良な亭主に還元した私は、あれこれの言訳を心に泛かべながら、冬陽を背に受けて、最寄りの駅へと歩いていった。

今日、現在、唯今、今以て腰が痛いのは、あの夜の、余りにも烈しい、あらくれのプレイが祟っているのかも知れない。



SMプレイの歴史的考察

モガリ
虎落笛

二、三年前までは、特定の書店に行かなければ無かったSMプレイに関する写真、雑誌等が最近はこの書店でも気軽に買い求めることができるようになった。

この事実、はたして喜んでよいのか悲しむべきか、二律背反する問題のような気がする。というのは、私を含めてSMプレイ等に多少なりとも関心のある人にとっでは、種々の文献を知ることができ、好事者同志の個人的意見の交換も容易になって、SMプレイの魅惑をいっそう楽しく味わうことができるからだ。しかし、裏を返せば、それだけ、SMプレイという本来隠されてきた快樂追求

の手段が陽の目をみる状態になったというのは、一部の良心的理解を別にして、日常性に対する不満や人間疎外への絶望、都会生活での自己喪失等々が、深刻になってきた証左ではあるまいか。

これは過去の歴史から判断すれば、惰性的生活空間が、より拡がり、破壊の危険性を孕む要素を多く持っていると言える。つまり平和崩壊の予兆をみることもできるのだ。前記「一部の良心的理解」というのは、ボルノ解放運動から来る表現の自由を指すのだから念のため。

ところで、SMプレイの快樂を人間が享受するようになったのはいつ頃からだろう。読者諸兄で、このSMプレイの古今東西の歴史を考証して貰えればと思うが、如何なものか。私の個人的意見を述べてみると、次のようになる。SM的快樂というのは、人間が

類人猿であった頃の、あるいは霊長類であった頃の獸、更にそれ以前の原始的深部から来ている本能的體驗のひとつではあるまいか。原野を疾走していた時代のセックスへの追慕、それが人間的エロティシズム感と結びついて、形を変えてプレイ的なものとなり、我々の前に現出してくるとしたらどうであろう。このSM的快樂は、人間が言葉を覚え、思考を始めた時から存在したと言ってよい。そして、人間の打ち消し難い野蠻性の別の發露として、我々が人間である限り、これは続くものらしい。しかし、私が恐れるのは、単純なSMプレイが度を越して殺人にまで及ぶ場合である。そんなことはない、とは断言できない。浣腸行為から、切開行為、内臓摘出行為へとつながる気配は十分だ。そして、この時点で人間は、人間性を喪失した狂人へと移行してしまい、道德中心の社会から抹殺されてしまう。

我々の自由(サド的)は、第二次大戦後拘束されたのである。悲しいことだが、サドの世界にあらがれて、平和的SMプレイを羞恥を持って楽しむことが、我々の唯一の願望であるかもしれない。

被虐の女人渡部好美、飽くなき責めに恍惚の、虹の世界に浮かぶとき、白き豊かなその肢体、狂喜の炎に灼かれつつ、桃源境の味を噛みしむ。

情無用の荒縄が、深くくびりしその乳房、期待におののくその乳首、縄噛み込みし柔肌も、轡にせかれし紅唇も、一途に待つは我が責め手。

いでや叶えんその願い、陶器の如き白肌に、想いを籠めしいたぶりの、紅き兆しの浮かぶまで、喜悅のうめき挙るまで。

冷やかなりし床板に、熱く火照りし肌を擦り、もだえる姿ぞ生身なる、オンナ好美の美しさ。真白き腹を縦に割る、むごき縄目も好美には、なくてはならぬものならん。青き剃り跡歴然と、隠しようなき羞恥をも、被虐にむせぶ好美には、なくてはならぬ喜悅なり。

女盛りの艶やかさ、脂ののりし太腿を、無情と見ゆる青竹で、大きく割りしこの態も、好美の心を

渡部好美夫人に
捧げる憧憬詩

豊田二浪

イメージ画『鑑賞物』 柏木真佐男



M 女性を求めて 飼育と素質 一角正人

奇クを読み出して八年。ことS Mに関しては、かなり深く研究しているつもりである。

S Mの根本は、いうまでもなく本能的なものであり、生理的に、男性はS傾向、女性はM傾向を持っている。そのために、ほとんどの女性が多少に拘らずM的快楽を得られるだろうし、私は、それを与えられると確信している。今までに、私は、全くM気な

かった女性を数人飼育し、S Mプレイのパートナーをつとめさせて少しはM的快感を感じさせた経験を持っている。

しかし、最近つくづく感じてきたことは、女性にM的本能が内在しているとはいっても、程度の差によって結果は大いに違い、本当にMの快楽を理解させるには、やはり「素質」が必要だということである。

これは、素質のないものを飼育することに疲れた、というより飽きたりなくなってきた結果だといふほうが正しいと思うが、つまるところは、M女と呼べる価値のある女性と、思う存分にプレイをしたい気持ちに駆られるようになってきたのである。

「素質」のないものでも、飼育により、ある程度のM性は引き出せるものの、限度以上となると容易ではなく、残念ながら私の過去の飼育女性中には「M女」は居ないといわざるを得ない。私は自由業であり、時間的にはかなり融通がきく幸い、東京近郊でM願望のある女性を探そうと思っている。

男なら、美しい女性の姿に慣れるのは当然であるが、私は特に、自由を奪われて悶える女性の姿の中にこそ美があると感じ、実社会では求め得られないその美を、緊縛画や写真に求め続けてきたが、責められる女性の哀れさ、美しさを満喫するためには、自分で作品化する以外はないようだ。パートナーやモデルの出現を望むや切。誌上を賑わしている高村浩子、荒尾慶子、福井桃子等々の美花を是非一度、許しを乞うほど苛めてみたいが、遠いのが残念である。

推しはかり、無理強いしたる構図とは、知るや知らずや胸のうち。熱き涙落ちるたび、吊り上げられし足指の、うごめくさまも艶めかし。

眸にあふれ頬つたう、真珠の如き水滴も、しのび泣くよなその声も、感きわまりし兆しなり、忘我の巷さまよいて、喜悦にむせぶ証しなり。

人の字形に宙に浮き、鞭音高く肌にあたて、歓喜の一瞬失禁の、羞恥の水条這い下る、白き内腿慄わせて、うねるが如きその女体、M女好美の素晴らしさ。

柔き白肌朱に染めて、色あざやかな鞭痕の、くつきり浮かぶ双臀を、もっと打ってと突きだし、被虐の業火に身をこがす、マゾ女好美のあでやかさ。

豊かな肢体折り曲げて、無残と見ゆる海老縛り。背中にうごめく十本の、手指の表わすこの苦痛。縄喰いこみし柔肌の、喘ぎせつなきこの責めも、マゾの陶酔呼び入る、欠かせぬ窓と好美知る。

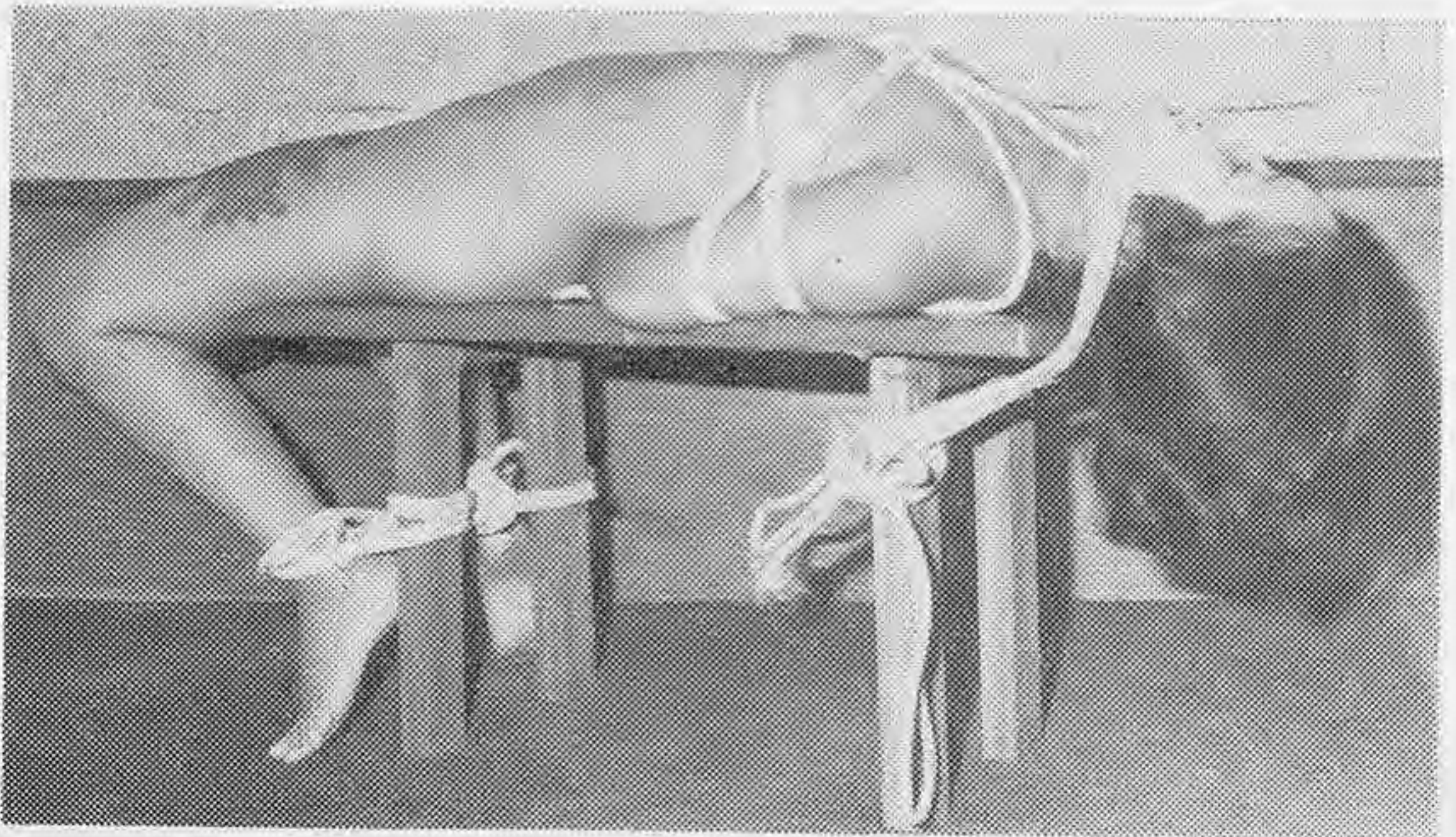
苦しさ耐えて待ち望む、女体に与える快楽は、好美の好きなアヌス責め。嬉し羞かし口ごもり、蚊の鳴く如き声を出し、浣腸責めを求めくる、M女好美に憧れる。


~~~~~ 夫婦プレイの経歴 ~~~~~  
 私たちの場合 … 早坂信治 …

毎月号の『奇クサロン』で、夫婦プレイ同好の方々の、それぞれ個性あふれる作品を楽しく拝見させていただいています。私達は、結婚十年を過ぎた中古夫婦ですが、私は結婚以前からのハ奇クVオールドファンであり、結婚以来、ひそかに家内と二人でSMプレイを楽しんでまいりました。かねてから同好の方々とお会いできたら楽しかろうと思いつながら、それも実際にはかなわず、せめてものことと思ひ、今回初めて投稿させていただきます。これを機会に、私達夫婦も同好の方々のお仲間入りをさせていただき、今後ハ奇クV誌上を通じて、いろいろとご交歓願えれば幸いです。



長年のプレイ経験にもかかわらず、私も妻も余り強い責めは好みません。殆どが羞恥あふれる責めが多く、パイプ、バナナ、コケシなどの小道具を使用して、嗜虐の中に欲情の吐け口を求めています。これは殊に『夫婦プレイ』に許された特権のように思います。又、私達はプレイのアクセサリとしてハ刺青ペインティングVも応用しており、私の欠かせない趣味の一つになっています。妻の体に巻きつけたロープによって浮き出る刺青。それと種々の小道具が私の陶酔感を、いや増してくれます。そんな時ふと自己の性向、欲望に似通った妻を見つけて、そこに新しい夫婦愛を感じ







じることが出来ました。妻も多くの同好の御夫人方と同様に、体毛は全部綺麗さっぱりなくしてしまいました。元来、余り濃くはなかったのですが、最初はカミソリで剃り、二、三ミリ生えた所を、毛抜きで丹念に抜き取りました。毛抜き作業の間、ずいぶん痛いようでしたが、その中にも複雑な歓びを味わっていたように思います。ちなみに私達の夫婦プレイ写真を同封さ

せていただきます。未熟な写真ですが、若し出来れば御掲載のうえ同好の方々から御批評を賜れば幸いと思っています。初めての投稿ですので、何を書いて良いのか要領を得ませんが、何卒よろしく御願い申し上げます。編集部の方々始め、同好ファンの皆様方の御多幸をお祈りします。





## マゾ記 ある夜の拷問 早木夢二

たまらなくなつて、朝から慶子に縄をせがむことが月に二回ぐらゐある。

氣候のいい時なら、もちろん素っ裸になるが、寒い時は着物の上から菱縄をかけて貰つて、夕方まで、そのままの姿で過ごす。

自分は週に一回は必ず要求して心ゆくまで縄と責めを堪能しているくせに、どうかすると私の気持ちを無視しているのではないかと、いらいらしてくる私の、いわば慶子へのあてつけともとれるような仕草だが、彼女は彼女で、それを逆手にとって、その夜は、たっぶり私を責めて、それで私の気持ちも調和がとれてくるというようなことになる。

不思議なもので、着物の上からでも縄をかけられていると、自分が罪人の様な気持ちになつてくるものだ。これは慶子も同様である。

そんなことを泌々述懐したことがあつた。

そんな罪人になり切つた気持ちで夜を迎え、充実した「お役人さまと囚人」の拷問プレイが展開されるのだが、そういう日に限つて慶

子の責めは激しく、私は拷問に喘ぎながら、その日の私の無礼を彼女にお詫びしなければならぬ。

ある夜などは——部屋を暖かくしてもらつて素っ裸になつた私は菱縄をかけられ、両股をぐつと広げ、尻を出来るだけ後ろに引いて椅子に腰かけ、しゃがんだ彼女の手で責具を差し込まれ、じわじわと責められながら、

「お役人さま。本日の御無礼、どうぞ、お許し下さいませ」

と喘ぎ喘ぎ哀願するのだった。

「自分から、あてつけがましく要求するなんて、生意氣だったらありやしない。ほんとうに悪いと思つてゐるのか」

慶子は、ねちねち、そんなことを言いながら責具をぐつと引いては、また直ぐ、ぐつとおし込む。

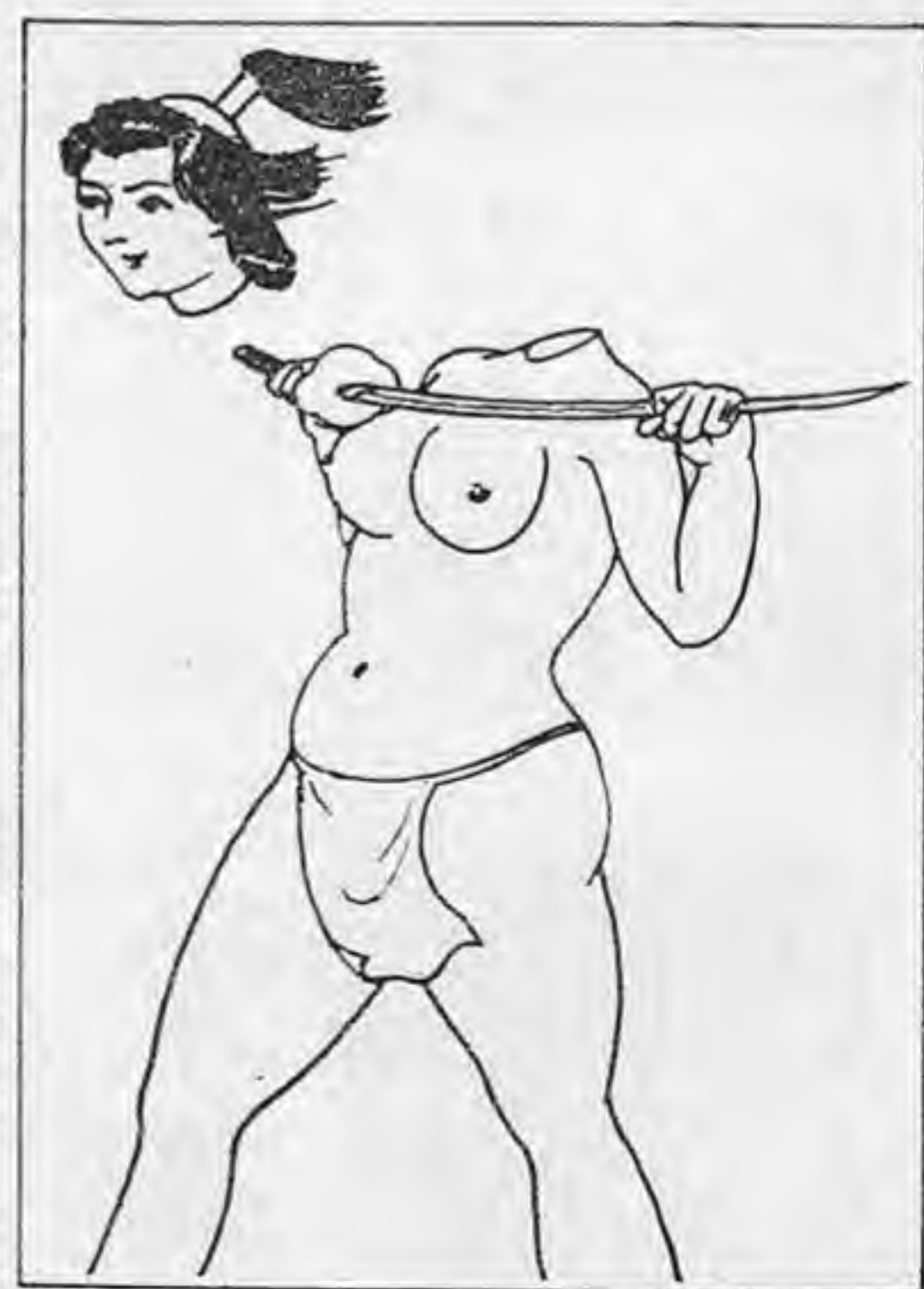
私は、責め具の動きにつれて身悶えながら、

「もう決して、あんなことは致しませんから、きょうだけは、お許し下さい」

「きつとだね」

「ハ、ハイ、お役人さま」

「よし、じゃ今日のところは許し



てやろう。その代わり、たっぶり責めてやるから」

「ありがとうございます。拷問、存分におかけ下さいませ」

私は胸を、しゃんとはり、尻をぐつと後ろに引いた。

愛する女に全裸で菱縄しばりをされ、これだけに通用する拷問を楽しむなんて、私にとって、こんな幸せはなかった。

責具を思い切り突っ込んで慶子は私の前に回ると、

「夢二。どうだい、気持は？」

と、のけぞらせた私の顔を、のぞき込んだ。

「おや、泣いてるの？」

彼女は指で私の目尻をふいた。

「ハ、ハイ。嬉しくて嬉しくて」

「そう」

彼女は、ふっとしんみり、そういう。

「あとで、ゆっくり可愛がつてあげるからね。辛くても、もう少し拷問を受けてるのよ」

「ハ、ハイ。拷問、嬉しくお受けしております。もっともっと、責めて下さいませ、お役人さま」

私はキッパリ、そういった。

慶子が再び後ろに回つて、責め具に手をかけた。

「ゆくよ、夢二」

「ハ、ハイッ！」

—— 美少女無惨絵秘帖 ——

『斬首独演』 桐原紫門



&lt;告白&gt; ..... 佐野みさ子

## 理想のプレイ・メイト



十一月二十八日の夜は、みさ子にとって、とても素晴らしい夜となりました。

私は奇クの編集長様より紹介していただいた「ロマン派生様」と新宿のホテルで楽しいSMプレイを致しました。

と申しますのは、私はどうしても奇クの緊縛モデルになりたくて編集長様に、どうか東京まで辻村様でも塚本様でも、出張させて私をモデルにして下さいとお願いのお手紙を何度も出したのです。そ

れに対して編集長様は、ようやく「ロマン派生様」を、ご紹介して下さいましたのです。

ロマン派生様はお人柄といい社会的地位といい、まったく、ご立派でみさ子には、もったいないくらいの、お方でした。

SMプレイが、あくまでも、プレ



イである以上、たとえ強度なS男性であっても女を愛する優しい心がなければ、プレイをする資格もなければ、また身を投げだしてくる女もいないでしょう。そして、その上、更にプライバシーを完全に守って下さる、お方なくてはなりません。

まさに、この条件にピッタリといえるお方が、ロマン派生様なのです。

プレイはホテルの一室で午後四時から九時まで行なわれましたが時間のたつのが、とても早く感じられました。

それに一つのプレイが終わるたびに、みさ子の縛りを解いて「次の準備が出来るまで、お風呂へ入ってらっしゃい」と優しく気をつ

かって下さる時に、たまらない親しみを感じました。

これでこそ、女が心も身体もその方にまかせることが出来るのですし、責められる女の肉体は燃えるのです。

プレイ中は、みさ子の希望により、ロマン派生様にも全裸になっ

ていただきました。そして、みさ子からお願いしてオシャブリの奉仕をさせて頂きました。それに69もして頂き、剃毛されたばかりの、ビーナスの丘に、キスマークをつけてもらいました。

もちろん、これはすべて、女奴隷みさ子にふさわしく、縛られたまま、致しました。

開股責めでは、電動バイブ(各種)、コケシ、コーラの瓶、指などで心ゆくまで責めて頂きました。プレイのあと、豪華な、お食事まで御馳走になりました。

みさ子にとって、彼は、まったく理想的な、とても素晴らしいプレイのお相手なのです。





## —＜第九十三回＞—

辻 村 隆

SMのよき同好者であるドクター氏が、香港みやげだといって、一冊のポルノまがいの雑誌を送ってきた。税関もフリーパスの、露出なしの安全なシロモノだが、内容は、海外のショッキングな映画紹介で、かなりドギツイSM的なものも多く掲載されていた。

アメリカ、カリフォルニアあたりの発行で、誌名は「アダム・フィルム・ワールド」。それだけなら、何も紹介する程のものもないのであるが、フィルムワールズ、ムービーガイドと銘打って、世界各国の映画紹介フォトの中に、なんと「徳川女刑罰史」の強烈な緊縛シーンが、二ページに亘って紹介されていて、ドクター氏の私に送ってきた真意はそこにあったのである。全文英字のそのタイトルは「TOKUGAWA TORTURED WOMEN」。掲載のデカデカと大

きい八葉のフォトは、すべて拷問と緊縛で、始めての緊縛指導で、張切って、やったものばかりである。ドクター氏にいわせると、私の緊縛が世界の誌上に発表され、あんたもいよいよ国際的になったものだ、さかんにハッパをかけるのであった。

世界中の映画の、ショッキングシーンの中に、この映画もとり入れられたところを見ると、外人のSMに対する関心も、我々とうやうに似たりよったりである。

SMプレイの自由化に伴い、興趣の昂進は強烈を呼び、極致を求めて狂奔し、急速に拍車をかけてゆく。プレイし尽し、凄まじいフォトも、撮るだけ撮ってしまうとやがて、私の謂う「緩々」の域を彷徨するか、対象を別の女性に求めて、偉い努力に明け暮れるよ

うになる。

交歓プレイも、煎じつめれば、二人きりのSMプレイに飽いた、挙句の手段に外ならない。SMの刺激と、女体の探究を求めて、それは当然の帰結のように思えるのである。

唯、そうした複数プレイには、どこまでも、根幹のゆるぎなき愛情と、強い理性が、必要なものではなからうか。SMのハントに狂奔して、それこそ大久保清の二の舞にならぬとは誰も保証出来ない。私のSMカメラ・ハントにしても、理性という、一本のバックボーンが脱けたら、或は大久保清のようになっていないとは、いいきれない危険が、いつも胚胎している。

今の世の中に、アバンチュールを求める男、女は余りにも多い。一発的俗悪週刊誌は、そうしたことを、面白、可笑しく、誇大的に書き立て、若い娘は、痴漢の手を秘かに求めているのかと思われるくらいに挑発的で、ミニやホットパンツで濫歩している。

アバンチュールを求めるもよしされど理性を喪失した場合、SMの行為と、犯罪は紙一重である。所詮は、近頃流行りのスキンシッ

プで、肌と肌の触れ合い、心と心の問題ではなからうか。

最近、頓に奇クサロン欄などに夫婦プレイや、愛人の緊縛フォトが多くなってきたが、こうしたSMプレイの強烈なフォトが、一般にも気軽に撮れるようになったのは、大いに喜ばしい傾向である。

緊縛や、愛情交換、ポルノ的フォトが、自分達の手で作れたら、高価な代金を払って、暴力団ルートの、古ぼけたポルノ・フォトやインチキくさい、三流新聞広告の緊縛フォトを求める者も少なくなると、この種の被害が減少することは確かである。

SMプレイがマイホーム化しつつある、その最大の一因は、急激に普及してきた、DPEの自家製造と、手軽なストロボ、操作安易で、撮り損いの少ないカメラの発展等であろう。初歩向きなら二、三万円程度で、現像、引き伸ばし一式が揃い、カメラ雑誌の手引で手軽に覚えられる。

DPEなど、車の運転技術などから較べれば、問題にならぬくらい簡単で、しかも生命の危険は全くない。

愛妻、愛人、恋人等との、愛技



## モデル志願 砂川圭子



の交歓プレイ、SMのプレイのフ  
ォトを、俄づくりの暗室で、二人  
でつくり上げてゆく愉しみは、金  
がかからなくて、しかも二人きり  
の秘密めいて、心ときめくもので  
はなからうか。

二人のSMの愛技は、それによ  
って、新たな次の刺激と興趣を

求めて、更にフレッシュに進んで  
ゆく。果ては、信頼出来る同好、  
相通ずる組み合わせによって、千  
変万化に、プレイは絢爛と開花し  
てゆく――。

アルサロや料亭で、金目当ての  
ホステスを口説いて、莫迦々々し  
いゼニを撒いているより、遥かに

私はモデルになってみたいと、  
そう思っただけで、身ぶるいする  
ような気持になります。これは何  
故でしょうか。私はモデルになり  
たいと思います。ぜひ私をモデル  
に使って下さい。もしモデルに使  
って下さるのなら、一生けんめい  
言われた通りにやります。

年令は十九才、身長一六〇セン  
チで体重は四三キロですからやせ  
ています。決して美人ではありません。  
せんが写真を同封しておきます。  
まだお化粧の仕方も知りません  
ので教えて下さい。今は勤めてい  
ませんので、いつでも出られます  
が、日帰りのところでないかと駄目  
です。編集部とは少し遠いので、来  
ていただけないようでしたら、近  
くの人を紹介して下さい。お願い  
します。(神奈川県・砂川圭子)

円満、平和で健全である――と、  
私は思うのであるが、皆さんは如  
何でしょうか。こんなことをいう  
と、諸賢は、ツジムラタカシは、  
けしからん。己れは、ゲップが出  
るほど、数知れぬ女人のハントを  
しておいて、何をぬかすかと、仰  
有りたいに違いない。

成程、それに対して、私は一言  
の抗弁もない。ただ、泥棒にも三  
分の理窟で、一寸附言させてもら  
えるなら、私のカメラ・ハントも  
こうした過程で成長し、真似事の  
雑文を書けるところから、それを  
発表したのが、膨れ上がって、今  
日に到ったのである。

私の書齋の机上には、月々送ら  
れてくる新刊の奇クや、参考誌が  
何のてらいもなく極く在りの俥に  
投げ出されてある。ということは  
私の場合、十中八九までは、家内  
公認のSMプレイであり、カメラ  
ハントなのである。傍の書架には  
昭和二十七年六月号以降の本誌が  
数冊の欠号のみで、ずらりと五段  
ぐらいを占めていて、家内は月に  
二度ぐらい、整頓して掃除してく  
れる。

私の書いたものは、拾い読みし  
ているか、或は慣れきってしまっ

て、読みもしないか、それは分か  
らない。

膨大にふくれ上がったフォト・  
コレクシオンは、鍵のかかる、自  
称「耽奇房」の小間に、ぎっしり  
詰め込まれているが、鍵は夫婦の  
タンスの抽出しに入れてあるので  
覗き見る気なら、いつでも自由な  
のである。

畢竟、私達夫婦の仲には、余り  
隠しごとがないということなので  
若し私のハントを読んで、ジェラ  
シーを起しては、それこそ  
年柄年中、ツノを出してなければ  
ならない環境におかれているの  
であった。

フォトを眼前に展開させて、夜  
遅くまで、追われたSMカメラ・  
ハントの原稿を書いている時など  
妻は、しばしば紅茶や、茶菓子を  
運び、時にはラーメンなどを作っ  
てくれる。そんな折、机上のフォ  
トをとりあげ、チラリと眺めて、  
若い人ね、とか、よく肥えている  
のね、とか、奥さんなの？ とか  
訊ねるが、深くは追及しない。  
私達夫婦にとっては、凡ゆるS  
Mプレイの過程を卒業した、心の  
安定と信頼が、深く相互の心に根  
を降ろしているからである。  
ハントの内容の、どこまでが虚



構で、どこまでが真実なのか、それも追及しない。

結婚当初、若い時代の血気にまかせ、一寸した夫婦間のトラブルは二、三度あったが、特定の軽妾も、愛人もなく、既に二十八年間私達夫婦は今に至るも至極、円満で、仲が良い。

妻は逸早く、私の心底に根ざしているS性を理解し、M性になるうと努め、結婚当初から、SM的なプレイを拒否しなかったのである。SMに関心度の高い今の時代なら、さほど珍しくなくとも、戦中・戦後の時代に、私のS的行為を、変質扱いすることなく、亭主の好きな赤鳥帽子で、易々と受諾したところに、私の妻に対する、深い愛情の根が培われていったのである。

こんな時代になって妻は、むしろ私の先駆者的な想念に、内心、感嘆しているようである。雀百までのたぐいで、懼らくヨボヨボの爺さんになるまでも続けるかも知れぬ私の性格を知っているから、いっそ協力的な方が、自分の心も救われると悟ったらしい。そこには、私達夫婦の、SM的行為のしつくした飽和感が確かに流れていた。

暇さえあれば、せつせと、フォトを焼く私に、妻は半ば、呆れたように、

「そんなに蓄めて、どうしますの？ 息子にも譲れないし、といって、焼き捨てるのも惜しいし、墓場まで持ってもゆけないのに……」と、笑い乍ら慨嘆するのであった。

当初は、マイホーム的に始めた私達のSMプレイがきっかけとなり、奇クヘ投稿する拙筆が縁で、箕田氏という、無二の好伯楽を知り、それが現在のSMカメラ・ハントへと発展していったとすればSMプレイも、まずは「カイ」より始めよ、M的な女性をハントしてみたいという欲望の前に、夫婦が愛人同志で、ポチポチ始めるのが、一つのルートでもあり、発展への秘訣ではなからうかと思うのである。

マルゴや、ニューポート社のSM的な装身具、拘束帯が、同好者の人々から分譲をうけ、もうかなり溜まってきた。一つ、それぞれ×千円、×万円するシロモノもあって、確かによく出来ているし創意工夫されている。それが、こう易々と分譲をうけ



『力学責』堀 真彦

る原因は何かといえ、一つの固定された型に嵌まってしまいうからであろうか。

覆面嵌口具つきで、すっぽりかぶり、乳首のみ覗くようなシロモノにしる、数度女性につけさせたら、もう同じ恰好ばかり眼につき飽いてしまうからに外ならない。創意はあっても、さまざまに変化しない。それが、SM装身具の弱点のように思われる。縄は一見平凡である。それでいて、プレイヤーの想像は無限に変化する。一度は、そうしたSM装身具に興味をもつ人々も、結局は又、縄へ戻る。

緊縛プレイの場合、やはり縄に始まり、縄につくようである。装身具が、偶にたべる御馳走であるならば、縄は米のメシのよう

なもの。

数本の縄があれば、千変万化に緊縛ポーズは変わる。

緊縛を始めて、もう二十数年。まるで米のメシのように、縄を本命に緊縛をつづけてきたが、これから結局、縄がSMプレイの主役であることに変わりはないだろう。

唯、大人の玩具の、女悦を昂める電池用品などは、SMプレイに一つの大きな革命を与えたことは否めない。私が最近、用いる玉子形のリモコン電動器なども、かつての小型バイブに変わって、近頃は太い活用して、ハント女性に随喜の涙を流させている。とすれば、この大人の玩具、買い求める男より、与えられる女の恩恵の方が遙かに上の様である。



# 深田菊子嬢に浣腸したい

芝

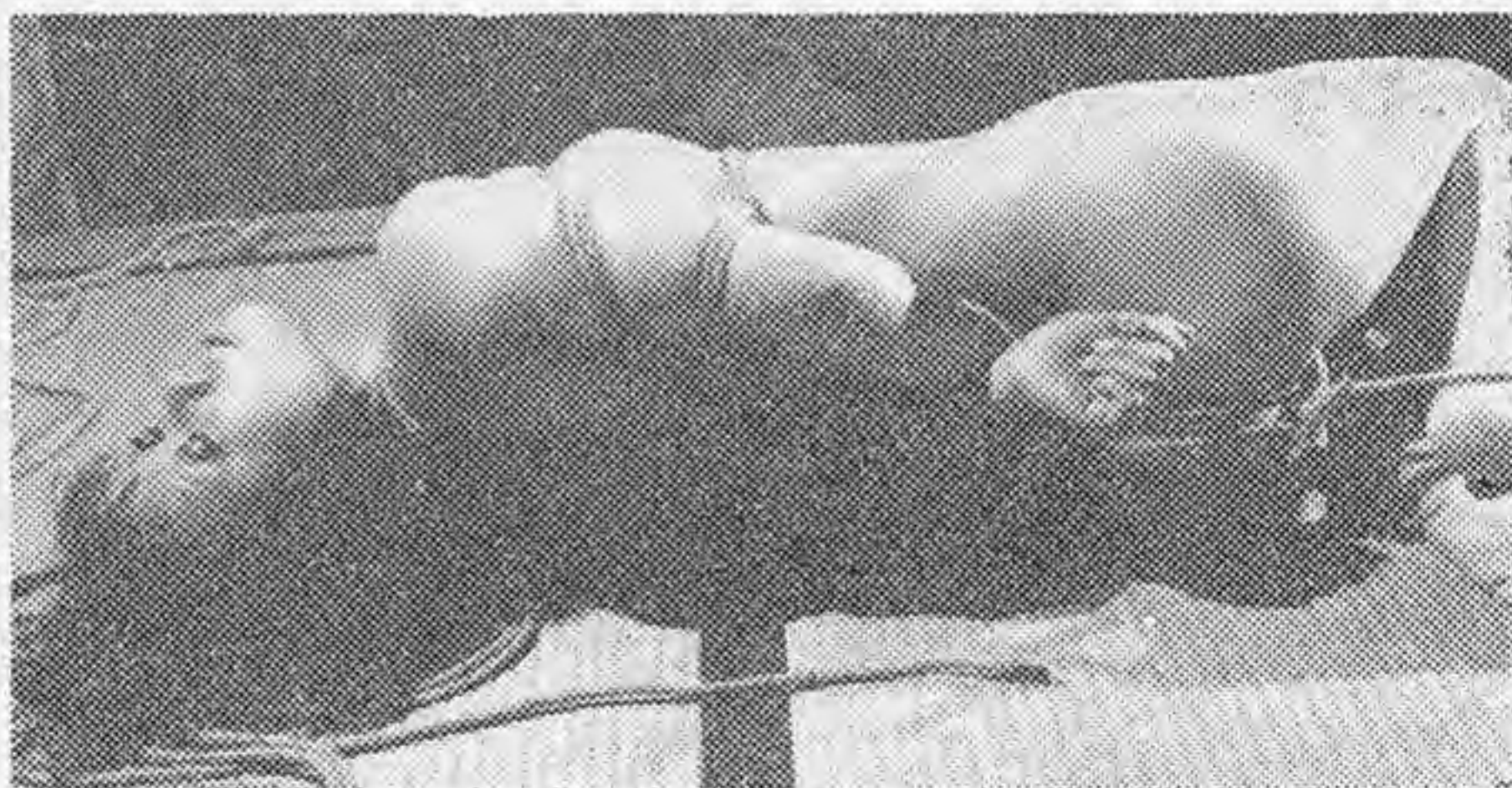
浣吉

小生は深田菊子嬢の大ファンです。何故かといえば彼女のプロポーション、肉付きは正に浣腸向きだからです。彼女は浣腸をされるため、アヌス責めをされるため、

生まれてきたのかと錯覚する位です。しかも、単純な浣腸ではなく異常と思われる位の強烈な浣腸にも耐え得る体の持主だと思います。もし、彼女と浣腸プレイができる機会が与えられたら小生は次のようにして彼女を責めたいです。

すなわち彼女を海老責めに縛って浴室につれてゆき、彼女をおおむけにさせると彼女のふくよかな双尻が天井を向きます。つまり、浣腸器を上から直角に差し込むことが出来るわけで、溶液は一滴もこぼれません。

そこでアヌスにポマードをたっぷり塗り、まず開口器でアヌスを最大限に拡大します。拡げられたアヌスの奥を上からのぞくと、便秘のせいか、その奥に一見、ソーセージのような便が見えます。開口器を拡大したり



は苦しい姿勢のまま、「その固い便を指でかき出して」と叫ぶでしょう。

しかし、そうはしません。二〇〇CCの浣腸器に即効性のドナント持続性のグリセリンを半々に入れたアヌスから三回六〇〇CCを浣腸します。終わったら直ちに直径五センチ位のソーセージをアヌスに押し込み栓をします。彼女は襲ってくる便意に双尻を動かそうとしますが、なにしろ海老責めになっているので、尻を動かすことも出来ず、かといって、下半身をよじることも出来ません。

身体を動かさずに便意を耐えることが如何に苦しいか、彼女は痛感するでしょう。十五分位耐えさせソーセージの栓をいきなり抜くと、耐えぬきためていた便が一挙に噴出します。次は水道のホースをアヌス深く押し込み、思い切り水道のセンをヒネルと水は強い勢いで彼女の腸にはいり、やがて腸の奥に残っている便が水の勢いで噴出されます。

このような息もつかせぬ浣腸方法を深田菊子嬢にぜひ試みたいと思います。浣腸のために生まれたような彼女は、この壮絶な浣腸に十分耐えるものと信じています。



## 一月号 感 雑

山田正輝

一月号のなかで、もっとも感動的だったものは、辻村氏の手を介した岸悠子夫人の告白『桎梏より遁れて』であろう。事實は小説より奇なり。まるでメロドラマを見ているようで、うまく再会するところができ幸福にプレイを楽しんでいられる夫妻には、大きな喝采を送りたい。桎梏に抗し、情熱をまっとうしようとした意志は、純愛とさえいえるのではないか。

悠子夫人の肢体には、奇クでよくお目にかかつてはいたものの何気なく見過ごすことが多かったがこの告白を読むと、夫人の姿が以前より魅惑的に、身近に、親しく感じられるようになったのだから不思議である。今後大いに誌上を飾ってほしいものだ。何はともあれ良かった。おめでとう！

この告白のほかに、谷山久美子さんと福井桃子さんの告白がありこの分野での奇クの充実ぶりを物語っている。告白に加えてルポがあるが、この二本の柱こそ、現在の奇クの屋台を背負っていると思は思う。この点が、近年、雨後のタケノコのように出てきたSM雑

誌とは異なる、奇クの特徴である。それを可能にしているのは、奇クの長い歴史なのだろう。

福井桃子さんの浣腸告白は、見せるのである。まことに時の流れを感じる次第。たしかに最近の辻村氏のカメラ・ハントなどには浣腸が多くなり、かなり大胆な写真が見られるようになっていたけれど、ここまでできたのは大きな進歩である。

ルポでは、愛読者代表？の益田茂夫氏が深田菊子さんを縛った記録があり、これは初心者だけにういういしくて、かえってリアルに感じられた。奇クサロンを読んでいると、かなりの人が深田さんを縛ったようだが、遠く関東にいる我が身がうらめしい。普通ならば、東京の近くに住んでいることは、我々の方が地方にいることになるらしい。

塚本鉄三氏のルポにはアッ気にとられた。ちょっと読んだだけでは、信じられないくらいである。嘘ではないことは分かっているけれども、ホンマかいな？という

気がしてならないのである。女性というのには不思議なもので、謎にさえ思えてくる。私が朴念仁なのかしらねえ？人間というのは色々な可能性があるもので、人間の感受性の幅ということさえ、考えずにはいられなかった。とにかく想像するだけで、奇妙な光景である。全裸で縛られて放っておかれていただけで、全身で悶え、虫のように蠢くというのだから、福竜という芸者さんはマゾもマゾ、空想力の強いマゾなのだろう。これからの奇クでの活躍も期待できそうである。再び誌面に姿を見せてほしいものである。

告白、ルポの充実ぶりに対し、創作のほうとなると、かなり見劣りするところがあるように思う。何よりも期待していた『花と蛇』の最終回を、また、おあずけをくってしまったのだからガッカリさせられた。編集後記にも全然事情が説明されていないので、いったいどうなっているのかと心配になってくる。

なんとなく『花と蛇』の最終回は書かれたいのではないかという悪い予感に襲われる。八十回で打ち切るなんて無理なことを云わなければよかったのにと思ったりす

る。おそらく団先生としては、年内（七一年）に結着をつけたいと思っていたのではないだろうか。とにかく、七十九回の掲載分からは八十回でどうやって終わらせるのか見当がつかない。まだまだ続くような感じを受けるのである。

二カ月もおあずけをくうと、いっそう、未完のままであってほしいという気にもなる。万一、静子夫人や京子が救助されてしまったら、そのあとを想像する楽しみがなくなる。未完ならば、どう想像しようとする自由だし、それだけ贋作も書きやすくなるというものである。京子と美津子の姉妹レズも書いた団先生だから、おかしなハッピー・エンドにはしないだろうと思うが、面倒になって救助で一挙解決という方法をとらないとはいえないので少々心配なのである。それとも、たっぷりと書いて一挙掲載といくのだろうか。

奇クの今後の課題は、やはりグラビア復活にあるのではないか。ポルノ解禁になれば問題なく復活するだろうが、そうでなくとも、奇クの最近における写真の重要性を考えれば、多少、定価をあげても、グラビアを復活させるべきだと思ふ。



＜詩＞ 爽快な朝

南原 赤秋

毎晩、枕もとに並べる品物。目覚まし二つ。スタンド。三四冊の本。そしてあの一番大事な宝物。

パラパラと頁を繰る。あった。何度も読んだ記事だ。それでも目を通す。いい加減で寝よう。

ベルが鳴ってる。うるさいヤツだ。黙れ。眠いんだ。又々ベル。チクショウ。もう時間か……？

目覚ましを小突いた手を枕元に滑らす。おお、この手触り。ひんやりとすべすべしたこの手触り。

ふっくらした丸みがチュルチュルという感じと共に凹む。ごくろうさん。キミの役目は終わった。

ウーン、効いてきた。頑張れ、もうちょっと。伸びたり縮んだり転がったり。ああ、もう、限界。

さわやかな朝だ。あの可愛い宝物のおかげだ。身も心も軽く、若者は、晴れやかな顔で水を流す。

人間馬プレイの隠し撮り

—— 佐 野 寿 ——

薄いカーテンの向こうで繰り広げられていた人間馬プレイの情景は、私の魂をうばった。  
女のむっちりした両腿に締めつ

けられた幸福な牝馬の、サロン中を乗り廻された為か、激しい息使いが聞こえるようであった。  
容赦なく騎り廻し、完全に馬を



征服している女性のすばらしい肉体美からは、熟しきった年増女の色っぽさが感じられ、紫色のネグリジェから透けて見えるパンティも艶めかしく、いかにも人間馬を征服する女主人の雰囲気、辺り一面に立ちこめているようだ。  
奴隷馬となりきって、ズッシリと重い女主人を背にして、呼吸も荒く這い廻る男は、かような屈辱的行為にもかわらず、快楽の絶頂を味わっているに違いない。  
深夜の一室に、時の経つのも忘れて展開されるこの激しく悩ましい華麗なプレイは、時折、女王の振り降ろす笞の音と、苦痛の入り混じった人間馬の呻きを伴奏に、果てしなく続いたのであった。





## 夫婦プレイのお誘い

室生雪子

私が始めて奇クを手にしたのは三年半ほど前のことです。主人の室ででした。その時は、主人を質者ではないかと疑った位です。なぜなら、その時の私はSMという言葉すら知らなかったからです

が、今では主人と一緒に奇クを楽しく愛読させていただけるようになりました。

そればかりでなく、私は主人から身動き出来ない位、きつく縄で縛られ、浣腸パイプ責め、剃毛などされることによって、大きな快楽を味わっております。

私共夫婦は身体に傷をつけるようなプレイは

好みませんので、もっぱら羞恥責めを主にしたプレイを行っております。私は主人以外の人の前で縄を掛けられ責めを受けた事がございませんので一度同性の方を入れてプレイを試みたいと思っております。どなたか、私達夫婦と思いきりプレイをしてみませんか。軽い



井沢の落合葉子様。宜ろしかったです。いかがですか。きっと貴女の喜ばれる責めをして差し上げられる事と思います。

同封しました写真は、私共夫婦のプレイの時の物です。

まだ主人のカメラのほうのうでが未熟ですので、あまり良くうつっておりませんが、ページの片スミにでもものせていただければ幸いに存じます。

## 編集部だより

○SM誌に写真集の大氾濫はSMブーム到来かの感があったのだが、所詮、俄作りの粗製濫造が崇つての返品の山という有様。本誌の準備万端整えていた緊縛写真集の刊行も、そんなわけで一応見合せていたが企画は出来ていたので、何れ乱売合戦が終了したところで、お目見えしたいと思っている。

○創刊以来すでに二十有余年、広範な読者層の信頼と支持を受けて着実に地歩を築いて参った本誌が殊に意を強うするのは、多くの女性読者が身を以て誌上に登場して下さることである。皆様にお馴染みの佐野みさ子さんが、ロマン派生氏のマゾヒスチック・レディの一人として第何楽章かを奏でられる事になったのは楽しい一エポックであった。いずれ誌上に佐野みさ子夫人の麗姿と共に皆様のお目にかかることだろう。

○責めの大家辻村隆氏に対しても女性読者からのアピールが絶えないが、これは今後の誌上を飾ってくれる楽しみに、詳細は秘しておこう。地方記者並に写真部の特派



## 映画「性倒錯の世界」を観て

馬 祖 漢

僻地山陰の地で、首を長くして待った「性倒錯の世界」。M人士たる小生は映画館に一日中ネバること二回。計六回の上映を鑑賞しました。奇ク一月号で杉本氏が評していられる通り、常識的な世間に気兼ねして核心の表現を避けているにも拘らず小生が六回も同じものを観たのは、黒ブラジャ

があつたからなのです。特にイヤな場面は、お白粉をベタベタ塗った男娼のセックスシーンで、全く不快以外の何ものでもなく、顔をそむけました。小生はMマニアですが、渡部好美夫人、谷山久美子嬢の責められるSプレイシーンでは、もう四、五名の出演者により、虐げられ、羞かしめられる女体の興奮、喜悅の表情、官能のうずきなどを捉えた映像が、見たかったと思いまし

## 肥満女性バンザイ

— 赤 畑 修 造 —



この人形は滋賀県近江の小幡土偶「海女」(20cm)。赤い腰巻に包まれた豊かなヒップがとても良

い。奇ク一月号の忍頂寺、虹丸両氏の肥満女性に関する活字と、春川、緑両氏のイメージ画に万才。

た。山原清子さんなどが出演されていたら、と惜しまれます。あのご自慢の刺青と緊縛プレイ。はてはS女王と交じて、M男を責めまくる場面などがあれば、素晴らしさが倍加したでしょうに……。小生のお目当てだったM場面もS女性が全裸でM男を責めるのは理想的でしたが、二人のS女性がカメラを意識されてか、動きが硬く、同じ事をドウドウ巡りしている様で、悦虐の表情も不鮮明だしリアルな迫力に欠けていたように思います。

ここでも、ノンコ夫人、アコ嬢はもとより、山原女史とか、他に一、二名のS女性、それにM男の出演者も多くして、尻責め、股責めなど自由奔放な責めシーンが欲しかったし、完全征服した男に奴隷の誓いをさせるべく浴槽まで人間馬に跨がって行ったS女性が、この映画のラスト・シーンのように神酒を奉戴させるところまで、撮って欲しかったと思います。

出演された辻村氏の風貌、語り口が誠にソフトで、雄弁にアブノーマルが反社会的なものではない事を実証して下さったと感じましたが、来年には、是非「SMの世界」など希望したいものです。

準備は整えて待っているのです、どうか我と思わん勇氣のある女性の方は名乗りを挙げてほしい。自分で文章の書ける方であれば尚のことであるが、SMに興味と関心を持たれる方であれば大いに歓迎。○本誌独特のカラーとして読者の投稿を最大限に活用しているが、『夫婦プレイ』の告白と写真は、その巧拙に拘らず多くの読者の支持を受けている。そして月毎に新しい夫婦プレイ体験者が登場して誌面に活を与えてくれているのは大いに喜ばしいことだ。この面でも、どうか遠慮せずに誌面を活用してほしいと願います。

○3月号の号数がついているが、暦の面では新しい年を迎えるわけである。SM界も本年は華麗でより多彩な交転を遂げるのではないかと気がする。場当たり的なハツタリを極力排する本誌の行き方に歯がゆさを感じられる読者の方々も多いことと思うが、何卒長い目で見て頂きたいものだと思う。○パロディ／＼花と蛇／＼は益々快調の進撃で息もつかせぬ桂子に対する羞恥責めを展開させているが、果して誰がどのように登場して責め地獄に喘ぐか、山光純氏の迫力ある筆に大いに期待しよう。



## 私のスウィート・サディズムス

中津

浩

先月、初めて投稿した処、一月号の「奇クサロン」に早速、掲載されたので、おどろくと共に、奇クがより身近に感じられました。

今回は私の好みのモデルにつき一寸、ふれました。人の好みは、全く千差万別です。私の最高に好きな縛りポーズは、原則として、一、腋窩の見えるもの。二、縄の余り身体にかからぬもの。三、眼帯、又は猿ぐつわを使用する事。つまり、大の字縛り、ハリツケ等の羞恥責めで、残酷なものは余り好みません。

そこで山本章氏の小説『痴人の糧』にちなんで先日撮影会ではモデルに明美と名づけた様な次第です。生贄、ハリツケ、晒し、

引き廻し等の言葉には、いつも心のときめきを、おぼえます。

20年位前の奇クで「赤い部屋」という作品（作者は、確か岡田咲子さん?）。ストーリーは、ある男がボンビきにさそわれて、しもた屋の二階につれてゆかれ、素人の娘が両手吊りにされているのを観賞するという筋でしたが、その一節で、「旦那、準備完了です」というボンビきの台詞など、今でも思いだすだけでドキドキする次第です。

私も何度かフィクションで、この様な物語を書いてみようとしたことがあります。矢張りこれは才能が無ければ駄目の様です。

私の好みの作者水田真紀子さん



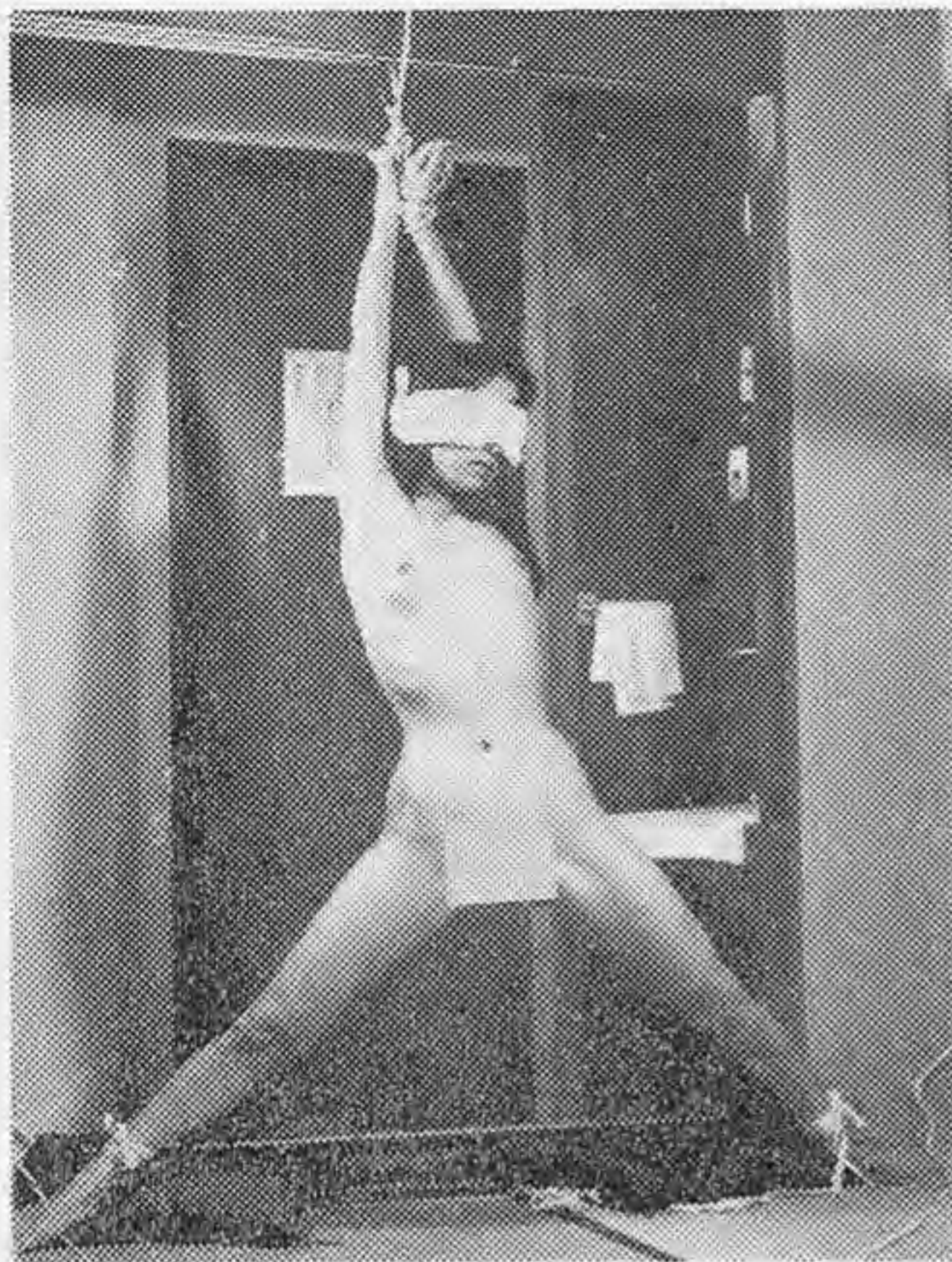
（以前の『ハイキング残酷記』や最近の習作シリーズでは『女子高校生』『縛り雛人形』等）にイメージが湧く様な、とっておきのフォトを提供致しますから、フォト・ストーリーを書いていただけないでしょうか。水田さんの作品は、いつも秀れていますが、特に珠玉の如き台詞がたんたんと出てくる習作『オフィス・ガール』は傑作でした。

また風流極道軒さんの初期の作品も好きでした。贅沢の様ですが

連載物になって登場人物が多すぎると、どうしても内容がうす味になる様で、最近の「紫蘭の門」は読んでおりません。

団鬼六氏の「花と蛇」も最初の頃、京子が捕えられて剃毛される頃までは毎月楽しみにしておりました。思いつくままに勝手なことを書き並べましたが、格調高い奇クは大抵現在のまま、ずーっとつづいて欲しいと思います。一般受けするグラビアページを再設したりすると、いろいろ永続しにくく





なると思います。

話は又、とびますが、昭和39年の映画で「日本拷問刑罰史」に今テレビで活躍している梓英子が当時十七才、森美沙という芸名で美しい乳房もあらわに引きまわしの上、火あぶりになる場面がありました。映画の最終日に訪れてスチール写真を数枚、映画館の人に頼んで五〇〇〇円でゆずってもらったことがあります。

そんなこんなで、貴重な資料が現在、私の部屋の大書庫に一杯つ

まってる居ります。気心の知れた人数人で、奇ク東京支部をつくり、月に一回位、会合したり辻村さん等をゲストとして招いたり観賞会撮影会を開いたり……というのが不惑の年に達した私のひそかな願いです。

尚、同封のフォト、モデルは明美ですが、同時に掲載していただければ幸いです。明美は20才、女子学生のアルバイトです。単なるヌードモデルのつもりで来たよう

## 一月号「カメ・ハン」に感ず

国川栄一

辻村隆氏という方は、女性の扱い方の大変にうまい人だと思う。

特に神経が太く押しが強いと云うのでもなく、むしろ憶病なほどの気弱なフェミニストとも感じられるが、自然に女性は脱ぐ気にさせられるらしい。

一月号の、大沢妙子の巻のカメラ・ハントで、彼は近頃の自作にロクなものがないと何度もこぼしていたが、なかなかどうして。同じく同号で、SMプレイの出来る女性は顔や肉体ではなく心の問題だ、と触れていられたが、しっかりSM緊縛写真も同様であって、そこに、彼の写真の良さがあると思う。

全く無関心なヌードモデルの表情をただの一度も写真にしたことがないのは何故だろう。即物的に女性の生命というべき裸体を扱うだけの心を彼が持ちえない厳肅さが、彼女等の表情を緊張のあまり変化させるのかも知れない。『知りたい年頃』の妙子嬢も、近頃の娘にあり勝ちなシンプルなわり切りかたで、SMプレイを若き日のメモライズに残したいと思う気

持で取り組んだと考えられるが、その写し出された「美」たるや、正に甘い被虐に歓喜する完全の被虐願望の女性のそれであった。

最初は軽蔑さえまじったまなざしを受けることも多いだろう、容赦ない拒絶の言葉も頭から浴びせられもしただろう。しかし、辻村隆氏は求める美しいSM写真を撮るためには、女性に馬鹿にされながらも、その女性のオシッコをあげることも、舐めることも敢えてなす男性なのである。勿論そこに彼の写真にとって極めて重要な意味があるのであるが。

大沢妙子20才を全裸にして柱に両手を縛りつけ、仰臥させて両足をかがけて柱を挟んで縛り、片仮名の「コ」の字型に仕上げた上で水蜜桃の如き双臀に、ゆっくりと舌を伸ばす。これでこそ、あの耽美な妙子が誌上に誕生したのだと私は信じる。

私如きが氏を評するはおこがましいが、氏が益々、意のおもむくままに女性を弄して、より格調高き写真を発表して下さることを待ち望んでいる。



## 『夫婦プレイ』雑感

井上 浩

プレイを行なう一週間も十日も前から、何となく落着かず、そわそわした日々の連続です。と言いますのも、今度行なう予定の縛り方責め方を、何十冊の奇クを参考に考えきめるのです。

私の脳裡は、あたかもコンピュターの如く走り廻り、あげくの果ては、忘れまじと演劇の台本の如く、プレイの筋書きをメモしておく有様です。

しかしながら一旦プレイを行なう日になって縄を手にした瞬間、今迄の意気込みや気迫はどこへや



ら、その際、詳細にカメラにて記録したい気持が大きく左右し、ミノルター〇一、ポラロイドの両刀



使い。その上、露出等の勉強不足の不安にかられ、結局、形式だけの様なプレイになってしまい後悔してしまいます。そして、中途半端な行為の事後は、寝ている子を起こした様な妻の姿を感じないでもありません。

人間本来の本能的欲求は、習得不要の感がありますが、縛り責めの人工的動作は、なお一層研究の余地充分なるを感じざるを得ません。

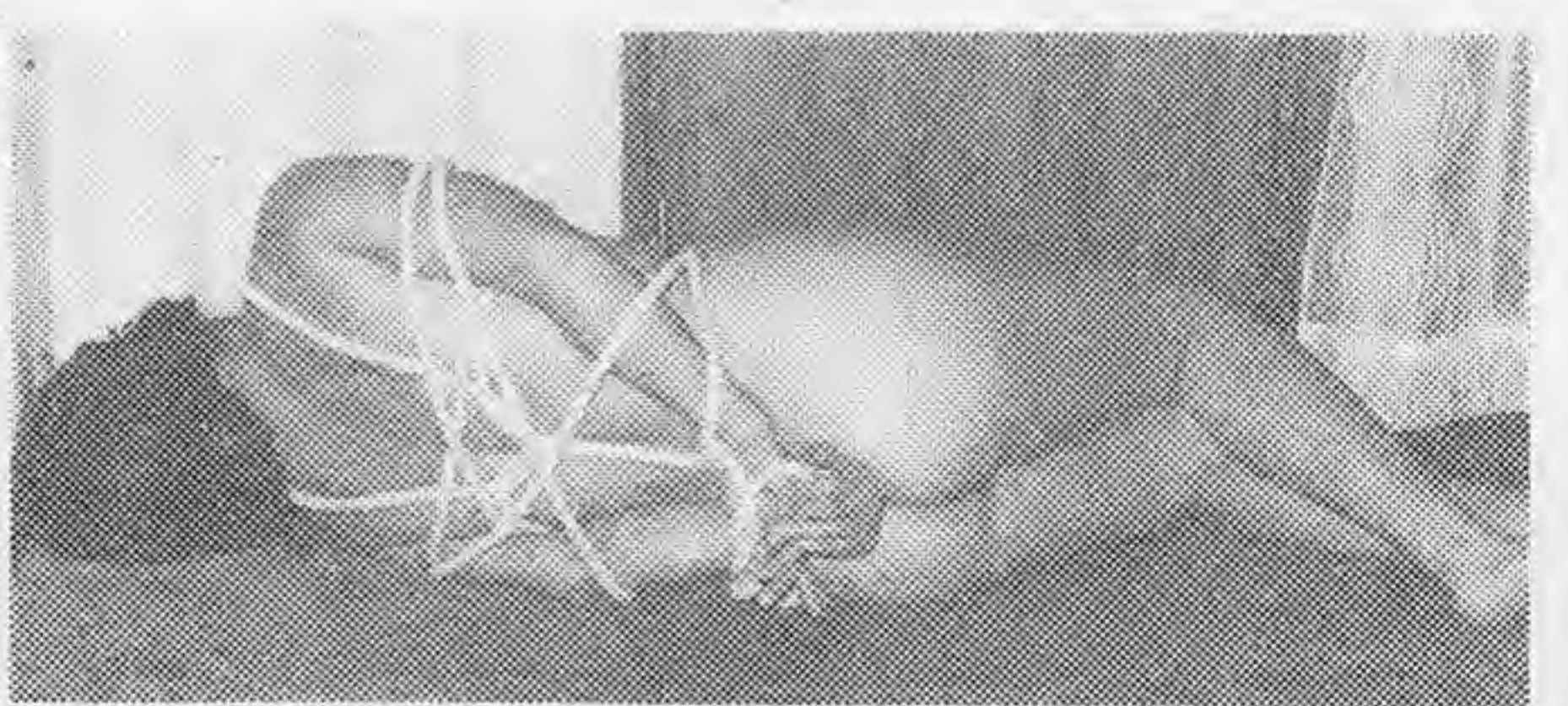
そこで、もしどなたか、経験豊かなS性諸氏が居られましたら、

一度、妻を研究材料にして御指導頂ければ幸いと存じます。

十月号の土田純一、紀川正信氏。十二月号の浜浦順一氏（十二月号には小生の拙き作品を掲載して頂きました）。一月号の田尻長州氏、等との文通を希望しております。一度、誌上では是非とも御連絡

下さい。

最後に発表出来得る様な作品ではありませんが、数葉の近作を同封しましたので掲載下されば幸甚の至りと存じます。奇クの発展をお祈りします。







—ファン・レター—

MY VENUS  
ゆう子様へ

野田由雄

黒を基調とした表紙の奇クをそつと開く。「あ、ゆう子さんだ」と思わず叫びました。それは、ゆう子様の観音様のような写真が、あったからです、ゆう子さんと分かっただけで心臓の鼓動は速く、激しく打ち始めました。ゆう子様の事だけが頭に浮かび、本屋からの十分の家路が大変、長く感じられました。

部屋に入ると、早速奇クを開き先程見たゆう子様を探しました。「あった」それは九十六頁の後手に緊縛され胡座するゆう子様。正に観音様を思わせる。いや、観音様そのものの写真です。驚くことに、ゆう子様の目も眩むまぶしい

緊縛写真が、十数頁にわたり、掲載されているではありませんか。もう狂ったようにそれらを眺めまわしました。そしてあまりの素晴らしさに興奮し、全身の血液は熱く滾り一箇所に流れ、爆発しそうでした。

四十六年五月号にて初めてゆう子様を拝見致してより、貴女様に引かれ、夢中になりました。六月号にて再度そのお姿を拝見し、小生の心の中でゆう子様の存在は決定的に大きくなりました。でも「妻」「愛妻」と題されていたのが残念でした。しかしすぐに、奇クにゆう子様の写真が掲載されることを願いました。

翌月号から、ぶつくりと姿を消されました。来月号は、来月号はと信じながら毎月奇クを手にしでしたが、お姿を見る事はできなかつた。その間、何度も奇クに便りを出し、貴女様に呼びかけようかと思いましたが出来ず、今日にまで至ってしまったのです。

辻村様がハントされたいと洩らされ、辻村様と貴女様に親交を感じ、自分の勇気と実行力のなさに嘆いておりました。

十一月二十六日、本屋に立ち寄り奇クを買い、家路への途中、人目を憚りながらそつと開き、見たのが、ゆう子様の写真。その喜びは前述しましたが、字にしてみてもこんなんじゃない、どうして有りのまま書けないのかと、腹立たしくなります。

その夜は食事もそこそこに、ゆう子様の告白を読みました。時の経過も忘れ、何度も何度も読みかえしました。読むたびに、英雄氏とゆう子様の深き愛を感じ、涙を禁じ得ませんでした。これこそ夫婦の愛、本当の男と女の愛の姿、縄の介在する男と女の愛の喜びからのみ出る感動の記録と感じたのです。若き日に襲い来た不幸を、愛の絆で撥ね除け、真のお二人の

幸福を掴み取られた姿に、言葉で言い表わせぬ熱く美しく燃えるものを感じさせてくれました。

三日三晩、ゆう子様の告白のみを読み、暗記してしまつたほどです。そして、いよいよ、ゆう子様への慕情は、つのるのです。

宝塚に、ゆう子様ほどの素晴らしさを備えた女性がいるでしょうか。黒のパンタロン姿が似合う、スラリとした女性を想像するのです。百一頁の写真のように、朝丘雪路（あんな年寄りでは、もちろんないが）に似て豊かさや暖かみのあるゆう子様。苦難を乗り越切る厳しさと強さのにじみ出る九十六頁の写真。英雄氏の限りなく崇高な愛を一身に受け、幸福に満ち、喜びを表わす他の写真は、風も音もない白い雲海の上を太陽の光を全身に黄金色に浴び、ゆっくり飛ぶ不死鳥を思い浮かべさせます。

誰が何と言おうと、ゆう子様は私の女神です。そう思うと決心がつき、便りのペンを執りました。

岸英雄様、岸悠子様。独断的小生の文章にお腹立ちを禁じえないでしょうが、どうか年上の女性に引かれる男をお許し下さい。

別紙に、ペン画を描きましたので同封致します。







## 〔極最新版〕 新人M女性羞恥責め写真集

## V組 百態 大手札印画紙 (9×13種) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚 (送料共)

|        |       |
|--------|-------|
| 五組五枚   | 八〇〇円  |
| 十組十枚   | 一五〇〇円 |
| 二十組二十枚 | 二八〇〇円 |
| 五十組五十枚 | 五〇〇〇円 |
| 百組百枚   | 八〇〇〇円 |

(郵便番号545-91) 天星社  
大阪市阿倍野局私書箱14号

複写による不鮮明な緊縛写真が  
出回っているようですが、これは  
全部特殊マニアの蒐集用として一  
粒選りのネガから直接印画紙に焼  
付した極めて鮮明な逸品揃いばか  
りです。きつとファンのアルバム  
を最高に充実させると信じます。  
大阪市阿倍野局私書箱14号天星社  
へ前金にてお申込み願います。

☆

|   |                |
|---|----------------|
| 1 | 足挙げ羞恥責め(深田 菊子) |
| 2 | トイレ排泄強要(三浦 純子) |
| 3 | 完全二つ折締め(三浦 純子) |
| 4 | 逆エビ凄絶苦悶(前田真知子) |
| 5 | 超強烈エビ責め(三浦 純子) |
| 6 | 荒縄柔肌いじめ(前田真知子) |
| 7 | 全裸縛玄関晒し(三浦 純子) |
| 8 | ネどうでもして(高村 浩子) |
| 9 | 蠟燭責後手縛り(富田由美子) |

|    |                |
|----|----------------|
| 10 | 羞恥の源を抉る(江口 淑子) |
| 11 | 妊婦縛りの圧巻(富田由美子) |
| 12 | 菱縄縛正面開放(江口 淑子) |
| 13 | 正面の妊婦縛り(富田由美子) |
| 14 | 麗しのマドンナ(荒尾 慶子) |
| 15 | 両手挙前面晒し(福井 桃子) |
| 16 | 強烈流腸ポーズ(高村 浩子) |
| 17 | 後手吊上げ猿轡(高村 浩子) |
| 18 | 胡坐縛りの羞恥(江口 淑子) |
| 19 | ゴム人形の恐怖(江口 淑子) |
| 20 | 菱縄股間縛前面(深田 菊子) |
| 21 | 柱縛り開股強要(福井 桃子) |
| 22 | 鮮烈股間縛の縄(深田 菊子) |
| 23 | 本格的な麻縄責(前田真知子) |
| 24 | 強烈麻縄の緊縛(前田真知子) |
| 25 | 正面股間縛晒し(高村 浩子) |
| 26 | 両足吊りの苦悶(江口 淑子) |
| 27 | 店での全裸縛り(福井 桃子) |
| 28 | 豊満な女体開陳(福井 桃子) |
| 29 | 恍惚バイブ責め(江口 淑子) |
| 30 | マダム責の哀愁(江口 淑子) |
| 31 | 開股強制棒責め(前田真知子) |
| 32 | 大の字片足挙げ(高村 浩子) |
| 33 | 雁字搦目の女体(江口 淑子) |
| 34 | 足挙げ責の羞恥(江口 淑子) |
| 35 | 淫虐蠟燭の挿入(福井 桃子) |
| 36 | 海老開脚強制責(深田 菊子) |

|    |                |
|----|----------------|
| 37 | 全裸立像後手縛(富田由美子) |
| 38 | 麻縄逆エビ惨酷(前田真知子) |
| 39 | 美女の全裸縛り(荒尾 慶子) |
| 40 | マダム全裸開陳(江口 淑子) |
| 41 | 後手錠吊上げ責(江口 淑子) |
| 42 | 女体美を晒して(深田 菊子) |
| 43 | 高々と後手緊縛(福井 桃子) |
| 44 | 猿轡に悶える女(高村 浩子) |
| 45 | 太鼓腹全裸正面(富田由美子) |
| 46 | 菱縄股間縛猿轡(前田真知子) |
| 47 | 苛酷の宴果てて(高村 浩子) |
| 48 | 美しき緊縛女体(荒尾 慶子) |
| 49 | エビ責めの序曲(江口 淑子) |
| 50 | 猿轡に呻く麻縄(高村 浩子) |
| 51 | 料理される女体(高村 浩子) |
| 52 | 美肌に映える縄(荒尾 慶子) |
| 53 | 両手両足開責め(三浦 純子) |
| 54 | 剃毛責めの結果(荒尾 慶子) |
| 55 | 人の字型羞恥縛(江口 淑子) |
| 56 | 浴室での流腸責(江口 淑子) |
| 57 | 股間に喰込む麻(深田 菊子) |
| 58 | 流腸責めのあと(福井 桃子) |
| 59 | 黒髪前に垂れる(福井 桃子) |
| 60 | スナックで縛る(福井 桃子) |
| 61 | 喰込む股間縄責(江口 淑子) |
| 62 | 責めに呻くM女(高村 浩子) |
| 63 | 片足挙げ開股縛(江口 淑子) |
| 64 | 菱縄悲し女泣く(江口 淑子) |
| 65 | M女を責め尽す(前田真知子) |
| 66 | 引回される全裸(江口 淑子) |
| 67 | 尻立蠟燭悦虐責(福井 桃子) |
| 68 | 羞恥責を待つ女(深田 菊子) |

|     |                |
|-----|----------------|
| 69  | 凌辱に捧げる体(高村 浩子) |
| 70  | 剃毛の女体展開(荒尾 慶子) |
| 71  | 被縛者のマダム(江口 淑子) |
| 72  | 縄の山と流腸器(福井 桃子) |
| 73  | 強制足挙臀部晒(高村 浩子) |
| 74  | 嚴重菱縄緊縛責(江口 淑子) |
| 75  | 両手両足吊り責(江口 淑子) |
| 76  | 白肌に喰込む縄(荒尾 慶子) |
| 77  | 全裸一直線開股(福井 桃子) |
| 78  | 裏門を開放する(深田 菊子) |
| 79  | 豆絞りの猿轡縛(深田 菊子) |
| 80  | 後手胴締股間縛(深田 菊子) |
| 81  | 強烈海老責地獄(江口 淑子) |
| 82  | 大の字縛り正面(高村 浩子) |
| 83  | 足挙げ強制開陳(高村 浩子) |
| 84  | 海老責の耐久度(荒尾 慶子) |
| 85  | 猿轡咽喉輪縛り(三浦 純子) |
| 86  | 後手吊上げ責め(三浦 純子) |
| 87  | 羞恥責臀部露出(三浦 純子) |
| 88  | 柔肌に喰込む縄(荒尾 慶子) |
| 89  | 淫虐に晒す女体(高村 浩子) |
| 90  | マダム開股の図(福井 桃子) |
| 91  | がっちり後手縛(深田 菊子) |
| 92  | 無惨白肌の縄痕(前田真知子) |
| 93  | 妊婦大の字縛り(富田由美子) |
| 94  | 開脚を強要せよ(富田由美子) |
| 95  | 引回される妊婦(富田由美子) |
| 96  | 強烈麻菱縄掛け(前田真知子) |
| 97  | 股間縛の引回し(江口 淑子) |
| 98  | 正座する股間縛(荒尾 慶子) |
| 99  | 荒縄後手二つ折(前田真知子) |
| 100 | 椅子開股羞恥責(前田真知子) |



△最新撮影▽異色美人モデル緊縛フォト選

Y組新百態 大手札型印画紙 (9×13 ㎝) 極鮮明焼付

各組 一枚一組 (送料共)

|        |       |
|--------|-------|
| 四組四枚   | 五〇〇円  |
| 十組十枚   | 一〇〇〇円 |
| 二十組二十枚 | 一八〇〇円 |
| 五十組五十枚 | 四〇〇〇円 |
| 百組百枚   | 七〇〇〇円 |

(郵便番号 545-91)

いずれも直接印画紙に焼付けた  
極めて鮮明美麗なフォトで複写も  
の一枚も含まれていません。貴  
重なコレクションとして永久に保  
存して頂くに足る優秀品でありま  
す。お申込みは大阪市阿倍野郵便  
局私書箱第十四号天星社宛へ前金  
にて願います。

☆

|               |               |               |               |               |               |               |               |               |               |
|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 10            | 9             | 8             | 7             | 6             | 5             | 4             | 3             | 2             | 1             |
| 痛苦に耐える女(三浦純子) | 喘ぐ縄猿轡痛め(三浦純子) | 正面エビ強烈責(三浦純子) | 海老縛り閨責め(三浦純子) | エビ責め縄猿轡(三浦純子) | 麻縄強烈柱縛り(三浦純子) | 二つ折り腎挙げ(三浦純子) | 尻挙げ開脚責め(三浦純子) | 開股パイプ責め(三浦純子) | 台上に晒す全裸(三浦純子) |

|               |               |               |               |               |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |               |               |               |              |               |               |               |               |               |               |               |    |
|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|---------------|---------------|---------------|--------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|----|
| 37            | 36            | 35            | 34            | 33            | 32             | 31             | 30             | 29             | 28             | 27             | 26             | 25             | 24             | 23             | 22            | 21            | 20            | 19           | 18            | 17            | 16            | 15            | 14            | 13            | 12            | 11 |
| 全裸緊縛の愉悦(渡部好美) | 閨中の股間縛り(渡部好美) | 悦虐の開股縛り(渡部好美) | 蜷涙責めに哭く(渡部好美) | 開股責めの序曲(渡部好美) | 責に諦観の美貌(前田真知子) | 逆反り弓吊り責(前田真知子) | 光に映える白肌(前田真知子) | 裸女を押込める(前田真知子) | 柔肌に喰い込む(前田真知子) | 首縄菱亀甲縛り(前田真知子) | 純肌を柱に晒す(前田真知子) | 全裸の美女に縄(前田真知子) | 鏡に映るエビ責(前田真知子) | 白肌をくびる縄(前田真知子) | 緊縛に悶える足(座間明子) | 開股縛りに諦観(座間明子) | 後手縛りを誇る(座間明子) | 美しき全裸縛(座間明子) | 股間縛りに喘ぐ(座間明子) | 高らかに笑う顔(座間明子) | 沖縄美人の表情(座間明子) | 豊満を縛る魔手(座間明子) | 開股正面逆立責(三浦純子) | 二折りの引回し(三浦純子) | 驚ぶかみの黒髪(三浦純子) |    |

|                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |               |               |               |               |
|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 68             | 67             | 66             | 65             | 64             | 63             | 62             | 61             | 60             | 59             | 58             | 57             | 56             | 55             | 54             | 53             | 52             | 51             | 50             | 49             | 48             | 47             | 46             | 45             | 44             | 43             | 42             | 41            | 40            | 39            | 38            |
| 羞恥に悶える女(叢子・好美) | 連縛双丘の珍景(好美・叢子) | 椅子開股の二人(好美・叢子) | 高手小手を開陳(好美・叢子) | 全裸の二女陳列(好美・叢子) | 責め疲れた二女(好美・叢子) | 柱に二女の連縛(好美・叢子) | 女性自身を晒す(谷山久美子) | 哀憫非情な麻縄(谷山久美子) | 条痕を尻に残す(谷山久美子) | ムチ打ちに泣く(谷山久美子) | 厳しき後手縛り(谷山久美子) | 情容赦ない麻縄(谷山久美子) | 大の字開股縛り(谷山久美子) | 強縛愉悅の極み(谷山久美子) | 椅子開股で晒す(谷山久美子) | 苦悶の末の頂点(谷山久美子) | 責めるの許して(谷山久美子) | 齒で咬んだ猿轡(谷山久美子) | 緊縛最高の悦楽(谷山久美子) | 悦虐悶えの果て(谷山久美子) | 極限の苦痛襲う(谷山久美子) | 苦痛に反る足指(谷山久美子) | アニマルの表情(谷山久美子) | 赤裸の尻を暴く(谷山久美子) | 強烈二折り責め(谷山久美子) | 海老責に喘ぐ顔(谷山久美子) | 股間縛りの正面(三浦純子) | 愛妻飼育の過程(三浦純子) | ムチ打ちの洗礼(三浦純子) | 爛熟した女体責(三浦純子) |

|                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |                |    |
|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----|
| 100            | 99             | 98             | 97             | 96             | 95             | 94             | 93             | 92             | 91             | 90             | 89             | 88             | 87             | 86             | 85             | 84             | 83             | 82             | 81             | 80             | 79             | 78             | 77             | 76             | 75             | 74             | 73             | 72             | 71             | 70             | 69 |
| 縛った異国の女(シーラケニ) | 畳の上に転がる(シーラケニ) | 卓上の一輪の花(シーラケニ) | 投げだした全裸(シーラケニ) | 諦観白人の表情(シーラケニ) | 高手小手に縛る(シーラケニ) | 金髪碧眼の女性(シーラケニ) | 白人の肌を縛る(シーラケニ) | 碧眼に驚きの目(シーラケニ) | 日本式胡坐縛り(シーラケニ) | 両手挙げ美肌晒(シーラケニ) | 後手縛りで開脚(シーラケニ) | 金髪は縄に動く(シーラケニ) | 白肌と汚れた縄(前田真知子) | 美は麻縄を超越(前田真知子) | Mを恋する表情(前田真知子) | 灯籠の前で縛る(前田真知子) | 伸びやかな肢体(前田真知子) | 一糸まとわぬ女(前田真知子) | 麗しき首縄旅情(前田真知子) | 三本の棒で拘束(川路むら子) | 棒縛り羞恥責め(川路むら子) | 足挙げ正面棒責(川路むら子) | 点火した蜷燭責(渡部・川路) | 一体にした緊縛(渡部・川路) | 捕われの全裸像(渡部・川路) | 尻も何も丸出し(好美・叢子) | 股間縛りの併立(叢子・好美) | 正面相對の連縛(叢子・好美) | 羞らう美女二人(叢子・好美) | 美しき床の飾り(叢子・好美) |    |



# 女子大生前田真知子天然色緊縛フォト

本誌上に姿を現して以来、その手記と共に非常に人気を博しました。美貌の女子大生前田真知子嬢のカラーフォトは、広くファンの方々に要望されていましが、こので新しく特写の機会を持ちました。たので好事家のお目にかけます。

## 柱縛りと脚挙縛り

大手札三枚 一組 一〇〇〇円  
前田真知子 略号八〇〇円  
肉づきのよいふくよかで美しい太腿を引き上げられて柱に全裸で縛られたM女の本領をあらわす。

## 麻縄高手小手首縄

大手札三枚 一組 一〇〇〇円  
前田真知子 略号八〇〇円  
黒ずんだ麻縄が真白い柔肌に喰い込んでピンク色に染まった美しいカラーでまた格別である。

## 荒縄強烈エビ縛り

大手札三枚 一組 一〇〇〇円  
前田真知子 略号八〇〇円  
トゲトゲとした荒縄で情を救う強烈なエビ縛りに責められてれば流石のM女も白肌を赤く彩る。

## 荒縄悦虐羞恥責め

大手札三枚 一組 一〇〇〇円  
前田真知子 略号八〇〇円  
赤い絨氈の上に荒縄でぎゅぎゅ縛られた全裸の女体が芋虫のよう浅間しくうごめいている。

## 悶える強烈海老責

大手札三枚 一組 一〇〇〇円  
前田真知子 略号八〇〇円  
高手小手に縛られた上二つ折りに屈曲させられた女体は秘所もあらわに畳の上を転々と悶える。

## 柔肌をくびる縄目

大手札三枚 一組 一〇〇〇円  
前田真知子 略号八〇〇円  
正面と側面と横臥と、その姿態は変れども全裸の美しい女体に厳重に掛った縄目はむごたらしい。

## 緊縛女体をいびる

大手札三枚 一組 一〇〇〇円  
前田真知子 略号八〇〇円  
身動きも出来ない縛られた裸身を目的の下にして、思うがままにいたぶるのはS男子の本望である。

## 羞恥を晒す女体柱

大手札三枚 一組 一〇〇〇円  
前田真知子 略号八〇〇円  
立柱に棒縛りになった女体は、加虐者の思いのままに、その嗜虐心の欲望の犠牲となつて哭く。

◎右に掲げました総天然色のカラープリントは、美人女子大生前田真知子嬢の一条まとわぬ緊縛フォトばかりです。必ずや女体緊縛フォト蒐集家の方のお気に召すものと信じます。

# ☆深田菊子浣腸悦虐責めフェチフォト

## 〔悦虐浣腸写真〕

### 溶液を圧入される

大手札三枚 一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号八〇〇円  
エネマと硝子シンダーで浣腸液を圧入される時の姿態と表情。

### 全裸で受ける浣腸

大手札三枚 一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号八〇〇円  
三種の浣腸器具でお尻を突っ立てたあられもない姿で施す浣腸。

### イルリの嘴管挿入

大手札三枚 一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号八〇〇円  
二千CCのイルリガイトルからドクドクと注ぎ込まれる溶液。

### 刺す浣腸器の恐怖

大手札三枚 一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号八〇〇円  
ズブリと突き刺さる浣腸の恐怖が。

### 自ら施す浣腸悦楽

大手札三枚 一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号八〇〇円  
強制されて自分自ら浣腸器を握って施す浣腸の羞恥と被虐悦楽。

### 体内に奔流する液

大手札三枚 一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号八〇〇円

尻つき出した四つ這いで浣腸液はグングンと体内に奔流する。

## 浣腸を楽しむ美女

大手札三枚 一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号八〇〇円  
羞かしい浣腸もやがては自ら慰め楽しむ悦の小道具となる。

## 〔オシメ着用写真〕

### オシメからカバー

大手札十二枚 一組 二〇〇〇円  
深田 菊子 略号八〇〇円  
浣腸のあとオシメを装着する。

### おムツに排便する

大手札十二枚 一組 二〇〇〇円  
深田 菊子 略号八〇〇円  
オムツを当ててカバールを装着する。

### 生ゴムのオムツへ

大手札十枚 一組 一八〇〇円  
深田 菊子 略号八〇〇円  
ヌメヌメとした生ゴムのカバー。

◎以上発表しました浣腸写真の要望によりまして、フェチのS嬢に興味をもち、深田菊子嬢を金に成して大阪阿倍野郵便局私書箱第14号天竺宛へ、略号記載の上、どうぞ。







## M資料分譲品一覽

## ○新人S女性出現○

遅ましき股に挟まる

大手札四枚一組 略号(あとお) 一〇〇〇円

素足の脂がべっとり

大手札五枚一組 略号(あて) 一〇〇〇円

縛った男をムチで料理

大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇〇円

女王様の人間便器になる

大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円

蠟涙の雨を全身に浴びる

大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円

尻の下につぶされた男

大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇〇円

エビ責めに弄ぶ女

大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円

神酒を与える女神

大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円

咽喉輪を股責極楽

大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円

素足の足舐と嗅香

大手札五枚一組 略号(あこ) 一二〇〇円

M男性を尻に敷く

大手札六枚一組 略号(まく) 一〇〇〇円

人間犬の芸仕込み

大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円

女の尻に顔がつぶれる

大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇〇円

足指に挟んだ菓子

大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇〇円

男を縛って弄ぶ女

大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円

尻責めと股責め

大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円

大男の訓練風景

大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円

男を刺し殺す美女

大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円

男を尻の下に敷く

大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円

女の足下にうごめく顔

大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円

汚物を戴く男

大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円

男を馬にする美女

大手札五枚一組 略号(みか) 一二〇〇円

人間椅子の御褒美

大手札五枚一組 略号(みお) 一二〇〇円

飼犬に餌を与える

大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円

浣腸器で男を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇〇円

股で絞められる首

大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇〇円

芳香を嗅がす尻

大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇〇円

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 略号(まの) 八〇〇〇円

足舐めの奉仕と強制

大手札三枚一組 略号(まわ) 八〇〇〇円

股責めにあう男の顔

大手札三枚一組 略号(また) 八〇〇〇円

女に縛られて弄られる

大手札三枚一組 略号(まひ) 八〇〇〇円

踏みにじられる顔面

大手札三枚一組 略号(まな) 八〇〇〇円

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 略号(まは) 八〇〇〇円

男を縛って玩具にする

大手札三枚一組 略号(まて) 八〇〇〇円

首を太股で絞めあげる

大手札三枚一組 略号(まや) 八〇〇〇円

灰皿にされた男

大手札四枚一組 略号(そほ) 一〇〇〇円

裸女の長靴に悶ゆ

大手札四枚一組 略号(そに) 一〇〇〇円

美女に飼われる犬の生態

絹川文代 略号(そろ) 八〇〇〇円

美女の手で縛られる過程

絹川文代 略号(そと) 一〇〇〇円

女御主人に使役される男

大手札四枚一組 略号(そち) 一〇〇〇円

美女のおいしい足を戴く

絹川文代 略号(そぬ) 一〇〇〇円

むしゃぶりつく素足の味

大手札三枚一組 略号(そは) 八〇〇〇円

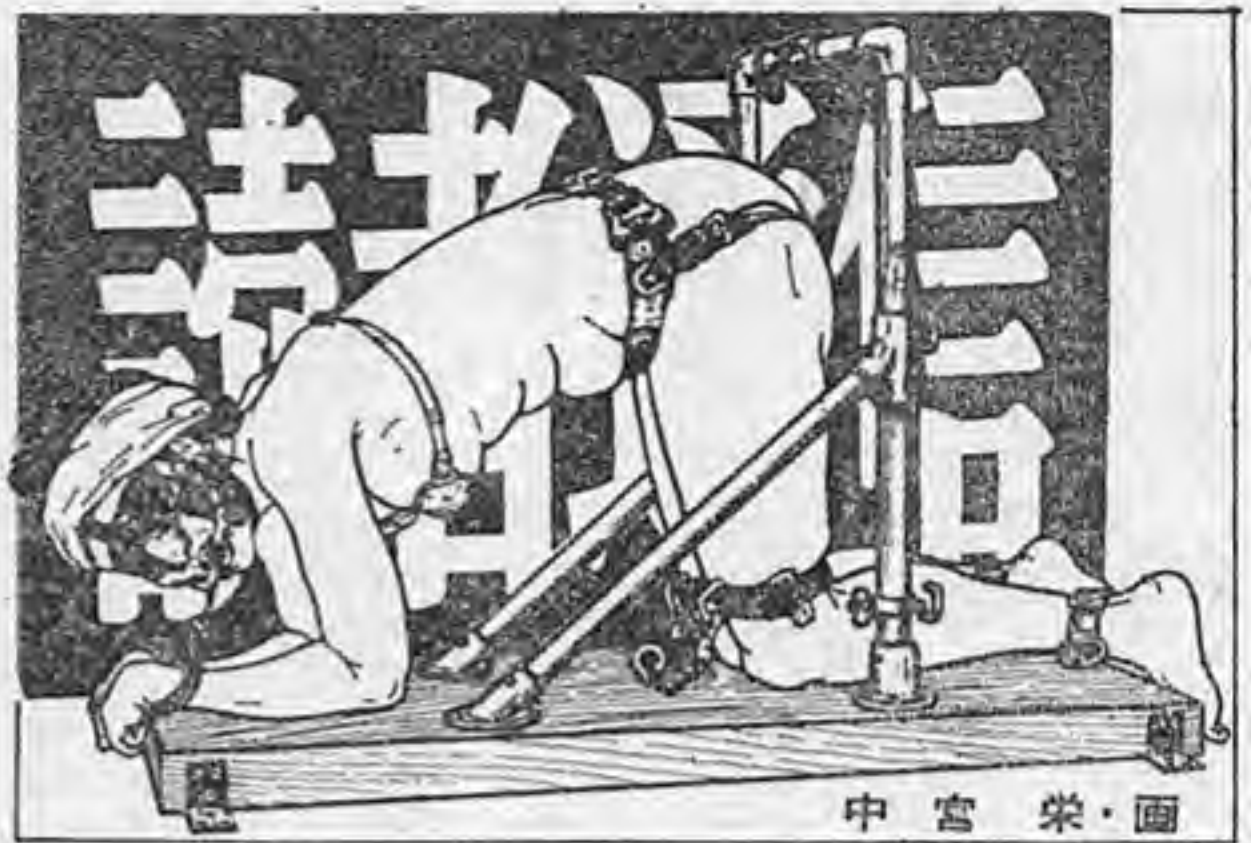
凌辱と美女のなぶり者

絹川文代 略号(そり) 一〇〇〇円

素足を舐める構図

大手札四枚一組 略号(そへ) 一〇〇〇円





新しい号をひもとく度にSMの魅力が深まりゆく想いのする雑誌が奇クである。テレビ文化に慣らされてしまった幼稚なオツムは挿入写真に先ず目が走ってしまうので申訳ないが福井桃子、松本たえ岸悠子そして私の想い出の女性深田菊子の緊縛美は最高のものであった。特に悠子夫人は筆もたつとか。最近の辻村節はオシッコや浣腸をテーマに艶色濃厚のSM調ゆえ、いずれ美女悠子の羞恥と屈辱

に悶える姿と十分に成熟した被虐願望女性の感想告白がカメラハン トを通じて鑑賞出来ると期待している。尚、本誌をひそかに愛読している若い女性も多いと思うが願わくば私に縛られてお小水を戴かせてくれないだろうか。おそろくたまりたまった何かのスーツと洗われるような羞恥の快感でスカッとするとと思うがね。佐野みさ子さん、どんなものだろうか。

(神戸市・乃美対造)

小生、四月から香港に駐在し半年ばかり滞在しておりますが、どうやら年末もこちらで過ごす事になりそうです。こちらへ来るとき数冊のKKを持参しましたが、何度も読み返しているうちに、新しい号も欲しくなり、先日まとめて送って貰いましたが、又々あとの分が欲しくなりました。留守宅より送金させますからお手数でもこちらへ送って下さい。「花と蛇」の特集号は重いのを辛抱して持参しましたが、これは大変役に立ちました。この厚い本を、もう数回読み返して読む度に新しい感興を呼びさましております。香港では日本語の雑誌や本に接する事も少なく、SMファンの小生にとってKKが唯一

の情報源となつています。帰国しましたら、写真文献資料なんかもうんと買い求めたいと今から楽しみにしております。異境に滞在しておりますと何かと淋しく、どうしても人恋しくなりますが、そんな時、KKは私を力強くさせてくれます。どうかよろしく願います。

(香港・金井鎮雄)

今、奇クの愛読者に一番人気のある深田菊子様。僕もSMに興味を持ってから約五年が過ぎまして貴女に呼びかけるのも今回が二回目です。最近、色々な方とプレイした記事が載っており、もうどうしてもガマンが出来ず、僕も貴女にプレイをしようと思込みます。多少の経験もありますし、貴女を責める為の道具も多く揃えております。そして貴女の好きな羞恥責めも考えております。もしこの文が貴女の目にふれましたら、ぜひ僕にも呼びかけて下さい。いつでもプレイの相手をさせてもらいます。なお方23才、大阪に勤めております。(奈良市・服部生)

今年も残す所わずかになりましたが、御社には益々御発展のことをお慶び申し上げます。さて先日奇

ク12月号誌上で秋山美智夫氏が病氣療養中との記事を拝見しました(サロン楽我記)。小生は秋山氏の一ファンに過ぎませんが、出来ればお見舞状でも差上げたいと存じますので同氏の御住所をお教え頂きたく存じます。

(豊中市・東町三夫)

私は奇クを知って七年になります。私はSM小説が好きで奇クを買っても小説ばかり読みあさり、ほかにはあまり目もくれませんでした。しかし今回2月号の高村浩子さんのフォトを見た瞬間、私はページをくるのさえ忘れえました。あの愁いをもった顔(写真2)私はそれから何をしてもつまらなく仕事をして家に帰って来て何をおいても、あの写真を見るのです。今までは小説を読みSの主人公役を自分におき換え、自分が主人公になったような錯覚さえ起こしていたのですが今回は高村浩子さんのあの顔が頭から離れなくて困っております。私は死ぬまで一度でいいから高村浩子さんをガンジガラメに縛って思いきりいじめてみたい。高村浩子さんの写真を見てもからもう十日になります。いつも頭の中でプレイをしている想像を



(東京都・江川富次郎)

||御送金についてのお願い||

現金を普通郵便物に封入する  
ことは、郵便法によつて禁止さ  
れています。現金での御送金の  
場合には必ず「現金で御送金お  
願ひ致します。」と書留「替」で  
額小為替、普通小為替等の方法  
もあり、ます。普通の利用にさい  
ても便利ですが、必ず「代用」に  
致します。尚、七月一日より願  
致します。尚、七月一日より願  
郵便料金の値上げに依り、送料  
が、ありますので御諒承下さい。

と生み出す純粋美の世界。SMプレイは現代に於ける唯一の秘儀だと思っています。実際にプレイの現場を目撃したい。あるいは自らエロスの司祭者になりたいという気持ちがあるが、胸にとめどなくこみあげてきます。羞恥責願望のM女性、あるいは夫婦プレイに参加を必要とされる方々、是非御連絡下さい。私、二十一才の男子大学生です。

(東京・耽美賞潤齋)

(千葉県・高田恵夢夫)

愛読者の皆さん今日は。初めて御便りさせていただきました。私がＳＭに興味を持ちはじめたのは中三の頃からです。あれから六年間というものはＳＭ誌から手を離れたことはありません。そしてつい

れが本当のSM誌であると気づきました。今まで本当のM女性が居るとは夢にも思っていなかったのですが、高村浩子様はじめ多くの女性の投稿を見て本当のM女性がこの世にいるということがわかりました。二月号で、高村浩子様が「プレイに徹したい」という文章をのせられています、この文章を読んで私はいっぺんに高村様とプレイしたくなりました。載っている十枚の緊縛写真も皆いいですね。二月号は全部読みがあつてなんだか雑誌が厚くなったような感じですよ。カメラルポの「縄に恋した女」の写真がまたずば抜けて素晴しかった。二十四枚の芸者福竜の緊縛写真はどれもがうっとりとした表情で、思わず全身が身ぶるいするようなものばかりですが十四枚目のセミが木にとまったように後手で柱にしばらく両足を揃えて上へあげた格好のなんかは、とてもマゾ女性でないと辛抱できないきつい責め方です。私はこの女性の正面へまわりたいと何度思ったことでしょうか。塚本先生、どうか福竜をもっともっと責めて下さい。私にかわって連続で責めて下さい。お願いします。二月号は



高村浩子様の告白とこのカメラポだけで十分たんのうでしたがなかなかどうして、そればかりでは、ありません。福井桃子さんのお喋りと写真が、又々素晴しかった。肉ののったいかにもマダムらしい桃子さんの緊縛写真はどれもこれもSMの熱気がむんむんとしていて、まるで庶民的なムードが大変親しみを覚えました。二枚目の口をイーと噛みしめたような責めに耐える表情はバツグンです。七枚目の縄のムチが一瞬肌にバシリと飛んだところ。それを受けて桃子さんのお尻を突き出して受身の態勢をとったところなど、息もつかせぬSMプレイの一瞬がよくあらわれています。二月号はどれもこれもよかった。いつもこのような号であってほしいと願うのは私ばかりではないだろう。

(京都市・白川ミノル)

ぼくは、北海道でも比較的、暖かい函館に住んでおりますが、この通信欄には本州の人が多いのでぼくは淋しい。奇クを読んで胸の中のもやもやを解決していただけます最近では本だけでは満足出来ずSMに理解のある女性の友達を求めております。ぼくはS性なので女

性に対してロープを使っての羞恥責めや浣腸責めなどをしてみたいと思っております。女性のM性の方がなかなか見つからず困っております。30才ぐらいまでのM性の女性がありましたら誌上でお知らせ下さい。どこへでもぼくは出かけます。そしてあらゆる器具を用いてサビスしたいと思えます。ぼくは20才の青年で多少のMにも興味がありますのでS性の女性で男性をいじめたいという方がありましたら、ぼくを呼んで下さい。全員の女性のみなさん。SMどちらでもかまいませんが、とにかく連絡して下さい。

(北海道・佐賀美男)

私は身長一六五センチ、体重五五キロ。気が小さくて面倒くさがり屋。上に姉がいたせいか女性的な性格。目が小さくメガネをかけている。一口で言えばムツツリスケベ。自分の性格をかくして人に接触しているため、どうしても無口になる。女性と会うとうまくものが言えない。人みしりをする。なればよくしゃべるので女性の中で私と交際して胸の中のモヤモヤをはらそうという方はいませんか。一面、初恋の人を未だに忘れ

最新版分譲フォト

うつら若き美女を緊縛する  
映画紙直接焼付極鮮明写真

逆エビ縛り吊り上げ

大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△ろて▽

縄付きで愛してネ  
大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△ろせ▽

棒責め開股縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△ろひ▽

可愛い牝犬の珍芸披露  
大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△ろり▽

開股責めの種々相

大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△ろみ▽

柔肌に喰い込む麻縄

大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△ろし▽

海老責めで虐める女

大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△ろめ▽

責め抜かれた結末

大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△ろに▽

股間縛りにあえぐ女

大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△ろち▽

高小手縛り首縄悦楽

大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△ろと▽

脚吊り柱強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△ろも▽

白ロープの亀甲縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△ろへ▽

逆エビ縛りで晒す美形

大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△ろす▽

開股開陳羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△ろは▽

白縄の強烈縛り地獄

大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△ろそ▽

牢舎へ引き回す囚女

大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△ろい▽

菱縄縛りで責める

大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△ろふ▽

M女荒尾慶子のすべて

大手札三枚一組 四〇〇円  
荒尾 慶子 略号△ろふに▽

浣腸溶液受入態勢充分

大手札三枚一組 四〇〇円  
荒尾 慶子 略号△ろふし▽

剃毛の美女を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円  
荒尾 慶子 略号△ろふん▽

私をよく観賞してね

大手札三枚一組 四〇〇円  
荒尾 慶子 略号△ろふな▽

ベッド上での狂態を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円  
荒尾 慶子 略号△ろふは▽

強烈菱縄股間縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
荒尾 慶子 略号△ろふい▽



私でも良いでしょうか。二十六

当方全くM体験なく、ひたすら奇クによってのみM願望を充足し

緊縛にもだえ抜く福竜の蠱めきを  
止めるために脚を吊り固定すべ  
上半身が更に激しい蠕動を起す。  
◎以上はいずれも直接ネガから印  
の紙に焼付けられた。鮮明な一粒選り  
の写真ばかりです。お申し込みは前



ている一青年です。歩くには支障のない程の軽度の障害者なのが心まで弱気になり、十代位から美しい女王様に責められる事のみを思う完全Mとして生きて来ました。最近の私のM心境について少し述べてみたいと思います。私の内なる女性へのM願望いささかもおとろえず心の中より噴き上がるのをおぼえます。毎号配達される本誌を見る度にワクワクしながらまっ先にM画やM記事のみを一夜の中に読み自らのM願望を満たしています。数年前、相当コレクションしていたM画や資料を自己嫌悪から全部焼き捨てた事を悔むこの頃です。自らの本能を無理に押さえる事の愚かさを思い知らされました。7月号の編集部だよりに載っていた若く美しいサジスチン川野香代女王の事を忘れないでいたところ、2月号では堂々と写真入りでM志願者を責めていられる所が出ていて、このM男が羨ましくなりません。一寸勇気がなくて志願できなかったのですが、おそまきながら川野女王様のMドレイとして責められたく、どうか哀れなM男に対するお呼びかけを賜りたくお待ちします。

(静岡県・伊豆明夫)

私は現在療養中の者にて二月に入院以来、八カ月以上も病院のベッドで暮しています。退屈な病院生活で奇クが唯一の楽しみです。SもMもFも大好きで全頁を殆ど繰り返し、時にはページがすり切れるほど読みます。一月号から十二月号まで全部そろえて読みかえしています。最近号の一月号と二月号は特に充実しているように72年はまたどのようになるかと楽しみです。「花と蛇」が最終回の予告を残したまま永遠の未完のまになりました。2月号では山光純氏が団鬼六氏よりも勝るとも劣らない華麗なる筆で「パロディ」をかきでてくれているのを読み奇クのために大いに意を強くしました。山光氏ガンバレ。休載することなく毎月このスバラシイ大抒事詩を書きついでほしい。登場人物は多いし捕われの美女群に対する責めのタネもまだまだ多い筈。この際筆者交替は行き詰まり気味の「花と蛇」のマンネリ打破には一番の妙薬と思う。山光純氏のペンに、新鮮さを感じます。SM時代小説「紫蘭の門」は2月号で6回目を迎えています。中々の力作。美女

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
東浦ひかる 略号 (かみ)

強制 空気浣腸

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
東浦ひかる 略号 (かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
東浦ひかる 略号 (かな)

浣腸 實の極致

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
東浦ひかる 略号 (かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号 一五〇〇円  
梨花悠紀子 略号 (れち)

強制 女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
絹川 文代 略号 (きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号 一五〇〇円  
梨花悠紀子 略号 (いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
東浦ひかる 略号 (かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
遠藤百合子 略号 (ゆか)

浣腸 器と女

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
絹川 文代 略号 (ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大塚 啓子 略号 (きい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号 六〇〇円  
大塚 啓子 略号 (るは)

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
大塚 啓子 略号 (ほは)

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
大塚 啓子 略号 (ほい)

浣腸 後の排便

大手札五枚一組 略号 六〇〇円  
大塚 啓子 略号 (へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号 六〇〇円  
大塚 啓子 略号 (へか)

浣腸される清子

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
山原 清子 略号 (かる)

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号 一三〇〇円  
山原 清子 略号 (かへ)

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号 一二〇〇円  
山原 清子 略号 (かに)

イルリガートル

大手札十枚一組 略号 一五〇〇円  
山原 清子 略号 (かも)

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号 一〇〇〇円  
山原 清子 略号 (かて)



も年増もあばずれも各々の女性に  
応じた責めを展開してほしい。時  
代物だから少々の無理はきく筈。  
完全なフィクションとして大盤ぶ  
るいの女体責めの大サービスをし  
てほしいものだ。長らく休んでい  
た塚本鉄三氏が再び筆をとって誌  
上に美しい緊縛写真を飾ってくれ  
たのは楽しい。特に1月号と2月  
号の二カ月にわたって芸者福竜の  
凄い責めフォトをふんだんにサー  
ビスしてくれたのは、よかった。  
写真を見ながらルポを読んでいる  
とまるで自分がその場にいる様な  
錯覚さえ起こす。芸者福竜はこれ  
くらいではまだまだ不十分です。  
もっともこの上派手に責めて  
下さい。塚本氏の手によってどの  
ように責められ、どのように肉體  
的に変化するか楽しみです。私は  
女性を責めたくても自分でやれな  
いのだから代弁者となって、どう  
かどしどしやって下さい。そして  
誌上で報告して下さい。大家の辻  
村氏ばかりでなくロマン派生氏も  
新しく登場してきています。それ  
に城章夫氏もモデルは同じ人なが  
ら深く探求しています。何度読み  
返してみても、益々味の出でくる  
スルメのような雑誌が奇クです。  
拾い読みしただけであとは見るの

も嫌になる雑誌が多いなかで奇ク  
だけは手放したくないのは何故な  
のか、自分でもわからない。2月  
号の巻頭浦沙登子さんの「夕陽よ  
とまれ」はなにか、ぎゅうと圧縮  
し煮つめたような濃縮ジュースを  
飲まされていくような感じ。写真  
ページの多い中で、こんなに読み  
ごたえのある告白が混じっている  
なんてこれこそ奇クならではの羨  
ましい企画であった。今日もまた  
私は繰り返し奇クを読んでいる。  
(北九州市・冬木七星)

人に話しかけたい、呼びかけた  
いという人恋しさにかられるとき  
がある。殊にSMという疎外され  
易いジャンルにある者にとっては  
そんなとき、うちひしがれた負け  
犬のような気持になるものだが、  
奇クの読者欄はそんなときに温か  
い広場を提供してくれる。どんな  
ことでも話しあえ、そして全国の  
奇ク読者の眼がそれを温かく見守  
ってくれる。自分一人だけのエゴ  
的な気持で、この貴重なスペース  
を利用するのではなくて、全国の  
奇クファンの同志的心の結合の場  
として活用してほしいものだ。S  
Mというアウトサイダーに根づい  
ていながら二十何年に亘って奇ク

# 浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号 (のけ) 四〇〇円  
遠藤百合子

# 高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (むい) 四〇〇円  
大塚 啓子

# 浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号 (むは) 四〇〇円  
大塚 啓子

# 施される浣腸

大手札三枚一組 略号 (むろ) 四〇〇円  
大塚 啓子

# 浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (ゆか) 四〇〇円  
遠藤百合子

# 自ら施す浣腸

大手札三枚一組 略号 (ちぬ) 四〇〇円  
大塚 啓子

# 浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号 (ちり) 四〇〇円  
大塚 啓子

# 浣腸を施される女

大手札三枚一組 略号 (ちら) 四〇〇円  
大塚 啓子

# 浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号 (かね) 一〇〇〇円  
山原・東浦

# シリンドラーにて浣腸

大手札六枚一組 略号 (かた) 一〇〇〇円  
山原・東浦

# イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号 (かち) 一〇〇〇円  
山原・東浦

# アィヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号 (かの) 七〇〇円  
山原・東浦

# 浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 略号 (うも) 五〇〇円  
山原 清子

# 浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号 (うわ) 五〇〇円  
山原 清子

# 浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 略号 (ぬる) 六〇〇円  
美木乃々子

# 施される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号 (ぬか) 六〇〇円  
美木乃々子

# 挿入された嘴管

大手札四枚一組 略号 (るて) 五〇〇円  
大塚 啓子

# 襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 略号 (るち) 三〇〇円  
大塚 啓子

# 女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号 (ると) 四〇〇円  
大塚 啓子

が續いているという事を私は一つの  
驚異だと、思っている。根づよ  
い潜在的な奇クのファンが確実な  
固定票として奇クを支持している  
からだろう。私達の同志は全国に  
沢山いるのだ。意を強くして誌上



の上にて堅く手を握り合おうではないか。諸者！

（三重県・枝川莞）

○ 此の二カ月来の福井桃子様の美しい文章に女性のM性の証を楽しく拝読させて頂きました。S或はMと簡単に申しますものの、現実にSMの感覚を正直に他人に対して表現出来る異性を求める事が出来るのは辻村様とか塚本様の様な限られたエリートを除いて今の世間では数少ないものと思いませんか。現実にはSといひMといひても表裏一体のものでSでありたい心理もMでありたい心理も、せんじつめれば同じ刺戟に対して如何に忠実であるかという点に於いて同一のものと思つて居ります。MというものはSに対して実際には奉仕的な態度を取つて居りますが本当はSこそ其の奉仕者でありMこそ自己の肉体に最大の快楽を求める貪欲な被奉仕者ではないでしょうか。東京大阪といった地方に比べ名古屋を中心とした東海地方はSM文化の不毛の地となげいておりました私共として福井桃子様の出現はあこがれにも似た夢の現実化でございました。岐阜の駅近くのスナックの女主人とのことに

附近を求めて求め得ず空しく淋しく帰りました。若しも貴女とSMの真髓を探求出来る機会が得られますならば此の身の如何になる事もないといひません。逆吊りなり鞭の洗礼を受けクリスタルされ血の一滴迄しぼり取られる様な責めを受けても、きつと私はそこに欲びを見出すことが出来ると思つております。桃子様、貴女のS性としての夢が何であるか私は存じません。縛りでしょうか、鞭でしょうか。はた又人間便器としての奉仕でございましょうか。貴女様の御希望が何であるにしろ私はそれを甘受する用意がございます。小生自称28才、戸籍上40才、職業医師若し許されるなら御信頼に応えられるものと思つて戴いて十分とお答え出来ます。貴女様のプレイ相手としてお許し下さるなら直ちに参上致すべくペンを執りました。真実にS性を試してみたいと御希望ならば御返事給ります様伏して願ひ申し上げます。私の夢をこわさない様に。小生S5M5否S9M10位の男です。

（名古屋市・森岡品郎）

○ 初めてお便り致します。小生二十三才。奇クを読み始めて三年に

「異色緊縛女性フォト集」  
△光沢印画紙極鮮明焼付▽

首縄高手小手全裸縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いき▽

縄の痛さに耐える表情  
大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いめ▽

股間縛りは凄く締まる  
大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いあ▽

卓上の緊縛裸身は躍る  
大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いて▽

両手吊りの全裸縛り  
大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いた▽

投げだした被縛女体  
大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いま▽

麻縄は白人の女体を裂く  
大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いゆ▽

縛られるのいや！  
大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いせ▽

私の裸をシロシロ見ないで  
大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いし▽

日本式後手縛りの痛さ  
大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いそ▽

白人女性をいたぶる魔三  
大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いや▽

金髪美女も縛られて台なし

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いも▽

異国女性の被虐の表情を狙う  
大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いむ▽

美しき白人緊縛の姿態  
大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いけ▽

逆エビ責めの外人女性  
大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いひ▽

雁字搦目で椅子に縛る  
大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いえ▽

落花狼藉のしとねの上で  
大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー略号△いう▽

妖艶な縛られぶりの沖縄美人  
大手札三枚一組 四〇〇円  
座間 明子 略号△ほけ▽

股間縛りの痛さに開股か  
大手札三枚一組 四〇〇円  
座間 明子 略号△ほへ▽

悶える厳しい縛りの明子  
大手札三枚一組 四〇〇円  
座間 明子 略号△ほて▽

椅子で演ずる明子の痴態  
大手札三枚一組 四〇〇円  
座間 明子 略号△ほと▽

観念して縄に身を任す  
大手札三枚一組 四〇〇円  
座間 明子 略号△ほあ▽

縄は豊満な柔肌をくびる  
大手札三枚一組 四〇〇円  
座間 明子 略号△ほさ▽



なります。今までは奇クを読み空想するだけで満足していたのですが、最近はどうしても実際にプレイしてみたくて仕方ありません。女性の方でこんな私とプレイして下さる方は有りませんか。私自身はSかMかはまだよくわかりません。従ってどちらにでも御指導によって進んで行けるように思います。それから一月号の二四三頁下欄に載っていた「マダム美美代コト福井桃子さんはM男を責めたい」と言い出した。志願者はいないだろうか」という記事ですが、これは本当でしょうか。私は以前よりマダム美美代さんの、大ファンで一月号の「流腸って素敵」の記事を読んで一層ファンになった所です。私を是非、桃子様のドレイとしてMに育てて下さるようお願いいたします。(大阪府・向井茂男)

○ 以前に一度、お便りをした三十才のS男子です。御誌愛読以来、小生の手元には写真五百枚、雑誌も何十冊と集まりました。小生の好みは、羞恥責め、剃毛、軽いムチ打ち、バイブ責めなどを好みます。今までに二人の女性とプレイの真似事をしましたが、彼女達も結婚してしまいました。最近、

同県、隣県にM女性が現われ、うれしく思います。上田市の南山、軽井沢の落合、山梨の安部、各嬢からのお便りを期待します。

(諏訪市・武藤一清)

○ 福山市の谷山久美子様は、この頃、少しSの気も出てきたとのことですが、私を責めて下さいませんか。ムチ打ちはもちろん、犬、馬、トイレ、その他、どんな方法でもよろしいから、力の限り責めて下さい。一生、トイレにもなる覚悟です。谷山久美子様、Mというものはどんなものか、おためし下さい。(福岡県・太田正)

○ 東京近辺のM女性諸氏。ひそかに誰かにいじめられたい、虐待されてみたいと日夜、夢みる貴女。小心で勇気がなく一人で悩み続けている方は必ず、いるはず。そのような女性を心待ちしています。当方は身長百七十二センチ、中肉で、年令二十才を過ぎたばかりの、若さが財産の男です。その他、いろいろのことについても話のできるような方、そんな女性を待っています。

(東京・三島竜夫)

美しき抜群の正面を晒す

大手札三枚一組 略号△ほゆV 四〇〇円

悦唐にむせぶ美貌のひと

大手札三枚一組 略号△ほしV 四〇〇円

責められて恍惚境をさまよう

大手札三枚一組 略号△ほひV 四〇〇円

足挙げ縛りと開股縛り

大手札三枚一組 略号△ほもV 四〇〇円

超羞恥責めの極致

大手札三枚一組 略号△ほせV 四〇〇円

名古屋の三宅具隆様。私の呼びかけに勇をふるって、お手紙を出すことになったことを読み、感激しました。私は地味な性格で、自分の方から、つきあって下さいと男の方に呼びかけたのは始めてです。ふだんの私なら、好きな人がいても退いてしまふんですが、この本を読んでいると、この本に出ている人は気楽に話せそうで好きです。三宅様から声をかけられ、よろこんで、お友達になりたいと思います。ハレンチなことをいえないし、できもしません。そうしむけるのは三宅様、貴方の腕次第です。純情なだけに書きましたが私は古い女です。独身なので人目につくことはしたくありません。

股縄は何んでも知っている

大手札三枚一組 略号△ほすV 四〇〇円

鼻責めの悦楽境地

大手札三枚一組 略号△ほめV 四〇〇円

鼻を愛撫する責め

大手札三枚一組 略号△ほみV 四〇〇円

蠟燭責めと臀部打ち

大手札三枚一組 略号△ほにV 四〇〇円

喰い込む股間縛り

大手札三枚一組 略号△ほんV 四〇〇円

S的な傾向を好むとのこと、話が面白いですね。(中津市・南加津子)

○ 谷山久美子殿。やっと声をかけてくれたな。それにしても大きく物をいうとるようじゃが、一度も岡山のS男どもの縄目も受けんと泣くとか泣かんとか、ちゃんちゃら、おかしいというもんじゃ。S男のわしを、どんな男かというところ、自分は三十と四才、S気満点、自分でいうのもおかしいが、陽気でのんきものの家庭もちである。カカアにも何でもいえる、うらを知らん男である。まあ、そげんことより、一ぺんおめえさんの身体に、とげとげした麻縄を充分



みまっ、大泣きに泣かしてやる  
けん、面と自慢の胴体をかせ。  
(岡山市・キク同人会S男)

○

二月号は、ちょっと変わった感  
じがしたが、とても良かった。何  
が違ったのかなと思って、前の  
号を出して見た。少し写真が多  
いかな。告白文に写真のついた  
が多くなったのかもしれない。し  
かし、福竜さんもいいし、田中美  
佐子さんもいい。福竜さんは、こ  
れから縄に対して、もっともっ  
と貪欲に求めてくるだろうし、田中  
美佐子さんは数年前に発表して、  
それ以来、つづいて縄を求めてい  
る。楽しいね。それに、あの写真  
は今昔どちらのものなのか、とて  
も美しい。ああ、福竜さんに会  
いに松山まで行ってくるか。少し年  
増に見えるけど、縄に関しては、  
まだ若いこれからの人だから……  
しかし、私は依然、渡部好美さん  
だ。今月号にはなかったけど、ど  
うか毎月、何かを出してもらいた  
い。編集部だよりによれば次々号  
に好美夫人の輪舞のプレイを予定  
しているとか、楽しみだ。渡部さ  
ん、毎月、写真一枚でも良いから  
誌上にのせようじゃあないか。そ  
れを待っている私のようなものも

いることを知っていてほしい。軽  
井沢の落合葉子さん。私たちとお  
つき合い願えれば幸いです。  
(群馬県・高崎エネマ)

○

谷山久美子様。私は奇クを愛読  
し始めて十年近くなります。身長  
百七十センチ、体重七十九キロ、  
昭和十五年生れのM男です。マゾ  
の女王、久美子様はM男を探して  
いらっしやることを知り、もうた  
まらなくなりペンをとりました。  
大変うれしく思っております。今  
まで空想だけで満足していた私で  
すが、現在では鼻障子を貫通して  
鼻輪をつけ、足かせ、手かせ、首  
かせをはめて、クリップ、ローソ  
ク、浣腸、ムチなどで自責めする  
ことで満足しております。一度だ  
けでもいいから、M性を知りつく  
した素晴らしいマゾ女王様に強く縛  
られ、羞かしめられ、思い切り責  
めていただけることを夢見ており  
ます。こんな変態男の悩みを理解  
していただけることと思ひながら  
いつまでも久美子様のことを心に  
思い、お便りいただける日をお  
待ちしています。

○

(徳島市・黒松真曾弘)  
若い女性の皆様へ。私は十二月

本誌愛読者美女緊縛姿態

膨満なる乳房責め

大手札三枚一組 略号△四〇〇円  
高村 浩子 略号△ひら

片足吊りにもたえる裸女

大手札三枚一組 略号△四〇〇円  
高村 浩子 略号△ひむ

初縛りに羞らう

大手札三枚一組 略号△四〇〇円  
高村 浩子 略号△ひな

縛りは大好きなのよ

大手札三枚一組 略号△四〇〇円  
高村 浩子 略号△ひれ

芳紀二十才の羞恥縛り

大手札三枚一組 略号△四〇〇円  
高村 浩子 略号△ひつ

恥かしき緊縛ポーズ

大手札三枚一組 略号△四〇〇円  
高村 浩子 略号△ひよ

ローソク責めの妊娠腹

大手札三枚一組 略号△四〇〇円  
富田由美子 略号△へえ

これが妊婦縛りだ

大手札三枚一組 略号△四〇〇円  
富田由美子 略号△へふ

前手縛りの妊娠太鼓腹

大手札二枚一組 略号△三〇〇円  
富田由美子 略号△へら

臨月腹を縄で縛る

大手札三枚一組 略号△四〇〇円  
富田由美子 略号△へれ

稚妻の妊娠太鼓腹観賞

大手札三枚一組 略号△四〇〇円  
富田由美子 略号△へあ

若妻妊婦全裸の羞らい

大手札三枚一組 略号△四〇〇円  
富田由美子 略号△へう

メロンのような腹

大手札三枚一組 略号△四〇〇円  
富田由美子 略号△へよ

一糸まとわぬ妊婦像

大手札三枚一組 略号△四〇〇円  
富田由美子 略号△へや

強烈エビ縛り地獄

大手札三枚一組 略号△四〇〇円  
谷山久美子 略号△ひあ

麻縄開股責め地獄

大手札三枚一組 略号△四〇〇円  
谷山久美子 略号△ひて

開股縛りの強烈さ

大手札三枚一組 略号△四〇〇円  
前田真知子 略号△ひえ

白肌に喰い込む縄

大手札三枚一組 略号△四〇〇円  
前田真知子 略号△ひま

後手縛り吊り上げに呻く

大手札三枚一組 略号△四〇〇円  
前田真知子 略号△ひの

開股責めの醍醐味

大手札三枚一組 略号△四〇〇円  
前田真知子 略号△ひこ

縄で汚す清純乙女の肌

大手札三枚一組 略号△四〇〇円  
前田真知子 略号△ひふ

エビ責めに映える柔肌

大手札三枚一組 略号△四〇〇円  
前田真知子 略号△ひう

捕われの美女は泣く

大手札三枚一組 略号△四〇〇円  
前田真知子 略号△ひや



号で、お便りを出しましたが、誰一人として私を利用してあげるというたよりがなくて残念です。確かに若い女性にとって恥かしい行為でしょう。また反面「この男は私の尻の下で大きな口を開けて私の排泄物を食べている」と考えただけで楽しくありませんか。私は女性専用の人間便器となつて暮してみたいのです。日本国中で毎日沢山の女性の排泄物が捨てられています。捨てられるのに何故、私の口にはいらぬのか、非常に残念です。ずばり申しまして、私は女性のうんこが食べたいのです。お金を出してでも買えないし、どうすれば食べられるのか、毎日考えて悩んでいます。そして、ついに奇クに便りを出したのです。どなたか「私のうんこ食べさせてあげるから口を開けなさい」と優しくいつてくれる女性の方はいませんか。できれば五、六人のグループで私の顔に口に胸に、所かまわずオシッコをかけ、うんこをして欲しいのです。私は貴女方の排泄物にかこまれていたのです。女性のうんこを愛しているのです。多くの女性のうんこを腹一杯、食べてみたいのです。若い女性の方でどうせ捨てるなら一度、男の口に

でも、うんこをしてやれ、と思われる人、貴女のおいしいうんこを食べさせて下さい。私のような悩みを持つ男性が沢山いることと思います。  
(東京・人間便器)

神戸市の風流粹人様。奴隷妻まりこにお呼びかけ下さり、本当に嬉しうございます。貴方様の手で浣腸されたり、一糸まとわぬ全裸を縛り上げられ、開股の浅ましい姿勢で鑑賞して頂く場面を想像するだけで顔が赤くなるほど羞かしい気持です。でも心の奥底ではマゾの悦びがジワジワと燃え上がって参ります。貴女様の文章を読んでも主人も、かなり興奮したようでした。その夜からのお仕置が、とってもきびしくなりました。あたしには、お仕置きが、きびしければきびしいほど嬉しく、夫婦プレイに刺激を与えて下さった貴方様に心から感謝しております。お礼に、裸パン助になつて一夜、お慰めしては、などと主人は冗談を申します。夫婦プレイに第三者を加えることは、主人がかねてから望んでおり、近く、あたしは、主人の出入りの官庁のお役人様に人身御供として、丸裸でお勤めすることを強いられております。主人以外の

惨酷海老賣め胡坐縛り

大手札三枚一組 略号△ひす▽  
三浦 純子 四〇〇円

亀甲縛りと後手柱縛り

大手札三枚一組 略号△ひせ▽  
三浦 純子 四〇〇円

足挙げ開股賣めを拒む

大手札三枚一組 略号△ひし▽  
三浦 純子 四〇〇円

臀部賣めの悦楽境

大手札三枚一組 略号△ひし▽  
三浦 純子 四〇〇円

三浦 純子 略号△ひも▽

髪を掴んでいじめる

大手札三枚一組 略号△ひさ▽  
三浦 純子 四〇〇円

化粧室とトイレ賣め

大手札三枚一組 略号△ひん▽  
三浦 純子 四〇〇円

股間縛りと臀部賣め

大手札三枚一組 略号△ひゆ▽  
三浦 純子 四〇〇円

殿方に肌を許すことは、とても辛く身の切られるような思いです。でも、まりこは主人の御命令通りどんなに辛いことでも、どんな羞かしいことでも、どんななじめなことでも素直に従うように飼育された女です。貴方様に私共夫婦プレイに参加して頂くことも、主人の心次第でございます。ただ主人は大変、慎重な人で、本当に気を許した方でないとは決心しないと思えます。それにしても御住所も御本名も定かでない貴方様が恋しくて、とても遠い遠い方のように思われてなりません。せめて誌上をお借りして、このまりこを賜りものにし、死ぬほど羞かしい思いをさせて下さいませ。北川まりこ夫人など固苦しいお呼びかけをなさらず、まりここと、呼び捨てになさって下さいませ。まりこは、い

私は本誌の愛読者として、かれこれ十年になる、大のSMファンの心身ともに健康、かつ、清潔な三十才の独身青年です。最近、私も現実の女王様が欲しくなりました。四十才ぐらいの女性であれば最高です。「女王様が欲しい」とは、何て奴隷らしからぬ言い方でしょう。「ぼくを女王様のものにして下さい」と言うべきですが、私の気持を率直に表わすには生意気ですが、その方が良いと思いました。S的も良く分かるのですが



# 次号(四月号)は二月二十五日に発売いたします

今の私は女性から虐められたい気持で、いっぱいです。たとえば、足舐めや、その他、ネチネチと執拗に、いたぶられたい。そして最終的に女王様のものを食べさせられたら、と思うと最高の被虐に浸れます。また私の手相は、とても献身的だそうです。女王様の前では私は従順な召使いになります。

アンマ、お洗濯、爪切り、背中流し、マニキュア塗り。その他、色々な御奉仕ができます。何でも女王様の思い通りになります。また私の顔の上に騎乗をして下さって女王様のお尻の臭いを嗅がせて下されば、この上ないおめぐみと存じます。

(尼崎市・下男)

人間美の、あるいは女の肉体の、かもし出す最高の魅力を引き出し得るのはSM写真だと私は思う。そして自分の手でも、それを試みたいと願っている。本誌愛読女性の心ある協力、もしくは同好夫婦による妻女提供を切望して止まない。仮に下半身は写さずとも、現実の美しさを求めるためには被虐願望の女性は実際に全裸開脚して

カメラに正面を曝しつつ、放尿しなければならぬというのが私の信念である。心ある御人が「美」の創造のために妻女をお貸し下さり、心あるM女が名のりて下さることを祈るのみ。

(神戸市・大西弘明)

佐野みさ子様をはじめとする奇ク愛読者の皆様。貴女がたのS性M性を問わず、私めをお使い下さい。直接、御神酒さえ頂けますれば、貴女がたの御たのしみの御為に一日中でも御奉仕たてまつりましょう。紀川正信様、小竹一浩様、土田、阪東様御夫婦プレイの方々奥様の御神酒を同好のよしみにてただかせて下さい。貴方の見ている前で汚れた二カ処を犬になつて清めるための行為を甘受いたします。

(国川栄一)

前略ごめんなさい。わたくしは都心のアパートに独り暮らしの二十四才の女性ですが、数年前から奇クを読んでおります。わたくしはとって内面的な性格で、男性に声をかけられただけでも真赤にな

ってしまい、オロオロしてしまふため全くお友達がございません。そのくせ、内心では「花と蛇」の静子夫人のような目にあつてみたいと、凄惨なことを考えてみたりします。男の方の持っている神経と、女の持っているそれとは大分違うのでしょうか。とっても恥かしがり屋なのに正反對のことを想像して、男の方の手で全裸にされた上、縛られ、童女のように剃髪され、責められることを心の奥では望んでしまいます。内向的なわたくしを、うまく口説いて羞恥責めを施して下さい方をお待ちしております。

(東京・佐野朱美)

兵庫の奇抜を好む男というペンネームで一月号に寄稿なさった方にお便り致します。私は二十四才の男性ですが、貴方の御希望とは多少、異なる興味から、貴方とのSMプレイを望んでおります。貴方は奇クな男性対女性のSMを性別をおきかえて夢想なさる同性のSMプレイ趣味者で対女性とのプレイも万一、実際におこなつてみたら関心が生じないだろうかと思像なさっていらっしゃるかと一月号で読みました。私は、その反対で

本当はホモ気、皆無の若者ですが女性SMパートナーにめぐりあえず、また事実上、全く将来も女性パートナーに恵まれなれないと思いがら、SMプレイに最大の興味を持って、幻想の中に、みずからも被虐女性化せしめたいと思つてゐる者です。素っ裸にされ縛り上げられて剃毛された上で敏感な個処を擦り責めにされながら女性を夢見たいと存じます。緊縛のまま尻高々とかかけ、たっぷりと塗り込まれるコールドクリームの冷たさに、被虐女性の羞恥と屈辱の悶えを想い、果ては内臓で知覚する熱い肉柱で女性悦虐の羞かしめを妄想したいと貴方を求める次第です。びったりと息のあつたSMプレイで親交を結んだ末、お互いに異なった意味で二人協力して本当の被虐女性を探そうではありませんか。

(苦木桃太郎)

十二月号で「白粉花の誘惑」と題して拙い告白をのせていただいた近藤恵美子です。あの文章を書いてから、もう何カ月になるでしょうか。その後いろいろの方からお便りを戴き、ありがたうございました。あの文章を書いていましたときは、もっともっと書きたい







## △編集後記

○「すき間風」の吹きこむアバラ家を悦虐の天国に変えたいものと、「S Mの好きなお姐さん」や「私とプレイした人たち」をあれこれ物色。「被虐と浣腸の幻想」を想い描きながら「紫蘭の門」と「パロディ花と蛇」とをゴツチャ混ぜした「パロディ」をデッチあげ「陶醉への誘い」として送ったら、返事が来たのはたったの一通。それも、「私は誘拐されたたい」し「水車小屋」みたいな所で「破壊と教育」をして貰いたいけれど、アンタは欲求不満の「大噴火」で、「K・C処刑場」なみに扱われそうだからヤメタ、という断り状。「愛しの薔薇奴」を求めて振った「賽目無残」に裏目と出たハライセに「三浦夫人」

の写真を苛め、「前田真知子はどこに？」行  
った！ とヤツ当りしたが手応えなし。「夫  
婦交換」しようにも相手なく、トルコへ行く  
にもカネはなし。一縷の望みを繋げる彼女は  
ないことはないが、「馬化開眼」でもしなけ  
れば望みなし。「M派……」になれといわれ  
ても、酔った体験もないのに「マゾヒストへ  
の復活」は出来そうにない。恵まれた人も居  
るのにと「四十六年度刊の奇クを回顧」して  
プレイ実践者をヤツカンダとたんに目が醒め  
て、テレビで除夜の鐘を聞きました。

○ポルノ解禁の噂を含み、多くの問題を孕ん  
だ新年が、いや応なく動き始めた今、本誌編  
集スタッフ一同打揃い、愛読者各位の御期待  
に副うべく意を新たに致したところです。本  
年も相変らぬ御支援をお願い申し上げます。

## 〔懸賞原稿募集〕

△體驗、告白、手記▽

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけは、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千元以上の賞金を贈呈します。

△創作、小説、物語▽

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これは  
 と思う作品は必ず誌上に取り  
 上げます。腕試しの意味で奮  
 って御投稿願います。採用篇  
 には賞金十万円迄贈呈。

△感想、論評、批判▽

△感想、論評、批判▽

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌弾なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、  
単行本或はその他見聞などで  
特に興味をお持ちになった事  
項の通信をお待ちします。出

処は詳しく明記願います。採  
 用篇には本誌三月分以上又は  
 二千元以上の賞金贈呈。  
 ◎御送付下さいました原稿は  
 原則として返却の求めに応じ  
 ないことになっております故  
 悪しからず御諒承願います。  
 ◎本文記事中に各種の「懸賞  
 原稿募集」を致しております  
 故、御応募の方は項目を御明  
 記の上御送稿下さい。

〽読者通信原稿〽

△讀者通信原稿▽

卷末の通信欄は読者の皆さまのための公共の広場として開放しています。御遠慮なくお寄せ下さい。

## ☆ 本誌御購読の栞 ☆

予約に限り

|         |       |      |   |
|---------|-------|------|---|
| 一月分(1冊) | 三五〇円  | 送32円 | ▽ |
| 三月分(3冊) | 一〇〇〇円 | 送共   | ▽ |
| 半年分(6冊) | 二一〇〇円 | 送共   | ▽ |

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

三月号  
(第二十六卷第三号)  
(通刊第二百八十九号)

昭和四十七年二月二十日  
昭和四十七年三月一日  
印刷  
発行

編集人 杉本 箕子  
発行人 原田 俊夫  
印刷人 虹川 二夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

郵便番  
（昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可）  
（昭和四十二年四月二一日）  
国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号

## ☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に注意する各条例に指定されており、いよう充分に注意して編集いたしております。すが、本来成人向として発行を企図しており、下さらないよう、特にくれぐれも、絶対願ひを申し上げます。